
IS **インフィニット・ストラトス** - ACE OF ACE -

Smoker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス - ACE OF ACE
E -

【Nコード】

N6975U

【作者名】

Smoker

【あらすじ】

女性にしか扱えない兵器・・・『IS インフィニット・ストラトス』

その影響により、『女尊男卑』となった世界・・・その発端ともいえる『白騎士事件』

その『白騎士事件』で、圧倒的な力を世界中に知らしめた白騎士と互角に戦った一人のパイロットが居た事を誰も知らない

如何なる状況下においても、常に余裕を崩さずに仲間を勝利へと導いたパイロット

人は彼を『生粋のエース』 - - - 【ACE OF ACE】と呼んだ

Prologue - Interview With The Ace Of

本編をそっちのけに、やってしまいました。

そんな愚かな作者の二つ目となる長編ですが、どうかよろしくお願
いします……

ああ、『あの時』の事が……よく覚えている

話せば、長くなる……そう、昔の話だ

知っているか？ 『IS』が現れるまで、戦闘機などの旧来の兵器が戦場の主役だった頃、『ACE^{エース}』は三つに分けられるのを

『強さを求める奴』

『プライドに生きる奴』

『戦況を読む奴』

……この三つだ。まあ、今となつては『IS操縦者』 Ⅱ 『エース』
なんてモノになつちまったがな……

悪い、話が拗れちまつたな……話を戻そう

-
-
-
-
-
-

彼の名前は『ジェイソン・シーガー』

元アメリカ海兵隊 第314戦闘攻撃飛行中隊の隊長を務めた男性

女性を中心とした今の世界 - - 『女尊男卑』の発端となった大事件 - - 通称『白騎士事件』の際、『白騎士』と交戦した『戦闘機乗り（パイロット）』の一人でもある

彼が隊長を務めた第314戦闘攻撃飛行中隊 - - 通称『ファントム【Phantom】隊』

12人編成の部隊であり、メンバー全員が『TOP GUN』の主席でもある選りすぐりの精鋭たち - - 常に激戦の最前線にて活躍した特攻部隊

当時、各国の軍隊でその部隊を知らない者は居ないと言わしめる存在であった

あの『白騎士事件』までは……

-
-
-
-
-
-

ジャーナリストである私は『白騎士事件』を追っていた

『白騎士事件』には未だに謎が多い

あの『白騎士』は一体、誰が操縦していたのか……開発者である『天災』とはどんな関わりがあつたのか……私はそんな疑問を胸に彼方此方を駆け巡る中、ある一人の『パイロット』の存在を知る事になる

かつて、世界最高峰の腕を持ち、如何なる絶望的状况下においても

余裕を崩さずに仲間を勝利へと導く『生粋のエース』……【ACE OF ACE】と呼ばれたパイロット

あの圧倒的な強さを世界中に知らしめた『白騎士』と互角に交戦したとも言われていたらしいが……勿論、そんな話はこれまでの各国の軍の公式発表に無ければ、資料にすら無い……『亡霊』のような存在

私は、第314戦闘攻撃飛行中隊に所属していた12人の足取りを捜すも『11人』の足取りは全く不明だった……

ただ一人……第314戦闘攻撃飛行中隊 隊長

『ジェイソン・シーガー大尉』を除いて

- - - - -

あれは、やたらと太陽の日差しが眩しい日だった

当時、各国の軍事ネットワークへ何者かのハッキング行為により、各国が所有する核弾頭ミサイルが一斉に発射されるという史上最悪の事態が発生した

誰もが最悪の結末を迎えると思い、人々は居るのかも分からない神に祈った

そこに現れたのが『白騎士』 - - - 【IS インフィニット・ストラトス】だった

白騎士は一斉発射されたミサイルを瞬く間に撃墜していった……
被害を最小限に留めた上で……

白騎士の強大な力に畏怖した各国は白騎士の撃破、または捕獲の命
令を下した

俺らの部隊も当然、その作戦に参加していた

-
-
-
-
-
-

ファントム3からファントム・リーダーへ 隊長、今回の作戦は

史上最大級の規模だって聞いたが、本当ですか？

こちら、ファントム・リーダー ああ、海上と航空には各国の半数以上の戦力が導入されてるらしい……………戦闘空域では、既に大勢の味方がやられているようだ

こちら、ファントム4 それだけの戦力を相手にしている『白騎士』ってのは、どんな化け物なんだあ？

こちら、ファントム6 一斉発射された核弾頭ミサイルを簡単にスライスしちまうような奴だよ

マジかよ……………一体、どこのイカレ野郎がそんな化け物を開発したんだ……………？

ファントム・リーダーから全機に告ぐ お喋りはそこまでにしておけ。まもなく戦闘空域だ……敵は正体不明だが、とんでもない化け物なのは確かだ。油断だけはするな

ファントム2 了解

ファントム4 了解、任せときな！

ファントム6 了解、【幻影】の名は伊達じゃないってのを教えてやるぜ！！

幾多の激戦を切り抜けてきた俺らには恐れは無かった

しかし、あれは相手が悪かったとしか言いようが無いな……

戦闘空域へと到着すると同時に俺らは白騎士との交戦を開始

だが、白騎士はこちらの猛攻撃をモノともせず次々と艦隊や戦闘機を撃墜していった……

史上最大級の激戦の舞台となったあの空域……後に『円卓』と呼ばれ、各国でも語り継がれる程の圧倒的な強さを誇った白騎士

13

あの時の光景は一生、忘れないだろう

上空と海上から取り囲むように展開する俺らをたった一人で相手をする白騎士……俺の目の前には、正に『円卓の騎士』が居た……いや、あれは騎士というよりも『鬼神』と言つべきだろうか……

交戦を開始して、僅か数分で海上の艦隊は壊滅……俺らも半数以上が白騎士に撃墜されていた

「こちら、ファントム4 クソツ!! やられた! 離脱するツ!
!

「こちら、ファントム2 味方が次々とやられている!!

笑えない話だ……あの【円卓】で、俺らが相手をしていたのは本物の【円卓の騎士】だったんだからな……

「……ファントム・リーダーから残った全機に告ぐ 直ちに進路を西にとり、戦闘空域を離脱しろ

な、何を言っているんですかッ！ 隊長ッ！？

これ以上、お前らがこの空で散っても何の意味も無い。白騎士の相手は俺に任せておけ

こちら、ファントム6 隊長ッ！ その命令は承服できません！

ファントム・リーダーからファントム6へ 少しは隊長らしい事をさせてくれ。これ以上、仲間を危険に晒させたくないんで……
ファントム2 指揮は任せたぞ

……こちら、ファントム2 了解、隊長…… 幸運を祈ります……

俺は僅かに残った友軍に撤退命令を下し、無謀にも一人で白騎士を相手しようとしたのさ

残った友軍と部下たちが撤退を開始し始めた中、俺は搭乗機 - - -
『F-14D Super Tomcat』の操縦席越しから白騎士と真つ向で睨み合いをしていた

不思議と恐怖などは一切、感じる事は無かった……それ以上に俺は、
圧倒的な強さを誇る白騎士を相手に自分が何処まで通用するのか -
- 言いようのない高揚感が俺を支配していた

……来いよ、【円卓の鬼神】 物足りなさそうで申し訳ないが、
俺が相手だ!!

俺は白騎士との交戦を開始した。これまで経験した幾多の激戦で自分
分が培ってきた技術の全てをぶつけてな…

どの位、時間が過ぎたのか……そんな事すら忘れる程、俺は白騎士

との激戦に意識を集中していた

こちらの攻撃を思わず、見惚れてしまう程の見事な動きで回避して
いく白騎士

極限にまで研ぎ澄ました集中力で白騎士から繰り出される攻撃を回避し、俺は白騎士と何とか交戦を続けていた……最初から白騎士に勝とうなんて事なんざ、考えていなかった

ただ、仲間が空域を離脱するまでの時間稼ぎさえ出来れば、充分だったからな……

俺は白騎士に僅かながらもダメージを負わせるが、俺の方は既にミ
サイルも特殊兵装も底を尽き、燃料タンクも殆どが空……

俺はあえなく白騎士に撃墜された……だが、白騎士の放った攻撃

は操縦席の俺を狙わずに機体だけを狙った為、俺はほぼ無傷だった

落ちゆく機体の中、俺はレーダーを確認すると、こつと言った

……ファントム隊、及び友軍の全機、戦闘空域の離脱を確認……
…俺の【勝ち】だ、白騎士……

そして、俺は落ちゆく機体から離脱。パラシュート降下で海へと落ちていった

その時だった……遙か上空で俺を見つめる白騎士……僅かながら与えたダメージの影響か、剥がれ落ちた装甲から垣間見えた『女の顔を見たのは……

- - - - -

私は、彼がそう語り終えた後に一つの事実を知った

今、私の目の前で『白騎士事件』を語った彼 - - - 『ジェイソン・
シーガー』こそ、白騎士と互角に交戦したパイロット - - - 『生粋
のエース【ACE OF ACE】』である事を

私は彼に問い掛けた

『何故、生粋のエースと呼ばれた貴方は軍を辞め、空から離れてしまっただのか？』

すると彼は言った

あの時の撤退命令は彼自身の独断によるものであり、惨敗を喫した軍からは、八つ当たりとも言える非難を浴びせられ、これまでの軍歴を剥奪され、不名誉除隊にされたと……

だが、彼は後悔していないと言った……大勢の戦友や仲間を犠牲にして、仮に白騎士を倒せたとしても、それは本当に失った仲間たちと同等の価値がある『勝利』なのかと……

私は彼の迷いの無い瞳に見惚れてしまっていた

彼は、こうも言っていた

『俺は確かに軍歴を剥奪され、不名誉除隊になったが……一切、後悔だけはしていない。それに……男が、夢や誇りを取り上げられたら、何をして生きていけば良いんだ？ 生まれてきた意味が無いだろっ』

そして、彼は最後に言った……あの日、自身の全てを賭して戦った『白騎士』に向けて……

『よう、白騎士……ありがとよ。あの時、お前は交戦してきた俺らを誰一人、殺さなかった……』

いつか、俺がまた空へと舞い戻る日が来たなら……もう一度、俺と空を飛んで欲しい。勿論、戦いは無しでな……

それまでは……またな、【戦友】

そう言った彼はどこか、少し嬉しそうな表情を浮かべていた

ジャーナリスト『アリシア・ウィーバー』の【白騎士事件】インタ
ビュー記録より

正にやってしまった感の塊です……

取り敢えず、こっちの方はネタが思い付きやすいので、ちよくちよく更新していく予定です

前書きにもありましたが、こんな愚かな作者ですがよろしくお願ひします……

回想 ・ 【最高の仲間】 ・

俺の名前は『ジェイソン・シーガー』

所謂、【転生者】という奴だ

何故、そうなったのかは俺にもよく分からない……

分かってるのは、以前に俺は今とは別の人間としての人生を送っていたという位だ。そして、その時の俺は交通事故に巻き込まれ、命を落とした

だが、次に目覚めた時には俺は赤ん坊となっており、見知らぬ夫婦

の子供として生まれていた

だが、俺は自分にある【異変】が起きていたのを知った……まるで、コンピューターがインプットしたかの様に頭の中には様々な情報があったからだ

自分が【転生者】である事、【転生者】と呼ばれる者には【特殊な能力】を複数、授けられる事……そして、俺は赤ん坊でありながら、既に精神的な年齢は以前の人生のまま、引き継がれている事だった

25

俺に授けられた【特殊な能力】は三つ

人並み外れた運動神経、常に身体の状態を最善に保ち、鍛錬を行えば、上限無く上がり続けて決して、落ちる事の無い能力……『超人的な身体能力』

あらゆる乗り物を見ただけで、全ての操縦方法を理解し、驚異的なまでの操縦技術を扱える……『あらゆる乗り物の操縦方法と驚異的な操縦技術』

多種多様な兵器、機体など専門的なモノから、あらゆる知識を所有する……『比類無き知識』

この三つを授けられた

26

二度目の人生を送る事となった俺は、生まれた直後に両親を失った……皮肉にも、以前の俺の死因と同じ【交通事故】でだ

俺は両親の死後、親類の軍人に引き取られた

成長していくにつれて、授けられた能力は顕著に表れ始めた

十代の頃には『超人的な身体能力』の鍛錬を兼ねて、サーフィンやモトクロス等の『極限【Extreme】ゲーム』の大会へと次々に参加・・・気付けば、世界大会の総合優勝者となっていた

18を迎えた頃、その能力に目を付けた俺の保護者代理である軍人は、俺を軍隊へと入隊させた・・・二年後、海軍へと配属された俺は、戦闘機乗りとして活躍、そこから『Top Gun』と呼ばれる精鋭^{エリート}中の精鋭が集まるアメリカ海軍のパイロット学校を主席で卒業する事に成功した

.....

その一年後、大尉となった俺は『アメリカ海軍 第314戦闘攻撃飛行中隊』・・・通称『ファントム隊』の隊長へと就任した

何時の間にか、周りの仲間たちは俺を『生粋のエース』……【ACE OF ACE】と呼んだ

だが、俺がそんな名で呼ばれるのは『最高の仲間たち』が居たからだ。仲間を信頼できなければ、俺はとつくの昔に死んでいる……

その後、俺ら『フロントム隊』は世界中の激戦へ出撃、各国の軍隊でもNO・1の出撃率と成功率を修めた

それから四年後……数日前、ジャーナリスト『アリシア・ウィーバー』に語った『白騎士事件』へと出撃する事になった……

.....

白騎士に撃墜された俺は、海上に漂う艦船の破片にしがみついて丸
1日程、漂流した後、味方に救助された

だが、基地に戻った俺を待っていたのは……あの時、俺が独断で下
した『撤退命令』による厳しい処分と1ヶ月の自室謹慎であった……

1ヶ月の自室謹慎を終えた俺は軍法会議の場へと呼び出された。予
想はしていたが、白騎士に惨敗した事を世界中で公開された事に怒
り狂った軍上層部の矛先が、俺へと向けられた訳だ……

不幸中の幸いか、あの時に無事、撤退できたファントム隊と友軍の
仲間たちが抗議し、俺は刑務所行きだけは避けられた

だが、下された判決は……今までの戦歴、勲章を含む全ての軍歴の

剥奪と不名誉除隊だった

判決が決まり、一週間の執行猶予が下された俺は長年、所属していた軍と当時、付き合っていた『恋人』への踏ん切りを着ける為、空軍へと顔を出していた

当時、付き合っていた恋人の名は……『ナターシャ・ファイルス』

入隊から僅か、二年で中尉へと上り詰めた女性

アメリカ空軍でNO.1の腕を誇るエース・パイロットでもある

俺の判決の噂は既に海軍だけでは無く、空軍にも広まっていた。ナターシャも当然、その噂を知っていた

顔を合わせた途端、ナターシャは涙で潤んだ瞳を俺へと向け、抱きついてきた。まるで自分の事の様に俺への判決に悲しんだ

ナターシャとの出会いは、まだ俺が『Top Gun』に所属していた頃に遡る

当時、空軍でエース・パイロットと称される腕前を持つ女性が居るという噂が広まっていた

女性がパイロットになる事は珍しくはない。だが、エース・パイロットと称されるのは稀な事だった。『男尊女卑』という当時の世界では、女性に対して偏見が多かったからだ

『上官と寝る』という手段を用いたのだ、等の良からぬ噂も流れた……ナターシャもそんな偏見の目に晒されていた

だが、アイツはそんな偏見に屈しなかった。出撃を重ねる度に周りの偏見は無くなっていった

常に仲間を見捨てず、危機的状況を切り抜けていく姿を見て、ナターシャをエースと呼ぶ連中は徐々に増えていった

『Top Gun』に所属していた俺は、既にナターシャと何度かは会っていた。エース同士、気が合うのかは分からないが、よくアイツと連む事も多かった

そんなある日だ、アイツが俺を呼び出し告白してきたのは……

不思議とそんな予感を感じていた俺に断る理由なんて無かった

だが、今になって軍を去る事になった俺はナターシャとの踏ん切り

……【別れ】を告げる

彼女は何も言わず、涙ながらに俺を見つめた……そして、別れを告げる俺の口を塞ぐかの様に唇を重ねてきた……その後、互いの様々な感情に火が着き、歯止めが利かなくなった俺とナターシャは、一晩を共にした

その夜、互いに身を重ねた俺とナターシャだけが居る部屋で俺は彼女に言った

『俺はお前が空を去ったとしても、飛び続ける。お前もそうだろう？ 俺の分も飛び続けてくれ…』

そう言ったら、彼女は誰もが見惚れてしまう程の笑みを浮かべ、こ
う言った

『別れなんて言わせない。今度は貴方を私に振り向かせてみせるわ』

それが彼女との踏ん切りとなった。今度は俺を惚れさせてみせると
言っとな……

-
-
-
-
-
-
-

そして、一週間後……俺は軍を去っていった

だが、思いもしなかったのは……海軍と空軍のパイロットたちが一斉に大空へと飛び立ち、空から離れる事となった俺を見送ってくれた事だ

勿論、それはパイロット一同の独断であり、命令違反となるのだが……アイツ等は、たかが一人の為にそんな馬鹿をしてくれていた

どうやら、俺が思った以上に俺は……『最高の仲間』に恵まれていたみたいだった

回想 - 【五反田食堂】 -

軍を去り、俺は生まれ故郷であるアメリカ西海岸で小さな修理屋を営んでいた。昔からバイクや車は好きだったし、改造や修理も得意だったからな……

ただ、空を見上げる時、やたらと太陽が遠く感じた……無理も無い……
……今までなら、大空を高く飛び上がり、太陽の近くまで行けたんだからな……

……

それから、二年が過ぎた

その頃にはISの技術は世界各国に普及、スポーツ競技から兵器にまで幅広くISは浸透していった

やがて、世界各国では一国を代表する『IS操縦者』たちが競い合う世界大会『モンド・グロツソ』……所謂、ISのオリンピッククまでもが開催した

そして、その世界大会で世界を揺るがす出来事が起きた

日本代表の操縦者が第一回IS世界大会『モンド・グロツソ』にて総合優勝を果たし、最強のIS操縦者の称号……『ブリュンヒルデ【Brunnhild】』を得たのだ

そのニュースは瞬く間に世界中へと駆け巡った……しかし、それだけでは無かった

総合優勝を果たした日本代表の操縦者は会見の場にて、かつて自分と互角に戦い、仲間を窮地から救った一人のパイロットへと『メッセージ』を送ったのだ

『私はあの時、お前と一戦を交えた際に今までに感じた事の無い高揚感と歓喜に満ち溢れた

あの時、お前は明らかな戦力差にも関わらずに仲間を救う為、私に挑んだ……

落ちゆくお前を見つめ、私は【お前と共に大空を駆け抜けたい】と強く感じた』

この『メッセージ』は大きな波紋となった。最強のIS操縦者【ブリュンヒルデ】と互角に戦った謎のパイロット……人々は、その謎の存在に強く興味を抱いた

その『メッセージ』が送られる以前には、ジャーナリスト『アリシア・ウィーバー』のインタビューを受けていた為、俺は更なるメデアからの追求から逃れる為、旅へと出る事にした

だが、そんな事よりも俺は驚いていた……その『メッセージ』では無く……日本代表のIS操縦者……最強の称号【ブリュンヒルデ】を持つ『織斑 千冬』があの時、装甲が剥がれ落ちた『白騎士』から垣間見た『女』であつた事に……

.....

俺は世界各国を旅して回った。アメリカからフランス、イギリスから中国……

最終的には日本へと渡った。灯台下暗しという訳では無いが『織斑千冬』の母国に居るとは思わないだろうと考えたからだ

日本での暮らしを始めた俺は、小さな車庫を買い取って改装し、その車庫を家としていた。勿論、軍時代の使い道も無く貯まり続けた給料は多少、旅費として消えたが未だに膨大な額のまま、残っていた

だが、暇なのは性に合わなく、俺は日本での職探しを始めて『五反田食堂』という店での仕事を始めた

本来ならば、アルバイトなどの類は取らないらしかつたが、店主である『五反田 蔵』曰わく、『お前さんの眼が気に入った』と即採用された

店主であつて、俺の雇い主である『五反田 蔵』が経営する『五反田食堂』は『五反田 蔵』……【オヤジさん】の三人の家族で切

り盛りしている

オヤジさんの娘さんである【二代目 看板娘】と呼ばれる『五反田雅』（因みに初代はオヤジさんの亡き女房だったらしい）

オヤジさんの孫で雅さんの息子、五反田家の長男……『五反田弾』

同じく、オヤジさんの孫娘であり、雅さんの娘『五反田 弾』の妹……『五反田 蘭』

オヤジさんを含め、四人は見ず知らずの俺を暖かく迎えてくれた。俺も『五反田食堂』での仕事に精を出しながら、充実した毎日を送っていた

2ヶ月が過ぎるとオヤジさんの孫である『五反田 兄妹』は俺の事を『兄貴』、『ジエイ兄』と呼ぶようになり、俺も二人を『弾』、

『蘭』と親しく呼ぶようになった

『五反田食堂』では昼から夜まで、多少の休憩を挟むも毎日、客が途絶える事はない程の忙しさだった……訪れる客は老若男女を問わず、様々な人々が皆、笑顔を浮かべていた

これも『五反田食堂』の魅力であるのだろう……常連客の男たちの目当ては、雅さんと蘭の二人なのだろう。皆、雅さんと蘭の笑顔を見る度にニヤケた笑みを浮かべているしな

逆に女性客の目当ては、その豪快な性格と頼りがいがあるオヤジさんと破天荒ながら、オヤジさん譲りの頼りがいを持つ弾なのだろう（ジェイソン本人は気付いてないが、女性客の八割以上がジェイソン目当てです）

ただ、仕事中に女性客たちに話掛けられ、会話をする度に雅さんや蘭から妙な威圧感を感じるのは何故だろうな……（二人共、笑顔を浮かべているのに何故か、恐怖を感じるのだが……）

そんな中、俺は弾の親友（弾曰わく、悪友）という一人の少年・
- 『織斑 一夏』と出会う事になる

回想 ・ 【少年】と【エース】 ・

『織斑 一夏』との出会いは至ってシンプルな感じだった

何時もの様に、食堂での仕事中に弾を訪ねに来た少年 - - 『織斑
一夏』

弾とは中学からの悪友らしく、この『五反田食堂』にもよく顔を見
せていたらしい

当然、今までに見た事の無い俺が食堂に居るのは不思議に思っだろう

弾はアメリカから日本まで旅をしていた外国人だと俺の事を言った

だが、『織斑 一夏』はある事に気付いた……不名誉除隊されても、かつての名残で肌身離さずに身に着けている『ドック・タグ認識票』に目を着けたのだ

弾の奴はアクセサリーの一種なのだろう、と思っていたらしい。だから、俺が元海軍所属のパイロットだった事を明かしたら、随分と驚いていた（因みに雅さんと蘭も驚いていたが、オヤジさんだけは驚いてはいなかった）

直ぐに俺は『織斑 一夏』とも打ち解け、俺は『一夏』と、一夏は『アニキ』と呼ぶようになった

ある日の事だ、一夏は俺にある事を聞いてきた

『アニキはパイロットだったんだろ？ なら……【ACE OF ACE】って、知っているのか？』

正直、俺は驚いていた。今やISの普及に『モンド・グロツソ』での【ブリュンヒルデ】で最早、聞く事は無いだろうと思っていた。――【かつての呼び名】

俺は一夏に聞いた

『何で【ACE OF ACE】なんて古臭いモノをお前が知っているんだ？』

そしたら、一夏はこう答えた

『以前、千冬姉から聞いたんだ。仲間を護る為、あの『白騎士』に挑んで互角に戦った戦闘機乗り――『生粋のエース』の話』

そして、一夏は言った

『俺の……【憧れ】なんだ。圧倒的な力を前にしても仲間を護る為に、その現実を覆す力……俺も誰かを護る為に、そんな力を持つ男になりたいんだ』

その時の一夏の眼は今でも、はっきりと覚えている

あれは俺たち、戦闘機乗りが戦いを前に決心を固めた時の眼……
『焰の着いた眼』だった

真実を知れば、きっと一夏は驚くだろう

何故なら、お前が目標としている男は……今、お前と共に笑っている男なんだからな

だが、日本での穏やかな暮らしをしていた俺は完全に気が緩んでいたとしか言いようがない

何故なら、『織斑』の名が付く日本人とは既に出会ってたから……

.....

一夏との出会いから、数週間が過ぎた頃、一夏は俺に紹介したい人が居ると言った

断る理由など無い俺はそれを承諾して後日、一夏の家へと招待された

他人の家庭環境には首を突っ込まない主義だが……『織斑家』には
両親が居なく、一夏には姉が一人居るらしい

そこで俺は漸く、失念していた『織斑』の名前に気付く事になる

何故なら、一夏が俺に紹介したい人……一夏の姉である『織斑
千冬』だったのだから

回想 ・ ・ 【白騎士】との再会 ・ ・

あの時は互いに驚いた

まさか、一夏の姉が『白騎士』・・・最強のIS操縦者【ブリュンヒルデ】でもある『織斑 千冬』とはな……

だが、向こうも驚いていたのは確かだ。自分の弟が『アニキ』と慕う男が、かつてのパイロットとは予想も出来なかっただろう

お互いに面食らっていた時、一夏は俺らにこう聞いた

『あれ？ アニキと千冬姉って……もしかして、知り合いなのか？』

俺らは何とか、その場しのぎに話を合わせた

『あ、ああ……彼とは以前に『モンド・グロッシン』の際に世話になつてな……』

『あー……あの時、俺は選手たちの……そう、一種のサポート的なモノをやっていたな。軍隊時代の知り合いの代理だよ』

正にその場しのぎの嘘ではあったが、何とか一夏に真相を知られるのを免れる事は出来た

その後、一夏は弾の奴との約束があると言い、家を後にした……
勿論、俺と『織斑 千冬』を残して……

長い沈黙が続き、時間だけが過ぎていく。そろそろ、この嫌な緊張感に似た状況を抜け出すか、と俺が口を開く前に『織斑 千冬』は口を開き、言った言葉は……【謝罪】だった

「…済まない……あの会見で私が言った事は……私からの一方的なモノだ……」

『IS』という圧倒的な力で一方的なまでに私はお前を含め、仲間や友軍たちを撃墜していった……」

なのに『共に空を飛びたい』等、都合の良い事だけを言って……一夏から聞いた……世界中を旅していたと……」

だが、本当はあの会見での世間からの追求から逃れる為なのだろう……？

……だから……私は……」

顔を俯かせ、『織斑 千冬』は謝罪の言葉を延々と言った

そんな彼女に俺は、そつと手を伸ばすと……俯いた彼女の額を指で弾いた

「痛ッ……!？」

予想外の事だろう。彼女は若干、赤くなつた額を擦りながら俺を見る

「んな事は気にしちゃいない。あの時、俺は墜ちる機体から言ったんだよ、『俺の【勝ち】だ』ってな

俺は最初からお前に勝とうなんて、思っていない。仲間をあの中域から撤退させれば、充分だったんだよ」

「だが、お前は……！」

俺は言葉を遮る様に彼女の唇に指を押し当てる

「俺はあの会見の前に、ジャーナリストから『あの時』のインタビューを受けた、といってもゴシップ系雑誌のだから……その時に言っただよ、『俺はあの時の事は一切、後悔していない』」

それにあれだけの激戦にも関わらず、俺らを一人も殺さなかった。それは寧ろ、感謝してるんだぜ？ 本来なら簡単に殺す事も出来たんだしな」

俺は言葉を続ける

「あの時、俺は仲間を撤退させるのが目的だった。最終的に仲間が撤退できた事が俺にとっての【勝利】だったんだよ」

俺は彼女の唇に押し当てた指を離し、手を差し出す

「それと……自己紹介はお互い、まだだったよな

俺は『ジェイソン・シーガー』 元アメリカ合衆国海兵隊 第31
4 戦闘攻撃飛行中隊『ファントム隊』隊長で大尉だった

光栄だったぜ？ あの時にお前と僅かな間だったが互角に戦えた事を」

すると彼女は静かに笑みを浮かべ、言う

「…私は『織斑 千冬』 かつて『白騎士』であり、最強のIS操

縦者【ブリュンヒルデ】でもある

誇りだったぞ、お前と一戦を交えた事をな」

「そりゃ……尚更、光栄だな。よろしくな、【千冬】」

「こちらこそ……【ジェイソン】」

そして、俺と千冬は互いに握手を交わした

.....

奇妙なモノだろうか？

かつて、敵だった奴と今では親友に近い関係となっている

他人から見れば、理解し難いモノなのかも知れない

だが、そんな事は知った事じゃない

他の奴が、どうこう言おうが……好きなだけ、言わせておけば良い

俺は彼女の事を信用し、彼女も俺を信用している

理由なんて分からない

お互い、一戦を交えたからかも知れない

ただ、そう感じるんだよ

-
-
-
-
-
-

千冬と親友に近い関係へとなる中、意外な一面を知る事にもなった

「……千冬、お前…もしかして、『片付けられない女』って奴か？
男の俺から見ても、この散らかり様はあまりにも酷いぞ？」

「う、うるさいッ……第一、お前が口出しする事じゃないだろッ……ッ……」

「一夏が前に言ってたぞ？」 『千冬姉は相変わらず、片付けられないから俺が家事をしないと』 ってよ

「ッ……一夏め、余計な事を……」

そんな風に毎日……日常を送る中、俺はもう一人の『白騎士事件』に深く関わった人物と出会う事になる

『IS インフィニット・ストラトス』の開発者であり、『天災』と称される女性科学者……『篠ノ之 束』にな

回想 - 【天災】と呼ばれし女 -

それから、2ヶ月が過ぎた頃……

日本での俺の住まいとなっている車庫には度々、現れる奴が居た

-
-
-
-
-
-

その日は『五反田食堂』での仕事は休みであり、俺は数少ない趣味であるバイクや車を整備しながら、過ごしていた

「ジェイクーんッ

愛しの束さんが遊びに来たぞーッ!」

そう……度々、俺の車庫に現れる奴はコイツ……

「……『束』、何時も言ってるが整備中に現れるのは構わないが抱きつくなって言ってるだろう?」

「むう……ジェイクくんは束さんみたいな美少女に抱き付かれて、嬉しくないのかなあ?」

バイクを整備する俺の背中に、その豊満な胸を押し当てる『女』

モデルすら裸足で逃げ出す程の女性らしさを強調する引き締まった肢体に、まるで童話に登場する【不思議な国に迷い込む少女】の様な服装で身を包み、やたらと機械的で兎の耳をイメージした飾りを頭に着けている『コイツ』の名は……『篠ノ之 束』

あの『白騎士』を含む『IS』の開発者であり、【天災】と称される女性科学者だ

.....

『IS インフィニット・ストラトス』

元々は次世代の宇宙服を目的とした強化服^{パワード・スーツ}だったが、開発者である『篠ノ之 束』が起こした事件 - - 『白騎士事件』

それを機に『IS』の計り知れない能力に目を着けた各国は、次々

と『IS』の兵器化へと着手していった

だが、『IS』には一つの問題点があった……それは、『女性』にしか扱えないというモノだった

それ以降、ISとその技術は各国へと普及。また、女性にしか扱えない為、各国の軍事・国防の要職に多くの女性が就任していった結果……

これまでの男性を中心とした社会……『男尊女卑』が終わりを告げ、新たに女性を中心とした現在の社会……『女尊男卑』が始まった

当時、俺が『白騎士事件』での不名誉除隊となった後、その影響は軍隊でも広がった

今まで、戦場での主役であった旧来の兵器と軍の縮小、男たちの肩身はどんどん狭くなっていき、俺に軍歴の剥奪と不名誉除隊の判決を言い渡したこれまで上層部に務めていた男幹部たちもが次々と退任、今では男の軍人たちは厄介者に近い扱いを受けているらしい（俺の除隊後、残る『ファントム隊』の11人も直ぐに変わり行く軍を捨て、自ら退役したらしい）

- - - - -

『篠ノ之 束』と出会う事になったのは、千冬との出会いから直ぐだった

ある日、千冬は俺に会いたいという友人が居ると言った

後日、俺の車庫に千冬と共に来たのが『篠ノ之 束』だった

「キミがちーちゃんの言ってたパイロット君かあ……中々、男前じゃないかあッ」

……と、脳天気な台詞を言うロイツがまさか、あの『白騎士』を含むISの開発者だとは夢にも思わないだろう……

『篠ノ之 束』は直ぐに俺の事を「ジエイくん」と呼ぶようになり、俺に自分の事を『束』と呼ぶように強要させた

千冬曰わく『束が初対面の奴にそう言うのは極めて稀な事だ』らしい

束は人に関しては殆ど無関心であり、自らの両親ですら、ただの身内としか見ていないらしい。唯一、その身内に関心があるのは【妹】だけの様だ

束が俺に関心を持ったのは、あの圧倒的な力を誇る『白騎士』と互角に対抗したからだろう

若しくは、『転生者』という【イレギュラー異例】な俺と【天災】と呼ばれる自分の持つ【異例】を感じたからかも知れない

その後、『白騎士事件』は世界中に自身が開発したISの能力を見せつける為のデモンストレーションであった等、驚かされる内容の話ばかりだった

普通ならば、男である俺らを蔑まれる対象とした原因である束に対して怒りを露わにするだろう

だが、俺は元から気にはいなかった……元々、古来から『男尊女卑』の時代はあり、今までに女性を蔑ろにしてきた【ツケ】が今となって来ただけ、『男尊女卑』から『女尊男卑』……ただ、今までの立場が入れ替わっただけだ、と考えていたからだ

それにあの時は、あまりの内容に怒りよりも呆れたという感情しか無かったしな……

.....

それから、束は度々、俺の車庫に現れる様になった

流石に各国に目を着けられている……所謂、『お尋ね者』の立場である束は仕事中には現れる事は無かったがな（その時だけは何故か、俺の携帯には必ず、束からの着信、又はメールが届いており、「女からなのか？」と蘭や雅さんから問い詰められる羽目になるのは余談だ）

車庫に戻れば、何故なのか、束は俺のベットで気楽そうに寝ていた、俺が帰宅後にシャワーを浴びている最中に「天才である束さんが、お疲れなジェイクんの背中を流してあげるぞーッ」等、狙っているのか？としか言えない様なタイミングで現れたりもした

偶に千冬が来ている時に現れ、その度に……

「何故、お前が我が物顔でジェイソンの家に居るんだ……ッ！！」

「痛たたたたあッ！！　ちーちゃん、痛いよッ！？　ちーちゃん
のアイアンクローで天才な束さんの脳髄が零れ出ちゃうよッ！！？」

「そんな脳髄など、零れてしまえッ！！」

「痛い痛いッ！！　ジエイくん？！！　愛しの束さんのピンチだよ
？！　助けてって……　痛たたたたあッ！！」

……　等と、千冬のアイアンクローを食らうのが当たり前の光景なの
だと思つ自分が恐ろしく感じる事もあった

だが、束と出会った事で……

俺は再び、あの大空へと舞い戻る事になるとは……

この時の俺はまだ知らなかった

それは、第二回目となるIS世界大会・・・『モンド・グロツン』の最中に起こった

当時、第一回目の『モンド・グロツン』での総合優勝を果たした千冬も当然、日本代表のIS操縦者として、大会に参加していた

最強のIS操縦者・・・【ブリュンヒルデ】が二度目の制覇を果たすのか？ そんな噂が各国に広まる中、『ある事件』が起こる

それは千冬が決勝へと順調に歩を進め、決勝戦の当日だった・・・
・千冬の弟である一夏が何者かに誘拐されたのだ

俺はそれを知ったのは千冬からの連絡だった

会場に居る千冬にドイツ軍が独自の情報網で入手した一夏の誘拐を知らせたのだ。そして、俺は千冬からの連絡を受けた

その時、俺は千冬に頼まれたのだ

『ジェイソン……お願いだ……一夏を……私の家族を助けるのに手を貸して欲しい……』

こんな風に頼まれて、断るなんて馬鹿な事をする訳が無いだろう

俺は連絡を受けた後、車庫の奥底に眠る一台の物置代わりとなった車に近付き、トランクを開ける

軍を去り、『女尊男卑』となった今の世界で二度と身に着ける事は無いだろう、と思いながらも廃棄する事なく、残しておいたモノ

かつて、海軍のパイロット……【ACE OF ACE】と呼ばれる以前……僅かな間、海兵隊特殊偵察部隊だった頃に使用していた装備

俺はその防弾と防刃を兼ね揃えたジャケットを身に着ける……その背には偵察部隊の頃、個性が必要だな、等と考えて入れた紋章

エンブレム

後に『ファントム隊』の紋章ともなる『漆黒の馬に跨り、剣を高らかに掲げる首の無い黒騎士』……中世の時代に実在したという東欧の伝説『首無し騎士』^{ヘッドレス・ホースマン}が入っていた

.....

考えてみれば、予期する事が出来た事態だった

そう、『俺』……『織斑 一夏』は自分の情けない状態に苛立ちを覚える

『モンド・グロツソ』での覇者……『織斑 千冬』の弟である俺が、こんな風に狙われるのは考えれば、分かる事だった

情けない……不甲斐ない……

俺は縛られた状態で俺を誘拐して、この古ぼけた廃墟と呼べる場所にまで連れてきた連中を忌々しげに睨み付ける

だが、俺は軍人だった『アニキ』に言われた事を思い出していた

『良いか、一夏 どんな状況に陥っても絶対に冷静になれ。頭が冷

えれば、物事を落ち着いて判断できるからな。軍隊でも生き残る為には必要不可欠だぞ?』

俺は深く息を吐き出し、気持ちを落ち着かせる。そして、アニキが言ったように冷静に自分の状況を考える

俺と誘拐犯たちは今、古ぼけた廃墟と呼べる場所に居る。内部の構造からして、元工場……微かに鼻をつく潮風からして海が近いと思う

79

誘拐犯たちは……七、八人……それに『銃』なんてモノを持って、やたらと強屈な身体つきからして、アニキみたいに元軍人って所か……

俺は出来るだけ、思考を冷静にさせて状況を分析する

今、自分には何が出来て……何が出来ないのか……

こんな無様な状態じゃあ、何一つ出来やしない……つくづく、力
無い自分を恨んだそんな時だった

『異変』が起こったのは……

-
-
-
-
-
-
-

男たちは今回の簡単な『仕事』の成功を確信していた

男たちは元軍人で『傭兵』だった。あの忌々しいISのせいで、職を失って今では雇われ兵士としての日々……

常に戦場で活躍し、敵を殲滅して男たちは喝采を受けた。なのに、今ではISのお陰で女たちは我が物顔で世の中を支配したつもりでいる

今回の『仕事』……『織斑 一夏』という少年の誘拐の依頼人は不明だった。ただ、仕事の依頼と仕事内容とは釣り合わない程の莫大な報酬を相手側は提示してきた

『織斑』の名前は男たちでも聞いた事がある

今や世界中に普及されたISの世界大会……『モンド・グロツソ』での総合優勝者であり、最強のIS操縦者『織斑 千冬』

普通ならば、そんな奴の身内に手出しするのは自殺行為だろう。だが、男たちはISを使う女たちを憎んでいた……ISという強大な力が無ければ、何の役にも立たない癖に自らを『選ばれし者』だの『エリート』だとほざく女たちに痛烈な一矢を報いてやろうと思っただけだ

それに幸いにも、『織斑 千冬』は第二回目となる『モンド・グロツソ』に出場している為、標的……『織斑 一夏』という少年は一人だけだった

あっという間に標的を攫うと一時、身を隠すために埠頭沿いにある

廃工場へと移動、仲間たちと共にこの成功と引き換えに得る莫大な報酬に期待を膨らませた

だが、男たちは知らない

その男たちが居る場所……日の光も届かない暗闇には【幻影】が
潜み、男たちを狙っている事を

-
-
-
-
-
-

『異変』は縛られた俺の側に立つ男から始まった

見ているだけで不快感を覚えさせるような表情で笑いながら、俺を見下す男……こんな奴らに捕まるなんて千冬姉にとって、俺はどうしようもない足手まといだ、と自己嫌悪する俺の目に映ったのは……

突如……本当に一瞬だったから、よく見えなかったけど……黒い影……そう【幻影】といえるソレは俺の側に立つ男を暗闇へと引きずり込んでいった

姿が見えなければ、音すら聞こえなかった。正に【幻影】は男たちに次々と襲いかかっていった

一人が消えても、残る誘拐犯の連中は全く気付かなかった。その『異変』を気付き出した男も居たが、その男も他の連中に気付かれないうちに【幻影】に暗闇へ引きずり込まれた

二人が消えて、ようやく連中も気付いたらしく、俺の側へと駆け寄ると叫ぶように怒鳴りながら、俺に聞いてきた

『おい、小僧ッ！！ お前の側に居た二人はどこに行ったんだッ！』
『？』

俺に聞かれても答えられる訳が無いだろう。【幻影】としか言いようの無い『何か』が暗闇へと二人を引きずり込んでいったなんて信じる訳が無い

聞いてきた男は何も答えない俺に腹を立てたのか、縛られて無防備な俺を殴りつけた

殴られた衝撃で頭はフラつき、口内からは血生臭い鉄の味が広がる

だが、その時だった。その【幻影】が残る男たちに一気に襲いかかったのは……

一人、また一人が一瞬で暗闇へと吹き飛ばされて消えていく

あまりの出来事に焦った男たちは手にした銃を四方八方へと撃ち始めた

鼓膜を激しく震わせる銃声……テレビや映画とは全く違う轟音に俺は地面へと伏せる

手で耳を塞ぎたくても縛られた状態の俺には出来ず、ただ必死に目を瞑った。聞こえるのは激しく鳴り響く銃声と男たちの悲鳴――五分くらいが過ぎた頃、目を瞑った俺の耳には先程までの激しく鳴り響く音は聞こえず、その代わりに俺へと近づく足音が聞こえた

その足音が一步、一步と近づくに連れて俺はこう思った

ゴメン……千冬姉……俺……最後まで、千冬姉の足手まといだった

……

そう観念した俺の耳に聞こえたのは……

『…よお、一夏 大丈夫か？』

俺が千冬姉と同じ位に尊敬し、慕っている……『アニキ』の声だった

-
-
-
-
-
-

かつての装備を物置代わりの車から引つ張り出した俺は一夏と一夏を誘拐した連中が居る場所……千冬から聞いたドイツ軍の情報を頼りに埠頭沿いにある廃工場へと向かった

その後はさつさと事を終えた。俺は持ち前……授かった能力を活用し、連中を片付けていった（あの時は、到着から10分くらいで片付いたから……自己最短記録だろうな）

だが、何よりも驚いたのは一夏を救出した直後にISを展開した千冬が現れた事だ

決勝戦をそつちのけに千冬の奴は一夏を助けに向かったらしい。何
だが、悪い事をした気分だったな……駆け付けた頃には俺が全て、
片付け終えた後だったんだから……

今回の事件は世間一般では非公式扱いとなり、千冬の『モンド・グ
ロツソ』での決勝戦出場の棄権は世間の大きな話題となったのは言
うまでもない

だが、話はまだ終わらない

今回の一件でドイツ軍は千冬に対して、一つの貸しを作った訳だ

後日、ドイツ軍は千冬に一年という期間で教官を務めて欲しいという要求を出した

勿論、千冬はそれを承諾した。だが、予想外な事も起きた

千冬と共に何故か、俺までもが補佐として指名されたのだ

かつての軍歴を剥奪された俺に何故、指名が来たのかは謎だった

とは言っても千冬の弟であり、俺の弟分でもある一夏を助けたのはドイツ軍の協力があってこそ……

千冬と俺は一年という期間限定で教官とその補佐に着任する事になった

そこで、俺が再び空を飛べる様になり……

かつての呼び名……【ACE OF ACE】と呼ばれる様になる事なんぞ、誰一人が予想なんてしていなかっただろう……

回想 ・ 【フランキー】 ・

ドイツへと向かった俺らを出迎えたのは一人の女性だった

『ドイツへようこそ、私は【フランキー・アルマ】中佐 これから一年、貴官たちが教官を務める基地での責任者だ』

『フランキー・アルマ』

因みに本名は『フランチェスカ・アルマ』であり、【フランキー】は通称らしい

ドイツ軍で随一の実力を誇る女性エース・パイロットであり、階級

は中佐

長く艶やかな黒髪、左目には眼帯をしており、その眼帯の下からでも見える程、大きな切創の傷痕……だが、その傷痕を差し引いても千冬や束たちと引けをとらない程の美貌を持っていた

後に知るが、アルマ中佐の性格は常に堂々としており例え、相手が自分以上の階級だろうが自国の首脳だろうが、物怖じせず立ち向かうという男の俺から見ても『男前な性格』の持ち主だ

アルマ中佐に案内され、到着した基地で千冬が教官を務めるドイツ軍のIS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』……通称『黒ウサギ隊』についての簡潔な紹介を受けた

部隊章は『眼帯をした黒ウサギ』であり、ドイツ国内にある10機のISの内、3機を保有している名実ともに最強の部隊

最強のIS操縦者……【ブリュンヒルデ】の名を持つ千冬が、その部隊の教官に務めるに關しては納得だが、俺まで指名された事に關しては全く不明としか言いようがない

だが、基地に到着すると俺はアルマ中佐に呼び出された

「生粋のエース……【ACE OF ACE】と呼ばれたパイロット『ジェイソン・シーガー』大尉……会えて、光栄だな？」

「……人違いでしょう、それと俺には軍に居た記録（軍歴）は存在しませんよ？」

『いや、お前で間違いない……アメリカ合衆国 海兵隊に所属し、今ではその存在を知る者は殆ど居ない部隊……』第314戦闘攻撃飛行中隊 フォントム隊』の隊長

『白騎士事件』までには、数多の戦闘で『一度も被弾した事が無い』という超人的な操縦技術を持つ世界屈指のエース・パイロットとしても有名だ

だが、『白騎士事件』での独断による撤退命令により、これまでの軍歴を剥奪、不名誉除隊とされた……まだ、人違いだと？」

「……それもドイツ軍独自の情報網から、ですか？」

するとアルマ中佐は手にしていた資料を綴じると残った蒼い右目で俺を見る

「少し、違うな……私は以前、この軍の精鋭戦闘機部隊……」

スレイプニル』を率いていた

私も『白騎士事件』の戦闘空域……【円卓】に居た

当時、軍でも最強と称されていた私たちは無惨にも白騎士に敗れた

……

私も『あの時』、お前に助けられた一人だった訳だ……

だから、感謝している」

「……………中佐、感謝される事をした覚えはありません。あれは俺の独断なんですよ?」

するとアルマ中佐はふと、笑みを浮かべて言う

「【フランチェスカ】だ、今は私と二人しか居ないからな。ただし、それ以外の時には必ず『中佐』と『敬語』を使って貰うからな？【ジェイソン】」

「……了解、【フランチェスカ】」

そうやって、俺はアルマ中佐……【フランチェスカ】は握手を交わそうとしたが……何故か、フランチェスカは俺の差し出した腕を絡めるようにして抱き付いた

「……フランチェスカ……何してんだ？」

するとフランチェスカはこう言った

「何、握手なんかで掌の感触よりも『こっち』の方が良いだろう？
私とお前との仲だしな」

そういつて、フランチェスカはその豊満な胸で俺の腕を挟み込む

「いや、そりゃあ……そっちの感触の方が……って、私とお前の仲
って……」

その時だった

俺の背後から、今までに感じた事の無い『恐怖』が居たのは……
・「ほほう……アルマ中佐に呼ばれていったから、どんな要件かと思
思ったが……随分と楽しそうだなあ……ジェイソン？」

声の主の方へと振り返れば、そこには――腕を組んで静かに微笑みながら、こちらを見る千冬が居た……但し、目だけは一切、笑っていないかったが……

「おや、『織斑 千冬』殿ではないか？ 随分と物騒な雰囲気を出してるが……大丈夫ですか？」

ニヤリッ、と笑みを浮かべて更に抱き付いた俺の腕を自らの胸で挟み込む

「いえ、心配には及びませんよ…『アルマ中佐』、ですが……ジエイソンの腕に抱き付くという行為に関しては、二人の会話の内容は存じておりませんが必要な事でしょうか？」

互いの呼び方にやたらと力が込められているのは気のせいだろう…

…少なくとも、今はそう願う

「何、この行為に関しては『私とジェイソンとの仲』では挨拶代わりだ。それに古来の人は『気に入った異性を腕尽くで虜にした』という……だから、私もその古来の伝統に従った訳だ」

「アルマ中佐、今の世界では個人の意志を尊重するという常識をお忘れみたいですね……それに『ジェイソンとの仲』については、私の方が深い間柄だと自負しておりますが？」

嗚呼、俺は何時までこの二人の間に居なければならぬのだろうか

……

「……なあ、取り敢えず……お互いに冷静になってから……」

俺がそう口にした瞬間……

「お前は口を挟むなッ!!」

相当、頭に血が昇っているのかは知らないが……千冬とフランチェスカ、両名の拳が勢い良く俺の顔面へと炸裂

その結果、俺の意識は当たり前の様に刈り取られていった……

余談だが、これまでに衝撃^{ショック}で気絶した事は三回、ある

-
-
-
-
-
-

最初のは海軍にて、パイロットになる前だ

「普通、パイロットとなるには様々な適性検査などを行うが、特殊偵察部隊ではキミの噂は幾度となく聞いている。その為、技術と精神、知識面においては文句なしで合格だ

だから、簡易的な【衝撃テスト】を行う」

「【衝撃テスト】？」

椅子に座り、上官と試験官（何故か、医師^{ドクター}まで居るが）の方へと向いた俺の目に映ったのは……

試験官が持つ木製の野球バットが俺の顔面に炸裂する瞬間だった

「こりゃ、凄いな……二分も経たない内に意識を取り戻したぞ」

「おめでとつ、テストは合格だ。パイロットになれるぞ」

……等と抜かす連中に殺意を覚えた俺は悪くない筈……

-
-
-
-
-
-
-

あれは千冬と友人に近い関係となった頃……多少、世話になる事も
ある織斑家に差し入れをしに行った時だ

その時、広間では一夏と会えたが千冬の姿が無く、一夏曰わく「久
々に千冬姉、仕事が休みだから、まだ寝てるんじゃないかな？」と
言い、俺が千冬を起こしに行く事となった

千冬の部屋の前に着くと俺はおもむろに扉を開けた（この時、ノッ
クすれば良かったが……）

そして、俺が見たモノ……着替え中なのか、黒い下着姿の千冬だ
った。そして、互いの視線が交差する

「……やっぱり、黒が似合うよな？」

「み、見るなあああッ！……」

……と、千冬の拳が俺に炸裂して意識を一瞬で刈り取った時

-
-
-
-
-
-

そして……今現在、千冬とフランチェスカの二人の拳を喰らった時だ

因みに分かると思うがこれが三度目の気絶だった

回想 ・ 【出来損ない】と呼ばれし少女 ・ (前書き)

相変わらずの駄文かつ超ご都合主義が冴え渡る話です

そんな駄目な作者ですがよろしければ、これからもよろしくお願
い
します……

回想 ・ 【出来損ない】と呼ばれし少女 ・

三度目の気絶から、数日後……

千冬が教官を務めるIS配備特殊部隊『シユヴァルツェ・ハーゼ』
――『黒ウサギ隊』は正に優秀だった

教官を務める千冬の教導は、基礎を徹底的に身体に染み込ませると
いう従来の教導スタイルだった

確かに優秀なIS操縦者と言えど、基礎を蔑ろにすれば、ロクな結果にはならないだろう。それは俺が戦闘機乗りである頃と同じだ

だが、ISは高性能な代物だ。操縦者の実力以上の力を発揮させる
- - -しかし、基礎を徹底して身体に染み込ませた操縦者がISを
操縦するならば、ISを完全に操る事が可能だろう

千冬もISという存在をよく知っている。そして、人間性能の限界
というのも充分に理解しているからこそ、教官としての指名を受け
たのだろう

この教導スタイルはISに最も有効だと、俺は思う

男である俺はISについては、全くの専門外だが……稼働時間に比
例して、上達するらしい。だから、回数を重ねての教導を千冬は繰
り返した

この点については、筋トレと同じモノだろう。より、ハードなトレ
ーニング内容よりも軽いモノで回数を重ねれば、効果があるようにな

俺の仕事は教官を務める千冬の補佐

とは言っても、ISを使う事が出来ない俺には教導を受ける『黒ウサギ隊』の隊員たちの適性資料の確認くらいの仕事だった。無論、『女尊男卑』の世界では……どこに言っても男の肩身は狭い

『黒ウサギ隊』の連中からは何故、男である俺が千冬の補佐を務めているのか、理解に苦しむ表情を浮かべられていた

だが、そんな中で俺は一人のIS操縦者の資料を見付ける

名前は『ラウラ・ボーデヴィツヒ』

まだ幼いながらにして、少佐の階級と『黒ウサギ隊』の隊長の座に着く少女だった

功績はあらゆる兵器の操縦方法や戦略等を体得し、常に優秀な成績を誇るといふ驚くべきモノだ

しかし、資料にはISの登場以降、今までの成績とは打って変わり、全て基準以下の成績となっていた

IS操縦者である時点で、少なからずはISに対しての適性はあるのだろう

だが、俺はそれ以上に引つ掛かる点があった

あの若さにして、以前の成績は不釣り合い過ぎる……過去に某国では、中国の一人っ子政策で男を望む家庭から生まれた娘が孤児院に送られるのに目を着けて、秘密裏に養女として引き取るという事をしていた

引き取った娘に様々な戦闘と殺人技術を仕込ませて、一切の感情も無く任務を確実にこなす【冷徹な機械】にする為にだ

しかし、あの若さでそこまでの技術を体得できるとは思えない。生まれながらも特殊な能力を持つ【転生者】である俺ならば、まだしもだ……

何かが引っ掛かる……俺はそう感じた

-
-
-
-
-
-

後日、俺はフランチェスカに『ラウラ・ボーデヴィツヒ』について
聞いたでした

そこで知ったのは、更に驚くべきモノだった

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』は、かつてドイツが研究していた遺伝
子強化の試験体として生み出された存在 - - - 所謂、『試験管ベビ
ー』であり、戦うための道具としての存在という事だ

IS登場以降、成績の急激な悪化の理由は - - - 『ヴォーダン・オージェ越界の瞳』と呼
ばれる疑似ハイパー・センサー仕様のIS用補佐ナノマシンを左目
に移植した際の不適合である事を知った

『越界の瞳』^{ヴォータン・オージエ}とは、IS適合性の向上のための処置の一環で、『脳への視覚信号の伝達速度の飛躍的な高速化』、『超高速戦闘下での動体反射を向上』を可能にする代物らしい。理論上、不適合などのリスクはないと言われたが……

現に移植された『ラウラ・ボーデヴィツヒ』の左目は金色へと変色、制御不能となった。

その後、あらゆる訓練において後れを取る事となった今では……【出来損ない】という烙印の象徴となってしまうた

(因みに『黒ウサギ隊』の隊員たちは、全て『越界の瞳』^{ヴォータン・オージエ}の移植者であり、肉眼の保護と部隊の誇りとして眼帯を装着している)

-
-
-
-
-
-

その話を聞いた俺は、フランチエスカと千冬を呼び出して『ある頼み』をした

もしかしたら、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』……彼女に同情したからかも知れない

だが、それ以上に俺は気に食わなかった

テメエ等の都合で作り出しておいて、自分たちの期待通りに行かなかったら、【出来損ない】と呼ぶだと……？

俺はこの世で我慢ならない事は三つある

『仲間を見捨てる事』

『裏切る事』

そして、何よりも……

『命を軽々しく扱う事』だ……

-
-
-
-
-
-
-

それから、暫くすると『黒ウサギ隊』の教導成績にて、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』の成績は徐々に頭角を表し始めた

他に変わった事と言えば……

「う……長……た……隊長ッ！」

ふと思考の海に意識を沈めていた俺を『隊長』と呼ぶ声により、俺は意識を引き戻す

そして、その声の主の方へと向く……そこには……

「『ラウラ』、その『隊長』って呼び方はどうにかならないのか？
階級はお前の方が上なんだぞ？」

そう、今や名実ともに『黒ウサギ隊』隊長……IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』きつての実力者の座へと返り咲いた『ラウラ・ボーデヴィツヒ』が居た

「いえ、私にとって『隊長』と『教官』は【出来損ない】と呼ばれた私を再び、今の座へと返り咲かせてくれた恩人ですので……それに、フランキー中佐から隊長の軍歴や率いていた部隊についても聞いております。

如何なる状況下においても仲間を見捨てずに勝利へと導く……『生粋のエース【ACE OF ACE】』と呼ばれた隊長は私にとって、理想の隊長像ですから」

相変わらず、堅苦しい奴だな、コイツは………というよりも口が軽いぞ、フランキー………

俺は『ラウラ』の隣に居る『黒ウサギ隊』副隊長……『クラリッサ・ハルフォーフ』へと目を向ける

「『クララ』、お前から何とか言ってくれないか？」

「無駄だと思いますよ？ 隊長はシーガーさんを織斑教官と同じくらい、慕っていますから」

そう言って、『クララ』は静かに微笑む

-
-
-
-
-
-

あの時、俺は『ラウラ・ボーデヴィツヒ』についてを知った後、千冬とフランチェスカに頼んだ事……『ラウラ・ボーデヴィツヒ』を俺と千冬が再び、部隊長の座……『最強』へと返り咲かすというモノだった

フランチェスカはそれを笑いながら、承諾した。『頂点^{トピック}から【出来損ない】へと墜ちたエースを再び、頂点へと戻す為に鍛え直す』という俺の考えを気に入った様子だった

基本的にIS関連は千冬が担当、俺の担当は従来の空中戦の基礎、体力と精神面の向上だった

既に『ラウラ・ボーデヴィツヒ』はあらゆる兵器などの操縦方法を体得している為、その応用をISに生かした訳だ

空中戦の基礎に関しては俺が『Top Gun』時代に経験した内容を活用した。それに『Top Gun』とは【空中戦再教育】の為、設立されたモノだしな

教導スタイルは『Top Gun』と同じ……日に二度の実戦訓練、合間を縫つての学科とテスト……実戦訓練に関しては最強のIS操縦者『織斑 千冬』が居るから、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』は日が経つに連れて、成長を果たしていった

徐々に本来の実力を取り戻していく『ラウラ・ボーデヴィツヒ』は千冬の事を『教官』と、俺の事は『隊長』と呼ぶようになり、俺らも『ラウラ』と呼ぶようになった。因みに最初の頃、俺は泣いていた（一応、以前の俺の階級は大尉であり、ラウラは少佐であったからだ）

だが、涙目で俺を見上げて『隊長……駄目なんでしょうか……？』なんて【反則技】を使われて、俺は折れるしか無かった（まだ子供である年齢の少女に、そんな目で言われた時の罪悪感がハンパなかったからだ……）

『黒ウサギ隊』副隊長……『クラリツサ・ハルフォーフ』との出会いはラウラの教導中でのモノだった

千冬と共にラウラへ全力でサポートする俺を見て、この『女尊男卑』の世界に居る『過去の栄光に縋り続ける情けない男』たちとは違い、『女尊男卑』の世界でも、周りからの目を気にせずに堂々とする俺の姿に信頼できると思っただらしい

元々、階級も同じ『大尉』であつた為か、直ぐに俺は『クララ』と呼ぶようになった（だが、この時にラウラと千冬がやたらと不機嫌だつたのは謎だ……）

.....

それから、隊長である『ラウラ』と副隊長である『クララ』からの信頼を得た俺は徐々にだが、他の隊員たちにも信頼され始めていた

千冬曰わく『お前の兄貴的な人柄も理由の一つだろうな』らしい

確かに信頼を得た隊員の何人かは『お兄様』だの『アニキ』だの『お兄ちゃん』だのという奴も居たがな（その時、千冬やラウラたちは『またオトしたのか……』、『ライバルが……』、『朴念仁……』等と良く分からない事を呟いてたな）

ドイツでのそんな教導の日々を送る中、俺は『思わぬ再会』を果たす事となった

それが、千冬やラウラたち……何故か、『黒ウサギ隊』の隊員たちがやたらと不機嫌になる事になるのだが……

回想 ・ 【出来損ない】と呼ばれし少女 ・ (後書き)

次話では、『女性の嫉妬は恐ろしい』というのが主題となる予定です

『思わぬ再会』で登場する人物は、既にお分かりでしょうけど……

回想 - 【思わぬ再会】と【復職】 -

ドイツ軍での教導を始め、半年の月日が過ぎた

私 - - 『織斑 千冬』は私の補佐官として、私と共に教導を受け持つ彼 - - 『ジェイソン・シーガー』と共に半年の月日を過ごしたのだ

ジェイソンは私にとって、束以外に親友といえる間柄だ。しかし、私は彼に - - その - - 少なからず、好意というモノを持っている - -

いや、私以外にも私と彼の教え子となっている『シユヴァルツェ・ハーゼ』 - - 『黒ウサギ隊』の隊員たち、隊長を務めるラウラや副隊長のクラリツサ - - 私の古くからの親友 - - 『篠ノ之 束』も好意を持っているのだろう - -

ジェイソンはISという存在 - - この『女尊男卑』の世界に翻弄

された男だろう……かつて『生粋のエース』と呼ばれていた男が、これまでの栄光を奪われ、空から墜ちてしまったのだから……

だが、彼は自分が行ってきた事に後悔など無い、と言った。ISを操る私たち、今の『女尊男卑』の世界では様々な面での主役となっている女性を一切、恨むことは無かった

他の男性ならば、かつての栄光に縋り続けるか、これまでの主役という座を奪った『女尊男卑』の世界を恨み、女性を憎むのが大抵なのだろう

しかし、彼は常に堂々として今の世界に屈すること無く、自分を貫き通している……そんな彼に私たちは惹かれたのかも知れない

半年の月日が過ぎた今では、私が仕切っていた教導に彼も教導を受け持つ様になっていた

また、以前まではジェイソンの事を『女尊男卑』の風潮か、快く思

わなかつた隊員たちも今では、ジェイソンの教導を真剣に取り組んでいる

教導については、IS関連のモノは男であるジェイソンには専門外である為、私が担当を受け持ち、体力面と精神面の向上を兼ねてのトレーニングはジェイソンが担当している

元々、軍人であるジェイソンにとっては、正に適任だろう。しかし、流石は元エース・パイロットというべきか……

彼のトレーニング内容は『少々、酷なモノ』だった

- - - - -

「おらおらッ！、最後くらいは気合いを入れて走れよな？ もし、一人でも脱落したら……もう1セット追加だぞッ！！」

今、俺は基地内の滑走路にてトレーニングを行っていた

滑走路の距離は片道でおおよそ、3000〜4000m程。片道一回を1セットとして、計2セット（往復一回）のランニング形式のトレーニングだ

これでも、充分に譲歩した方だ。昔の男だらけの部隊では少なくとも、4〜5セットはやっていたからな

俺と千冬も勿論、このトレーニングには参加している。サボる奴が居る訳では無いが、ただ隊員たちだけを走らせて激を飛ばすのは俺の性分じゃないしな

トレーニングを終えた頃には隊員たちは皆、滑走路の上に寝転ぶよ

うに仰向けとなって倒れ伏す。ラウラやクララ、千冬も若干は息をきらすも他の隊員たちと比べれば、まだ余裕がある様子だ

「ほら、全員に俺からの差し入れだ」

そう言つて、俺はクーラー・ボックスに入れてある人数分のスポーツ・ドリンクを手渡す

毎回、俺がやる^{トレーニング}教導を終えた際に必ず、差し入れる定番となっているがな

「ふう……毎度の事だが、お前の自腹でこの人数分の差し入れは厳しいんじゃないのか？」

手にしたタオルで汗を拭いながら、千冬は俺を見る

「何、軍での給料は殆ど使い道が無くてな。多くあっても困るモノ

じゃないが……

これ位の差し入れて、アイツ等（隊員たち）の笑顔が見れるんなら、惜しくも何とも無いさ」

俺は笑いながら、憎たらしい位に晴れ渡る空を見上げる

以前まで遠く感じていた空が今はやけに近く、俺は感じていた

- - - - -

ジェイソンのトレーニング指導を終えた私たちは、ジェイソンからの差し入れてあるスポーツ・ドリンクでの水分補給をしていた

私も日本代表のIS操縦者として、普通の人間よりは、体力はある方だと自負していたが……あのトレーニングを平然とこなし、汗一つすらかいていないジェイソンの体力は異常だろう

以前、日本に居た際、剣道での模擬戦をジェイソンと行ったが……三時間以上の長期戦となった際もアイツは平然としていたな。それ以前にアメリカ出身であるジェイソンはあまり剣道を知らなかったが、いざ模擬戦を開始すると型などは無茶苦茶だったが、私と互角に渡り合った

元は軍人である以上、戦い慣れているのだろう。ジェイソンは長年剣道を経験している私から見ても申し分ない実力を誇っていた

132

「教官、隊長はあれだけのトレーニングに平然としていますが……何か、秘訣でもあるのでしょうか？」

私の隣で休んでいたラウラはジェイソンを見つめながら、私に問う

「いや、アイツの場合は秘訣というよりも習慣だろうな。

プロの演奏家は毎日、欠かさずに楽器を引くという。常に演奏の感覚を忘れない為にもな

アイツも同じだ、軍を離れた後も毎日、欠かさずに鍛錬を続けているらしい」

「成る程……常に自分を甘やかさず、厳しくする……私も見習わなくては……」

……ジェイソンの言う通り、堅苦しい奴だな……

ふと、ジェイソンを見ると他の隊員たちから何やら会話をしているジェイソンの姿があった。隊員は皆、笑顔でジェイソンとの会話を楽しんでいる様子だ

皆、ジェイソンの冗責的な人柄に惹かれているのだろう。毎回、わ

わざわざ差し入れを自腹で用意する男だしな

私はそんな風にジェイソンの事を考えているのが習慣となっている事に気付かないでいた

.....

俺が受け持つ^{トレーニング}教導を終えた後、俺はフランキー中佐・・・フランキエスカに呼び出されていた。詳しくは知らないが……何やら、仕事上での話らしい

「フランキー中佐、何か御用でしょうか？」

俺は敬礼をフランキエスカに向け、質問する

「……今、私のオフィスには私とお前の2人つきりだ。だから、その堅苦しい挨拶は止める、ジェイソン？」

「……仕事上での話って聞いたが……俺に何の関係があるんだ？」

するとフランチェスカは、一つの資料を取り出すと俺に手渡す

「今日、この基地に二人のIS操縦者が到着する。どちらもアメリカからだ

一人は米軍のテスト操縦者、もう一人はアメリカ代表の操縦者だ。理由については二人が来てから話すが……お前が居なくては話にならなくてな……」

俺は手渡された資料へと目を通す……が、そのテスト操縦者の項目を見て固まる

「後、三十分で到着する予定だ。資料にもあるが、アメリカ代表の操縦者の名は『イーリス・コーリング』、テスト操縦者の方は元空軍所属でエース・パイロットだったようだ」

名前は……………」

少なくとも、アメリカ代表の方の名前は知らなかった。俺が除隊した後にアメリカ代表となったからだろう

だが、テスト操縦者の方は知っている……………いや、お互いに『知りすぎている』というべきか

「……………悪いが、この後で格納庫ハンガーの整備兵たちとポーカーの約束が……………」

「却下だ、それに言った筈だぞ？」

お前が居なくては話にもならないとな」

逃げ場無し……………しかもよりによって、此处で会う事になるとはな……………」

俺が手にしている資料に書いてある項目……テスト操縦者の名前はこう書いてあった

『ナターシャ・ファイルス』

……べつやら、俺の運とやらは、これまでには無い位に最悪のようだ

……

- - - - -

そして、三十分後……

俺にとっての【公開処刑場】と成り得るこの格納庫で、千冬とフラ

ンチエスカ、ラウラたち『シユヴァルツェ・ハーゼ』の隊員一同が、到着した二人のIS操縦者……『イーリス・コーリング』と『ナターシャ・ファイルス』に目を向けている

あえて言っておこう。正直、ナターシャの奴が何を言い出すのか、気が気では無い事を……

「……という訳だ。質問のある者は挙手しろ」

フランチエスカの声で意識を引き戻すと、どうやら二人についての紹介を終えたみたいだった

「はい、お二人はアメリカ出身であり、ファイルス操縦士は米軍のテスト操縦者と聞いておりますが……お兄さ……ジェイソン・シーガ―補佐官とは面識があるのでしょうか？」

危うく、俺の事を『お兄様』と呼び掛けた隊員が挙手し、二人に質問を問い掛ける。よりによって、ピンポイントでかよ……

俺は一同から少々、離れた場所に居たが懐にしまっていたパイロット・グラスを取り出すとソレをかけて、なるべく視線を合わせない様にする

「私は面識は無いけれども……『ナタル』の方が詳しいんじゃないかしら？」

「そうね……【ジェイソン】と面識はあるんだけど……何て言えば良いかしら……？」

焦らすような口調で微笑みを俺へと向ける

俺の脳内では警告音アラートが鳴り出して、止まらない

《メーデー、メーデーッ！！ 捕捉ロックされたッ！！》

「そう……お互いに、『よく知っている仲』かしら？」

《敵機、ミサイルを発射ッ！！ 繰り返す、ミサイルを発射ッ！！》

「『よく知っている仲』……ですか？」

「ええ、何故なら……私と彼は【恋人】だったんだから」

《被弾したッ、被弾したッ！ 離脱できないッ、墜落するッ！！》

「ほほう……それは中々、興味深いモノだな……？」

千冬が俺に視線を向けると同時に一同、全員が俺を見る

「……人違いではないでしょうか？ 同姓同名という可能性が……」

俺は視線を逸らした状態で言う

「あら、最後の夜は二人でベッドの上であんなに激しく……」

「すまん、俺が悪かったから、それ以上は言うな……」

ここからが良いところなのに……、と呟くナターシャ

「「ジエイソン……」」

振り返れば、聖母と表現すべき微笑みを浮かべる千冬とフランチェスカが居た……但し、その目だけは一切、笑っていなかったが

「後で詳しく話を聞こうじゃないか……？」

「……了解……」

そんな二人を前にNOと言えるだろうか？

間違いなく不可能だろう（しかも、ラウラを含む『黒ウサギ隊』のメンバーは涙目で俺を無言のまま、見つめるのだから罪悪感は何となくいなままでにハンパない……）

だから、此処では会いたくなかったんだ……

修羅場と化した格納庫で俺は思った

- - - - -

場所は変わり、『黒ウサギ隊』を除く俺たちはフランチェスカのオフィスに集まっていた

無論、一時間前までは千冬とフランチェスカの質問（いや、尋問か？）があつたのは言うまでもない……

「それでは、改めて自己紹介をしよう。

私は『フランチェスカ・アルマ』中佐、この基地での全権と責任を任されている

【ジェイソン】とは『深い間柄』でもある「

「私は『織斑 千冬』、日本代表のIS操縦者であり、今はこの基地での教官を務めている

【ジェイソン】とは『親しい間柄』とでも言うっておこう「

やたらと『間柄』を強調する二人……何故、間柄にこだわるのかは不思議だがな

「それじゃあ、此方も改めて……」

私は『イーリス・コーリング』、アメリカ代表のIS操縦者よ

^{ジェイソン}
彼とは初対面ね」

「そして、私は『ナターシャ・ファイルス』、元空軍所属のエース・パイロットであって、米軍のテスト操縦者でもあるわ

彼とは【恋人】であって、『誰よりも深い間柄』と言っておきましようかしら？」

やたらと【恋人】というのを強調するナターシャ……頼むから、これ以上に二人を焚きつけるな

火に油なんてレベルじゃないぞ……最早、核弾頭を放り込むと同等だぞ……

そして、四人の視線は俺へと向けられる

「……『ジェイソン・シーガー』元大尉、第314戦闘攻撃飛行中隊……『ファントム隊』隊長を務め、今は千冬の補佐官を務めている……」

そこに居るナターシャとは……【元恋人】だった……」

「そう、ジェイソンには【何度も】抱かれているわ」

ナターシャ……頼む、五分で構わないから二人を焚きつけるな……」

「……まあ、その話については『後日、ゆっくりと』聞かせて貰うとして……」

フランチェスカは仕事の話へと切り替える……その表情は『フランチェスカ』では無く、『フランキー中佐』のモノになっていた

「わざわざ、二人にアメリカからドイツまで来てもらった理由は……先程、格納庫にて説明した我が軍のIS配備特殊部隊……『シユヴァルツェ・ハーゼ』の監査という訳だが……」

それは『表向き』だ。本当の目的は『ジエイソン・シーガー』元大尉、貴官だ」

「俺が……ですか？」

するとアメリカ代表のIS操縦者、米軍のテスト操縦者……『イリス・コーリング』と『ナターシャ・ファイルス』は、こう告げた

「ISとその技術が兵器としても普及した現在では、軍や国防にも多くの女性たちが要職についております」

『ISに対抗できるのはISだけ』

その考えから、このドイツ軍でのIS配備特殊部隊『シユヴァルツ
エ・ハーゼ』の様に各国では様々なIS配備の部隊結成、最新機の
共同開発などに力を入れている傾向があります」

『イギリス・コーリング』の説明の後に続け、ナターシャは言う

「ですが、過去に起こったあの『白騎士事件』……あの事件の際、
今までは極めて、少数の人物しか知らない【ある事実】が最近とな
って判明しました

かつて、世界最高峰の腕を誇ったパイロット……あの白騎士とも唯
一、互角に交戦した戦闘機乗り……【ACE OF ACE】と
いう存在を

国際IS委員会は、ISを使わずに対抗できる世界で唯一の存在 -
- 【ACE OF ACE】の詳細を全権を使用して、あらゆる
方面を調べ上げた結果……ようやく辿り着いた訳です

第314戦闘攻撃飛行中隊『ファントム隊』隊長、『生粋のエース

【ACE OF ACE】と呼ばれたジェイソン・シーガー元大尉、貴方にね」

そして、彼女……ナターシャは言った

「ジェイソン・シーガー元大尉、国際IS委員会の命により、かつて貴官に言い渡された軍籍を含む軍歴の剥奪と不名誉除隊を取り消し、貴官を【復職】させます

但し、海軍としてではなく……国際IS委員会……【国連】所属の『フリー・パイロット』、所謂『傭兵』としてですが」

それは俺にとっての……【復職通告】だった

回想 ・ 【ACE】の条件 ・ (前書き)

空中戦などのスカイ・アクション物の執筆は今回が初の試みなので、
表現が曖昧となって難しい……

そんな作者ですが、よろしければ今後ともよろしくお願いします……

回想 ・ 【ACE】の条件 ・

【復職通告】から翌日……

俺は今や、国際IS委員会……【国連】所属の『傭兵』となった
訳だ

一つ、疑問に思った事は……よくアメリカ軍はソレを容認した事だ、
一度は除隊したパイロットを使うのをな

だが、ナターシャ曰わく……当時、俺に判決を言い渡した上層部た
ちは『女尊男卑』の影響で俺が除隊して直ぐに上層部の席を降ろさ
れた

また、同時の判決は軍の法律では無く、私情を挟んだ上での身勝手
な不当判決である、という事で当時の上層部のメンバーには批判も

あつた為か、皮肉にも連中は俺に言い渡した『軍歴の剥奪』と『不名誉除隊』となつたらしい

まあ、その点に関してはあまり興味は無かつた。どこかの言葉にもあるが……『人を裁いたら、自らもその秤で裁かれる』

つまり、それ相応のツケはいずれ、ソイツ等にも回ってくるモノだと考えていたからだ

そして、国連所属の傭兵となつた俺は今……ドイツ山岳地帯の上空に居る

-
-
-
-
-
-

話はこうだった。国連はパイロットとしての俺の腕を買った、しかし、俺は除隊から数年はもう一度も飛んでいない

そこでかつての腕を取り戻す為、訓練という名目で再び、こうして空を飛んでいる訳だ

- - - - -

晴れ渡った大空の下で俺は搭乗する機体、フランチェスカが戦闘機乗りであった頃の愛機『S u - 3 3』 - - - 通称『フランカー』の操縦席にて、再び大空を飛ぶ喜びを噛みしめていた

《ファントム1 こちら、フランキー中佐だ。聞こえるか?》

《こちら、ファントム1 感度良好》

コックピット
操縦席内に無線での俺らの会話が響き渡る

《ジェイソン、お前にはかつての腕を取り戻す為、『相手』を用意している》

《『相手』……無人機（UAV）か？》

《直にお前の正面に現れる。精々、頑張ることだな》

俺はリーダーに映る前方の機影を確認する

そして、前方へと視線を向けると……

《……おい、数年間の空白フランクを抱えてるパイロットに一国を代表する『IS操縦者』を相手させる気か？》

俺の前方に居る『相手』……アメリカ代表のIS操縦者『イーリス・コーリング』がISを展開した状態で居た

《何、私はスパルタ流でな。それに人間、極限にまで追い込めば何でも出来るだろう？》

嗚呼……今、絶対に笑顔で言っているよな、フランク……

《それじゃあ、始めましょうか……【ACE OF ACE】さん？》

前方に居る『イーリス・コーリング』からの無線が入る

……まあ、何とかなるだろう。これまでもそうだったしな

《お手柔らかなにな……ルールは一般的なモノだ『捕捉された方の負け』、問題は？》

《いいえ、じゃあ……始めましょう》

その言葉と同時に俺と『イリス・コーリング』の模擬戦が開始される

-
-
-
-
-
-

ISと空中戦を挑んだのはコレで二度目だ

模擬戦を開始すると同時に驚異的な機動性で『イーリス・コーリング』に背後へと着かれた俺はそう思いながら、スロットル・レバーを押し込み、エンジン出力を上げる

端から見ても遊ばれているとしか言いようが無いな……コレは……

俺は速度を加速させ、迫るIS……『イーリス・コーリング』を引き寄せる

徐々に距離は狭まる中、俺は『高機動旋回』……【ハイGターン】からの宙返りで『イーリス・コーリング』の背後へと回り込む

回り込むと同時に俺はミサイルから機銃へと武装を切り替え、前方の『イーリス・コーリング』への捕捉を開始する

だが、ISと旧来の戦闘機とはあまりにも機動性は違いすぎる。
『イーリス・コーリング』は左方向へと急旋回、此方からの射程外へと移動する

徐々にかつての勘を取り戻していく俺は、相手の左方向への急旋回とほぼ同じタイミングで急旋回、ピッタリと背後へ回り込む

身体に刻み込まれた……かつて、数多の激戦を潜り抜けてきた経験が俺を支配する。脳裏ではあの『白騎士事件』で行った数々の戦闘機動が繰り返して再生される

徐々にISの機動性に慣れ始めた俺は捻りを加えての急降下を開始急降下した俺に続けて『イーリス・コーリング』も雲の中へと入っていった……

- - - - -

私 - - - 『イーリス・コーリング』は侮っていたと実感した。『ナ
タル』の恋人だった男性 - - - 『ジェイソン・シーガー』の実力をだ

この模擬戦を始める数十分前、基地の格納庫で『数年振りに戦闘機
を操縦するな』、と苦笑いを浮かべて戦闘機の操縦席へと乗り込ん
でいった彼

だが今、私が相手をしているのは【ジェイソン・シーガー】という
男性では無く……『生粋のエース』 - - - 【ACE OF ACE】
と呼ばれた戦闘機乗りだった。ISを操縦する私の背後へと回り込
み、今も背後に着いている

捕捉されない様、急旋回を開始すれば、まるで予知しているかの様
に同じタイミングでピッタリと着いてくる

これが【ACE OF ACE】の実力……

ISと旧来の戦闘機という圧倒的な機能性の差を覆し、今にも私を撃墜すると言わんばかりの勢いで迫ってくる

私は『ISに対抗できるのはISだけ』と彼に言った

だが、現に彼は戦闘機でISに対抗している。それは覆しようの無い事実

すると、今まで私の背後に着いていた彼の搭乗する戦闘機は突如として、急降下を開始すると雲の中へと入っていった

私は好機と思わんばかりに雲の中へと入っていく

雲の中は、当たり前のように視界が悪く、彼の機体すら見えない

私はISに備わっている『ハイパー・センサー』を使い、機体の位置情報補足を行う

すると直ぐに反応は表していた。しかし、その反応は私自身だった

何故？ センサーの故障なのか？ 何故、私自身を表している？

混乱する私に映る視界に一瞬、陰りが表れる……まるで私の上を『何か』が覆い被すかの様に

私は頭上を見上げた。そして、ソコには……

《よお、何をボサツとしてんだよ?》

背面飛行で操縦席越しから、私を見下ろす彼が居た

-
-
-
-
-
-

背面飛行での状態で、『イーリス・コーリング』を操縦席越しから
見下ろしながら、俺は考えた

ISというのは極めて、高性能な代物だ。搭載されたセンサー類も従来のモノとは比べ物にもならないだろう

『ISに対抗できるのはISだけ』

それは間違っではない……でもな、

《人が作り出したモノだ、やり方次第ではどうとでもなるモノなんだよ》

俺は背面飛行から機体を水平に戻すと加速、雲の中から抜け出す

続けて、『イーリス・コーリング』も雲の中から抜け出し、俺を追い掛ける

ある程度の速度に達すると俺は垂直上昇飛行を開始、上昇時にかかるGにより、身体中が軋む……しかし、俺にとってはその軋む音でさえ歓喜に感じる。自分が飛んでいる事を改めて、実感できるからだ

太陽を背にした状態で俺は下方に居る『イーリス・コーリング』の真上を飛んでいた

そこで、ある考えが浮かんだ

ISとは元々、次世代型の宇宙服として開発されたモノ。以前、千冬から聞いた話では地上200mの距離からでも、下に居る人間の眉先すら見えるらしい

今、俺は太陽を背にしたまま、本来は『イーリス・コーリング』にも降り注ぐ日差しを機体で覆い被している状態だ。ならば、ソレを利用できるのでは？

賭けに近い考えを俺は行動に移す。『イーリス・コーリング』が上昇を開始すると同時に機体を旋回、覆い被していた強烈な日差しが『イーリス・コーリング』へと降り注ぐ……すると僅かだが、『イーリス・コーリング』の動きが一瞬、鈍くなる

すかさず、俺は急降下から背後へと回り込む。降下中に用意していた捕捉を開始……鈍くなった動きが回復した頃、俺の機体は前方の『イーリス・コーリング』を捕捉完了ロック・オンしていた

-
-
-
-
-
-

私……『ナターシャ・ファイルス』はたった今、帰投したばかりの元恋人だった彼……『ジェイソン・シーガー』のトレーニングを見ていた

戻ってくると同時に彼はトレーニング・ウェアへと着替えてトレーニングを開始。そして、今に至る所だ

「戻ってくると同時にトレーニングって……随分と凄いわね？」

背後からの言葉に振り返ると、そこには――先程、山岳地帯上空でジェイソンに翻弄されていた『イーリ』が居た

「彼は昔からそうなのよ。晴れの日には飛ぶかトレーニング、雨の日は整備かトレーニング……絶えず、鍛えるのが日課ね」

「随分と努力家なのね？」

そんな会話をしている私たちの側へとトレーニングを終えたジェイソンが近寄る

「……はあ……ナターシャ、タイムは……？」

私は先程まで計測していたタイムを確認する

「2時間10分ジャスト……100KMマラソン（ウルトラ・マラソン）をそんなタイムで終えるのは、『ジェイ』くらいじゃないかしら。」

「100KMを2時間10分って……最高記録でも、6時間はかかるけど？」

若干、汗を流すものの平然としているジェイソンに私たちは視線を向ける

「まあまあだな……取り敢えず、俺は汗でも流してくる」

そう言っつて、滑走路を後にしていった

「……凄いわよね、彼っつて…」

ジェイソンの後ろ姿を見つめながら、イーリはそう言っ

「……昔、ジェイは言っつたわ。『エース』は三つに分けられるっ
てね」

「三つ……？」

「ええ……そう三つ…」

『強さを求める者』

『プライドに生きる者』

『戦況を読める者』

……この三つよ。ジェイは……そう、『戦況を読めた上で強さを求めて』、エースと呼ばれたのよ」

そして、私も滑走路を後にする前にイーリに言う

「それと……彼に魅せられたら……『墜ちる』しか無いわよ？」

その直前、イーリからの小さな呟きを私は確かに聞いた

『……もう手遅れかもね……？』

また、『ライバル』が増えた訳ね……でもね……

そう簡単には渡さないわよ？

- - - - -

基地のシャワー室にて、先程まで行っていたトレーニングでかいた汗を流す

数年振りの飛行に身体中の筋肉が悲鳴を上げている……明日は筋肉痛だな、こりゃ……

だが、俺は満足感に満ちていた。かつての勘と腕を徐々に取り戻していった事にだ

すると俺は背後から気配を感じ取る。俺が此処（シャワー室）に居るのを知った上で来る奴とさえば……

「……ナターシャ、お前か？」

俺は背後に居るナターシャと思われる奴へと振り返る……だが、そこに居たのはナターシャでは無く……

「残念、ナタルじゃないわよ？」

一糸纏わぬ姿……つまり、全裸でバスタオルを身に付けた『イーリス・コーリング』が居た

「……イーリス……悪いな、長居し過ぎだか？」

別に狼狽える事は無い。女の裸はナターシャで見慣れているからな

当たり前だが、かつて恋人だったアイツとは……まあ、恋人同士が『スる事』は何度も経験しているからな

「ふふ……別に気にしないで？ 私は『ジェシー』が居るのを承知で入ってきたんだから」

「……『ジェシー』……？」

「『ジェイソン・シーガー』だから、略して『ジェシー』なの。それとも……駄目だったかしら……？」

イリスは俺の側へと近寄るとその繊細な指先で俺の胸板をなぞる

様に指を滑らす

「いや、別に構わないけどな……」

やけに熱っぽい視線を俺は感じながら、イーリスを見る

「……見事だったわ、ISを翻弄する腕前……実践だったら、今頃は……」

「紛れだよ、それに俺は雲や太陽……環境を利用しただけだ。戦闘機とISの基本性能スペックじゃあ、勝負にすらならないだろ？」

するとイーリスはバスタオル越しから、その豊満といえる胸を俺の胸板へと押し当て、腕を俺の背へと回す

シャワー・ノズルから降り注ぐ温水が絶えず、俺とイーリスを濡らしていく

「…戦況を判断して、自分の居る場所の環境をも利用して、自分の力にする……それはジェシーの実力があるから、成せる事なのよ？」

それにナタルから聞いたわ。『戦況を読めた上で強さを求め』、エースと呼ばれたって……

ジェシーは『エースとしての条件』を二つも満たしてるじゃない？」

「……俺は何時だって、自分をエースとは思っちゃいないぜ？」

俺が【ACE OF ACE】なんて呼ばれたのは……『最高の仲間』たちが居たからだ

できなきゃ、とつくの昔に死んでいる」

イリスは俺を見上げると、その繊細な指で俺の頬を撫でる

「……ジェシーと飛んで分かった事があるわ……」

貴方は常にどんな不利な状況下でも余裕を崩さず、自信に満ち溢れている……それでも、自分の腕を過信し過ぎていないってね……」

「……イリス……俺は……っ……」

「ん……っ……」

イリスは俺の言葉を遮る様に……自ら、唇を重ねてきた

あまりに突然すぎる出来事に俺は啞然としたまま、立ち尽くしていた

五分……いや、十分？

或いはそれ以下かも知れない

それ程、時間が長く感じる間……イリスは俺と唇を重ねていた

「っ……『イーリ』よ。イリスじゃなくってね？」

悪戯が成功した子供の様に嬉しそうに『イーリ』は笑い、俺から離れるところ言った

「今のは『お礼』よ。『ISに對抗できるのはISだけ』じゃない事を教えてくれた事にね、それと……」

『ナタルたちには負けないわよ?』

そう言い残し、イーリはシャワー室から出て行った

一人、シャワー室に残された俺は軽く壁に頭を打ちつける

取り敢えず……今、言える事と言えば……

「千冬たちにバレたら、殺される……」

その場合の自分が被る被害を考え、一気に体温が下がるのを感じた
俺は……

今、浴びているシャワーの温度を上げる事にした……

回想 ・ ・ 【ACE】の条件 ・ ・ (後書き)

次回はドイツ駐在中でのジェイソンの受難(女難?)の日々を題材に更新予定です

さて、ジェイソンは無事にドイツでの教導補佐という仕事をこなせるのか?

ドイツでの教導に加え、国連の傭兵（飼い犬）になってから一週間が過ぎた

本来ならば、国連からの通達と表向き理由としての監査が終わったので任務完了と言う訳なのだが……未だにイーリとナターシャの二人が居るのが謎だ…

理由を聞いてみれば『ここ数年は休み無く仕事をしていたから、【長期休暇】を取った』らしい。ならば、南辺りで休暇を過ごせば良いものを何故、ドイツの……それも軍事基地で過ごすのか？

まあ、余計な詮索は止めておこう。俺の安全の為にもな

ドイツでの教導補佐の仕事は至って順調だった。これも優秀なIS
操縦者たちである千冬たちや部下からの信頼を得ているフランチェ
スカが居てからこそなのだろう

ただ……女ばかりの職場で男である俺が居るからなのかは知らない
が……ロクな目にあわない事が多かった

例えば……

-
-
-
-
-
-

その日は教導が休みであり、俺は与えられた自室で惰眠に貪ってい
る時だった

ふと、眠っている俺は自分の身体に【何か】が纏わり付く感覚で目を覚ます。自室では俺しか居ない筈……

俺はシーツを退け、纏わり付く【何か】を確認しようとする……

「スウ……スウ……」

……と、可愛らしい寝息をたてるラウラが居た。どうやって、鍵の掛かった部屋に入ったのかよりも俺はラウラの格好へと目を向ける
その格好は……待機状態のIS以外、何も身に着けていないモノだった（要するに【全裸】という訳だ）

「おい……ラウラ……」

俺の腹部辺りに抱き枕を抱える様にして眠るラウラを揺する

ラウラが密着する腹部からは暖かな体温と共に小ぶりながらも柔らかな双丘の感触が伝わる

「ん……隊長お……？」

寝ぼけ眼を擦りながら、俺を見上げるラウラ

「……何してんだ？」

「……添い寝です」

「……何故に……？」

理由も無く、男に全裸で添い寝をする奴が何処に居るんだよ……？

「以前、クラリツサから聞きました。日本という国では、慕っている異性が居る場合はその異性と共に添い寝をするという伝統がある

と言つ事を」

……俺も日本には長い間、居たがそんな伝統は聞いた事が無いぞ…

取り敢えず、ラウラに服を着させて部屋へと戻したのだが……俺はその日以降、教導のメニューに【正しい日本文化】という項目を追加する事にした

……

他にも多数、あるのだが……『千冬』と『フランチェスカ』、『イ
ーリ』と『ナターシャ』の四人を挙げる事にしよう…

……

あの時は……そう、教導を終えた俺が夜に一人、街へと繰り出して酒場へと訪れた時だった

丁度、酒場でラジオから流れる音楽に耳を傾けて心地良い酔いを堪能している時にイーリは現れた

「探したわよ、ジェシー……この私を置いていくななんて随分と良い度胸じゃない？」

「お前……どうやって、分かったんだ？この酒場だつてよ」

イーリはカウンターに座る俺の隣へと腰掛ける

「ナタルからはジェシーの趣味や好みについては散々、聞かされたからねえ……」

そりゃ、ジェシーの話を持ち出したら、もう止まらないっつたら、ありやしないわよ……」

注文した酒を煽りながら、ため息を零して愚痴を言い始めるイーリ

イーリの奴、あのシャワー室での一件から急に性格が変わったと思ったら、こっちの方が素らしい。まあ、こっちの性格の方が話しやすいから楽なんだかな

「そりゃ、悪かったな……まあ、飲めって……俺の奢りだ」

「勿論、飲ませていただくに決まってるじゃない？」

「こっちはジェシーが居なかった数年間も毎日、ナタルからはジェシーについてを聞かされていたんだから……」

イーリの愚痴と共に酒は進み、次々と俺らは店のボトルを空けていった。それは店中の酒を飲み干す勢いでな

日付が変わった頃、俺らはようやく店を出た。金額に関しては海軍時代での稼ぎは良かったので問題は無かったが……

「うー……ジエシー……」

イーリの奴は一人じゃ、まともに歩けないまでに飲み過ぎていた

「イーリ、飲み過ぎだぞ……歩けなくなる程、飲むか？」

「うう……ジエシーだって、あんだけ飲んだじゃないの……」

「俺は【特別】なんでな……所謂、蟒蛇って奴だ」

嘘では無い。授かった【能力】の一つ……『超人的な身体能力』のお陰でな

どつやら、常に身体を最善の状態に保つ為なのか……大量の酒を飲んでも精々、ほろ酔い程度……数分もすれば、酔いも覚めちまうからな

俺はイーリを背負い、基地への帰路を歩き出す

「ジエシー……私をベッドに連れてってくれなきゃ、サヨナラよ？」

「なら、酔いが覚めるまでの間……道路にでも寝かせとくか？」

「アンタねえ……【恋する乙女】がこう言ったら、普通はYESって言うのが男ってモノなんだけど？」

「【恋する乙女】は、歩けなくなるまで酔わないのが普通じゃないのか？」

すると、イーリは背負う俺の耳に軽く噛み付く

「……おい、何してんだよ。イーリ？」

「何って……誘ってんのよ？」

そう言って、イーリは俺の背中に胸を押し当てて首筋に顔を埋める

「……やっぱり、道路にでも寝かせとくか……」

その後、基地に戻るまでの間……イーリ曰わく【誘惑】とやらを散々、味わつ羽目になったのは言うまでもない……

.....

ナターシャの場合、他の三人とは違い……その……【欲求不満】とでも言うておくべきか……

あの時は千冬が教導を担当、ISを使つての実戦訓練であつた為、俺は暇となつた訳だ（補佐として、イーリが千冬と共に教導を行つていたので心配は無かつたが…）

暇になつた俺は自室で教導内容のチェックを行つていた時にナターシャが現れた

「……少しは休憩でもしたら、どう？」

背中からかかる声と共にその細い腕が俺に巻き付く。背中からは柔らかな感触が……って【感触】？

振り返つて、ナターシャの姿を確認すると……

「……ナターシャ……何で【全裸】なんだ？」

「それはねえ……待つてたからよ……」

するとナターシャは俺をベッドへと押し倒す。コイツ、この細腕で意外と力があるんだな……、なんて事を考える俺へとナターシャは顔を近付ける

「……こうして、ベッドに二人つきりなんて…何年振りかしら……」

「少なくとも押し倒された事は無かったな……」

ナターシャは指先を俺の胸板へと滑らし、服のボタンへと指をかける

「…随分と盛ってるな……欲求不満か……?」

「そうよ……ジェイが居なくなつてからの数年間……私の隣に居るのが当たり前だったのにな……」

それに……ずっと夜は寂しく過ごしてたのよ?」

ナターシャの顔を見ると……その瞳はうつすらと涙で潤んでいた

「……俺と付き合った事……後悔してるか？」

俺はナターシャの潤んだ瞳から流れる雫を親指で拭う

「いいえ……一回も思った事なんて無いわ……それに……貴方以外、他の男なんて考えられないわ……」

そう言って、ナターシャは唇を重ねた

まあ、あの後……場の勢いだけでも言うか……『スる事』をした俺も俺なんだがな……

- - - - -

後の二人……『フランチェスカ・アルマ』と『織斑 千冬』の話だが……

千冬に関しては長くなる為、先にフランチェスカの方を話しておこう……

- - - - -

その日は教導は休み、俺はドイツでの【楽しみ】を堪能していた

ドイツには『アウトバーン』と呼ばれる高速道路がある。そこは【速度無制限】と全線の【料金無料】という何とも魅力的なモノだ

俺は【とある経緯】を経て手に入れたバイク・・・英国生まれの名二輪車『ヴェンセント』に跨り、アウトバーンで飛ばしていく車の僅かな隙間を縫う様にしてかつ飛ばしていた

そんな中、サイドミラーから一台のバイクが迫ってくるのを見た

黒のライダースーツ、同色で羽ばたく鷲の絵を入れたフルフェイス・メット……体つきからして、女というのまでは理解できた

その女は身に着けてるライダースーツとヘルメットと同様、黒のマシン……日本製バイク（確か……あれは【NINJA】と呼ばれるモノだ）を飛ばし、俺の側へと寄せる

バイク好きであり、バイク乗りとしての性なのかは知らないが……

俺はその女ライダーとのスピード勝負を開始、互いに速度を更に加速させ、まるでダンスをするかの如く、二台のバイクは交差し、次々と前方を走る車の隙間を潜り抜け、疾走した

俺はアウトバーンを抜け、休憩所にバイクを駐車させる。女ライダーも俺の隣へとバイクを駐車させた

「良いバイクだな、それに腕も良い……思わず、見惚れちゃって事故る所だったぜ？」

すると女ライダーはヘルメットへと手を掛け、こう言った

「そうやって、多くの女たちを口説いてきたのか？」

俺は女の声聞き、驚いた……その声と素顔でな

「……【フランチェスカ】か…？」

女の正体……それは、俺が千冬の教導補佐として居る基地の責任者【フランキー】こと、『フランチェスカ・アルマ』中佐だった

「私もよく彼処^{アウトバーン}で走っていてな……久々に走ったが、お前が居るとは驚きだったぞ？」

「そりゃ、こっちの台詞だ。バイク乗りとは聞いていなかったぞ？」

「聞かれなかったからな」

フランチェスカは笑みを浮かべ、俺の側へと近付く

「さっきの勝負……僅かながらだったが……私の勝ちだな？」

片手を俺の首へと回し、顔を近付けさせる

「……一応、聞いておくが…何する気だ…？」

「何、勝者は【褒美】というモノを得るのが当然だろう？」

そう言うとフランチェスカは唇を重ねた（勿論、俺への確認など無いがな）

「っ……私への【褒美】でもあるが……お前も楽しめただろう？」

「……ここに千冬たちが居ない事がせめてもの救いだよ……」

「なら、私の下に来れば良いだろう？ お前の身の回りの安全は私が全権を持って保証するぞ？」

そう言って、フランチェスカは笑った

その後、基地に戻ってから……ドイツ軍独自の【情報網】とやらで知った千冬たちに散々な目に会わされたのは最早、『お約束』となっていた……（というよりも、そんな事に情報網まで使うか…普通？）

- - - - -

残るは千冬なのだが……少し、長くなるな…

あれは……そう、教導後の時だ

俺はいつもの様に全員への差し入れをした時だった

「ジェイソン、後で話があるので私の部屋に来てくれ」

別に教導後には偶に格納庫の整備兵とのポーカールをする位しか、やる事が無かった俺はそれを受諾した

一時間が過ぎた頃、俺は千冬の部屋へと来ていた

「ほお……以前とは違い、綺麗じゃないか……部屋の中」

「う、うるさい！彼処は私の家だぞ、どう扱おうが私の勝手だろ
うが……！」

そう言って若干、顔を赤らめる千冬

織斑家での千冬の部屋は……まあ、凄かったからな。服は脱ぎ散らかされ、部屋で飲んだであろう酒の空き缶やらが転がっていたからな

「まあ、綺麗で何よりだ……此処では一夏の奴は居ないから、俺が片付ける羽目になるんじゃないかって思っていたからな」

「う……た、確かに一夏が家事を担当しているが私だって、別に片付けられない訳じゃないんだぞ……」

若干、うつすらと涙目で言われてもなあ……説得力ってモノが無いんだけどな

「まあ、そういう事しておくか……それで、話つてのは？」

「……ああ、此処での教導も半年が過ぎたからな……お互いに労いという事で飲もうじゃないか、と思ったんでな」

「成る程な……確かに千冬とは長い付き合いだが、あまり一緒に酒を飲む事は無かったしな」

以前、日本に居た際には俺の車庫（という名の家）で飲む事は何回かはあったが、その度に束の奴がどこからともなく現れたからな。その度に……………

『何故、お前は狙ってる様に現れるんだ……………!!』

『ふっふーん…甘いよ、ちーちゃん？』

愛しのジエイ君と2人つきりでお酒を飲んでジエイ君を酔わせて…
…痛い痛いッ!!』

『誰が誰の【愛しの】だ!! 今日という今日はもう勘弁ならんぞ、束……………!!』

『痛たたたたたあッ!!ちーちゃん、ギブギブッ!!』

あの時は、危うく冗談抜きで束の頭が千冬のアイアンクローによつ

て粉碎される所だったよなあ……

今となつては良い思い出が……

まあ、俺と千冬は2人つきりで酒を飲み交わす事になった訳だ。丁度、翌日は互いに教導は休みだった為に俺らは次々と用意していた酒を空けていった

暫くすれば、千冬の奴は酔いつぶれてしまい、床で眠ってしまった。流石に自室とはいえ、風邪を引くと思つた俺は千冬を抱えてベッドへと運んだ

運んだまでは良かったものの……千冬は俺を掴んだまま、熟睡していた。流石に起こす訳にも行かず、仕方無く千冬の眠るベッドの端で眠る事にした俺は悪くない筈だ

翌日となつて、最初に目を覚ましたのは千冬だった。隣で俺が寝て

いる事に驚いた千冬は自分の格好を確認した

千冬は覚えていないが、酔った際に『暑い』と言って衣服を緩めた為に服装は乱れていた。俺は男しか居ない軍での癖なのか半裸（つまり、上半身裸）で寝ていたのだが……何やら【勘違い】をした千冬はこう言った

「……ジエイソン……その……もしかして……私たちは……寝た（アツチの意味で）のか……？」

「あー……まあ、確かに寝た（睡眠的な意味で）な」

すると千冬は……

「う、うわあああッ！ー！」

顔を真っ赤という表現では言い表せないまでに赤くして……隣に

居る俺を扉からぶち破る勢いなまでの強烈な掌底を喰らわした（どう考えても、これは俺が悪い訳じゃないよな？）

後になり、勘違いと気付いた千冬に謝罪されたから別に気にしちゃいないが……俺じゃなきゃ死んでたぞ、あの威力はよ……

.....

……という訳だ。何故か、結果的に俺はロクな目にあってないのだが……

『好意は悪意の裏返し』とでも言いたいのだろうか？

寧ろ、俺は【殺意】を感じるのだが……まあ、俺みたいな奴の事を好いてくれるのは嬉しいのだが……

「……好かれる様な事をした覚えは無いんだがなあ……」

俺は俺一人しか居ない自室で静かに呟いた

ドイツでの教導も残す所、ひと月になった頃……まあ、未だにナターシャとイーリの二人は【長期休暇中】の様であり、基地に居るんだけどな……

俺はフランチェスカに呼ばれ、この基地では閉鎖されている第四格納庫へと来ていた。格納庫の前では千冬とフランチェスカ、ナターシャとイーリの四人が待っていた

「……それで、俺を呼んだ理由ってのは何なんだ？」

するとフランチェスカは格納庫の扉を開くと言う

「此処は閉鎖されている格納庫とされているが……理由は【ある機体】を格納しているのでは……」

格納庫内の中央には一機の機体が鎮座していた……【コイツ】は……

「……見覚えがあるのか？」

千冬は隣に居る俺を見る

「……あるも何も……【コイツ】を設計したのは俺だ、【CFA - 44】 - - 『次世代型のステルス艦上戦闘機』として、俺が設計した機体だ」

俺は機体 - - 【CFA - 44】の側へと寄り、機体を間近で見る

「特許申請でも出しとくべきだったかもな……と言っても、コイツを設計したのは【自室謹慎中】だったから無理だろうけどな……」

「……これはISとその技術が普及し始めてから、程なくしてアメリカとドイツが共同開発した試作機……所謂、【架空機】という奴だな……だが……」

「……当ててやるのか？ 開発に成功したまでは良かったものの、何らかの問題点が浮上して……機体の状態からすると、2〜3回のテ

スト飛行を行ったきり……だろ？」

俺はフランチエスカへと目を向ける

「そう……ISの技術を応用して開発に成功したまでは良かったものの、【問題点】が多くてな……」

先ず、これは従来のISとは違って戦闘機を主体としている為にパイロットとしての腕は必要不可欠……」

それにあまりの高性能さが裏目に出たのか、並大抵のパイロットでも操縦が厳しい上、ISとは女性にしか扱えない……女性で、そこまでの腕を持つパイロットは少ないのでな」

するとナターシャは言葉を続ける

「以前、私を含めて数人がテスト飛行を行うも……誰一人、この機体の真価を発揮する事は出来なかつたわ……」

「それで、設計者であって世界屈指の腕前を持つジェシーにアドバイス、又は解決策を聞こうと考えた訳よ」

イーリは俺へと目を向け、言う

「……コイツは普通の戦闘機とは違い、【ある特殊兵装】を搭載する事を想定して、安定性を重視した設計だったが……

設計途中に俺は、この一機だけで有利な戦況を維持できる様に【エース・パイロット仕様】に設計し直した。並大抵のエース・パイロットでも操縦は難しいだろう……

扱えるパイロットにとっては最高の相棒となるが……同時にコイツは操縦者の命を簡単に奪う……『死神』にすら成り得るからな」

するとフランチェスカは【CFA-44】へと近付く

「しかし、よくもまあ……こんな兵装を思い付いたものだな……」
全方位多目的ミサイルシステム (All Direction Multi-purpose Missile) ……【ADMM】

『電磁加速砲 (Electro Magnetic Launch)』 ……【EML】

……それと【30mm航空機関砲】を二門搭載とは……」

「設計上の思い付きだ。それに実際に開発したお前らもお前らだろ
うが……それと……」

俺は機体の五角形状のエア・インテーク部に注目する

「……エア・インテークをいじった様だが……何をしたんだ？」

「……この機体……【CFA-44】の特徴は高い機動性と【キレ】
だ」

「……【キレ】？」

「【キレ】とは単なるスピードや瞬発力じゃない。空中での一時静止状態からの凄まじく桁外れの0加速……僅か、一瞬で到達する
トップ・スピード
最大速度

何よりも重要なのは……その最大速度を瞬時に静止状態へと戻す……
……【フル・ブレーキング機能】だ」

「……その【0 (ZERO) - 100 (MAX) - 0 (ZERO)】
は最早、【超】が付く程の過酷な運動だろう？ そんな運動の核と

なるモノなんてあるのか？」

すると千冬は口を開く

「……成る程、それでISの【核】^{コア}と技術を利用した訳か？」

「…そう、ISの【核】^{コア}とは開発者である『篠ノ之博士』しか解明できない未知数の能力を秘めている。最早、奇跡としか言いようの無い確率で、アメリカとドイツはその【核】^{コア}を利用する事に成功した訳だ

エア・インテーク部から取り込んだ空気を機体の中心部に内蔵したその小さな【核】が限界速度（MAXスピード）から0（ZERO）の制動エネルギーを内部機構の回転エネルギーに転換、収縮と圧縮したエネルギーを一気に放出する

その放出されたエネルギーにより、軽々と【極超音速】に到達する」

瞬時で『マッハ5以上』に到達する【IS搭載戦闘機】……俺が設計した『ステルス艦上戦闘機』とは桁外れのバケモノになったものだよな……

「だが……こんな機体内で、そんな複雑な機構を組んでいる以上、何かしら【他の機能】を犠牲にせざるを得ないだろう?」

するとフランチェスカは言う

「その【犠牲】が最大の欠点でな……ISに搭載されている【ハイパー・センサー】等の補助的な機能は、この機体にも搭載しているが……」

……防御面、つまり【絶対防御】が犠牲となっている」

「……要するに防御面においては従来の戦闘機と同様、キツい一撃を喰らえば墜落って訳か……だが、こんな【高性能】なんて言葉が生易しく感じる程の性能を誇る機体となった訳だ」

普通のパイロット・スーツでは、そんな【極超音速】でのG負荷に耐えきれないと思うが……その点はどうしたんだ?」

するとフランチェスカは、【CFA-44】の側へとある強化ガラス製のケースへと近付く

「これは、ISの皮膜装甲技術スキン・バリアーを応用したモノだ。【CFA-44】
操縦時のあらゆる負荷にも対応できる」

【ソレ】は全身装甲……いや、全身装甲と言っても機動性を重視し
た軽量装甲仕様ライト・アーマーと言える強化服パワード・スーツだった

ヘルメットは酸素供給用のマスクとHUDヘッド・アップ・ディスプレイの機能を兼ね備えたモノ
であり、フランチエスカの話ではネットワーク回線へと接続でき、
瞬時に戦況、情報の収集も可能らしい

だが……

「…これも【CFA-44】と同様、IS操縦者である【女】にし
か使えないんだろ？」

「そつだ。その上、それは装着者の身体能力を強化するだけであり、
他のISとは違って飛行が出来なければ、固有武装すら無い

正に【CFA-44】専用のパイロット・スーツという訳だ……」

「成る程……この強化服パイロット・スーツについての固有武装は……コイツ……」

【CFA-44】って訳か……

それにこの強化服が無ければ、操縦は無理な上で……肝心の機体は女で無ければ起動できないし、並外れたエース・パイロット級の操縦の腕前が必要……

随分とハードルが高すぎる代物だな？」

「そこで、設計者であるお前からの意見を求めたのだが……」

「無理だな、IS搭載の件に関しては専門外だが……コイツは並外れたパイロットの腕前が必要だ。

先ず、その根本的な条件を満たさない限りは戦線への導入どころか、飛ばす事すら難しいだろうよ

それに……ナターシャ程の腕前でも難しいなら……望み薄だろうな、残念ながら」

千冬は機体を眺め、呟いた

「……【ジェイソン】なら飛ばせたか？」

「…少なくとも、自分が操縦できない機体モを設計したつもりは無いが、ISを搭載しているなら話は別だ。男である俺には不可能な事だから…」

女性にしか扱えない代物……『IS インフィニット・ストラトス』

随分と厄介な欠点だよな……

だが、その時……俺は千冬たちには言っていなかったが……ある自信が何故か、あった

『俺ならば、コイツを起動できる』

理由なんて分からない。根拠も無い

だが、そう俺は感じていた

だが、その僅か2日後……

その自信は【現実】となる事は誰一人として、知らないだろう

回想 ・ 【隊長】として ・

【CFA - 44】の件から翌日……

その日、教導での実戦訓練中に『ある出来事』が起こった

訓練中、部隊^{チーム}での連携を図ろうとした際に一人の隊員の独断による突出が原因で連携が乱れ、散々たる結果となったのだ

幸いにも怪我人は無く、千冬からは厳しい一喝を貰うだけで済んだのだが……

【隊長】として、隊員たちの手綱を上手く握れなかった事にラウラの奴は深く落ち込んだ様子で、今日一日の教導終了後、未だに自室に引きこもったままらしい

まあ、無理もないだろう。いくら優秀な軍人である以前に、まだ年端もいかない少女……

技術面は優れているが、精神面ではまだ未熟……所謂、途上段階というやつだ

教導終了後、俺は千冬とクララの二人からラウラの様子を見てくる様、頼まれた

千冬曰わく『お前はラウラの様な奴にとっては、『人生』としても『隊長』としても【先輩】にあたる訳だ。【先輩】として、アドバイスの一つでもくれてやれ』らしい

そんな訳で俺は今、ラウラの部屋に居た

.....

ラウラの様子を見にきたまでは良かったものの……

先程まで泣いていたのか……目は若干、赤く腫れ上がり、髪はボサボサ……

こりゃ、相当堪えてるな……【以前の仕事柄】、僚機を失って鬱状態になったパイロットは何人か、見た事はあるが……

今のラウラはそれと同等に近い有り様だった

「隊長……私は……」

ベッドの上で指先が白くなるまでシーツを握り締め、俯いた状態の
ラウラは言う

「私は……隊長として失格です……」

俺は軽くため息をつき、ベッドの端に腰掛け――俯いた状態のラ
ウラを軽く抱き寄せる

「……お前のせいじゃないだろうが……」

どんな優秀な軍人だろうが隊長だろうが、誰だってミスするモンな
んだぞ？」

涙で潤んだ紅い瞳で、俺を見上げるラウラは軽く俺の着ている服を
握り締める

「……でも……私は【戦う為に生まれた存在】です……」

なのに、こんなミスを仕出かして……こんな惨めに涙を流しているんですよ……？」

「……【戦つ為に生まれた存在】なんざ知った事じゃないんだよ……」

……ラウラ、お前はお前だ。お前以外、誰が『ラウラ・ボーデヴィツヒ』という人間なんだよ？」

俺はラウラの頭をそつと撫でる。女の扱い方に手慣れたる訳じゃないが……

ナターシャの奴が落ち込んだ際、余計な口を挟まずにこうして行動で示せば、落ち着いたからな

俺は『ある昔話』を語る事にした。昔話といっても少々……いや……結構、重い内容だな……

「……俺は昔、部下を『処断』した事がある……」

「…え…………？」

ラウラを俺を見上げる。その表情は驚愕を表していた

「俺が率いていた部隊……『ファントム隊』は十二人編成の部隊

……

だが、本来は『十三人』居た……忌々しいクソ野郎だったよ…

……そう、あれは……………」

- - - - -

あれは、俺が『ファントム隊』の隊長となつてから、二年が過ぎた頃だ……

当時、南アフリカでは反政府運動が活発だった。アメリカとの関係も悪く、国民たちの不満も頂点に達したのだろう

『大いなるアフリカの大地はアフリカ人のモノ。愚かな政府とアメリカから、アフリカを取り戻せ』

その言葉を掲げた国民たちは反乱を起こした。事態は直ぐに収まると思っていたが、反乱の焰は政府軍の一部にも灯ったのか、事態は悪化の一途を辿った

アメリカは事態の收拾をアフリカ政府から協力を求められた。アメリカは武力による收拾を開始

とは言っても既に度重なる反乱で疲弊した国民たちを制圧するのに対し、そこまでの戦力を導入する必要は無いと考えて俺たち、一個中隊を導入した

正直、気乗りしない任務だった。民間人を攻撃すると同じような内容だったからな……

その任務の際、俺は隊員たちに『ある指示』を出した

『撤退する者、または無抵抗の民間人に対して一切の攻撃をするな
無謀と知っていても挑む【勇敢な戦士たち】には俺たちも、それ相
当の敬意を持って全力で相手しろ』

戦士とは戦う事でしか存在意義を示せないモノだ。それぞれが護るべきモノの為に命を賭して戦う……

ならば、俺たちもその戦士たちの誇りを讃え、彼らと戦う事を誇りに思おう、と考えた訳だ

だが、そんな中……

『フロントム隊』の【十三番機】を操縦する忌々しいクソ野郎……
- 『ラインハルト・レノックス』は【やってはならない事】をした。
逃げ惑う民間人たちに向け、攻撃を始めたのだ

俺は搭乗する機体……『F-14D Super Tomcat』
をラインハルトの奴が操縦する機体……『F-15E Strike
Eagle』の側へと寄せる

民間人への攻撃に夢中となった奴は、俺が隣に居る事すら気付いて
いなかった。無線からは聞くだけで不快感を感じさせる奴の笑い声
が聞こえた

《ひゃっはーッ！！俺みたいなの『エース・パイロット』から逃げ
られると思ってんのかぁ？》

『エース・パイロット』だと……？

ああ、間違いなくお前はエースだよ。但し、【屑】のだから

《雑草のように放置しとけば、勝手に増えるテメエ等、愚民どもは俺が駆除してやるぜえ？ ひゃっははははッ！！》

その時の俺は至って、冷静だったよ……

何故なら、【あまりの怒り】に冷静になっていたからな

《クズ野郎って言葉はな、お前の為にあるんだよ。ラインハルト》

こんな奴が俺たち、『ファントム隊』の隊章……【首無し騎士】
の紋章エンブレムを掲げているのに虫唾が走った
ヘッドレス・ホースマン

だが、その不快感とも……お別れだ

《今のお前は、命令不服従と民間人虐殺……軍人としても人間としても、最悪の行為を行った訳だ》

俺は奴の背後へと移動し、機体の全兵装ロックの制御を解除する

《そう言えば、お前は一度も他の隊員との模擬戦に勝てた事が無かったよな……俺が今、相手になってやるよ……》

《た、隊長……何を言ってるんツスカ……？》

自分でも、ここまで感情の無い声で話せるとはな……と感心する程

の冷たい声を聞いた奴は恐る恐ると返答を返した

《各機、一切の手を出すな【隊長】として、全責任は俺が取る。『ラインハルト・レノックス少尉』 貴官は命令不服従、その上での民間人虐殺を繰り返し、我が隊の規律、軍規を乱し続けた》

俺は言葉を続けた

《軍規に明記してある……いたずらに部下が軍規を乱した場合、上官は処断する権限を有する、とな……ここまで言えば、分かるよな。更正の見込みも余地も無いお前にはここで死んでもらう

但し、お前が殺した民間人たちは天国だろうが、お前は地獄行きだ
がな》

無線からは奴の甲高い悲鳴が聞こえ、それと同時に奴が操縦する機体は急旋回して、俺から逃げていく

俺は旋回し、逃げていく奴を追い掛ける。奴は馬鹿の一つ覚えのよ

うに急旋回を繰り返し、俺から距離をとろうとする

そんな酷い腕で、よく『エース・パイロット』と名乗れたモノだ…
…まだ新米パイロットの方がマシな腕前だよ、全く……

俺は高機動旋回……『ハイGターン』から急上昇し、奴の機体の真上へと移動、その状態から機首を真下に位置する奴の機体へと向け、捕捉を開始する

《ラインハルト、模擬戦の結果は不合格だ。この隊からも、この世からも消えてもらおう》

ロック・オン
捕捉完了した俺は兵装を機銃へと切り替える

《た、隊長ッ！ 俺…いや、自分が間違っておりますッ！！

自分はただ、部隊と軍を思っただけ……！》

《自分の上官を脅迫して、俺の部隊へと入った男の言葉を信じるとでも思うか？》

《な、何を根拠の無い事を……》

《言っておくが、他の隊員たちも既に知っている。お前は自分の上官の不正を知り、それをネタに脅迫して『ファントム隊』へと入ったクス野郎だと言うことはな

それと……間違えに感しては『ファントム隊』に入る以前に気付くべきだったな……

本当に救えない奴だよ……お前は……》

俺は操縦席にいる奴……『ラインハルト・レノックス』に向け、急降下を開始した。完全に射程内へとラインハルトの奴を捕捉した状態だな

《く……るな……来るなあぁあッ!!》

奴のその言葉を最後に俺は、操縦席へと向けて一切の躊躇なく引き金を引いた

放たれた機銃弾はキャノピーを貫通して機体ごと、奴の身体に風穴を空けていった

穿たれたキャノピーの穴からはラインハルトの血飛沫を撒き散らし、機体は黒煙を吹き出しながら失墜していった

俺は操縦席からそれを眺め、無線で残った十二人に告ぐ

《各機に告ぐ……こちら、ファントム隊 隊長『ジェイソン・シーガー大尉』だ。当空域、及び戦闘地帯での敵性勢力の排除を確認した。尚、我が隊の『ラインハルト・レノックス少尉』は民間人虐殺、命令不服従、上官に対する反逆、複数の罪を犯した為、隊長権限として『処断』を下した。

また、今後の任務にて同様の蛮行を確認した場合、同じ隊員、友軍でも攻撃を辞さないと思え。

我が隊の同志たちの【良心】に期待する《

すると残る十二人からの返答が一斉に返ってくる

《Aye aye sir!》

そして、俺は静かに空を仰ぎ見て呟く

「……………あばよ、忌々しき【存在しない十三番機】ゴースト」

精々、地獄で自分がやった事に後悔することになったな……………」

……………

「……………という訳だ」

今まで昔話を語っていた俺の膝上に座るラウラを見下ろし、俺は言う

「隊長……………」

「…良いか、よく覚えておけよ

この先、お前は今回以上に悪い事態に遭遇するかも知れない。だから、【隊長】として覚悟を決める事だな…

…部隊の長としての責任、部下たちの為にも部隊を守る事も隊長の務めを果たす覚悟をな…………

時には『処断』という非情さも必要だと思っ事だ」

「……………私は……………隊長と同じように出来るでしょうか…?」

「……………お前は俺以上に仲間にも恵まれている。それに才能だってな

俺の様にならなくて良い……………お前はお前の道を進め」

俺は膝上に座るラウラの頭を撫でる

するとラウラは軽く俺に抱き付き、上着を軽く握り締めて胸板に顔を埋めた

「……やっぱり……隊長は……」

俺はその小さな呟きを微かにだが聞き取った

『やっぱり、隊長は私にとって理想の隊長像です』

やれやれ……俺は苦笑を浮かべた

『俺なんかを理想の隊長像にするなんて、ロクな隊長にはならない』

ぞっ
『

そう思いながら……

ラウラとの件から、翌日……

その日は普段とは違った。何故なら、基地内で鳴り響く警報音アラートで叩き起こされる羽目になったからだ

俺は眠気で呆けた意識を覚醒させ、基地内での仕事着……【復職通告】以来、教導時に着ている黒い作業着ツナギに似た旧来の戦闘機用パイロット・スーツを身に付け、部屋を飛び出た

基地内では戦場の様に兵士たちが駆け巡り、この警報音の原因に対する対処にあたっていた

俺は管制塔へと走り、扉を蹴破る勢いで開ける。塔内ではフランキーからナターシャまで一同が既に勢揃いしていた

「フランキー、何が起こったんだッ!？」

「落ち着け、ジエイソン」

フランキーと共に指示を出す千冬は俺を見て、言う

「ジエシー、今から説明するけど……これは、かなりヤバい事態よ……」

イーリは俺の肩へと手を乗せ、俺を落ち着かせようと宥める

話はこうだ、現時点でドイツ都市部へと急速で向かう未確認飛行物アンノウ体を管制塔内のレーダーが捉えた

その『アンノウ』の正体はドイツが以前、開発していた試作段階の兵器、『大型ミサイル・コンテナ弾頭』……通称【スタウロス】

【スタウロス】は現段階でおよそ、10機が試作品として開発されていたらしい。

その【スタウロス】とは発射された大型のミサイル・コンテナ弾頭に多数の巡航ミサイルを格納、一機の【スタウロス】でも小さな都市ならば、簡単に都市ごと敵を殲滅する事が可能な広範囲に渡る殲滅を目的とした兵器らしい

何故、そんな兵器がドイツ都市部へと向かっているか、その理由はこうだ

【何者か】がドイツの軍事ネットワークへと侵入、全10機の【スタウロス】をドイツ都市部へと向けて発射させた。その上、ハツキングした奴は独自の防衛ネットワーク（ファイア・ウォール）を張り巡らせ、此方からのアクセスは不可能としたのだ

本来ならば、ラウラが率いるIS配備特殊部隊『シユヴァルツエ・ハーゼ』を導入し、【スタウロス】の撃墜へと向かわせたいのだが

……

既に【スタウロス】は標的としている都市部から到達するまで僅か、10分の距離へと迫っていた。それに対し、この基地から【スタウロス】の距離まではおよそ、15分弱と言った所……

従来の戦闘機は勿論、ISでも到底、間に合わない状況だった

都市部の人口は少なくとも、約一千万人以上……僅か、10分程でどうやって避難させれるのか？

既にフランキーは部下に警察へ市民たちの避難誘導を指示しているが……

【スタウロス】は標的近くに迫ると格納した多数の巡航ミサイルを拡散させ、標的とその周囲を完全に破壊する代物……

僅か、10分という短い時間で避難したとしても攻撃範囲からは逃れられないだろう

俺はふと、【ある事】を思い出した。2日前、第四格納庫で見た『
IS搭載戦闘機』 - - - 【CFA-44】を

だが、ISは女にしか起動できない代物。男の俺が起動できる訳が
無い

だが、俺は2日前と同様に【根拠の無い自信】があった

『俺なら起動できる。俺しかアレを乗りこなせない』

すると俺の懐にしまっていた携帯が鳴り出す

俺は携帯を取り出し、届いたメールを確認する。差出人はこう書いてあった――【篠ノ之 束】と

そのメールの内容は短くこう書かれていた

『^{リアル}常識なんて、簡単に壊せるモノなんだよ?』

その内容を見ると同時に俺は第四格納庫へと走った

-
-
-
-
-
-

俺は第四格納庫にある機体……【CFA-44】の側にある専用のパイロット・スーツである強化服パワー・スーツを納めたケースへと近づく

俺はケースの側に寄り、拳を握り締めると……その握り締めた拳をケースへと叩き込む。【転生者】としての並外れた力を込めた拳を叩き込まれたケースは簡単に砕けた

俺は砕けたケース内に納められた強化服へと手を伸ばす

「何故、男である俺がISを起動できるという自信があるかは知らないが……」

もし、本当に……今の『常識リアル』をブツ壊せるなら、俺に力を貸しやがれ……」

俺はその言葉と共に強化服……『IS<インフィニット・ストラトス>』に触れる

触れると同時に俺の頭には様々なISの情報が流れ込んでくる

スキン・バリアー
< 皮膜装甲展開 >

< ハイパー・センサー最適化 >

ISからの電子音と共に、強化服は俺の身体に合わせて装着されていく

全身への装着を終えた俺は、この強化服の固有武装である機体……
- 【CFA-44】へと向かう

俺は機体の側へと近付くと操縦席に向かい、一気に跳躍する

元々、並外れた身体能力を持つ上、強化服により更に強化された俺の跳躍力は易々と操縦席へ到達する

操縦席へと乗り込んだ俺は【CFA-44】の全システムを起動、同時に全武装の制御を解除する

そして、俺は管制塔に居るフランチェスカたちに無線を入れる

《フランキー、聞こえるか？》

《ジェイソン？ 一体、何処に居るんだッ！？》

俺は【CFA-44】の胴体部に搭載された推進機スラスタを起動させ、機体を低空浮上させる

そのまま、搭載した武装……【30mm航空機関砲】の照準を前方の閉ざされた扉へと合わせる

《フランキー、時間が無いから少し、手荒で悪いが恨むなよな?》

その言葉と同時に俺は引き金を引いた

-
-
-
-
-
-

『フランキー』こと、【フランチェスカ・アルマ】はこの非常事態においても極めて冷静な判断を下していた

しかし、我がドイツ軍の軍事ネットワークへの侵入、その上で試作段階の兵器……【スタウロス】を開発したこの国に発射した

これでは、まるで……

「まるで『白騎士事件』の再来だな……」

フランチェスカは静かに呟いた

但し、状況は『白騎士事件』以上に最悪だが…、と心の中で付け足した

確かにそうだろう、あの時は『白騎士』の登場によって最悪の事態は免れたが……

今回は『白騎士』は登場しない上、あと10分足らずで発射された【スタウロス】は都市部へと到達するのだからだ

既に警察への避難誘導を指示したものの、10分で一千万人以上の市民をどうやって広範囲に渡る【スタウロス】の被害から避難できるのか？

最悪の事態を迎えるのは明らかに目に見えていた

そんな時だった。先程、この管制塔から姿を消した【一人】からの無線が入ったのは

《フランキー、聞こえるか？》

その声を聞くと同時にフランチェスカを始めとした管制塔に居る全員が、その声に耳を傾ける

「ジェイソン？ 一体、何処に居るんだッ！？」

すると無線からの声の主……【ジェイソン・シーガー】は言った

《フランキー、時間が無いから少し、手荒で悪いが恨むなよな？》

「……………どういう意味だ？」

次の瞬間、管制塔からも見渡せる滑走路側に位置する第四格納庫の正面から爆発が起こった

「第四格納庫にて、爆発ッ！！」

管制塔内を埋め尽くす程の人数が居る部下の一人が報告する

「爆発した第四格納庫から、動きが……………これは……………」

フランチェスカと千冬、ナターシャとイーリスの四人は第四格納庫へと目を向ける。そこで目にしたのは……………

「き、機体を確認ッ！ 【CFA-44】ですッ!!」

もう一人の部下が声を上げ、報告する

「まさか……アレを操縦してるのって……」

イリスは隣に居るナターシャへと目を向ける

「……他に居ると思うかしら？」

若干、呆れ顔のナターシャは呟いた

《フランキー、言いたい事は分かってるが……今、すべき事は一つ
だろ？》

ジェイソンからの無線が管制塔内に響く

『フランチェスカ・アルマ』は再び、ドイツ軍人……【フランキー中佐】として意識を切り換える

「分かった……【ファントム1】、離陸を許可する

直ちに都市部上空へと急行し、弾頭を撃墜せよ」

《こちら、ファントム1 了解》

そして、ジェイソンが操縦する機体……【CFA-44】は滑走路中央で推進機での低空浮上から、アフターバーナー点火へと切り換える。上空へと機体は高度を上げて飛行していく

一連の動作を見守ったフランキーは無線を入れる

「離陸成功、貴官の幸運を祈る……任せたぞ、ジェイソン」

《了解、【極超音速】飛行開始》

その無線から数秒後、ジェイソンが操縦する【CFA-44】は上空にて凄まじい衝撃波ソニック・ムーヴを放ち、【極超音速】で基地上空から飛び去った

『IS搭載戦闘機』・・・【CFA-44】を操縦する俺に【極超音速飛行】での『万力』という言葉が生易しく感じる程のG負荷が襲う

地球上の全重力が俺にのし掛かっているんじゃないか？、そう思わせる程のG負荷で内臓に絶えず、圧迫感を感じる

この強化服と俺の桁外れの適応力と耐久力でなければ、今頃はこの操縦席を潰れたトマトの様にして汚しているだろう

だが、三十秒もしたら絶えず、襲うG負荷とも内臓への圧迫感にも慣れてきた。俺は今更ながら、自分が化け物じみた奴だと再確認していた

俺は意識を切り換えると、前方へと視線を向ける・・・その先には、

目視でも三機の【スタウロス】が視認できる距離にまで、この機体は追い付いていた

《こちら、ファントム1 【スタウロス】を三機、目視で確認》

《了解した、ファントム1 攻撃を許可する。頼んだぞ……【ジェイソン】》

俺はフランキー中佐……『フランチェスカ・アルマ』からの返答を確認すると同時に強化服のヘルメット部に内蔵されたHUD機能を……照準機構を作動させる

ヘルメット越しからの俺の視界には『攻撃対象』である【スタウロス】に照準を定めるカーソルが表示される

《こちら、ファントム1 攻撃を開始する。任せとけ、【フランチェスカ】》

その言葉を合図に俺は機体を前方に位置する【スタウロス】三機の側面へと回り込ませる

この機体……【CFA-44】とは従来の戦闘機、現時点で普及されているISを遥かに凌ぐ機動性を誇る機体だ。だが、同時にパイロットとの相性が悪ければ、操縦者を簡単に死に至らしめるといふ『死神』の顔を持つ

しかし、パイロットとの相性が良ければ、正に操縦者の手足となり思うがままに操る事ができる『最高の相棒』ともなる。そう、あの『白騎士』とも互角に渡り合える程だ

どうやら、俺は後者に当たるらしい。思い描いた理想的な機動で回り込み、機体の機首は【スタウロス】の側面へと向いている……
勿論、三機の【スタウロス】を完全に捕捉した状態ロックでだ

《捕捉完了!!》
ロック・オン

引き金を引くと同時に搭載された兵装……二門の【30mm航空機関砲】から発射された機関砲弾は標的とした【スタウロス】の胴体部を真つ二つに寸断、搭載された巡航ミサイルにもダメージを与える

機関砲弾のシャワーを浴びた【スタウロス】は空中にて、残る二機を巻き添えに誘爆。一方で【CFA-44】は、その鋭い機動性を誇る動きで降り注ぐ【スタウロス】の破片と爆発の隙間を瞬時に潜り抜ける

《三機の撃墜を確認 フランキー、残りの【スタウロス】は？》

《あと、七機だ。待て……お前の位置から北東に【アンノウン】を捕捉した》

俺は操縦席から北東の方向へと視線を向ける。そこには此方に向かって飛来する二機の【スタウロス】が確認できた

《機関砲の射程圏外か……【EML】に切り換える》

機体を北東へと旋回、機銃から【EML】へと兵装を切り換え、起動させる

起動と同時に機体上面にある左右二つのウェポン・ベイに搭載された砲身が展開される

ヘルメット越しからの視界では飛来する二機の標的へとカーソルが表示される。【EML】は無誘導型であり、操縦者自らが捕捉しなければならぬが……設計者である俺はその事を充分、理解している

俺は速度を緩め、機体を安定させる。そして、表示されたカーソル内に標的を収める

《『マツハフ』で発射するコイツを避けられるか？》

俺は徐々に距離を縮める二機の標的に視線を逸らさず、発射スイッチに指を掛ける

そして、専用の発射コードを口にした

《フロントム1 スラッシュ！》

機体上面に搭載された二門の砲身から、【電磁誘導】により超加速された弾丸が空気を切り裂き、標的……二機の【スタウロス】へ目掛けて発射される

眩い二筋の閃光が二機の【スタウロス】を貫く。超加速により、貫通性と破壊力を増した弾丸は【スタウロス】の装甲を易々と貫き、内部に搭載された多数の巡航ミサイルをも破壊する

空中にて、爆散した二機の【スタウロス】を目視で確認した俺は再び、フランキーへと無線を入れる

《こちら、ファントム1 更に二機の標的を撃墜した。残る五機の位置は？》

《こちら、フランキー中佐 残る五機の内、三機が都市部上空へと接近している。直ちに撃墜に迎え！！》

《ファントム1 了解した》

俺は機体を急旋回させ、此処から南東に位置する都市部上空へと向かい、【フル・ブレイキング機能】を作動させる

急旋回した後、機体が僅かな間、胴体部に搭載した推進機スラスターによる空ホ中停止状態となる

エア・インターク部の制御を解除すると機体は制御解除されたエア・インターク部から一気に空気を取り込む。俺に装着された専用パイ

ロット・スーツである強化服（IS）のヘルメット越しの視界からは搭乗する機体……【CFA-44】の機体情報が表示される

表示されたのは取り込んだ空気量とこの機体の中心部に内蔵された『心臓』ともいえる【核】^{コア}の状態だった

《機体、及び機能の安定を確認。【フル・ブレーキング機能】作動》

推進機からアフターバーナー点火へと切り換えると同時に再度、飛行を開始

一定の速度へと到達、それと同時に俺は一気にスロットル・レバーを最大まで押し込む

一旦、機体は速度を完全に停止すると操縦席に居る俺は落下による僅かな浮遊感を感じた

……『来るぞ』

俺は奥歯を噛み締め、全身に力を込めて衝撃に備えた

次の瞬間、エア・インテーク部から取り込んだ空気を内蔵された【^{コア}核】は取り込まれた空気による制動エネルギーを内部機構の回転エネルギーに転換、アフターバーナー点火と同時に収縮と圧縮したエネルギーを一気に放出する

機体は空気の壁を突き破り、空中にて凄まじい衝撃波と共に瞬時に二度目の【極超音速】へと突入する

再度、【極超音速】によるG負荷が俺を襲う。俺は暴れ狂う操縦桿を押さえつけ、【極超音速】飛行中の機体を安定させる

一連の動作から僅か、二分足らずで【CFA-44】は三機の【スタウロス】が迫る都市部上空へと移動していた

無線からはフランキーの声が響く

《【スタウロス】、レーダーから消失^{ロスト}!! 『拡散』するぞッ!》

俺は都市部上空に飛来する三機の【スタウロス】の弾頭部が開くのを確認する

マズい……!

先程、使用した兵装……【EML】を起動、拡散態勢に移行する
三機の【スタウロス】の内、一機を捕捉する

《捕捉完了、ファントム1 スラッシュ!!》

搭載された二門の砲身から超加速で発射された弾丸は、空気を切り裂き眩い閃光と同時に捕捉していた【スタウロス】を貫く

拡散前だった為、搭載された巡航ミサイルと共に【スタウロス】は先程、撃墜した二機と同様に空中にて爆散する

《ジェイソン、レーダーから複数のミサイルを確認した！ 拡散したぞッ！！》

フランキーの無線で俺は残る二機の【スタウロス】へと視線を向ける。視線の先には【スタウロス】から拡散した巡航ミサイル群が都市部へと迫る光景だった

一機につき、約12機の巡航ミサイルが拡散されるのを俺は目視で確認……一機で12機を搭載……二機だから、計24機か……

《拡散を確認、【ADMM】を起動する》

俺は【CFA-44】に搭載された最後の兵装『全方位多目的ミサイルシステム(All Direction Multi-purpose Missile)』...【ADMM】を起動させる

起動と同時に機体の胴体部のシャッターが引き開けられる。その下から姿を現したのは、イージス巡洋艦などに搭載される【VLS(Vertical Launching System)】...潜水艦などの艦艇に使用される垂直発射システムの様なミサイル発射口だった

俺が装着する強化服のヘルメットに内蔵された照準機構が作動し、複数のカーソルが視界に広がる

その数は同時発射可能なミサイルの数...計24機のカーソルが表示された

表示されたカーソルが都市部へと飛来する24機の巡航ミサイルを捕捉、その数秒後には全ての巡航ミサイル捕捉完了を告げる

俺は発射スイッチに指を掛けると【EML】と同様、専用の発射コ
ードを口にした

《フロントムー ドライブー！》

俺は発射スイッチを押し込む。上下から垂直方向に撃ち出されたミ
サイルはある程度、母機である【CFA-44】から離れた場所で
水平方向へと針路を変更、捕捉した巡航ミサイル群へと加速を開始
する。

計24機のミサイルは捕捉した巡航ミサイル群を迎え撃つ様に真っ
正面から突っ込んでいく

加速されたミサイルはそれぞれが捕捉した巡航ミサイル群へと命中、

都市部上空にて盛大な花火と化した

機体を安定させ、都市部上空を旋回しながら、俺はフランキーへと
無線を入れる

《こちら、ファントム1 拡散した巡航ミサイル群の撃墜に成功》

無線からは管制塔内に居たフランキーの部下たちによる歓声が聞こ
えた

《よくやったな、ジェイソン……だが、まだ二機が残っているぞ》

《分かってる。残る二機を撃墜したら、任務完了って訳だろ？》

だが、そこで無線からは管制塔内に居るであろうフランキーの部下
からの報告が入った

《残る二機の【スタウロス】を確認、方角は……え……ッ？》

《…何か、あったのか？》

すると、その報告を告げた部下からの更なる報告が入った

《二機の【スタウロス】が撃墜されました……！》

《…フランキー、俺以外に戦闘機かISを出撃させたのか？》

《馬鹿を言つな！ その空域にはお前以外は戦闘機もISも居ない
筈だぞ……？》

すると今度は管制塔内に居るイーリから無線が入る

《ジェシート！ 北西の海上から高エネルギー反応を確認したわ！
！》

俺は北西へと機体を旋回、海上へと機首を向ける

北西に位置する海上には【何か】が、俺が居る場所へと高速で移動するのを確認できた。俺は高度を下げ、その接近する【何か】を改めて確認する

【コイツ】は……

俺は確認した【正体】を無線でフランキーたちに告げる

《……フランキー、よく聞け。こちらに接近する【何か】の正体を

確認した》

《……何なんだ？》

そして、俺は静かに告げる

《……【IS】だ、それも大型の推進機^{スラスタ}で海上を高速移動している上、馬鹿みたいなデカさの武器を装備したな……》

それが、国連に所属する俺が、後に率いる事となる『IS操縦者』と『戦闘機乗り』で編成された【部隊】の敵……『^{ファントム・タスク}亡国機業』が所有する……ギリシャ神話に登場する『一つ目の巨人』の名を持つ【無人IS機】……『サイクロプス』との遭遇だった

【ソイツ】は従来のISとは全く違った

俺が装着する強化服と同様の全身装甲……だが、人が装着するには余りにもデカすぎるサイズだった

^{ヘビィ・アーマー}重装甲仕様、背中には海上を高速移動する為に使用している戦闘機スラスタのアフターバーナーと同等、又はそれ以上の大型推進機を背面部に搭載。まるでSF映画に登場するロボット兵器といえる様な姿だった

269

そのデカすぎる強化服（IS）の腕に装着している武装……俺の搭乘する機体【CFA-44】にも搭載されている『30mm航空機関砲』を更にデカくした代物を携えていた

《……おい、千冬……イーリ、ナターシャ……あんなISを見たことがあるか……？》

恐らく、管制塔内のモニターには俺がヘルメット越しから見ると海上のISが映されているだろう。ネットワーク回線を繋ぎ、先程から無線を取り合っている分、造作ない事だからな

《いや……あんな大型ISを見たことが無い……》

《というよりも、全身装甲のISなんて今、ジェシーが装着している強化服以外は存在しないわよ……？》

千冬とイーリが返答を返す

俺は高度を更に下げ、海上を高速移動するISへと近付くと無線を入れる

《…所属不明のIS操縦者に告ぐ。【スタウロス】を撃墜したのは其方か？》

だが、向こうからの応答は無かった

《…取り敢えず、此方の指示に従って欲しい。進路を南東にとり…
…?》

すると、そのISは移動を止めると背面部に搭載されている大型の推進機を使い、その場で静止状態に入った。俺は機体を旋回させ、静止状態となったISへと視線を向ける

そして、そのISは上空にて旋回する俺へと視線を向けた…全身装甲である為、操縦者の顔は確認できないものの、その頭部の中心に内蔵された一つ目のカメラが俺を捉える

その時だった。そのISの背面の上部に位置する装甲が開き、六機の【ミサイル】が射出されたのは

《ジェイソンッ！ ミサイルだッ！！》

《分かってるッ！！》

俺はフランキーからの無線よりも早く、機体を急旋回させる。ISから射出された六機のミサイルは機体スレスレを通り過ぎ、遙か上空へと飛んでいく

《クソッ！ IS操縦者に告ぐ！！ こちらに戦闘の意思は無い！
繰り返す、こちらに戦闘の意思は無いッ！！》

だが、機体に備わっているレーダーはミサイルに対する警告が警告音と共に表示される

俺は先程、回避したミサイルが飛んでいった上空を操縦席のキャノピー越しから見上げた……視線の先には回避した六機のミサイルが上空から再び、俺へと向かう光景だった

追尾式か……！

だが、上空より飛来する六機のミサイル弾頭部が開くのを俺は確認した。俺の脳裏には先程、撃墜した【スタウロス】の拡散時の光景が駆け巡る

まさか……！！

俺はスロットル・レバーを押し込むと機体を急加速させ、ミサイルから距離をとる。それと同時に弾頭部が開いたミサイルからは複数の小型ミサイルが射出され、先程まで俺が居た場所へと雨霰の如く降り注ぎ、空中にて炸裂した

《フランキーッ！ どうすれば良いッ?!》

俺はISからの攻撃を何とか回避しながら、フランキーへと無線を

入れる。たかが【傭兵】となった俺の判断で所属不明とはいえ、このISを撃墜すれば、後に国際問題にも成りかねない

現時点で、それらの判断を下せるのは基地での全権と責任を任されている立場上、フランキー位だろう

《……ファントム1 交戦を許可する》

《本気が……いや、成る程な……》

無線からは攻撃を許可するフランキーとそれに納得した様子の子冬
の音が響く

《ジェイ、聞こえる？》

《ナターシャか……一応、聞いておくがれっきとした理由はあるんだらうな？》

《ええ、相手はドイツ領空域に侵入した上、現時点でドイツ軍に【補佐官】として在籍している貴方に不法な戦闘行為を仕掛けたわ》

《つまり、こっちは反撃するには充分過ぎる理由って訳だ。ジエイソン、相手が悪かった事を教えてやれ》

やれやれ……これで、ISと戦り合つのは二度目だな

《こちら、ファントム1 了解、反撃を開始する》

俺は機体を右方向へと急旋回させ、海上にて高速移動を行いながら、俺を追い掛けるISと真っ向から向かい合った状態で急降下を開始

海面スレスレの高度を保ち、兵装を【ADMM】から機関砲へと切り換える。向かい合った状態で捕捉を開始、狙うはあのISが持つ武装……『超大型の機関砲』

《捕捉した、攻撃する》

俺は引き金に指を掛け、速度を更に加速させる。鋭い機動力を誇る機体――【CFA-44】は前方の獲物（IS）へと牙を向ける

引き金を引くと同時に搭載された二門の『30mm航空機関砲』は激しい銃火を上げ、鋼鉄すらも易々と貫く機関砲弾をバラ撒く

海上にて、ISとすれ違う時間は恐らく、2分も無い程の短いモノだろう。だが、そのすれ違いの間に放たれた牛乳瓶の底部ほどにも匹敵する口径の機関砲弾は確実に狙うISの武装を砕いた

《IS機の武装破壊、IS操縦者に告ぐ 直ちに攻撃を中止し、此方の指示に従え。さもなければ、撃墜する》

俺は【最終通告】を送り、様子を見る

だが、そのISは背面部に搭載した大型の推進機の出力を上げて、移動を開始する。先程、破壊した武装が無くなった分、その機動力は更に上がり、キレも増していた

海上での高速移動を開始したISは、背面の上部に搭載した武装 -
- 【スタウロス】とは異なる拡散式のミサイルを発射する

《平和的な解決は無理……か……》

俺は機体を上空へと急上昇させ、後方より迫るミサイルから距離をとる。ミサイルはある程度の距離へと到達すると弾頭部が開き、内部に搭載した小型のミサイルが拡散して空中にて炸裂する

爆風の影響で機体が不安定となるのを俺は両手で操縦桿を押さえつけ、無理矢理に機体を安定させる

充分な高度へと到達すると同時に俺は『ハイGターン』による宙返りからの急降下を開始、兵装を機関砲から【ADMM】へと切り換

える

胴体部のシャッターが開くのを確認し、俺はISへと捕捉を開始する。起動させるミサイルの数は12機、恐らくは相手もミサイルを発射するだろうと考え、6機はミサイル迎撃用に残る6機はIS本体に向けてだ

ISには操縦者を保護する【絶対防衛】というモノがある。以前、IS操縦者である千冬たちに聞いた話ではシールドを突破した攻撃のみが『実体』……操縦者にダメージを与えられる

【絶対防衛】とは操縦者が死なないように【一部】を除くISには必ず、搭載されているシールドだ。しかし、それは極端にエネルギーを消耗する為、ISが破損したとしても平気だと判断した場合は作動しない仕組みらしい

【絶対防衛】に使用されるエネルギーが空となれば、その【一部】である『IS搭載戦闘機』……【CFA-44】と俺が装着している専用のパイロット・スーツであるISと同様、操縦者自身にダメージを受ける事となり、最悪の場合はISもろとも操縦者も死に至る

今、【ADMM】の同時発射できる最大数――24機を発射すれば、24機の中で6機はミサイル迎撃として消費するも残る18機は、あのISへと撃ち込めるだろう。しかし、直撃すれば一機でも高い威力を持つ【ADMM】を18機もの数を喰らえば、どうなるだろうか？

間違いなく、シールドのエネルギーは瞬く間に空となり、ISもろとも操縦者は【木っ端微塵】となるだろう

無闇な生殺与奪は避けたい。それが最善であり、俺の考えだった

6機ならば、恐らくはシールドのエネルギーを空にする程度で済むだろう。そう考える俺は捕捉完了と同時に発射コードを告げる

《フロントムー ドライヴー！》

胴体部のVLS式の発射口から12機のミサイルが射出され、母機である【CFA-44】からある程度、離れると水平方向へと針路を変え、標的であるISへと向かっていく

どうやら、俺の読みは当たりらしい。ISは迫る12機の【ADM】を確認すると六機のミサイルを発射するも、間近に迫っていた【ADM】はISが発射したミサイルが拡散する前に迎撃していく

その影響で上空に激しい爆風が巻き起こる中、残る6機の【ADM】は標的へと加速、ISも推進機を使い回避行動に入り、2機の【ADM】を避けるも残る4機は上空にて確認する俺から見ても文句無しに直撃していった

《【ADM】4機の命中を確認、これで大人しくはなるだろう》

《……殺してないだろうな？》

《フランキー、俺は殺人鬼じゃない。無闇な生殺与奪は避けたいからな、直撃はしたが【絶対防御】で恐らく、あのISのシールド・エネルギーは空だろうけどな》

俺は海上へと視線を向ける。視線の先にはシールドが剥がれたのか、装甲に若干の傷を負ったISは上空の俺を見上げる様に見ていた

するとISは再び、拡散式ミサイルを発射し、俺から距離をとり始める。俺はあのISとの交戦の最中、ひとつの疑問を思い浮かべた

《…千冬、あのISの動き……妙だと思わないか……？》

《……どういう意味だ……？》

《あのIS、先程から攻撃と回避を繰り返しているが……どれも最初の動きと寸分、狂わずに動いてるんだよ》

するとフランキーからも同意見が出る

《…確かに……人間ならば長期の交戦、又は自分が追い込まれれば、少なくとも動きに乱れが出始める筈……》

《……ひとつ、これは俺の推測なんだが……アレが【無人機】って可能性はどうだ?》

その言葉と同時に俺はISへと機関砲攻撃を開始、狙うはあのISスレスレの海面だ。放たれた機関砲弾は海面へと着弾し、水柱を上げる

ISはその攻撃を回避しての高速移動を繰り返すも、その動きは【ADMM】命中前と変わらない完璧なまで一定した機動を保っていた

282

《フランキー、あのISの生体反応を確認できるか?》

《了解した、だが……少し、時間が掛かるぞ?》

《俺を誰だと思ってんだよ? 心配すんな、問題無い》

俺は機体を急降下から加速、距離をとるISへと迫る。ISは今ま

で拡散式ミサイルを射出していた背面の上部とは違い、今度はちよ
うど腰辺りの装甲が左右へと開放され、それと同時に複数の小型ミ
サイルを射出。後方より迫る俺へと飛来してくる

《隠し玉って訳か、恐れ入ったよ……》

- だが、そんなモノで俺を墜とせると思ったか？ -

俺は機体を垂直上昇させ、迫る小型ミサイルを上空へと誘導、垂直
上昇飛行からの高機動旋回――『ハイGターン』による宙返りで
機体スレスレをミサイルが通過していくのを確認、ミサイルの背後
をとった俺はすかさずに【ADMM】を起動させ、前方を飛んでい
くミサイルを捕捉、捕捉完了と同時に【ADMM】24機を発射する

垂直発射された【ADMM】は、それぞれが捕捉したミサイルへと
向けて加速、その数秒後には全てのミサイルを叩き落とした

《ジェイソン、生体反応の結果が出たぞ》

俺は機体を旋回、海上にて高速移動で逃走しようとするISを追う

《それで結果はどうだ？》

《あのISからの生体反応は確認されなかった。お前の読み通り、あれは無人機だ》

《つまり、これで心置きなく……『ブツ壊せる』訳だ……！》

俺はスロットル・レバーを押し込み、アフターバーナーを点火させて速度を上げる。するとISは二種類のミサイルを搭載したそれぞれの装甲を開放、拡散式ミサイルと小型ミサイルを一斉に発射させた

《ジェイッ！！ スピードが速い上に距離が近いわッ！ 今すぐに回避して……！》

無線からはナターシャの音が響く

《ナターシャ、勘違いしているぜ……やっと、ちょうど良い距離になった所だ》

俺はスロットル・レバーを最大まで押し込む。急降下状態で機体は一時の静止状態へと入り、一斉発射されたミサイルは眼前まで迫っていた

《ジェイソン（ジェイノジェシー）ッ！！》

無線からはナターシャたちの叫びに似た声が響き渡る……少しは俺を信用しろっての……

一時の静止状態の機体はエア・インテーク部から膨大な空気を取り込む

《【極超音速飛行】開始》

眼前へと迫ったミサイルが炸裂する瞬間、【CFA-44】は静止状態からの極超音速飛行を開始、炸裂寸前のミサイル群の隙間を潜り抜ける

機体の後方にてミサイル群は炸裂、だが極超音速飛行に入った機体は全くの無傷だった

俺は兵装を【EML】へと切り換え、ISの頭上を通過する。そのまま、機体を背面飛行へと移行する

正に海面ストレスレの位置での背面飛行を行う俺は前方のISへと捕捉を開始する

《幕引きだ……その機械の塊キミックのボディでも、この一発は強烈だぜ？》

捕捉完了と同時に俺は発射スイッチに指を掛ける

《ファントム1 スラッシュュッ!》

発射コードと同時に放たれたマツハ7の速度を誇る電磁誘導により超加速した弾丸はISの胸部を貫き、風通しの良い穴を空けた

胸部に風穴を空けられたISはそのまま、力無く海面へと倒れ伏し……海中へと沈んでいった

回想 - 【疑問】 - (前書き)

後半の描写は、やけに生々しいモノですが……多分、R - 15の範囲内で収まるモノだと思います

あの無人IS機との交戦から、二日が過ぎた

まあ、あの後に基地へ帰還した俺を待っていたのは基地中の兵士、黒ウサギ隊の隊員たちからの賞賛とフランクたちとの質問攻めだったかな……

当たり前前の反応だろう。何故なら、俺は【男】でありながら、ISを起動させた上でソレを使いこなしたのだ……つまり、この【女尊男卑】^{リアル}の常識を見事にブツ壊した訳だ

だが、俺はISとそのISを搭載した戦闘機……【CFA-44】を起動させ、いきなり実戦に使った反動なのか、今までに経験した事の無い疲労感に襲われて自室に戻ると同時に倒れた

次に目が覚めた時は既に二日が過ぎていた。ラウラやナターシャ、千冬たちが交代で見舞いに来ていたらしい。だが、それよりも俺が

眠っていた二日の間に随分と世間は大騒ぎだったようだ

.....

「ほら、全ての新聞の一面トップになった感想はどう？」

二日間も眠っていてテキーラを一瓶、一気飲みした翌日の二日酔いよりも重い頭を覚ます為、頭以上に重く感じる身体を千冬に引き摺られて食堂で尋常では無い程の苦味と濃さのブラック・コーヒーを飲んでいる俺の前に数枚以上の新聞をイーリは置いた

「...何だ、そりゃ.....?」

「読んでみれば、分かるわ。それに今やジェイは隣に居る千冬...
『ブリュンヒルデ』と同じ位に有名人よ?」

何時の間にか、背後に現れたナターシャは言う

俺は置かれた新聞を手に取り、それを広げて書かれた記事へと目を通すが……

「……悪いが、ドイツ語は苦手だな……ラウラ、悪いが読んでくれないか……」

先程、食堂へと千冬に引き摺られている際に会ったラウラへと新聞を手渡す

「はい、隊長……『謎の戦闘機乗り、ドイツを救う』……『伝説のパイロット……ACE OF ACE』、『世界で初めてISを搭載した戦闘機を起動させた【男性】とは？』

……どれも隊長を英雄扱いしていますね。それにISを起動させた事も筒抜けみたいですよ？」

「……頭痛がしてきた……」

「頭痛薬の他に胃薬も必要になるわよ、これを見たら……」

そう言つて、イーリは食堂に置かれたテレビの電源を入れる

電源を入れたテレビの画面が映し出したのは、【CFA-44】が大空を縦横無尽に飛び回り都市部へと飛来する【スタウロス】を撃墜する映像が流れていた

『この戦闘機はISを搭載しており、この機を操縦していたのは何と【男性】であり、つまりは女性にしか起動できないISを世界で初めて男性が起動させたという訳です』

『ですが、ISを搭載した戦闘機を操縦するパイロットの腕はかなりのモノです。我々が得た情報ではこのパイロットはかつて、世界最高峰の腕前を持つ戦闘機乗り……『生粋のエース』と呼ばれた……』

テレビでは、どのチャンネルも全てがああの時の事を放送していた。どうやら、ドイツ以外の各国でも同じような番組を放送しているらしい

「…胃薬や頭痛薬じゃなく、鎮静剤が必要だな……」

他の新聞にはこう書かれているのもあった

あの『白騎士』と対なる存在……『黒騎士』

決して滅ぼす事の出来ない存在、一瞬で標的となったモノを刈り取る……『不死者』

ドイツを危機から救った英雄……『ジークフリート』

……随分と勝手に呼び名を命名されたモノだな、俺が寝ている間に
よ……

「……というよりも、何で俺の個人情報や【CFA-44】の事も普通に報道されているんだよ……それも【世界規模】でよ……？」

「それは、どこぞの誰かが機密扱いの情報をメディアに流したからよ。嚴重なセキュリティを突破した上でね」

【CFA-44】などの兵器類を狙うならば、分かるが……俺の個人情報まで得る為、嚴重なセキュリティを突破してまで入手する物好きなんざ、居る訳が……いや、居るな

俺の脳裏に一人の【ウサギ耳】の顔が浮かぶ

「……十中八九、【アイツ】の仕業だろうな……」

隣に座る千冬が小声で俺に耳打ちする

「……他に誰が居るよ……あのウサギめ……今度、会ったなら、折檻だな……」

俺は軽く目眩を感じながら、未だに重く感じる頭を押さえた

だが、俺はまだ事の重大性に気付いていなかった

今まで、俺を取り巻いていた全てが一変する事にもな

- - - - -

そう、あれは普段と変わらずに教導が休みの際、定番となったアウトバーンでの走りでは、パパラッチや各メディアに追い掛けられ……

また、ある時は馴染みとなったドイツの酒場へと足を運べば、街中の人々が集まり拍手喝采に歓声……最早、パレード級の大騒ぎとなつた

「……ある程度、予想はしていたが……こりゃ、予想を遥かに越え

たな……」

最早、唯一の安息地となった基地の食堂にて俺は酒瓶を片手に呷く。
ここ数日は基地で完全に缶詰め状態だから、気が滅入る

それに時間は既に深夜を過ぎており、食堂には俺一人しか居なかった

「随分と疲れた顔をしているな……？」

後ろを振り返ると其処には常に着用している軍服を緩め、ラフな格好をしたフランチエスカが居た

「……そりゃ、街に出れば珍獣扱いだぜ、フランチエスカ？」

その上、明らかにどこぞの科学者の様な連中が現れては『我々に君の遺伝子を貰えないだろうか？』とか『是非、我々の【研究】に協力して欲しい』だぞ？」

「だが、お前の事だ。そう簡単に承諾する訳が無いだろう？」

するとフランチェス力は俺が持つ酒瓶を取り、豪快に酒瓶へと口付ける。一気に酒を煽る。

「まあな、今頃は俺を訪ねた連中は全員、しばらくは病院のベッドの上で天井のシミを数えているだろうけどな……」

俺は以前、街へと訪れた際に購入した煙草を取り出すと一本を袋から取り出し、口にくわえる。

「……あまり、煙草を吸うのは感心できんな……集中力が落ち、心肺機能も低下するぞ?」

「適度な喫煙なら平気だ……それに気晴らしだよ」

俺はくわえた煙草にマッチで火を着け、深く煙を吸い込む。紫煙が肺を満たし、先程まで飲んでいた酒が溜まった胃袋が焼けた。ただれる様な熱さを感じる。

俺は深く吸い込んだ紫煙をゆつくりと吐き出す。吐き出した紫煙は食堂の天井へと上り、天井手前まで上がると空気の流れにより四散していった

「私は煙草が嫌いだな、先程も言ったが集中力が落ち、体力も落ちる上……」

フランチェスカは僅かに残った酒を一気に煽るとダラけた感じに座る俺の膝上に跨り……呆けた表情の俺へと唇を重ねた

重なった唇と共に俺の口内へとフランチェスカの舌がねじ込まれて先程、煽った酒が流し込まれる。流し込まれた酒が喉を伝う度にアルコール度数が強い為、焼けただれる様な熱さを感じる

俺はフランチェスカにされるがままだった。ねじ込まれたフランチェスカの舌は俺の歯列をなぞる様に動き、口内の中心に位置する俺の舌へと絡め、俺の口内を蹂躪する

既に煽った酒は無く、ただ無味の互いの唾液が生々しい音を立てながら混ざり合って俺とフランチェスカ、二人しか居ない静かな食堂に響き渡る

五分が過ぎただろうか……フランチェスカはゆっくりと舌を自分の口内へと戻し、唇を離す。唇を離す際には食堂の電灯に照らされた唾液による銀色の糸が俺とフランチェスカの唇を繋いでいた

「っ……それにキスする時、苦く感じるだろう……？」

「……俺には甘く感じたけどな……」

フランチェスカは俺の頬を撫で、ゆっくりと顔を近付けた

「なら、不公平だな………続きは私の部屋でな？」

「ここ数日、基地に缶詰め状態の俺を慰めてるのか？」

「なら、少しばかり………スキンシップするのが濃すぎるんじゃないのか？」

「拒むならば、お前だって簡単に拒めた筈だが？」

「…』来るものは拒まず、去るものは追わず』が俺の信条でな」

フランチェスカは俺の膝上から降り、俺の腕を引く

「ならば、拒まずに来て貰おうか……今夜は寝かさんぞ？」

まあ、言うまでもなく……その後、フランチェスカの部屋で二人、仲良く【激しく燃え上がった】とでも言っておこう

- - - - -

あれから、三時間位が過ぎた頃……俺はフランチェスカの部屋……

・ベッドの端に位置する窓から陽が昇る光景を眺めていた

自分のすぐ隣のベッドへと目を向ければ……薄いベッドのシーツを羽織ったモデルも裸足で逃げ出す一糸纏わぬ姿のフランチェスカが静かに寝息をたてていた

普段とは違い、寝顔は随分と可愛いものだな……

そんな呆けた考えを頭に浮かべながら、俺は眠るフランチェスカの頭を軽く撫でた

俺はフランチェスカの頭を撫でながら、俺はある疑問を思い浮かべていた

何故、俺はISを起動できたのか？ これも【転生者】とやらの能力のお陰なのか？

それに【スタウロス】の一件……あの無人IS機は誰が製作して何

の為、ドイツに現れたのか？

俺は床に脱ぎ捨てた上着から携帯を取り出し、その疑問の幾つかに答えられそうな奴に電話を掛ける。――普段ならば、向こうからしか連絡が取れないが……何故か、今ならば連絡できると感じたからだ

「……俺だ……今、会えるか？」

俺は繋がった電話先の相手……。『篠ノ之 束』にそう言った

回想 ・ 【疑問】 ・ (後書き)

次話では、この作品での【転生者】についてを主題とする予定です

まあ、ご都合的な内容に仕上がるでしょうが……

回想 ・ 【天災】との再会と【居場所】 ・ (前書き)

修正を終えたので、改めての再投稿です

やけに長ったらしく、御都合主義と原作を逸脱したオリジナル展開が満載となっておりますので、ご注意ください……

回想 ・ 【天災】との再会と【居場所】 ・

束に連絡を入れ、翌日……いや、正確には二日が過ぎた

まだ、陽が昇る前の暗闇がドイツの街を覆う中で俺は一人、静寂に包まれた夜明け前の街をバイクで駆け抜けていた

既にフランチェスカからの外出許可は得ている。許可を得るのには、そう苦労はしなかった

まあ、一晩中【激しく燃え上がった】のも理由の内だろう。それにフランチェスカは俺が今や一躍、有名人となった為に自由に行動できなくなったのを不憫に思ったのが最大の理由なんだろうよ

俺は束が指定した待ち合わせ場所へとバイクを駆りながら、ある事

を考えていた

- - - - -

あれは、まだ日本に来て五反田食堂での仕事を始める前の頃だった

暇を持て余していた俺は俺自身 - - - 【転生者】という存在についてを改めて考えていた。この世界には俺以外の【転生者】とやらは存在するのか - - - または、過去にもそういった存在は居ただろうか？

俺は手当たり次第にオカルト系などの過去の文献、古本屋などへ足を運んで調べた

だが、収穫は少ないモノだった。稀に前世 - - - 前の人生の記憶や技術を持ったまま、生まれてくる者などの所謂、生まれ変わりとい

うモノばかりであり、それ以外には満足な結果は出なかった

- - - - -

今現在、俺は考え方の角度を変えてみる事にした。常人離れた身体能力も桁外れに高い適応力も謂わば、遺伝子に刻み込まれたモノ
- - - ならば、人類最高峰の頭脳を持ち【天災】と称される束ならば、それらの謎を科学的に解明できるのでは？

それに【スタウロス】の件についても恐らくは関与しているだろう
…… それらを問いただすのを兼ねてだ

俺はバイクを加速させ、待ち合わせ場所へと急いだ

- - - - -

待ち合わせ場所……海岸沿いの道路脇にバイクを駐車させ、俺は浜辺へと歩き出す。まだ陽が昇るには大分、時間がある……俺は浜辺をしばらく歩きながら、東の到着を待った

だが、一向に東が現れる様子は無かった。辺りを見渡しても人影は無く、海へと視線を向けてもこれといったの怪しげなモノも見当たらなかった

「こりゃ、無駄足だったか……？」

そう呟き、浜辺へと視線を戻した俺はあるモノを見つけた。それは砂浜に突き出た物体……ウサギの耳を模したようなモノであり、ご丁寧にその物体には『引っ張って下さい』と書かれたタグが括り付けられていた

これは何かのテストか、罨の一種なのか……？

とはいっても束の姿が無い以上、明らかに怪しいソレ以外に束からの手掛かりは無い為、俺はタグに書かれた通りにソレを引っ張った

砂浜だった為か、ソレは難なく簡単に抜けた……だが、俺が引き抜いたソレは単なるウサギの耳を模したカチューシャであり、それ以外は何にも変わりは無かった

「……俺にどうしろって言っただよ……？」

俺はまだ薄暗い空を見上げ、呟く。すると俺の上空より飛来……いや、落下する【何か】が見えた

戦闘機乗りであり【転生者】でもある俺の目は最早、そこらの望遠鏡以上の視力を誇る。俺は落下地点と予想される場所……今、俺が居る場所から走り出す

ある程度、落下地点から距離をとった俺の眼前に遙か上空より落下

するソレは砂浜へと激突……衝撃で砂煙が辺り一面を覆う。俺は目を凝らして落下したソレの正体を確認する

まさか、未知との遭遇と言わんばかりにUFOじゃないだろうな……

だが、砂煙が晴れたソレの正体は呆けた俺の想像を遥か斜め上へとブツ飛んだモノだった

「……………キャラクター人参……………」

落下したソレはまるで漫画に登場する様なやたらとイラストチックな人参を模したモノだった

「あっはっはっはっはっ、引っ掛かったなあ！ ジェイ君！！」

高らかな笑い声と共にその人參の中心部が開き、中から現れた人物
……それは……

「……束、なんだそりゃ……？」

というよりも今頃、基地じゃあ未確認飛行物体が現れたって大騒ぎ
だぞ……？」

「心配ご無用、この移動用ラボ【吾が輩は猫である（名前はまだ無い）】は従来のステルス機以上の高度なステルス機能を搭載しているから」

「無駄なまでにハイスpekだな、オイ……」

明らかに技術の無駄遣いだろうが……

「でも、久しぶりだねえ……ジエイ君の【愛妻】である束さんの顔
を見たくて堪らなくなっちゃったのかなー……？」

ニヤニヤという表現がピッタリな笑みを浮かべ、相変わらずのモデル
顔負けの肢体を俺の身体へと擦り寄せる束

顔を俺の胸元に埋め、まるで猫が自分の縄張りを主張する様に顔を擦り付ける。すると束の動きは止まり、こつ言った

「……………雌おんなの匂いがする……………」

ジェイ君、私やちーちゃんという美人が居るっていうのに他の女を抱いたの？」

「犬か、お前は……………」

……………その件に関しては……………【黙秘権】を……………」

「天才であり、ジェイ君の嫁である束さんは却下します

相手は誰かな、あのナターシャっていう元カノ？」

「いや、ナターシャとはひと月程、前でコレはフランチエスカ……………
あ……………」

俺は自ら、最大の墓穴を掘った事に気付いた

「ふーん……もし、ちーちゃんやジエイ君を慕っている子たちへの事がバレたら……きっと世間とかは大騒ぎだろうねえ……？」

「頼むから、やめてくれ……」『ドイツ基地で殺人、痴情のもつれが原因か？』なんて報道されるのが目に浮かぶ……」

「じゃあ、ジエイ君は束さんに対して大きな借りができた訳だね？
ちーちゃんたちに内緒にしてあげるんだから」

まるで新しいオモチャを手に入れた子供の様に無邪気に笑い、束は俺を見上げる

「……あんま、無理難題をふっかけんなよな？」

俺はお前とは違って、優れた人間じゃあ無いんでな」

「んー……無理難題じゃないよ？」

束さんが要求するのはジエイ君からの愛かな？」

「愛ねえ……それも難題つてモノに変わりないんじゃないのか？」

「別に大した事じゃない筈だよ？」

例えば………」

すると束は顔を近づけると……無防備となっている俺へと唇を重ねた

ゆっくりと束の舌は俺の口内へと侵入、この間のフランチエスカと同様に侵入してきた束の舌は俺の口内を蹂躪した

十分が経過した頃、満足したのかは知らないが束は舌を戻してゆっくりと唇を離れた

「……満足しましたか？」

「っ……束さんの初めてのキスを堪能したんだから、もっと嬉しそうな感想は無いのかなあ？」

「ファースト・キスで舌を突っ込んでくる奴は居ないと思うが？」

……取り敢えず、これで貸しはチャラって事か？」

「何だったら、もう一つの束さんの【初めて】も捧げてあげようか？」

「とても魅力的な話だが、遠慮させて貰おうか……そこまで、節操なしでも無いんでな」

「つれないなあ……他の女は抱いても私やちーちゃんは抱けないっていうの？」

「お前ならともかく、何で千冬まで出てくるんだよ？」

それより、何時からお前は【俺の女房】になったんだ？ 恋人やら結婚やらを数段階、すっ飛ばしてよ……」

俺は軽く頭を押さえ、束へと目を向ける。コイツと話すと何故かしら、こっちのペースというか調子というか……色々と崩されてしょうがない

「束さんのジエイ君に対する愛は常識なんて、つまらないモノは通用しないの」

それにジェイ君は束さんやちーちゃん、その他多数の人に好かれるんだよ？ ジェイ君もそこまで朴念仁じゃないと思うけど？」

「はあ……キリが無いから、この話はパスだ……【本題】に入ろう」

俺は正に神出鬼没である束を呼び出した【本題】へと入る

「先ず、お前には頼みたい事がある。何故、【男】である俺がISを起動できたのか……精密検査なり何なりと調べて欲しい」

それにこのISについてもな、本来なら【不死者（Nosferatu）】についても調べて欲しいが……生憎、機体は格納庫で嚴重保管中なんぞな」

少なくとも今、【スタウロス】の事を聞いても結局、はぐらかされてお終いになりそうだ、そう考えた訳で先に俺や待機状態……首にぶら下げた認識票となっているISについてを調べて貰おうと判断した

「せつかちだなあ、ジエイ君は……まあ、そこも魅力的なんだけどね？」

そう言って、束は人参……移動用ラボへと俺を招いた

内部は移動用の為か、搭載された機材などはコンパクトにまとめられているが、それらに関しては素人の俺から見ても軍施設の設備とも引けをとらないモノだった

「まずはジエイ君の検査からかな……それじゃ、上着を脱いでくれるかな？」

俺は言われた通り、上着を脱ぎ捨て半裸となる。手慣れた様子で束は注射器を取り出し、採血を開始する。やたらと熱っぽい視線を束から感じるのは気のせいだという事にしておこう

「血液の分析には少し時間が掛かるから、その間にジエイ君のISを調べちゃうね？」

束は俺の首にぶら下がった待機状態となっているIS……認識票
を手に取り、ソレを眺める

「待機状態はジェイ君の認識票と同じ形状になってるね。ただ『首
無し騎士』の刻印が刻まれている……」

何の偶然か、ジェイ君が率いていた部隊の隊章と全く同じだよ？」

俺はその認識票（IS）へと目を向ける。刻み込まれた刻印はかつ
て、俺が率いた部隊……【フロントム隊】の隊章とは違い、色付
けは無いものの『漆黒の馬に跨り、剣を高らかに掲げた首の無い騎
士』だった

「……偶然というべきか……はたまた、必然だったのか……」

世の中、分からない事ばかりだな……」

束は搭載された機材のキーボードを叩き、画面にはよく分からん数
列やら計算式が表れる。しばらくすると画面には起動時のISの図
面が表れた

「ふむふむ……このISは普通のととは違い、装着者の身体機能の強化を重視したスタイルになっているね

でも、その分は他の機能を犠牲としているかな」

「……つまり、分かり易く言うത്？」

「装着者の身体機能は強化されるけど、飛翔機能も無ければ絶対防御も無く、基本的なハイパーセンサー位しか内蔵されてない【欠陥機】って訳だよ」

「【欠陥機】か……まあ、少なくともノスフェラトゥ【Nosferatu】のパイロット・スーツとしては最適だったな」

「【不死者】なんて随分と物騒な名前だね？」

「割と気に入っている異名だ。それに元々、アレを設計したのは俺だ、設計者が名前を付けるのは当然だろう？」

「まあね、束さんが開発したISの幾つかも、名前は束さんが付け

だから

でも、ISを戦闘機に搭載するとは中々の考えだよ。天才である束さんも感心しちゃったなあ……」

「だが、お陰で俺専用機となっちまったがな……まあ、元々は俺が操縦する事を前提に設計したから、当たり前だと言ったら当たり前だけだな」

だが、ISを搭載した事については予想外だったが、と付け足して俺は言う

「でも、ジエイ君ならISを起動させても不思議じゃないかな……何たって、束さんの【旦那様】なんだから」

「だから、俺はお前の恋人でも旦那様でも無いが……？」

「今はまだね、でも直にそうなるよ？」

「その根拠のない自信は何処から湧いてくるんだかな……」

一通り、ISの検査は終わり俺は脱ぎ捨てた上着を着直す。その際、束から残念がる視線を感じたのも気のせいだと思っておこう

そうこうしていると血液検査とやらの結果が出てきたらしい。束は機材の画面からその結果を映し出した

画面に映し出されたのは、映画やテレビなどによく登場する遺伝子の配列図の様なモノだった

「簡易的なモノだけど、そこらの病院や研究施設とは比にならない程の精度を誇るのだから、間違いは無いから心配ご無用だよ」

「いや、そこらの病院や研究施設以上の精度を誇る機材は簡易的とは言えないと思うけどな……」

「お堅い事は無しだよ、ジエイ君？」

さてさて、検査の結果は……」

束はしばらくの間、検査結果とやらが映し出された画面を眺めていた。だが、流石は【天災】というべきか……十分もすれば、束は俺の方へと向き直る

「んー……検査結果は至って正常かな？」

でも、【一部】を除いてね」

「……【一部】を除いて？」

すると束は先程、採血の際に注射器を刺した右腕を指差す。右腕には刺した筈の小さな針穴の痕は無く、うっすらと出ていた血も何時の間にか、止まっていた

「ジェイ君の治癒過程の速度は常人の50倍ってところかな？」

掠り傷なら数秒で治っちゃったり、殆どの病気なんかも免疫を備えている……正に有り得ない事だよ？」

「……つまり？」

「白血病や癌なんかの現在でも不治、治療困難の病気にすら高い免疫力を備えているから、全ての病気に克服している状態って訳

それにあらゆる毒物、薬物にも免疫があるから、強力なモノでも時間があれば勝手に解毒しちゃうだろうね」

「……常々、自分が化け物じみた奴と考えていたが真正正銘の化け物だったとはな……」

すると束はこう言った

「寧ろ、これは【進化】なのかもね？ 他にも高い身体能力や桁外れの適応力……」

これは束さんの推測なんだけど……ジエイ君は現在の人類よりも数段階、先を進んだ人……所謂、スーパー・サレエンス「超人類」ってモノじゃないのかな？」

「【超人】って訳か？」

なら、納得できるわな……見ただけで乗り物の操縦方法が理解でき

て、ISを起動させたのも……」

まあ、随分と無理矢理なこじつけだがな…、と俺は付け足して言う

「でも、これは束さんも驚きだねえ…… IS以上の大発見だよ？」

「少なくとも、この事を知られたら各国の科学者たちは狂喜して、各国は躍起となって俺を狙うだろうな

正に絶好の【研究対象】かつ最高の【実験動物】モルモットって訳だ……唯でさえ、ISを起動させた男として目を着けられているのによ……」

すると束は俺に近寄るとその細い腕を俺の首に巻き付け、抱き付く

「ジェイ君は大丈夫だよ……だって、ジェイ君は私のモノなんだから……」

……他の科学者なんかには渡さない……」

俺は束の瞳を見た。その瞳は普段とは違い、暗く無機質というような感情が無い瞳だった

「……………俺は誰のモノでも無いぜ？」

……………少なくとも、科学、研究オタク共のモノでも無いがな」

俺は束の頭をゆっくりと撫でる。束は俺の胸元に顔を埋めた

「……………束、あの無人IS機……………製作したのはお前か…？」

「……………ううん……………アレは私が作ったモノじゃないよ……………」

でも、作った連中の目星は着く……………」

「……………そうか……………なら……………【スタウロス】の一件、あれはお前の仕業か？」

「……………分かっている事をジエイ君は聞くのかな…？」

「……………俺はお前の口から聞きたいんで……………」

すると束は顔を胸元に埋めたまま、静かに言い始めた

「……ジェイ君はISに人生を翻弄されていたでしょ……でも、ジェイ君は束さんやちーちゃん、女性を憎んだりしなかった

それにジェイ君は、この【女尊男卑】の世界でも常に自分を貫き通していた……」

束はゆっくりと言葉を続ける

「ジェイ君は何時も空を眺めては寂しそうな表情をしていた……でも、当たり前だよね……」

だって、ジェイ君から空を奪ったのは私が原因なんだから……」

束は俺の上着を握り締める。その細長い指には指先が白くなる程の力が込められていた

俺は、ただ黙って束の言葉を聞き続けた

「……ジェイ君が此処にちーちゃんと一緒に来た時、あの戦闘機の事を知ったんだ……勿論、ジェイ君が設計した事もね……」

ジェイ君がISを起動しなければ、私がやった【賭け】は成立しなかったけれど、私はジェイ君が起動できるって思ったんだ……」

科学者っていうのは感情よりも理論を優先して、物事を考えるモノなんだけどねえ……」

「随分と分が悪い上、危険な【賭け】だな……俺が起動できなければ、都市は消滅して数万人が死ぬ事になった……」

俺一人に対して、大きすぎるリスクだな……？」

「……私はね、ジェイ君……この世界が嫌いだった。幼い頃から私は自分の才能に気付いていた

みんなが、一を知って二通りの答えを出せるようになる頃、私は一を知って千通りの答えを出せた

みんな、最初は凄いつて誉めてくれた……でも、時が経つにつれて、

私を気味悪がっていった……学校の先生や自分の両親にすら……」

俺は束の話聞いて思った。人間って生き物は異なるモノを恐れる

最初は束を優秀だと、皆が持て囃したのだろう……だが、束の底知れぬ才能に皆は恐怖を抱いた

行き過ぎた才能は何れ、自分たちを脅かす脅威となるのではないか？

きつと、そう考えたのだろう……随分と勝手な考えだな……束は自らが望んでその才能を得た訳では無い。ましてや、その才能を私利私欲の為、使った訳でも無い

ただ、一人の人間には有り余る才能を持っていただけで周りからは畏怖の目を向けられた

人間ってのは、つくづく身勝手な生き物だ

束は言葉を続けた。相変わらず、顔を俺の胸元に埋めたままで表情は見えなかったが……

「……でも、幼い頃からちーちゃんが居てくれたから私は平気だった

そして、私はISを開発して世界に私の居場所を作ろうと考えた……でも、そのせいで私は両親から非難を浴びて、妹の【篝ちゃん】にも迷惑を掛けて……結局は居場所を無くしちゃったんだ……」

俺は束の頭を撫でながら、こう言った

「……束、俺はよ……生まれて直ぐに両親を亡くしたんだよ」

「え……？」

「生まれて直ぐだったから、親の顔なんて写真でしか見た事が無かった。それに俺が軍に入って出会った仲間も相当、キツイ人生を送った奴らばかりだよ……」

目の前で親兄弟を殺された奴、唯一の肉親だった妹をどこぞのゴロ

ツキ共にボロ雑巾のように暴行された上、なぶり殺しにされた奴……
… 拳げ句の果てには生活苦で無理心中を図ろうとした親を自分の手で殺した奴……

そんな連中も居た…… だからよ、お前は人生のどん底を経験したと思っ
てんなら…… そりゃ、小さい事なんだよ。お前はまだ、【一番の居場所（家族）】を失った訳じゃないだろう？」

「……そう……かな……？」

束は埋めていた顔を上げ、俺を見上げる

「ああ……それによ……」

そう言って、俺は束を外へと連れ出した

- - - - -

俺は束を外へと連れ出し、バイクの後ろへと座らせて日の出前の薄暗い街を駆け抜けていた

「バイクになんて、乗った事なんか無いだろ？」

「うん、私は今日が初めてだよ」

先程とは違い、普段の様な明るい口調で束は言う。バイクを駆る俺の後ろに座り、束はしっかりと俺にしがみついた

「こうして、バイクや車を飛ばしているとよ……普段の道が全く違う様に感じるんだよ

それに……世界ってのは見方の角度を変えれば、幾らでも変わるモノなんだぜ？」

俺はバイクを加速させ、まだ誰一人として起きていない街を駆け抜ける

「……………ありがとう……………」

風を切る音と共に、束が呟いた言葉が微かに聞こえた。俺は静かに笑みを浮かべて、更に速度を上げた

……………

バイクを最大速度まで飛ばし、俺と束がたどり着いたのは山岳部の峠道の頂上だった

俺はバイクを止め、ドイツの街並みを一望できる場所へと足を運ぶ

「随分と走ったけど……此処に何か、あるの？」

「……まあ、見てみろって……俺のお気に入りだぞ」

2〜3分が過ぎると水平線の彼方から朝日がゆっくりと昇り、薄暗かった街を眩い光が照らしていく

「うわぁ……綺麗……」

東はその光景に暫し、目を奪われている様子だった

「……俺はよ、ガキの頃から夜明けをよく見ていたんだよ。どんな場所だろうが必ず、夜明けってモノは来る……明けない夜ってのは無いってな

それによ、世界ってのは……そう悪い所ばかりじゃない。こういった良い所もあるんだ……」

お前には千冬や妹の【篝】って娘、それに俺が居るんだ。お前の居場所はまだ失ってないんだからよ……」

「…ジエイ君……」

「だから、何でも一人で抱え込むなよ……また、俺の為とか言っ
て軍事ネットワークやらにハッキングしての大騒ぎはゴメンだから
な？」

「酷いなあ、全てはジエイ君を想つての行動なんだよ？」

東さんみたいに一途で相手に尽くす美人は早々に居ないと思うけど
？」

「尽くす手段がブツ飛び過ぎだろうが……まあ、相手の見せ場を作
る為に都市に巡航ミサイルを発射させる奴なんぞ、お前しか居ない
だろうけどよ」

「それ位、東さんのジエイ君に対する愛は大きいんだから」

すると東は俺に近寄るところ言った

「でも、ありがとうね……ジエイ君のお陰で何だか、スッキリした

よ。それに、この世界もそう悪くないって思えてきたしね」

「そりゃ、何よりだ。これで世界中に核弾頭だの巡航ミサイルなんかをぶっ放す事を避けた訳だからな？」

「ふっふーん、そうかもね？ それとさっきも言ったけど……」

- ジェイ君は私のモノだからね？ -

そう言って、束は軽く俺に唇を重ねた

「っ……それじゃ、また会おう」

唇を離すと束は俺から数歩、離れた。俺は束を目で追うも朝日の眩い逆光で一瞬、視界を遮られた

次に東が居た場所を見れば、既に東の姿は無かった

俺は海辺の方向へと視線を向けるも、其処にはあの『人参』型の移動用ロボも既に姿は無かった

「…神出鬼没というよりも…予測不能な奴だよ、相変わらずな…」

俺はため息をつきながら、バイクに跨ると基地へとバイクを飛ばした

それから、数日後…ドイツでの教導生活も残り僅かとなった俺に一通の手紙が届いた。手紙といってもソレは一枚の写真が同封されているだけのモノだった

写真には無邪気に笑う束と……ぎこちなさそうな堅い笑みだが、少しだけ嬉しそうな表情を浮かべる少女が写っていた

そして、写真にはこう書かれていた

『篝ちゃんと一緒に　まだまだ、ぎこちない感じだけど私の大切な居場所……家族と』

俺はソレを見て、静かに呟いた

「……………何か、束とは真逆な感じだな…………？」

作者は原作知識は皆無であり、基本的にこの作品は二割の原作沿いと八割のネタとオリジナル展開で構成されております

また、作者自身もこの話を書いている最中に「何か、ベタな展開だろ?」と思いましたが、作者のちっぽけな頭と微生物以下の文才ではこれで精一杯ですので、どうか寛大なお心でこれからもよろしくお願い致します……

次に更新する話で回想編を終わりとする予定です

内容としては『亡国機業』との対抗勢力として、ジェイソンが新たな【部隊】を結成するまでの話を考えています

作中では、ジェイソンの率いた【ファントム隊】の愉快(?)なメンバーも数名、登場予定です

メンバーとしては、女ったらし、寝る時以外は喋り続ける奴などの個性的なキャラを考えております

それでは……

回想 ・ 【別れ】、そして【現在】へ ・

ドイツの教導生活も終わりに近づくにつれ、俺はこの基地での一年間という長い様で短かった期間を振り返った

初めは千冬の補佐官として、途中からは同じ教導官として……

まあ、ナターシャとの再会など色々とあり、今では国連所属の傭兵パイロット兼【世界初の男性IS操縦者】となった訳だ。俺もそろそろ、三十代に差し掛かるが……これまでの人生でも、正に怒涛の一年だったな……

教導生活が残り1ヶ月となった頃、多少は世間からの反響とやらは収まってきた。だが、今ではこの世界……【女尊男卑】に生きる世界中の男たちからは俺を【英雄】と崇める奴も居るらしい

しかし、世の中の女性たちも【スタウロス】の一件以来、これまでの極端な男に対する【扱い】とやらも以前に比べて良くなったらしい。それに各国の軍隊では戦闘機乗り憧れて、次々と入隊志願する男たちが増えた様だ（但し、ISの登場以降の軍事縮小の為に戦闘機の数減っており、パイロットの数の方が遙かに上回っているのだが……）

だが、各国からはこぞって、俺を傭兵として雇いたいという申し出が多数、出てきた

待遇はかなりのモノであり、報酬も結構な額を提示している上、望むモノは全て手配するという中々、魅力的な条件を出してきた

だが、どの国も本当の目的は同じだ。男であり、ISを起動させた俺を研究したいのが本心だろう

何故なら、俺は言わば、この【女尊男卑】という世界を引っくり返す『唯一の鍵』だからだ。誘惑に負けて、その条件を飲んだなら最後……俺が死ぬまで連中の研究材料にされるのがオチだって事は分かり切っている

まあ、連中は無闇に手出しはしないだろう。今はドイツでの補佐官として……コレが終われば、国連の傭兵……既に予約済みなんadena

.....

ドイツでの教導生活も残り半月となった頃、俺は基地内でも引つ張りだこになっていた

千冬に呼び出されては以前、日本に居た頃に一度だけ、千冬と行った……『剣道』ってヤツか？ ソレの模擬戦を頼まれたり、ラウラヤクラリツサの『黒ウサギ隊』の隊長格からは二人同時に接近戦の模擬戦を頼まれたりもした（千冬もだが、やたらと【本気】な目をしていたが……）

また、イーリの奴からはISを使った空中戦での模擬戦を頼まれた事もあった（その模擬戦の直前までは、ナターシャに【絡まれて】いて、模擬戦時には【本気で撃墜する】と言わんばかりの勢いだっただがな）

ナターシャやフランチェスカは……あー、あまり詳しくは言いたくないがその……教導が休みとなっている日の夜には現れて【搾り尽くされかけた】とでも言っておこう。というよりも、あの二人の体力は俺以上じゃないのか？（【夜限定】でよ）

……おふざけな話はこちらまでにしておき、半月前の【スタウロス】の一件の際、現れた【無人IS機】については海中に沈んだ残骸を回収し、国連の研究機関へと送り、調査された結果は半月後の最近になって届いた

あの無人機は【スタンド・アローン独立稼働型人口頭脳（AI）】を搭載、それに【リモート・コントロール遠隔操作システム】、IS自体も束が開発したモノとは違い、それらをモデルとした【擬似IS】だという事が判明した

あの無人機に使用されていた【擬似IS】は本来のISの所謂、劣化物といった所だろうか。絶対防御などの基本的なセンサー類はあるものの、基本的な性能は劣るモノだった

しかし、厄介な事に【擬似IS】は開発途中の段階であり、もしも開発を終えていた場合は【男性】でも起動できる上、擬似（つまりは、コピー品）という面でも大量生産も夢では無いという可能性が見えてきた

俺は秘密裏に束から情報を頼んだ。以前、束と会った際に束はあの無人機を作った【連中】の目星は着くと言っていたからだ。束は情報を提供してくれた、あくまでも国連の為では無く、俺からの頼みだからだと強調してな

提供された情報で、あの無人機を開発したであろう【連中】
- - -
『亡国機業』^{ファントム・タスク}と呼ばれる組織と判明した

フランチェスカからの『亡国機業』という名の組織について、尋ねてみるとある事が分かった

『亡国機業』とはかつての大戦 - - 第二次世界大戦中に創設された組織 - - 所謂、【秘密結社】らしく、これまでに起きた大規模な戦争、又はテロ……しかも、あの史上最悪のテロ - - - 『9・11』
1 『 』 までにも関与しているらしい

これまでに判明している関与した出来事に対して『亡国機業』の目的は何らかのテストと思われる。実際、あの無人機の出現も実戦での性能をテストする為だろう

だが、『亡国機業』が関与しているモノはそれだけでは無かった。あの第二回目のIS世界大会……『モンド・グロツソ』の時に起きた一夏の誘拐事件にも関与している事も分かった

どうやら、ここ数年……連中はIS関連に目を着けている様だ。それに恐らく、連中は俺にも目を着けただろう、男でありながらISを起動させ、自分たちが開発した無人機をいとも簡単に破壊したんだからな

少なくとも俺が連中ならば、そうする

この事を踏まえ、国連は『亡国機業』の開発している無人IS機はまだ多数、存在すると考えた。ドイツでの様に恐らく、連中は都市部を狙つての【テスト】を何れ、また行つと想定した国連はナターシャやイーリを通して、ある命令を出した

それは、国連が指名する『IS操縦者』と俺が推薦する『戦闘機乗り』たちで対『亡国機業』専門の部隊を結成しろとの事だ

現在、その部隊とやらのメンバーは俺とフランチェスカ、ナターシヤとイーリ……正式では無いが千冬の名も挙がっている

しかし、まだ教導期間中である為、結成は教導生活の終了後と先延ばしにした。一度、頼まれた事はキッチリとやり遂げるのが俺の流儀なんぞな

.....

俺と千冬は晴れて、一年間という教導生活を今日で終える。既に荷物（とは言っても日常生活に必要な最低限のモノなので、極めて少ないのだが）は纏め終え、俺と千冬、ナターシヤやイーリ、フランチェスカに『黒ウサギ隊』の一同が【CFA-44】が納められてい

た格納庫に勢揃いしていた

今では、俺の専用機となった【CFA-44 Nospheratu】は二日前に国連から派遣された作業員たちにより、俺の新たな『配属先』へと既に輸送済みだった。格納庫の外に位置する滑走路には一機の輸送機――【C-130 Hercules】が待機していた

千冬は日本へと帰国するそうだが、俺は直ぐに『配属先』へとナターシャとイーリの二人と共に移動するそうだ。フランチエスカはまだ、この基地に駐在するらしい

何でも、自分の後任に相応しい人物を見付けて『キツチリ』と教育した上で、これから結成しなければならない【部隊】に配属されるようだ

俺と千冬は一年間、教え子だった『黒ウサギ隊』の一同に別れの言葉を送る最中だった

「キミたちは、私たちが一年という期間で鍛え上げた。正直、言えば……直ぐに音を上げると思っていたが、流石はドイツが誇る精鋭たちだ」

千冬は『黒ウサギ隊』の一同を見つめ、言葉が続ける

「今や実力はこれまでとは比較できない程、高いモノになっているだろう……しかし、過信はするな

過信は己を滅ぼす事となる。常に鍛錬を怠らず、より高みを目指して精進する事を忘れるな……！

キミたち、『黒ウサギ隊』……ドイツ軍IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の教官を務めた事を誇りに思う」

千冬は言葉を締めくくると敬礼を隊員たちに向け、行った。その姿は正に軍人、そのものだった

千冬という言葉が終わり、俺の番がやって来る……正直、千冬という言葉が良すぎる為、俺は非常に気まずい

ご立派な言葉など、考えもしていないからな……まあ、下手に着飾らずに思った言葉を言えば良い

その方が、俺らしいからな

「あー……『黒ウサギ隊』の諸君とは、トレーニングなどの基本的な教導しか担当していなかった。正直、千冬たちに比べれば、俺がキミたちに教えた事は微々たるモノだろうな……」

キミたちに送る言葉は……まあ、だいたいは千冬と同じ内容だ。だが、一度は部隊を率いた経験がある『隊長』として、そして『先輩』として、『黒ウサギ隊』……『シュヴァルツェ・ハーゼ』の諸君に一つ、言っておく事がある

何れ、キミたちにも様々な任務を任される事が恐らくはあるだろう。もしかしたら、その任務は理不尽かつ人として、軍人として誇れない様な【汚い仕事】かも知れない

だが、これだけは覚えていて欲しい。キミたちは最高の部隊であり、【最高の仲間】たちに恵まれている……だから、仲間だけは誇れ

……俺が言える事はそれだけだ」

俺は千冬と同様に敬礼し、言葉を締めくくる

それと同時に俺を除く格納庫内の全員が一斉に敬礼をした。隊員たちの顔を改めて見てみれば、既に何人かは泣きそうな表情を浮かべているのが居た

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐、前へ!!」

俺はラウラの奴を呼び出すと前へと来させる

俺はラウラが此方へと来ると一度は軍を離れても肌身離さずに身に付けていた認識票ドック・タグを首から外し、ラウラの首へと掛ける

「隊長……これは隊長の……」

ラウラは自分の首に掛けられた認識票へと視線を向ける

「……同じ隊長として、お前にコレを預ける。何時か、また会える日が来るまでな？」

するとラウラは視線を俺へと向け、敬礼をしながら言う

「っ………了解しました！ 全身全霊を賭けて誓いますッ！！」

その時のラウラの右目は………今にも涙が零れ落ちそうだった

「……頼んだぜ、ラウラ？」

俺は軽くラウラの頭を撫で、笑みを浮かべる。湿っぽい別れは苦手だ………だから、こうして笑うのが一番なんだよ

.....

「……そして、現在……つまり、今はこうして輸送機の中で、こうして昔話をしている……ここまでが【回想記録】イベント・ログって訳だ」

「……気を確かに、ジェシー？」

隣で不憫そうに俺を眺めるイーリが言う

「……あのな、これは独り言じゃなくて、今までの事を記録していったんだよ

第一、5〜6時間も機内に缶詰だろうが……機内食も機内上映も無いんじゃない、記録くらいしかやる事が無いだろうが……」

俺は記録の際に使用していたパソコンを片付けると積み込まれた一台の戦車の上へと登り、寝転ぶ

「全く……普通、一度はアメリカに飛行機で行ってから、ヘリとかで移動するのに何が悲しくて、戦車と一緒に輸送機で運ばれなきゃ、ならないんだか……」

「それは仕方ないじゃない、ジェシーは今や世界で唯一の【男性】IS操縦者なんだから

普通に飛行機になんか、乗ったら各国の機密組織やら機関がハイジヤックしてでも、拉致しようとするでしょうが？」

「それに……こんな美女が二人も同伴しているんだから、寧ろ幸運な事なのよ、ジェイ？」

先程まで、この輸送機の操縦者と何やら話していたナターシャは、そう言っただけで戦車の上で寝転ぶ俺の腹部へと跨る

「……それに昔を思い出さない？ 軍に居た頃、ジェイの愛機だった『F-14D』の操縦席で【イイ事】をしたじゃない……？」

まあ、明らかにアレは規律を違反していたけど、と付け足しながら言うナターシャ

「少なくとも、今程は盛っていなかったただろうなあ……お前はよ

それに幾ら、美女といってもベッドの上では【獣】だろうか？」

「あら、獣っていうのは失礼じゃない？　せめて、『愛が激しい』
と言って欲しいわ」

「それにアタシが散々、言ってるじゃない？」

ドイツでは【裸同士】でキスまでした仲なんだから、ナタルみたいにアタシの【純潔】をジェシーに折角、捧げてあげるって言うてるのに……」

肩を竦めながら、言うイーリ……普通、女が言う台詞じゃないだろうが……

「聞いてないわよ、ジェイ？　何時、イーリとそんな関係になったのかしら？」

……と、頬を膨らませながら言うナターシャ……

「……聞かれなかった上、言っても無いからな。知ってる訳が無いだろうが？」

「全く……千冬にフランキー、それに『黒ウサギ隊』のメンバー、それにナタルとアタシ……何人の女を墜とせば、気が済むのかしらねえ、ジェシー？」

「人を女つたらしのように言うな、少なくとも俺はお前らに一度も言い寄った覚えは無いぞ？」

すると二人はため息をつき、自分の頭を軽く押さえた

「ハア……普通に無意識で墜としているから、厄介なのよね……」

「その上、中途半端にしか分かっていないんだから尚更、質が悪いっただらありゃしないわよ……」

……等、と何やら呟く二人……俺、何か変な事でも言ったか？

「……しかし、また部隊を率いる事になるとはな……それも、ISと戦闘機の混合とは……」

俺は先程、片付けたパソコンを取り出して画面に『とある紋章^{エンブレム}』を映し出す

「……あら、それは？」

俺の腹部から降りたナターシャは、パソコンの画面を覗き込んだ

「……一応、部隊の隊章を考えてな。ISと戦闘機の部隊って訳で、思い付いたのが【コレ】だ」

画面には俺にとってのISの象徴……あの『白騎士』とかつて、俺が率いた戦闘機部隊の隊章……『漆黒の首無し騎士』が共に剣を掲げ、交差させている姿が描かれた紋章だった

「ふーん……中々、イイ感じじゃない？」

ナターシャの隣からパソコンを覗き込むイーリ

「……それで部隊の名前って、決まっているのかしら……？」

「一応はな……対『亡国機業』専門、IS編成戦闘機部隊……名前
は……【TASK FORCE】だ」

輸送機にて、延々と気流による揺れを散々、堪能した俺は新たな『配属先』へと向かっている最中だった。先程、パイロットに現在地を聞いた所、どうやら【北アメリカ北西部】を飛行中らしい

しかし、ここら一帯には軍事施設、基地は地図に無い筈……俺は暫しの間、考え込む

そう言えば、海軍での頃にこんな噂があった。噂といっても、くだらない内容なんだったがな……

当時、アメリカは年間の国防費を存在する軍事基地、施設の数よりも上回る費用を毎年、出費していた。噂ではあの有名な……『Area 51』での研究費用に回されていると言われていた

不思議な話では無い、【彼処】で行われている事は軍や政府でも僅か、一部の人間しか知らない。『大統領』までもが彼処の全てを掌握していないらしいな

俺はナターシャとイーリの二人に問い掛けた

「ナターシャ、イーリ……俺の『配属先』について、何か知っているか？」

するとナターシャは言う

「……ジエイも知ってるわよね？ 昔、アメリカは存在する軍事施設、基地の数以上の国防費を出費していた事は」

「ああ、お陰様で世間では『軍は軍事施設、基地の【便所】に莫大な費用を掛けている』なんて、馬鹿な噂が広まったよな？」

「もしも、それが事実なら……究極の税金の無駄使いだな、オイ……」

「ジエシーの『配属先』の名称は……【第十六国防戦略拠点】……
『地図にない基地』よ」

「『地図にない基地』？」

するとナターシャは言う

「言葉通り、地図に無い基地よ。知っている者も僅か……所謂、【秘密基地】って所かしら？」

「成る程……年間、消え行く莫大な国防費の謎の答えはソレって訳か……だが、随分と凄い所が配属先になったな……謂わば、【軍事機密】に指定されている場所だろ？」

「まあ、ジェシーが【世界初の男性IS操縦者】である以上、其処しか配属先が無いんじゃない？」

「俺はてつきり、あの『Area 51』で徹底的に研究されると思っていたがな……」

そんな会話を続けながら、俺らに乗せた輸送機は『配属先』……
【地図にない基地】^{イレイスト}へと向かい、飛行していった

.....

更に輸送機で揺れを堪能する羽目となり、数時間……

俺ら^{イレイスト}を載せた輸送機は目的地である『配属先』……【地図にない基地】へと到着していた

基地自体は、そんなに他の基地とは変わらないのだろう……『地図に存在しない事』と『ISとそれらに関連する設備が充実している事』を除けば……

ある程度、基地を案内（案内役はナターシャとイーリの二人なのだ^{ガイド}が……）された。俺の専用機の一つ……【CFA-44 Nosferatu】はISの扱いに特化した整備士たちにより、丁寧に保管されているらしい

まあ、新顔（と言っても、今では知らぬ者は居ない程の有名人だが）が現れた為、それなりに【一悶着】はあった

- - - - -

今から僅か、数十分前の出来事だが……此処へと到着した時だ。俺はナターシャとイーリにある事を訪ねた

「なあ、此処の責任者ってのは誰なんだ？ 一応は新顔として、挨拶くらいはしとかないとな」

すると二人は……如何にも不快感を露わとした嫌そうな表情を浮かべる

「……何か、悪い事でも言ったか？」

「責任者……と言つよりは……」

「寧ろ、【足手まとい】な奴だよ……」

余程、その【責任者】には良い印象が無いのかは知らないが……イ
ーリの奴、素が現れている

以前、ドイツの街へと繰り出した際にイーリの奴をナンパしようと
試みた【勇敢な（またの名を愚かな）男たち】との会話の際、『寝
ぼけた事を言つてんじゃねえよ。テメエ等と付き合う暇なんぞ、コ
ンマ一秒たりとも無いんだよ』と一喝と共にISの部分展開で哀れ
にも、イーリの奴に吹き飛ばされたなあ……（まあ、別にイーリの
口調には驚きはしなかった。『ファントム隊』にも口を開けば、罵
声飛び出る奴は居たからな）

「足手まとい……？」

「……名前は『スカーレット・ヴァレンタイン』、階級は【少佐】

此処の責任を任されてるけど、実質は彼の【優秀過ぎる部下】たちが
役目を果たしているわ」

「あの野郎、親の七光りだか何だかは知らないけど、自分が責任者
つていう立場に居るから我が物顔で基地を歩き回る事くらいはし
てないんだよ」

基地の管理なんぞ、全て部下に丸投げだよ」

「野郎つて事は男つて訳な……同じ男としても耳が痛い話だな、そ
りゃ……」

というよりも、素が丸出しだぞ、イーリ？」

「此処はアタシの古巣のような場所。だから、素が出るのも当たり前
前なんだよ、ジェシー？」

それとも、今までの方がジェシーの好みかしら？」

「好みも何も、どちらの口調でもお前はお前だろ？」

口調が変わる位で一々、好意が変わる程、俺も小っぽけな奴では無
いんでな」

するとイーリは若干、顔を赤らめながら何やら呟き始めた。それに
比例する様に不機嫌に頬を膨らませるナターシャ……

……本当に俺、何か変な事を言ったか？

すると俺らの前に一人の男が現れた

「やあ、ナターシャにイーリ！！ 久々だなあ……キミたちが居なくて、私は若干の寂しさを感じていたよ」

「……誰だ、コイツ……？」

俺はイーリの耳に小声で言う

「……今、説明していた奴……」

俺は改めて、その男へと視線を向ける

男の容姿は短く切りそろえた茶髪、体格もしつかりと鍛えられており、顔立ちも悪くない……寧ろ、同性の俺から見ても結構な男前だ……やたらと馴れ馴れしい態度を除けばな……

俺の目の前には、かなり鬱陶しそうな表情のナターシャ、そのナターシャの態度に気付きもせず、話しかけている男……『スカールツト・ヴァレンティン少佐』の姿だった

「ナターシャ……キミに会えて、本当に嬉しい限りだよ

私にとって、キミは太陽に匹敵する程に眩しい存在なんだからねえ？」

「……ええ、それは光栄だわ……本当に……」

するとイーリは俺に小声で言う

「ナターシャに気があるんだよ、下心見え見えの上キザったらしい事、この上ないんだっての……」

「……そりゃ、同情するよ……」

すると『スカーレット・ヴァレンタイン少佐』は、ようやく俺に気付いたのか……此方へと近付いてくる

「……ああ、キミが世間を賑わせている傭兵か……」

何処か、敵意が込められた見下す様な視線を俺へと向ける

「お会いできて光栄です……『ジェイソン・シーガー』、元海軍所属のパイロットであり、最終階級は【大尉】であります」

俺は敬礼と共に簡易的な自己紹介をする

「キミの話は聞いているよ、大尉……ナターシャとは【恋人】だったそうだと聞いているよ……？」

「昔の事です。今の私は傭兵として、国連に雇われて此処へと配属された只の兵士ですので……」

「ふむ、身の程をわきまえた当然の態度だな……言っておくが、此処での君の上官はこの【私】だ

君が世間で、どれほど持て囃されようが此処では関係の無い事……

『常に忠誠を』……それが此処のモットーであり、【陸軍】に所属していた私の信条でもある。此処で上手くやっていきたいのなら、それをよく覚えておく事だな、大尉？」

この手の奴は面倒だ、自分の気に入らない奴には理不尽なまでの不遇を与えて、困惑する様を喜びながら眺める……

それに【陸軍】で『常に忠誠を』……？

ナターシャの方へと目を向ければ、俯きながら握り締めた拳は余程の力が込められているのか、指先は白くなっていた。それは俺の隣に居るイーリも同様だった

「全く、ナターシャも昔は困った所があった様だな？」

高々、少しばかり腕の立つ飛ぶ事しか脳の無い海軍パイロットを恋人にするとは……」

嗚呼……どうやら長時間、輸送機に缶詰めになっていた俺もストレスで我慢の限界の様だな……

俺は溜め息を吐き出して……目の前に立つ【少佐殿】の股ぐらを蹴り上げた』

悲鳴にならない様な声を絞り出し、少佐殿は蹴り上げられた股間を押しさえて無様に地面へと倒れ込む

俺は少佐殿に向かい、こう言った

「少佐殿、聞こえますか？ まあ、聞こえてなくても良いけど……勘違いをしてる事に気付いてない様だから教えときますけど……常に忠誠を』は【陸軍】ではなく【海兵隊】のモットーだよ」

……それにな、これが一番にマズかったな……俺の事を貶すのは
幾らでも構わないが、仲間や海軍の悪口だけは勘弁ならないんだよ」

俺は地面でのたうち回る少佐殿を跨ぎ、基地内へと歩を進めた

その際、基地内で一部始終を目撃していた兵士たちから拍手を受け
たのは気のせいだろう

- - - - -

「それにしても、さっきのは本当に……凄く、ジェイを抱き締めた
くなつたわぁ……」

そう言いながら、上機嫌そうな表情で俺の右腕へと抱き付くナター
シャ……

「本当、見てるだけでスカツとしたぜ、ジェシー？」

ナターシャと同様、上機嫌そんな表情を浮かべて左腕へと抱き付く
イーリ

コイツ、完全に素を晒してるよな……まあ、口調が荒い女も【守備
範囲】と言えば、そうなんだがな……

そんな呆けた考えを思いながら、俺は言う

「さつき、言っただろ？俺の事を悪く言うのは構わないが……仲間
や海軍の事だけは勘弁ならないんだよ」

「……でも、そこは【仲間】じゃなくて『ナターシャ』って言うて
欲しかったわ……」

若しくは【俺の女】でも可、と付け足しながら、ナターシャは言う

「それは昔の話だろ？ また、そう呼ばれたかったら……早い所、俺を振り向かせるんだな」

そんな会話を続けていると、背後から荒々しい声が飛んできた

「き、貴様あ……！」

振り向かえれば、片手で股間を押さえて鬼の様な形相で俺を睨む【少佐殿】が居た。驚いたな、もう立って歩けるとは……少なくとも、見掛け倒しの肉体では無い訳か……（まあ、蹴り上げた【場所】は中々、鍛える事が難しいんだが）

372

「上官に対して、随分と舐めた真似をしてくれたなあ……！！」

たかが、傭兵風情が……処罰は免れんぞ……！」

すると、一人の兵士が俺らの間に割り込んできた。何やら、二つばかりの書類を腕に抱えて……

「ヴァレンタイン少佐、お話しの中で申し訳ありませんが、少佐宛に本部から通告書が届きましたので……」

それと、ジェイソン・シーガー大尉にも通告書が……」

兵士は俺と少佐にそれぞれの書類を手渡す

書類を手渡した兵士は、それぞれの書類の内容を読み上げる。先ずは俺の方の様だ

『ジェイソン・シーガー大尉、貴官はドイツでの都市防空、及び無人IS機の撃墜の結果、過去に例のない大惨事を防いだ貴官の勇敢なる行動と判断力、成績を鑑みた結果……』

国連の命により、貴官を大尉からの【二階級昇進】……『中佐』へと任命する。尚、貴官にはこの命を拒否する権限は無い』

二階級昇進……俺が【中佐】に……？

続けて、兵士は少佐へと向き直ると、少佐宛の通告書を読み上げる

『スカーレット・ヴァレンタイン少佐、貴官に対する基地内での不評、貴官の【責任者】としての職務態度を内密に監査した結果……

貴官は【責任者】としての責任能力を含む技量が不足している面を鑑みて、貴官を【第十六国防戦略拠点】……『イレイスト地図にない基地での役職……【責任者】を解任、貴官は極東部に位置する【軍事観測所】へと異動を命ずる』

少佐は啞然とした表情を浮かべ、此处での役職の解任と人事異動の通告書を見ていた

「あらあら、一気に出世しちゃったじゃない？」

『ジェイソン・シーガー中佐』殿？」

「それに比べて、あっちはお払い箱って訳か。イイ気味だな、クソツタレめ」

それは、もうこの上ない程の上機嫌そうな表情を浮かべる二人……

随分と嫌われているみたいだな、少佐殿はよ…

「……………【中佐】って、フランキーと同格の階級だろ？ 出世には興味が無いんだがなあ……………」

寧ろ、大尉のままで良かったんだが……………、と俺は言葉を付け足す

「ジェシーは、これから結成する部隊……………【TASK FORCE E】の隊長になるんだぞ？」

大尉なんて中途半端な階級じゃあ、格好がつかないだろ？」

「寧ろ、中佐の方が中途半端に思えるがな……………？」

俺は通告書を手に固まったままの少佐殿を横目に溜め息を吐き出した

因みにこの日以降、基地での俺の評判は鰻登りとなった様だ。大半

の理由は、翌日から異動された少佐殿の一件が理由らしい

【キャラ&mp・IS（機体）紹介】（前書き）

簡易的なキャラとIS（機体）の紹介です

ISに関しては、後の話にて掲載する予定です

【キャラ&mp;is（機体）紹介】

『ジェイソン・シーガー』

本作の主人公であり、転生者

現段階での年齢は、28歳。容姿のイメージは『ACE COMBAT 6』に登場する敵国のエースパイロット【イリヤ・パステルナーク少佐】を若干、若くした感じです

転生者としての特殊能力・・・『超人的な身体能力』、『あらゆる乗り物の操縦方法と驚異的な操縦技術』、『比類無き知識』の三つを所持している

十代の頃、能力を使いこなす為にサーフィンやバイクなどの『エクストリーム（極限）ゲーム』の大会に次々と参加、世界大会での総

合優勝を果たした実績を持つ

18歳で軍へ入隊、二年後の20歳で『Top Gun』を主席で卒業、大尉となった21歳の時、『第314戦闘攻撃飛行中隊【ファントム隊】』の隊長へと就任

常に余裕を失わず、如何なる絶望的状况下においても仲間を勝利へと導く事から、『生粋のエース』――【ACE OF ACE】と仲間からは呼ばれ、隊長を務めた『ファントム隊』の名と共に各国へと知らしめた

ファントム隊での戦歴は、当時の各国でNO.1の出撃率と任務成功率を誇り、正に世界屈指の精鋭部隊として、数々の激戦の最前線にて活動していた

また、転生者としての特殊能力もあり、これまでに『一度も被弾した事が無い』という超人的な操縦技術を誇るエース・パイロットとしても有名

ファントム隊を率いる様になり、四年後の25歳の時に『白騎士事件』にて、仲間と友軍の撤退の時間稼ぎとして、白騎士と交戦。僅かな間だが、互角に対抗した

その後、【撤退】という独断による処罰（白騎士に惨敗した軍の上層部たちの八つ当たりを含む）により、これまでの軍歴を剥奪され、不名誉除隊となる

その後、世界中を旅して回り、日本へと渡る、後に『白騎士』こと最強のIS操縦者【織斑 千冬】とその弟【織斑 一夏】と出会う事になる

所謂、器の大きい性格の持ち主であり、周りからは『兄貴分的存在』となっている。また、多くの女性と親密な関係を持つが、女ったらしという訳では無く本人曰わく『信条である【来るものは拒まず、去るものは追わず】の結果』らしい

趣味は、鍛錬とバイクと車（特に年代物クラシックを好む）

現段階での近況報告では、ドイツで一年間の教導にて、『織斑 千冬』の補佐として活動。また、国際IS委員会からの命により、国際IS委員会・・・【国連】所属のフリー・パイロット（傭兵）と任命される

また、同時期にドイツを襲った試作兵器【スタウロス】と【無人IS機】を撃墜した事により、再び【ACE OF ACE】の名と世界初の【男性IS操縦者】として世間を賑わせる事となる

- - - - -

【CFA-44 Nosferatu】

（元ネタはそのまま、『ACE COMBAT 6』に登場する架空機【CFA-44 Nosferatu】より）

ドイツとアメリカの二国共同開発により、開発された【IS搭載戦闘機】

従来の戦闘機とは比較できなく、現時点にて存在するISの中でもトップクラスにあたる性能を誇る【試作機】

元々は、ジェイソンが『次世代型のステルス艦上戦闘機』として設計したモノをISとその技術を応用する事で、完成させた

全方位型多目的ミサイル・・・【ADMM】や航空機用の試作段階である兵器・・・【EML】、【30mm航空機関砲】などの武装を搭載、またIS技術の応用により可能となった『フル・ブレイキング機能』など【高性能】という言葉が生易しく感じる程の高い性能を誇る

しかし、あまりの高性能さにより、設計者のジェイソン以外は誰も使いこなせないという所謂、ジェイソンの専用機となっている

機体カラーはメタリック・ブラック

【I S 紹介】

【荒くれ者の魔銀】
ヴォルフ・ガング・シルバー

元々は【C F A - 4 4】専用のパイロット・スーツとして開発された強化服だが、現在ではジェイソンの専用機となっている

基本的な（【絶対防御】を除く）センサー類は他のI Sと同様に内蔵しているが、装着者の身体能力の強化を重視している為、『飛ぶ』という機能は無い（裏返せば、『走る』という機能は全I S機で随一の性能を誇る）

地上での高機動を主体とした接近戦に特化したI Sである

外見は機動性を重視した軽装甲仕様の全身装甲ライト・アーマー（外見イメージは『C R I S I S 2』というゲームに登場する【ナノ・スーツ】を想像してください）

【武装】

『 J E T
ジェット・リップパー
R I P P E R
』

両脚部に内蔵した鎖状の武装、鎖は【チェーン・ソー】と同じモノであり、相手の捕縛と広範囲での攻撃を目的としている。また、相手を斬る事では無く【削る】事を重視しており、攻撃の際には相手の【絶対防御】に使用されるエネルギーを削る事が可能

他に両腕部と両脚部に合計、4機のスラスト小型推進機を内蔵、移動と攻撃のスピードを向上させている

- - - - -

【フランチエスカ・アルマ】

通称『フランキー』

女性ドイツ軍人であり、階級は【中佐】

年齢は24歳、ラウラたち『黒ウサギ隊』が駐在する基地での全権を任されている

容姿は艶やかな黒髪、左目を過去に負傷し眼帯を着けており、左目部分を中心に残る大きな切創が特徴。また、傷痕を差し引いても『織斑 千冬』や『篠ノ之 束』たちと引けを取らぬ美貌を誇る

性格は常に冷静、相手が如何なる人物だろうと物怖じする事の無い『男前な性格』

かつては精鋭戦闘機部隊――【スレイプニル】の隊長を務めていたが『白騎士事件』後に部隊は解体、自身は基地の最高責任者として活動していた

戦闘機乗りの腕前はドイツ随一を誇り、エース・パイロットとして活躍していた。当時の愛機は『Su-33 Flanker』

ジェインソンとの初対面は『白騎士事件』だったが、後に『織斑 千冬』と共に一年間の教官を務める為、ドイツへとやって来たジェインソンと改めて再会を交わす

『白騎士事件』にて、ジェイソンの戦闘機乗りとしての腕前と仲間を護る為、自身の犠牲を厭わない性格を惚れ込んでおり、他の女性陣と同様、ジェイソンに好意を抱いている

現在は、後にジェイソンが指揮する事となる『IS編成戦闘機部隊』
- - - 【TASK FORCE】の隊員として任命された（だが、
本人は自身の後任者捜しの為、まだ正式には隊員となっていない）

【キャラ&mp・IS（機体）紹介】（後書き）

簡易的な紹介ですので、あまり詳しくは書いておりませんが、『主人公』であるジェイソンやISの容姿（外見）をイメージし易くできる様になれば、幸いです

俺の思わぬ出世から二日が過ぎた。あの少佐殿は通告書を受け取った翌日、人事異動によって極東部にあるという【軍事観測所】とやらに飛ばされていった

ナターシャやイーリ曰わく『彼（あの野郎）でもペンギンや野生動物となら、上手くやっていけるでしょう（だろう）』らしい

思わぬ出世……【二階級昇進】により、大尉から中佐へとなった俺の基地内での呼び名は【中佐】と定着している。余程、あの少佐殿は好かれていなかった様で、あの時の一部始終を見ていた数名の兵士たちからその日の内に僅か、数時間の内で基地全体へと広まっていった（まあ、上官の股ぐらを蹴り上げる奴なんざ、滅多に居ないからだろう）

……話を戻すでしょう。今、俺は基地内にある会議室を借り、ある資料を机の上に広げていた

その資料の内容はかつて、俺が率いていた部隊……『ファントム隊』のメンバー、11人の詳細だった

俺は国連から、『対亡国機業専門』の部隊……IS編成戦闘機部隊【TASK FORCE】の結成を任された。IS操縦者に関しては米国代表のイーリ、同じく米国のテスト操縦者であるナターシヤが担当を務め、俺は戦闘機乗りたちの担当となった訳だ

部隊メンバーに関しては、既にパイロットで俺とフランキー、IS操縦者はイーリ、ナターシヤ、また正式には無いが千冬の5人が決まっていた

メンバー候補としては、ドイツの『黒ウサギ隊』の名も挙がったのだが……実力は確かながらもまだ、実戦経験が少ない為に却下となった。少なくとも、ナターシヤたちは一国を代表とする操縦者である以上、高い実力と経験を兼ね備えている。それに俺とフランキー、戦闘機乗りとしては言わずとも、数々の修羅場を潜り抜けている以上、経験は誰よりも豊富だろう（修羅場を潜り抜けている以上、当たり前だが実力もあるからな）

そこで、俺は残る『ファントム隊』の11人へと目を着けた訳だ。

だが、全員が俺が除隊となって直ぐに軍を辞めた為に現在の消息は不明となっていた

「さて……誰から始めるんだ、ジェシー？」

机の上に広げていた資料を手に取り、俺へと視線を向けるイーリ

「あー……まず、一番に居所の分かる奴にするか……」

俺は広げていた資料の内から、一人目の資料を手に取る

「『カーター・ウィンストン』、ファントム隊でのNO・5だった奴だ。TACネームは【SKY KID】」

コイツが、よく喋る男でな……」

「ああ、カーターね……海軍内では【コンビニ】なんて異名で呼ばれていたわよね？」

苦笑を浮かべながら、ナターシャは言う

「……………【コンビニ】？」

「【24時間ノンストップ】で喋り続ける奴でな……………よくぞ、そこまで喋れると思ったたら、兵役前はラジオDJをやっていたらしい」

「ああ……………そりゃあ、喋る訳だ……………で、ソイツは何処に居るのは分かるのかよ？」

【SKY KID】……………『カーター・ウィンストン』の資料を指先でつまみながら、イーリは言う

「カーターが一番、見つかりやすい……………『コイツ』を使えばな」

俺は基地内にある内、借りてきた一つのラジオを机の上へと置く。ラジオの電源を入れ、各局のチャンネルへと回していく

暫くすると、ラジオからは一昔前の軽快なロック調の音楽が流れ出す

『ハイハイハイッ!! 今日も清々しい日を送っているかい、諸君？

さあ、このラジオの名物DJであり、元戦闘機乗りである俺様……
- 『カーター・ウィンストン』がハイテンションでお送りする【S
KY BOYS】が始まるぜえッ!!

このラジオは、ISの影響で『女尊男卑』となった世界で、肩身の狭い思いをしている全ての男たちを応援する番組だ!!

おおっとッ、言い忘れてたが俺は女性差別する気は全く無いぜ？

この番組……【SKY BOYS】は『男女平等』と『LOVE
& PEACE』をモットーに……』

開始早々、息をつかせぬ勢いで喋り続けるラジオDJ……『カー
ター・ウィンストン』

相変わらず、よく喋る奴だな……寧ろ、昔よりも磨きが掛かっ
ているんじゃないか？

『さあ、番組を始める前に何時もの【合い言葉】をキメてみようぜ？』

ラジオから流れるカーターの言葉と共に俺とナターシャは口を揃え、カーターの口癖……【合い言葉】を口にする

『「天使とダンスでもしてなッ！！」』

「……………何だ、そりゃ……………？」

キョトンとした表情を浮かべながらイーリは呟く

するとナターシャは、苦笑を浮かべながら言う

「カーターの口癖よ、彼は戦闘機の事を【天使】と称しているね。何かと、この言葉をよく言うのよ」

「まあ、『白騎士事件』以来はISを指しているんだがな……」

俺らは再び、ラジオへと耳を傾けた

『さあ、番組も盛り上がってきた所でお知らせだ。この番組……
【SKY BOYS】は何時でもリスナーからの質問や要望を待つ
てるぜ？

この番組への番号は……」

俺は携帯を取り出すと、ラジオから流れる番組への番号を打ち込む。
暫くするとラジオからは、こう流れた

『おおっと、早速の電話だ。はいはい、こちら【SKY BOYS】
の名物DJ……『カーター・ウィンストン』だ』

「相変わらず、絶好調の様子だな？」

『た、隊長おッ！？ 何で、どうして、マジかよッ！！？』

「落ち着け、【名物DJ】さんよ……詳しくは言えないが……」
S
KY KID【に戻る気はあるか？」

すると少しの間、沈黙が続き……カーターは言った

『勿論ツスよ、隊長ッ！！』

俺は海軍名物……【パイロットDJ】ツスよ？ それに隊長の誘いを断る訳が無いじゃないツスカあッ！！』

「期待してるぞ？ 後で迎えを寄越すから、それまでは……【天使とダンスでもしてな】」

そう言っつて、俺は携帯の通話を切る

『リスナーの諸君、此处で重大なお知らせだ。この番組……』
S
KY BOYS【は暫くの間、お休みする事になっちまった

何故なら、俺は戦闘機乗り……【空の男】だからさ。俺の信条でもある『LOVE&PEACE』の為にも、どうやらもう一度、空へと戻らなければならぬみたいだ

しかし、心配無かれッ！俺様は空から、リスナー諸君を応援するぜ？ それでは【PEACE】！！』

ラジオからは再び、軽快なロック調の曲が流れ出す

「取り敢えず、一人目は確保したわね？」

「ああ、先ずは一人……だが、此処からが面倒だぞ？」

俺は残る10人の資料へと視線を向けた

「次はコイツだ、『リチャード・ウォルター』

ファントム隊でのNO.7を務めた奴だ。TACネームは【iP O
r】

「……【iPod】？」

「彼は海軍史上初、『MP3 Player』と一緒に空を飛んだ男よ、イーリ？」

「どんな時も、携帯音楽器具を手放さない位の音楽好きだったわ……
それこそ、食事から寝る時もね」

「……もしかして、その当時のTACネームは【MP3】か？」

「イイ勘してるな、イーリ？ 大正解だ……まあ、『iPod』が発売されると同時にアイツのTACネームも【iPod】になったがな」

「筋金入りの音楽バカってのは、よく理解出来たけど……ソイツが何処に居るのか、分かるのか？」

「イーリは【iPod】こと『リチャード・ウォルター』の資料を指差しながら、言う」

「彼って確か、L・A・出身よね、ジエイ？」

「……アイツの音楽バカを考えるなら……L・A・で人気のクラブを捜せば、見付かるだろ？」

以前、アイツはクラブのDJという職業に興味を持っていたからな

「取り敢えず、二人目は目星が着いたわね……次は……【Vipe
r（毒蛇）】ね」

苦笑を浮かべながら、三人目となる候補の資料を手に取り、眺める
ナターシャ

「本名は『ハンス・ラファティ』、ファントム隊NO・9だった男
だが……ファントム隊の中で随一の女好きでな……」

俺はナターシャから資料を受け取り、資料にある写真をイーリに見
せる

「……冗談だろ？ 【女】にしか見えないぜ、しかもモデル並みの……」

「アイツは幼い外見と女顔を兼ね備えていてな。軍隊に居る以上、鍛えてはいるが体つきも細いから、女の格好をすれば、誰も男だつて気付かないだろうよ……」

だが、見てくれに騙されるなよ？ アイツは狙った獲物（女）は決して逃さないからな」

「ソイツ、女の敵だな？」

「あら、ハンズはやたらと手出しはしないわよ？」

彼氏、または夫持ちの女性には一切、手を出す事は無かったわ。それに誰かに好意を持つてる人もね」

「妙な分別をつける奴でな、まあ……アイツの事だ。捜すとすれば、女の集まる様な所だろう」

俺は四人目となる候補……ファントム隊、NO・2の資料を取る

「次は一体、誰だ？ お喋り野郎に音楽バカ、女負けの女顔で女つたらし……これだけでも、随分と【濃い】メンツだぜ？」

「まあ、ファントム隊のメンバーってのは【癖モノ揃い】だからな……」

だが、次は今までの三人に比べればマトモな部類だ。ファントム隊、NO・2『シヨーン・トバイアス』

TACネームは【Baron（男爵）】だ」

「彼は中々、面白い経歴の持ち主よ。幼い頃、貧民街スラムでの路上生活で育っていたけど……ある日、道端で拾った宝くじで巨額の富を得たの

家も無い貧しい生活から一気に大逆転を果たした幸運の持ち主よ。一度、シヨーンに見せて貰ったけど……その時の宝くじを御守り代わりに肌身離さず、身に付けていたわ」

「そして、一切の不自由無い暮らしに退屈した奴は自ら、スリルを求めて軍へと入隊した訳だ。パイロットの腕前はさることながら、ギャンブルの腕も中々のモノだったな」

一度、まだファントム隊があつた頃に休暇でメンバー全員でラスベガスへと訪れた際はたまげたモノだった。アイツはそこから拾ったコイン一枚から、一気に数千万まで稼ぎ出したからな

まあ、その時にアイツは笑いながら『お陰様で、あちこちのカジノで【要注意人物（BLACK LIST）】をされて、出入り禁止にされてますよ』なんて言っていたな……

「って事は金持ちだから、見つけやすいだろ？ ハリウッド辺りの豪邸を片っ端から調べ上げれば……」

「いや、アイツはラスベガスにある幾つかのホテルの最上階……『ペントハウス』を買い取っていてな

恐らくはラスベガス中のペントハウスを捜せば、見付かるだろう」

「……これだから、金持ちは嫌なんだよ……全く……」

「あら、シヨーンは違う部類のお金持ちよ？ 彼、自分が貧民街出身だから、毎年に孤児院や赤十字団体に多額の寄付をしているわ」

「……訂正するわ、ソイツって良い奴だな？」

「ファントム隊でも良心的存在でな、主に他の隊員が暴走しかけた時のブレーキ役でもあるんだよ」

俺は五人目の資料へと手を伸ばす

「五人目の候補は『バーンズ・アーチャー』 - - 通称【B・A】
ファントム隊NO・4 TACネーム【Iron Hide（鋼鉄
の伯爵）】だ」

「昔からだけれど……とてもじゃないけど、軍人には見えない顔立ちよね……？」

苦笑を浮かべながら、【B・A】の資料を眺めるナターシャ。その資料にある顔写真 - - 軍人というよりも、かなりの修羅場と場数を踏んだマフィアの如く【凶悪そうな】人相が写っていた

「……本当に軍人が、コイツ？」

アルカトラス州刑務所から脱獄してきた様な面だろ、道行く老若男女が一斉に逃げ出しちまうぜ？」

写真を眺め、イーリは言う

「見た目とのギャップってのが激しい奴でな……殆ど無口だが過去に一度の犯罪歴は無く、特技が料理っていう家庭的な男だ

だが、地上攻撃と近接地上支援の専門家スベチャリストで、アイツの愛機『A-10A Thunderbolt ？』が通り過ぎた後は、何一つ残らないって言われている位だ」

「OK、それでソイツの所在って分かるのか、ジェシー？」

「アイツは一応、自分の顔が……まあ、【普通】じゃないってのは充分に理解してるからな……」

あまり、他の人間と関わらない仕事を選ぶだろう」

-
-
-
-
-
-

所在地：【マイアミ】

『スペインッシュ・パーム葬儀社』 - - - 【処置室】

葬儀前に遺体に施される防腐などの『処置』を施すこの一室の前で二人の白衣を纏った男性が口論を繰り広げていた

口論の発端は、とある一通の電話が掛かってきた事からだった。電話の内容自体は大した事では無かった - - - 此处で働く一人の男性を尋ねたモノだった

しかし、その電話主が目当てとしている【男性】が問題だった

「お前が行けって、電話に出たのはお前だろッ!？」

「嫌だよ、俺は【あの人】が苦手なんだってッ!！」

「誰だって【アイツ】を苦手と思わない奴なんぞ、居ねえってッ！
！ 第一、アイツが話す所なんて一回も見た事が無いのに何処のど
いつが電話なんてしたんだよ？」

電話が掛かり、既に十分が経過していたが男たちは未だに口論を続
けていた。やがて、キリのない口論に痺れを切らしたのか、二人は
『処置室』と書かれたタグをぶら下げた鋼鉄製の扉を押し開ける

扉を開ければ、奥には二人を背にして、その大柄な身体の前に位置
する処置台に乗せられた遺体……この後、埋葬される予定で恐ら
く、遺族との最後の別れを迎える事になる遺体の身なりを整えてい
る人物が居た

「あの、お電話ですッ！！」

扉から頭だけを覗かせた二人の内、一人がその人物へと声を掛ける

その人物は後ろへと振り返った……大柄で白衣を纏っていても分
かる程、鍛え上げられた屈強な肉体、男の上腕部は丸太と匹敵する
のではないか？、そう思わせる程に肥大した筋肉をしていた

髪は綺麗に剃り上げられており、全身の肌は【黒人】の証とも言える黒い肌をしていて鋭い眼光が、声を掛けた二人を見据える。太い首にぶら下げた『認識票』が男の前歴を物語っていた

男は処置室に備え付けられた電話へと歩み寄り、受話器を取る

『あー……【B・A】か？』

【B・A】と呼ばれた男……『バーンズ・アーチャー』は受話器へと視線を向ける。何故なら、電話主はかつて、自分が在籍していた部隊の隊長……その兄貴的な人柄で老若男女問わず、全ての仲間たちに慕われた男だったからだ

『もし、そうなら……取り敢えず、ボタンを押せ』

暫しの間、部隊の頃を思い出していた彼は……その大きな指先で電話のボタンを押し込んだ

-
-
-
-
-
-
-

五人目となるB・Aの奴までは確保できるとしても……

残る六人が【問題】だった

-
-
-
-
-
-

「ああ、そつだ。『フランク・ゴードン』は居るか？」

『ああ、ゴードンの奴は死んだよ。どっかの店を叩いて、運悪く店主に撃ち殺されたらしい』

「ええ、『マックス・エヴァンス』が何処に居るかをご存知でしょうか？」

『マックスは『フランク・ゴードン』ってバカとメキシコに行ったわよ。あと、貸した金をさっさと返せって言っというて頂戴』

「そっだよ、アタシは『ジミー・オーリス』と『パトリック・シユタイナー』って二人の野郎が今、現在で何処に居るのかを聞いてんだよ？」

『二人共、今も仲良く同じ刑務所に入ってますよ。確か、過剰防衛とかの罪状で五年の刑期だっって聞いてますけれども？』

-
-
-
-
-
-

「四人共、消息は不明みたいね？」

「しかも、死んだって言われているのにメキシコに居るって言われている奴だつて居る始末だぜ？ どれが本当なのか、分かりやあしねえ……」

苦笑を浮かべるナターシャとため息を盛大に吐き出すイーリを横目に残る二人の資料へと俺は視線を向けた

「残るは……この二人だな……」

するとナターシャは俺の横から資料を覗き見た

「……【Reaper（死神）】と【Ratchet】？ この二人は……ちよつと、問題なんじゃないの？」

「だが、腕は二人共、ファントム隊でもトップクラスだ。その上、

メンバーはもう他に居ない」

「……どうなっても知らないわよ？」

「……どんな奴らなんだ、ジェシー？」

「ファントム隊のNO.3 TACネーム【Reaper】

本名は『クリスタ・ネコルヴィッチ』 - - 通称【クリス】」

「ファントム隊の紅一点ね。同性の私から見ても美人よ、彼女は」

「但し、美人の前に『残念な』が付くがな……」

「……『残念な』？」

「口を開けば、罵声しか出ない様な女だよ。口の悪さもファントム隊でトップ、その上で【戦闘狂】兼【スピード狂】だ」

「そりゃ、スゲエ……」

「昔、彼女に……そのセクハラ紛いな事をした上官が居ただけだね……」

彼女、その上官をこれでもかかって位の罵声を浴びせて除隊へと追い込んだ上、自殺寸前にまで追い込んだ位の強い女性なの」

「いや、気が強いってレベルじゃないよな、普通に考えてよ……」

最早、引きつった表情を浮かべるイーリ

「因みにクリスのTACネーム【Reaper】の由来はそのままだ。アイツの撃墜率は常に100%。その上、スピード狂だから標的を撃墜するまでは、何処までも追いかけてくる様子から着いた名だ端から見ても、狙われた相手から見ても【死神】としか表現できないからな」

「おつかねえ女、敵に回したく無い奴NO.1だな？」

「まあ、スピード狂のアイツだ。ロシア出身だが、育ちはシアトルでな」

まあ、北西部辺りのハイウェイで大型バイクをカツ飛ばしている女なんざ、アイツしか居ないだろ」

あちこちの州でスピード違反を含む交通違反を繰り返しているって、よく言っていたからな……

「最後は【Ratchet】ね、ファントム隊の12番機に乗っていたわ」

「本名は『ライリー・オドネル』。パイロットは勿論、メカニックとしての腕前も中々だ」

ただ……昔からだ【情緒不安定】な面があつてな……」

「【情緒不安定】って大丈夫なのかよ、ソイツ？」

「謂わば、心を病んでいるってヤツだな。まあ、鬱病とは違って【常識】ってモノを考えられないだけだ」

「そうねえ……空軍に私が在籍してた時も、彼の噂は耐えなかったわ……」

「飛行中の状態から、エンジンを切ったの急降下や地面スレスレの背面飛行を笑いながら、平然とやる奴だ。しかし、アイツに飛ばせない機体は存在しない……所謂、天性としてのパイロットの才能を持っている」

「今までのメンツで、最もブツ飛んだ奴だな、オイ……」

「……資料によれば、彼って今は【ドイツ】に居るらしいわよ？
また、とんぼ返りする羽目になりそうね……？」

また、あの缶詰め地獄を味わうのかよ……

「……フランキーに連絡を取ってくれ……」

どうせなら、アイツも拾っていくぞ」

- 【最後の一人】 -

メンバー集めから2日が過ぎた。一応は候補……【SKY KI
D】、【iPod】、【Viper】、【Baron】、【Iron
n Hide】、【Reaper】、【Ratchet】の七人が
決まった

俺らは、ドイツに居るフランキーに連絡を取り、ドイツに居ると言
われている【Ratchet】……『ライリー・オドネル』の所
在を確認してもらった。フランキーも、どうやら【後任者】の目処
が着いた様子で此方へと向かう予定だったらしく、手間が省けたと
言っていた

.....

「ジェシー、一応は六人の候補、全員を確保したって連絡が来たぜ
？」

「そうか、それで全員は予測していた通りだった訳か？」

「そうねえ……カーターとB・A・は真つ先に連絡が着いたから……残る四人は大体、ジェイの読み通りだったわ」

「先ず、【iPod】って奴はL・A・でクラブを経営していたつてよ。クラブの名前は『Dance With Angel（天使と踊る）』」

クラブの経営者兼DJをやっていたつて報告されてるぜ？」

「因みにその店には丁度、【Viper】も居たから二人共、同時に確保したんですつて。その時、【Viper】ったら、10人の女性を一斉に口説いていたそうよ？」

苦笑を浮かべながら、ナターシャは言う

「如何にもアイツらしいな……まあ、口説いていた最中に確保されたんだ、結果は残念なモノだろうよ」

「いいえ、彼はちゃんと10人の電話番号を手に入れたそうよ？」

「それに確保に来た国連の奴ら……まあ、【女】だったんだけどよ……」

ソイツ等の電話番号もすっかり聞き出したらしいぜ?」

最早、呆れ顔のイーリはため息を吐き出す

「昔、言っていたが……アイツの夢は【世界中の女と寝る事】らしいからな。着順に夢を実現させようとしているみたいだな……」

「……シヨーンに関してはラスベガスを捜したら、カジノでギャンブルの真っ最中だったそうよ。カジノの全資金を空にしかねない程大勝ちでね」

「しかも、イカサマ無しで完全なる運と実力だから質が悪いな?」

「アイツは恐らく、【世界一の幸運】の持ち主だからな。幸運の女神に愛されているとしか言えない位にな……」

「因みにソイツ、大勝ちして稼いだ金を全額寄付に回したらしいぜ。」

他の金持ちもソイツみたいな奴だったら、世界は安定するのによ……」

「最後にクリスなんだけど……一番、手こずった様子ね。市警に協力を要請して、確保に向かったんだけど……」

「白バイを含めて警察車両を20台、ヘリを2機も導入しても中々、捕まえられなかったみたいだよ……」

「それで、ヘリからジェイの名前を伝えた所でようやく止まってくれたそうよ?」

「だから言っただろ? クリスは【スピード狂】だってな……まあ、俺の名前を出さずに捕まえたかった場合は戦闘機かISを持ち出す必要があるな」

最も、それでもアイツを捕まえられる保証は出来ないが……

「それで……また、あの缶詰め地獄を味わうのは嫌だが、輸送機の準備は出来てるのか?」

すると、イーリはこう言った

「輸送機？ どうせだったら、『もう少し』速いやつにしよつぜ。」

.....

「これが『少し』速いってレベルか、イーリ？」

ドイツへと向け、飛行する一機のヘリの操縦席からイーリへと問い掛ける。ヘリはアメリカ陸軍でも愛用されている『多目的・強襲用ヘリコプター』。 . . . 【U H - 6 0 B l a c k H a w k】

少なくとも、俺やファントム隊のメンバーは戦闘機以外の機体を飛ばせる様に訓練されている。最も、俺が得意なのは車にバイク、戦闘機だが……俺らの目当てである【R a t c h e t】。 . . . 『ライリー・オドネル』ならば、目を綴じたままでも曲芸飛行を平気で行

つてのける程だがな……

だが今、俺が操縦するへりは普通のとは違った……何故なら、このへりは現在『超音速』の速度で飛行中だからな

「大体、どうやってへりが超音速で飛べるんだ？ 従来の戦闘機の
トップ・スピード
最高速度だぞ？」

「昔、アメリカ軍は運用しているへりなんかを改良しようとしていた時期があったのはジェイも知ってるでしょう？」

隣の席に座るナターシャは俺へと視線を向け、言う

「ああ、確か……10億の予算を出したが結局、その計画も打ち切られたよな？」

「実は、その計画で五機のBlack Hawkをベースに改良した機体があったのよ。機体の材質もスペース・シャトルに使用される様な特殊合金を使ってね

でも、エンジンに関しての改良で行き詰まって計画は中断になったのよ。一機で2億もの改造費を掛けた五機の改良途中のへりを残してね」

「それが【コレ】って訳か……だが、その問題点はどつやって解決したんだ？」

すると後部席に座るイーリは口を開いた

「【擬似IS】だよ 『亡国機業』の技術を利用してやった訳って事だ

【擬似】って事もあって、ISの基本性能は本物スベックに比べては劣るが、扱いやすさは本物以上、それに機体に搭載すれば、基本性能は従来
の性能に比べて飛躍的に向上できる。一石二鳥ってヤツだよ」

「…要するに【CFA-44 Nosferatu】に使った技術の応用って訳か……それなら、超音速での飛行が可能なこのへりも納得だ。因みにコイツの名前は何なんだ？」

『Super Black Hawk』とでも言つのか？」

「いいや、コイツの名称は【超音速攻撃へり】……コード・ネー

△『AIR WOLF』だよ」

「成る程、それは大層な名前だな……」

「因みにだけど、ジェイの指揮する事になる部隊……【TASK FORCE】の機体には全て、擬似ISを搭載してるわよ？ 実戦での稼働テストを含めてね」

「俺らを使って、テストする気かよ？ いい根性をしてるな、オイ……」

するとイーリはある事を問い掛けてきた

「そついやよ、ジェシーとナタルって戦闘機乗りだったんだろ？ 二人のTACネームって何だったんだ？」

「何だ、いきなり？」

「良いじゃんかよ、ふと気付いたからさ。教えてくれたって滅るモンじゃないだろ？」

「……当時、戦闘機乗りだったナターシャの愛機は純白の『RAF ALEM』でな。優雅に空を舞い、味方を支援するその姿から『空の聖母』……【SKY MARIA】スカイ・マリアというTACネームが着いたよな、確か？」

俺は助手席に座るナターシャへと目を向ける

「ええ、随分と大げさなTACネームだったわ。そして、ファントム隊の隊長になる前だった貴方は私とは正反対で漆黒の機体……『F-14D Super Tomcat』を愛機として、如何なる攻撃を仕掛けようと決して命中する事が無く、確実に捕捉された敵機は落とされる……」

敵から『幻影』又は『亡霊』……【Phantom】ファントムと呼ばれたのがTACネームの由来よね、ジェイ？」

苦笑を浮かべ、ナターシャは言う

「まあな、それで俺が率いた部隊は隊長を務めていた俺のTACネームから『ファントム隊』って呼ばれるようになったな……何時の間にかによ」

「白と黒、TACネームも正反対だよな？」

「そうよ、イーリ……お陰様で当時は『空の聖母』、『海の亡霊』
……【光と影】なんて呼ばれてたわよ？」

因みにその時には、もうジェイとは付き合っていたし、【抱いて
もらっていたしね？、と付け足すナターシャ

余計な事を言うなよ……お前は、しかも分かっただけで言うんだから
尚更、質が悪い……

「……………ジェシー……………」

嗚呼、後部席に座るイーリの地を這うように低い声が俺の耳へと入
り込んでくる……

「……あー……………何だ、イーリ？」

「……【Ratchet】って奴とフランキーを連れて帰ったら、
『やるぞ』」

「……一応、聞くが『やる』って何をだ……？」

「……そりゃ、男と女が裸で……」

「分かったから、それ以上は言わない。つか、女がそういう事を堂々と言わないよ……恥じらいってのを少しは持ったら、どうだ？」

「恥じらいを持ったら、ジェシーはアタシを抱いてくれるのか？」

「……悪い、お前に恥じらいなんて言った俺が馬鹿だった……」

そんな会話をしながら、俺らに乗せた機体……【AIR WOLF
F】は超音速の速度でドイツへと向かった

……あれだけ、盛大な別れを交わしたというのに僅か、数日で戻るとは情けないけどな……？

.....

「だ、駄目……ですつ……て……シーガー……さあ……ん……」

女の甘い吐息と共に喘ぎに近い声が零れる。女の柔肌に舌を這わせ、蛇の様に腕を絡めて離さない『シーガー』と呼ばれた男は意地悪げに笑う

「駄目だって……？　口はそう言っても身体は素直だぞ。クラリツサ……」

男……『シーガー』は『クラリツサ』と呼んだ女の首筋に軽く齒をたて、文字通り『噛み付く』様にキスをする

「っ……は……あ……！」

軽い痛みと共に快感が首筋から脳髄へと進む。女……『クラリツサ』は甘い声を漏らし、快感に身を震わせた

「……俺しか見えない様にしてやるよ、お前は俺のモノだ」

シーガーはクラリツサの乱れた服へと手を掛け、そして……

「おい……何、とんでもない事を口走ってるんだよ？」

「ひゃああああッ!」

状況を説明しろだつて？ 話はこうだ。かつて……といつても数日前に後にしたドイツ基地へと到着した俺らはフランキーへと会いに行ったが、フランキーは俺らより速く【Ratchet】……『ライリー・オドネル』が居ると言われている場所に向かったらしい

フランキーはクララの奴に行き先を教えている様なので、クララの所へと向かったら……冒頭にある様に何やら、卑猥な事を口走っていた。手にしている本のタイトルは『シーガー×クラリツサ』と手書きで書かれていた。まさか、自作か……？

「あら、中々の出来じゃない？ 私を相手にしたのも作ってくれないかしら」

「これは私の全身全霊を込めて書いた傑作です。あと、構いませんよ？ もっと濃い内容を書こうと思ってましたし……」

「アタシを忘れんなよな？ アタシのも一つ、書いてくれよ」

「おおい、そこの三バカトリオ。本題を忘れてる上に俺が居るのを忘れてるぞ」

それから、数十分程の時間を費やして暴走（いや、妄想か？）している三人を何とか、正気に引き戻した俺はフランキーの居場所を聞き出した

どうやら、フランキーは【Ratchet】……ライリーの奴が居るといふ陸軍の精神病院へと向かったらしい。何故、ライリーがドイツでしかも、海軍だった奴が陸軍の精神病院に居るのは不明だった。だが、精神病院の類に居る事は納得できた

何故なら、アイツは所謂……『フライト・ジャンキー飛行中毒』、飛べるのなら飯も酒も女も……挙げ句の果ては睡眠すら必要ないと豪語する奴だからだ

昔を思い出す……管制塔からのバンジージャンプ、戦闘機での正気とは到底、思えない様なアクロバット飛行……その度に俺がアイツの始末書を書かされたよなあ……

思い出したら、頭痛がしてきた……

基本的にファントム隊での始末書の内容は……主にクリスとライリーの二人だった。時折、【Viper】……ハンズの奴の女遊びに関してのもあったが……

俺が始末書を片付ける羽目になる度、B・A・とシヨーンの奴が頭痛薬を差し入れてくれたものだ……

昔の事を思い出し、頭痛に見舞われた俺はナターシャ、イーリの二人を連れてフランキーとライリーが居る精神病院へと向かった

.....

目的地……精神病院の屋上のへり・ポートへと着陸、俺らは屋上から一階の受付へと向かった。到着して、俺が会ったのは……

「ほお、僅か数日で再会するとは……そんなに私が恋しかったのか？」

「……まあ、そういう事にでもしておこ……痛ッ!?!?」

「ジェイ、私たちが居るっていうのにまだ物足りないのかしら……？」

「幸いにも此処も病院の一種だから、怪我をしても問題無いよなあ……ジェシー？」

ニヤニヤという表現が良く似合う笑みを浮かべるフランキーと……
軽い冗談を言った俺の両脇腹を抓るナターシャとイーリだった……

「冗談を言っただけで、両脇腹を抓る必要は無いだろうが……痛てえつての……」

「冗談とは随分だな、基地での夜の事を忘れたのか？」

二人、一つのベッドの上で激しく求め合っただろう……？」

その細い両腕を俺の首へと絡ませ、顔を近付けて耳元で囁くフランキー

「あんな、此処で言う台詞じゃないだろ？」

それに二人を焚きつけるな……」

後ろからは鬼神オーガも裸足で逃げ出す程の禍々しい気迫オーラを放つナターシャとイーリが……しかも、二人共に【物っ凄い笑顔】を浮かべる為、余計に恐怖を感じさせる……

というより、周りの医師や患者が怯えて俺らの周りから離れていくぞ、オイ……

「あー……取り敢えず、本題に取り掛かるうぜ？」

ライリーの奴は此処に居るんだろ？」

「ああ、お前が言っていたファントム隊の【問題児】か……取り敢えず、担当医を呼んである」

するとフランキーは奥に居る初老の医師を指差した。するとその医師は此方に気付いたのか、軽い会釈をすると此方へと歩み寄った

「どうも、私は此処の医師の一人で『ライリー・オドネル』の担当医を務めている『Dr・ハッチャー』です」

「これはご丁寧にどうも、私は『ジェイソン・シーガー』 元海軍パイロットで現在は国連所属のしがたない傭兵パイロットを務めています。一応、階級は……『中佐』であります」

「貴方があの有名な……いやあ、会えて光栄ですよ。貴方はこのドイツを救った英雄ですからね」

「英雄っていうのは大げさですよ、私は仕事をしたまでの事ですよ」

「いえいえ、貴方のお陰で大勢の人々が救われた……それに大きな声では言えませんが、貴方はこの『女尊男卑』の世界に生きる男性たちの希望であり、憧れなんですから」

「私なんかを憧れにするのはどうかと思いますがね……私は今も昔もただのパイロットですよ、空を飛び回るのを生き甲斐にしているね」

「……貴方のその人柄も大きな魅力なんでしょう、後ろにいらつしやる女性の方々もきつと貴方の……」

おおっと、これ以上は余計な詮索でしたね、いやあ……ただの老いぼれの戯言だと思ってください。それでは、案内しますよ」

俺らはライリーが居る病室へと向かった

向かうまでの最中、ライリーの担当医である『Dr・ハッチャー』はカルテを広げ、こう言った

「もう二年位ですかね……彼の担当医を勤めるのは、彼は……何と
いうか中々、ユニークな人物でして……」

「でしょうね、私も彼の上司をしていましたが【個人的】でしたの
で……」

「彼の経歴を拝見しましたが、正に歴戦の強者ですよ。あらゆる機
体に精通している……ですが、症例からして心を病んでいると言っ
べきでしょうか……」

「もしかして、何か騒ぎを？」

「いえ、幾つかの騒ぎはありましたが人を傷付ける事は全く……で
すが、先々週と先週の二回程、脱走をしようと試みた様子でして……
……」

「……脱走？」

「ええ、先々週は【看護婦】の格好をして……先週は救急車を盗も
うとしまして……それも【A・E・D（電気ショック器）】を使
って」

「成る程、それで自分が感電したと？」

「はい、ですが命に心配はありませんでしたが……少々、拘束を
しました」

そうこうしている間に俺らは一室の病室の前に辿り着いた

「私は外で待つておりますので何か、あつた場合には……」

「ああ、その辺は心配無用ですよ。私たちの内、三人は軍人なので」

そういつて、俺らは病室へと入つていつた

.....

病室に入り、目にした光景は……ベッドしかない殺風景な病室で、
ベッドの上に拘束着と猿轡を着けられたライリーの姿だった。まる

で【某 人喰いの天才精神科医】を彷彿させる程の拘束だな……

「ムグ……？ ムググ、ムグムグ！！」

「ああ……久しぶりだな、ライリー？ 相変わらず、ブツ飛んだ奴の様だな」

「なあ……何で、あれで会話が成立してるんだよ？」

「私に聞くな、私だって知りたい位だ」

「ほら、ジエイと彼は長年の仲間だったから……以心伝心ってヤツじゃないかしら……多分？」

俺とライリーの後ろではナターシャ、イーリ、フランキーのそんな会話が聞こえた

「取り敢えず、猿轡コシを外すぞ。噛みつくなよな？」

俺はそう言つて、ベルトで固定された革製の猿轡を外した

「つぷはッ!! やーっと楽になった……それよりも隊長ボスが何でこんな所に居るの?」

「その言葉をそのまま、そっくり返すぜ? まあ、此処に来た理由はお前の力を借りたいからだ。単刀直入に言う……もう一度、俺と共に飛んで欲しい」

「僕以外にも他に誰が居るの?」

「ああ……元フアントム隊のメンバー、六人がな」

「六人? 隊長ボスと僕を入れて八人でしょ、あとの四人は?」

「……それが……まあ、消息不明というか何というか……まあ、他の四人は乗り気じゃなかったんでな……」

「……で、お前はどつなんだ?」

ライリーは子供の様に笑みを浮かべ、言った

「何、言ってるんツスか？ 隊長と居れば、またアドレナリン全開の【臨死飛行】が出来るんだから、乗るに決まってるじゃないですか？」

「……【臨死飛行】は勘弁願いたいが……これで、候補は全員が揃ったな」

俺は静かに呟いた

ライリーを拾い、フランキーとも合流した俺らはライリーの退院手続きを済ませた。事前に国連から部隊……【TASK FORCE】の結成をする為、ある程度の無茶が通る様にそれなりの権限を得ている為にライリーの退院手続きは滞り無くスムーズに済む事になった

屋上にあるへり……【AIR WOLF】へと向かったが、へりを見たライリーはまるで子供の様にハシャギ、目をキラキラと光らせた

「嗚呼、麗しき愛しのへり！！ しかも、最新鋭の機体！！ 嗚呼、もう最高ッ！！」

隊長は最高、世界一の隊長だよッ！！ もう一生、ついて行くよッ！！！！」

興奮した表情で一気にまくし立てるライリー、正に『フライト・ジャンキー飛行中毒』だな……」

「なあ……本当にコイツで良いのかよ？」

イリーはライリーを横目に俺へと耳打ちする

俺はライリーへと再び、目を向けた。其処にはヘリのローターにぶら下がり、上機嫌で口笛を吹きながら回転するライリーの姿が……

「ローターのチェック、OKです」

「……心配すんな、アレはアイツの性格であって腕は確かだ」

俺はライリーへと呼び掛けた

「ライリー、腕が鈍っていないかの確認だ。行き先はドイツ基地まで、お前が操縦しろ」

ライリーは、その言葉で笑みを浮かべる。そして、ぶら下がっていたローターから降り、それは見事な敬礼をした

「了解ですッ！！ 久し振りの【極限飛行】を繰り広げてみせますよー……」

するとナターシャは苦笑……と言つよりも、引きつった表情を浮かべて言った

「それ、本気なの？ ジェイ……」

「ああ、本気だ^{ツマ}」

「……OK、今朝は何も食べてこなくて正解だったわ……イーリ」

ナターシャはイーリの方へと視線を向ける

「何だよ、ナタル？」

「私やフランキー、ジエイは元々は戦闘機乗りだったから……まあ、平気だけど……ある程度、覚悟した方が良いわよ？」

するとイーリは強気な態度で言った

「はッ、アタシはこれでも一国を代表するIS操縦者だぜ？」

たかが、頭のネジが二、三本はブツ飛んだパイロットの曲芸飛行に
ビビるかっての」

そう言って、イーリは機内へと乗り込んでいった。残った俺ら、四人も直ぐにヘリに乗り込む

「……二、三本どころか、全部を無くしちゃったヤツだけだな……」

俺はそう呟き、俺以外の四人を見る

操縦席へと座ったライリーは、口笛を吹きながら上機嫌でヘリのエンジン起動させ……

ナターシャは念入りにベルトで身体を固定し、胸の前で十字を切り、何やら祈りを呟いていた（お前、カトリックじゃないだろ？）

ナターシャのただならぬ様子を見て、同じく念入りにベルトで身体を固定するフランキー……

そして、完全にライリーの【極限飛行】を舐めているのか、余裕綽々といった表情を浮かべるイーリ……

……基地まで持つかねえ……（主にイーリが）

そう思いながら、俺は……他の二人と同様にベルトを固定した

- - - - -

さて、へりに乗り込んだ俺たちはどうなったかだつて？

「お次は新技だよ。病室で、ずっと考えていたんだ」

「そうか……なら、どうなるんだ……ッ!？」

現在、俺らに乗せた上、ライリーが操縦するへりは超音速で旋回中だ。しかも【連続三回転】でな

「もう、勘弁してくれないかしら……お願いだからッ!！」

「流石に……コレは堪えるな……ッ!！」

固定したベルトにしがみつき、懇願するナターシャに色々とキツそうな表情を浮かべるフランキー

イーリはというと……

「もう嫌だッ！！ アタシは自分で飛んでいくッ！！」

涙目で必死にロックされたドアを開けようと叫ぶイーリ……無理だつての、超音速飛行に耐用出来る様に予圧システムを搭載しているからロックを解除しない限り、開かないつての……

すると開かないドアに対して、イーリはISで腕部の部分展開を……
……つて

「おい、ナターシャッ！！ イーリを止めるよ、ドアを破壊されたら俺たち、地面にキスする羽目になるぞッ……！！」

余談だが、現在の高度は地上からおよそ2万メートル程だ

「イーリ、落ち着きなさいってばッ！！ そんな事したらどうなるか分かってるでしょッ！！？」

発狂の勢いで暴れるイーリをナターシャは押さえつける。一方でこの混乱している状況の発端であるライリーはと言つと……

「このへり、最高ッ！ もう最高ッ！！ 今まで出来なかったあんな技やこんな技も簡単に実現できちゃうもんね」

更に機体を急旋回からの垂直上昇、その後に地面ギリギリまでの垂直急降下を繰り返し、ハイになっている状態だった

「目的地（基地）までどれ位で着くんだ、フランキーッ！！」

「今の……速度なら後、数分って所だな……ッ！！」

「えーッ、もうお終いなのか？　これからが僕の十八番なのに」

「こっちじゃなくて、前を見るよッ！　イカレ野郎ッ！！」

操縦しながら、此方を後部座席に座るフランキーを見るライリーに
叫ぶイーリ

「後、数分が地獄だな……」

俺は正に混乱とした機内で呟いた

- - - - -

ドイツ基地へと無事に【生還】した俺らは一旦、燃料補給を兼ねて

休憩を取る事にした。ナターシャやフランキー、俺に当たり前だがライリーは元々、戦闘機乗りである為にG負荷というモノには慣れているが……ISというのは高性能であり、操縦者のG負荷も緩和させる……が、その高性能さが仇となる事もある

「イーリはどうだ？」

「全然、一時間前にジェイに抱えられてトイレに行ったけど……未だに籠もりっぱなしらしいわ」

フランキーのオフィスにて、ナターシャとフランキーの声が静かに響く。ライリーはオフィスに備え付けられた来客用ソファーに寝転び、呑気に昼寝中だった

「全く……【問題児】とはよく言ったものだな。流石にパイロットだった私でも、アレは堪えたぞ？」

「そんな【問題児】たちをまとめていたジェイは凄いわよねえ……？」

「そうだ、私やナターシャは元空軍だったが……ジェイソンの経歴

はどうだったんだ？ 海軍に所属していたと聞いているが……」

「私も詳しい知らないのよ。私が彼と出会ったのは、ジエイが『TOP GUN』に居る頃だったから……」

すると一人の声が二人の会話へと割り込んできた

「……^{ボス}隊長は元海兵隊だよ。それも武装偵察部隊……『Force Recon』所属の凄腕だよ」

「あら、ライリーだったら……寝ていたんじゃないの？」

「……続きを聞かせてくれないか、ライリー？」

「OK、海兵隊だった隊長は直ぐに戦闘機乗りに鞍替えしてね。パイロットの腕は天下一品って事で直ぐに『TOP GUN』に行つて、首席卒業した訳だよ

でも、卒業する前からナターシャとは付き合っていたもんね。当時は凄い噂になったよ？ 『アメリカ軍史上、最強のカップル』ってね」

「……中々、良い思いをしていた様だな？」

「ええ、そうよ？ 【元恋人】の強みとでも言っておきましょうか？」

若干、額に青筋をたてながらナターシャを見るフランキーとニヤニヤという表現が良く似合う様な笑みを浮かべるナターシャ

「あの一……話を続けても良い？」

「「ええ（ああ）、続けて（くれ）」」

「何で僕が知っているのかって言えば全部、【Reaper】……
『クリス』から聞いたんだけどね？」

隊長とクリスは『海兵隊』からの付き合いだったから「

「初めて聞いたわ……ジェイってパイロット以前の昔話はしないから……」

「あの二人って不思議な関係なんだよねえ……恋人かと思ったら、親友みたいな関係で……あ、でも二人……って言っても、クリスからだけと良く【相手】をしていたみたいだったしね？」

その言葉と同時にナターシャとフランキーはライリーの肩を掴む。
ミシミシという擬音が聞こえそうな程の力を込めた上で

「ライリー……」

「……何で御座いましょうか？」

「詳しく聞かせる（聞かせて）？」

「了、了解ッ！！」
ラジャー

……

「へっキシッ！！」

風邪でも引いたか……【妙な悪寒】がする……

俺は基地へと到着すると同時に今にもダウン寸前のイーリを抱え、
トイレへと向かったんだが……

「うえええええッ……」

個室トイレからは唸りに近いイーリの声が響く。こりゃ、重症だな

……

「スッキリしたか、イーリ？」

「うええええッ……まだだよ……胃が裏返された気分だ……」

「まあ、ライリーの操縦にそれ位で済んで良かったな？ 昔は痙攣
を起こしたヤツも居たぞ？」

「そりゃ、最高……よくあんなイカレ野郎を…… つうえええええッ
……!」

……「こりゃ、マジで重症だな……」

……

「成る程な、つまりはこういう事か

そのクリス……【Reaper】はジェイソンとは海兵隊時代からの付き合いであり、ジェイソンがパイロットになると共に自身もパイロットになったと?」

「そうでありますッ!! クリスは隊長と居れば【退屈】って言葉を忘れる程、スリルを楽しめるから隊長について行った訳でありますッ!!」

「そして【戦闘狂】という性格のせいなのか、空を飛べない時や哨戒飛行などの簡単過ぎる任務で一定のストレスが溜まる度にジェイに寄ってきて【発散】していた訳ね、ライリー?」

「はい、その通りでありますッ！！ 隊長も毎回、断ろうとしていたのですがクリスの押しの強さに根負けしてであり、隊長も隊長で毎回、様々な逃げ道を考えていたのですが……」

「……それで？」

まるで女神、又は聖母の様な美しい笑みを浮かべるナターシャ……
- 但し、醸し出している気迫オーラは悪魔や死神すら裸足で逃げ出す程だが……

一方でライリーは冷や汗をナイアガラの如く流しながら、引きつった表情で言葉を続ける

「以前、二回程ですが隊長が【相手】をしなかった際、【発散】する事が出来ず、溜まりに溜まったストレスの影響か、都市部の防空戦でビルを三棟、車両を数十台破壊した事があったので、それ以降は隊長も仕方無いという事で【相手】をしていただきますッ！！
因みにその際、民間人の避難は完了していたので死傷者は一切、ありませんでした。その上、人が居ない場所をピンポイントで敵機ごと破壊していたでありますッ！！」

そして、ライリーは高らかと敬礼をして言葉を締めくくった

「成る程……【問題児】がもう一人、居る訳か……」

「ええ、それも【ジェイ絡み】でね」

ナターシャとフランキーは、それはそれは見る者全てを魅力するかの様な美しい笑みを同時に浮かべた……但し、その目だけは二人共に一切、笑ってはいなかったが……

「でも……一番、キレたらヤバいのは隊長だよ？」

「……ジェイソンがか？」

「ほら、ナターシャも知ってるでしょ？ その……【ラインハルト】の一件で……」

「ええ……あれは、アメリカ軍でも封印された出来事よね……」

「……何か、あったようだな？」

するとナターシャは言った

「ファントム隊は十二人編成の部隊として有名だけど……結成当時は十三人居たの……」

当時、十三人目の隊員の名前は【ラインハルト・レノックス】階級は少尉であって、正に筋金入りの悪党だったわ」

「はっきり言って、アイツの名前を口にするのも気分が悪いね。アイツは人間の悪い部分で構成された様な奴だよ」

嫌悪感を露わにして、吐き捨てる様に言うライリー

「それで、ソイツが何をやらかしたんだ？」

「……アフリカ辺りだったかな、反乱軍の制圧で僕らが出撃した際に隊長は撤退する者、無抵抗な民間人には一切の攻撃をするなっって言っただよ。でも、アイツはその命令を破って民間人に攻撃したそれで、隊長はアイツを『処断』したんだよ」

「……今でも、覚えているわ……あの時、基地に帰還した時のジェイの顔……」

まるで触れるモノ、全てを傷付ける様な刃物みたいな雰囲気、氷の様に冷たい瞳をしていたわ……」

「……想像出来ないな……あのジェイソンが……」

「でも、隊長はアイツを何とかマトモな奴にしようと必死に努力していたんだよなあ……結局、それも無駄だったけど……」

それにその任務に着く時、僕らの何人かは隊長に反対したんだよ。アイツを連れて行くのは危険だって……でも、隊長は言っただ

『例え、どんなにクス野郎でも俺の部隊に居る以上は俺の部下であり仲間だ。それに信じてみたいんだよ……アイツにも【良心】ってモノがある事をな』って」

「でも、結局はジェイソンの願いも努力も虚しく無駄だった訳か……それも、ソイツが裏切る形だな」

「でも、話はそれだけで終わりじゃないの。その一件から数日後、ジェイはある事を知っちゃったのよ」

「ファントム隊ははっきり言えば、腕は確かでも【問題児】の集まりだから、上層部の何人かは忌み嫌っていたんだ。それで、その上層部の一人が自分の上官を脅してファントム隊へと入隊しようとしていたアイツを入隊させた訳。幾ら、隊長でも軍人である以上、上からの命令は断れないからね」

「その上層部の一人の目的はラインハルトを入隊させ、何かしらの問題を起こせば、隊長であるジェイは責任を取らなければならない……つまり、ジェイを失脚させようと考えていたのよ」

「……どの国にも必ず、腐った奴は居るものだな……」

嫌悪感を露わにして、フランキーは呟く

「あの時の隊長はマジでヤバかったね……それを知った隊長は、いきなり武器庫をこじ開けて散弾銃ショット・ガンを取り出しちゃってさあ……」

- - - - -

「ブエツキシッ!」

「随分と爺臭いくしゃみだな、オイ？」

「ほっとけ、俺はもう直ぐで三十路だぞ? というよりも具合が良くなったのは構わないが、何時まで俺はお前を抱えてなきやならいんだよ?」

約一時間半、個室トイレに籠もりっぱなしだったイーリは漸くスッキリしたらしい。だが、何で未だに俺はイーリを抱えてなきやならないんだか……

「普通、具合の悪い乙女を介抱するのは男の義務なんだぜ、ジエシ
ー?」

「普通、乙女ってのは個室トイレに籠もって唸り声を上げないと思
うぜ、イーリ?」

そんなくだらない会話をしながら、俺はイーリを抱えたまま、フラインキーたちの居るオフィスへと向かった

- - - - -

「それで、完全にキレた隊長はヤバかったねえ……その上層部の一人に銃口を向けてからの第一声なんて『懺悔は済んだか？ クズ野郎』だよ？」

オマケに基地内を逃げるソイツを追い掛けながら、散弾銃を冷静な表情でブツ放しながら追いかけているのなんて、夢に出てきそうな勢いだっただよ」

苦笑を浮かべながら、ライリーは言う

「本当、あの時は大変だったわよ……私は偶々、基地に居ただけれども、基地内で銃声が聞こえたから、兵士たちが総出で駆け付けたら、追い詰められたその上官の額に銃口を押し付けているジェイ

が居たんだから……」

「それで、ソイツはどうなったんだ？ まさか、そのまま、ジエイソンに無惨にも頭を吹き飛ばされた訳では無いだろう……？」

フランキーはナターシャとライリーへと視線を向け直す。だが、そのフランキーの問いに答えたのは二人のどちらでも無かった

「いいや、生憎だが散々、撃ちまくっていたせいで丁度、弾切れだったんでな」

声のする方へとフランキーたち、三人は視線を向けた。すると其処には……苦笑いを浮かべ、何故かイーリを抱き抱えたジエイソンの姿があった

「ライリー、口が過ぎるぜ？ お前には【死人に口無し】って言葉を教え込む必要があるかもな？」

「いやあ……それは勘弁してもらいたいですよ、隊長……」

冷や汗を流しながら、ジェイソンへと視線を向けてライリーは言う

「ねえ、ジェイ………?」

ふと、声を掛けられた俺は声の主であるナターシャの方へと向く。すると其処にはニッコリという表現が良く似合う笑みを浮かべたナターシャが居た……

だが、俺にはその笑顔がとてつもない【威圧感】を感じる……最早、恐怖すらも感じた俺はイーリを下ろし、反射的に後退り、ナターシャから距離をとる

「ナ、ナターシャ……ライリーから何を聞いたのかは知らないけどよ、俺にも弁解って余地を……」

「残念だが、その余地はお前には無いぞ、ジェイソン?」

ふと、背後から気配と共に声を掛けられ、俺はゆっくりとその声の主……フランキーの居る方へと振り返る。其処にはナターシャと同様に思わず、見惚れてしまう程の眩しい笑みを浮かべたフランキーが居た……。しかし、俺にはナターシャと同様、とてつもない【威圧感】と恐怖を感じるが……

「フ、フランキー……マジで何を聞いたのかは知らないけどよ……取り敢えず、落ち着け……」

俺はナターシャとフランキーの【笑顔】に挟まれ、イーリとライリーに助けを求めようと言わんばかりに視線を勢い良く向けた。視線の先には何やら、イーリに小声で何かを耳打ちするライリーの姿が……すると、イーリの様子は【急変】した

「ジエシー……中々、面白い昔話をアタシは聞いたぜ？ たった今な……」

俺の目の前には、それはそれは眩しい笑顔を浮かべたイーリが居た……。但し、ソレは俺を挟み込む二人と同様の【笑顔】だった……

「……ライリー？ お前、何を三人に言ったんだよ……！？」

「えー……っと、そのー……【Reaper】との『昔話』を……」

「……おい、まさか『昔話』って……」

するとライリーは……

「ゴメンね、言っちゃった」

嗚呼、こんな状況を何と表現するべきだろう。確か、昔に何処かの誰かが言った筈……

嗚呼、そつだ。こつ言っただな…… - - 『神は死んだ』

「『ジエイ／ジエイソン／ジェシー……』」

三人から、それぞれの呼び名を呼ばれる……

「燃料補給したら、基地を発つ筈だったが、予定変更よ……」

「今日は、この基地に一泊しようではないか……何、新たな所属先にはナターシャたちが報告してくれる。それに私がこの基地に居る間、此処の責任者は私だ……心配する必要はない……」

「そうだぜ、ジェシー？ だから、ジェシーも気兼ねなく今夜は……」

「「「^{アタシ} 私たちに喰われなさい（喰われる）「「「

……『^{ファントム・タスク} 亡国機業』と戦り合つ前に俺が『^{ファントム} 亡霊』になりそうなのは気のせいだろうか……？

- - - 因みにこれはジェイソンたちとは関係無いのだが…… 同時刻、
日本に居る【最強】は持っていたペンを粉碎し、とある某所に居る
【天災】は作業中の手を止め、無機質な暗く濁った瞳で何処か【狂
気】を孕んだ笑みを浮かべていたとか何とか…… - - -

あの後、といつても時間帯で言えば夕暮れ時だったのだが……ライリーのお陰でナターシャたち、三人から解放されたのは既に深夜を回っていたと言っておこう……

同時に三人を【相手】取つて、三人共にスる事を終えて解放された時の感想は余韻などでは無く……『生きてるんだな、俺……』とただ、無事に生きている喜びを感じる羽目となった（戦場でも無いのに何故、そんな感情を抱かなければならないんだよ……）

ふと、自分の左右へと視線を向ければ……昨日の【長期戦】の反動なのか、一糸纏わぬ姿の上にベッドのシーツを羽織り、寝息をたてる三人が居た。三人の位置は……フランキーが右側に、イーリが左側にそれぞれが寄り添う形で……そして、ナターシャは俺に抱き付く形で俺の腹部に眠っていた

まあ、こんな美女たちに好かれるのは悪くは無いが……

「…………どうも、女運は別の意味で良くないみたいだな……」

そう、確かにナターシャたちは誰が見ても美女という部類の上位に入るだろう。他にも【友人】として、千冬や束……海兵隊時代からの付き合いである【Reaper】……『クリス』もそうだ

けどな……何故、俺の知っている女つてのは【普通】の奴つてのが居ないんだ？ ナターシャは元軍人であり、アメリカ、ISのテスト操縦者……イーリはアメリカを代表するIS操縦者、フランキーは現役の軍人であり、基地の全権を任される程の実力者、束の奴はISを開発して『天災』と称される程の頭脳を持つ科学者……クリスは【死神】の異名を持つ『戦闘狂』兼『スピード狂』

そして、千冬は言わずと知れた『世界最強』のIS操縦者……【ブリュンヒルデ】

これを普通と呼べるのだろうか？ 間違い無く【普通】とは到底、程遠いだろう

俺は三人を起こさない様、静かに身体を起こして三人に脱がされた
(いや、身包みを剥がされたという方がしっくり来るな) 衣服を羽
織ると部屋を後にした

- - - - -

昨日から姿を見ていないライリーの奴を捜したら案の定、ヘリ・
- 『AIR WOLF』の機内で寝ていた。相当、コイツを気に入
った様子だな……

「おい、起きろ……」

俺は暢気に鼾をたてて眠るライリーの頭を軽く足で小突いた

「ううん……あれ、隊長^{ボス}……幽霊じゃないよね……?」

と起きるなり、人の足を確認してくるライリー

「この通り、ピンピンしているよ。お前のお陰で危うく【死にかけた】がな？」

「いやあ……あんな^{オラ}気迫を纏って、あんな笑顔で迫られたら話すしかないでしょ？ もつ、僕なんか冷や汗がナイアガラだったんだんですよあ……」

「……まあ、その気持ちは良く分かるぜ……アレはどんなに戦場でヤバい状況に陥った俺らでも、マトモに耐えられる奴なんざ、居ないだろうしな……」

俺は溜め息混じりにヘリの機体へと寄りかかる。懐から煙草を出し、一本を取り出すとソレをくわえて火を着ける

煙草なんて今まで吸うことは殆ど無かったが……今では必需品となっている。寧ろ、今後の事でも尚更、必需品になるだろう……昔、ファントム隊では胃薬は手放せなかったけどな……

「隊長、煙草なんて吸っていたっけ？」

ライリーは俺が吸う煙草を指差した

「一種の精神安定薬だ……今後の事でも頭が痛くなりそうだからな……」

「……そう言えば、まだ聞いてなかったけど、今度の【相手】ってどんな連中なの？ 昔は軍隊や傭兵集団、独裁国家なんて奴らも相手にしたけどね」

「強いて、言うならば……正体不明だが今まで以上にデカい影って事は確かだ。俺らの新たな雇い主である【国連】が今、現在も調査中だが……姿形すら不明のままだ」

「ウォ、それって【秘密結社】って奴？」

「イイ勘、しているな？ 敵の呼び名は『亡国機業』ファントム・タスク……表に裏、両方の社会に様々な影響を与えている様な組織だ……だが、どちらも名前だけであり誰一人として、その影すら見た事が無い

……はてさて、俺らの相手は『幽霊』か……或いは大戦後、70年以上の年月を経て膨れ上がった亡霊か……

正直に言えば、最も相手にしたくない連中の部類だ。先ず、向こう側が何かしらを仕掛けてこなければ、連中の動向の推測すら難しいからな……」

「……もし、その『亡霊』の正体を知ったら、隊長はどうする気？」

「……決まってるだろ？ 【潰す】……金輪際、その名前すら忘れ去られる位に徹底的にな、だが……その頃には『亡霊』の姿も見えやすくなれば楽なんだがなあ……」

するとライリーは苦笑を浮かべて、俺に言った

「相変わらず、敵と見なした連中には容赦ないよねえ……」

でも、女や子供に対しては弱いんだよね、隊長って」

「……今回はそうも言ってられないかも……」

まだ、無人機が相手ならば撃ち落とす事に何の躊躇いも必要ないが

…… ISの技術を連中…… 『亡国機業』が所有する以上、【操縦者】も恐らくは構成員として存在する筈……

そして、その【操縦者】は俺の様な『イレギュラー』では無く、確実に【女性】だろう……

「……つと、ちよつくらトイレに行ってくる。今の内に機体の点検をしておけよな？ ナターシャたちが起きたら、直ぐにお前や向こうで待たされ続けてるアイツ等の【配属先】に向かうぞ」

俺は吸い殻を指先で掴み、機体から離れていく。するとライリーが背後から声を掛ける

「そうそう、その【配属先】って何処なの？」

「……存在しない場所…… 『地図にない基地』^{イレイスド}だ」

- - - - -

僕はトイレに行くと言った隊長の後ろ姿を見つめていた。どんなにヤバい状況になっても常に余裕を失わず、誰一人として見捨てない
- - - 【偉大な戦闘機乗り】の後ろ姿を……

暫くして、僕は愛しい愛しいコイツ、隊長が言っていた『超音速戦闘ヘリ』
- - - 【AIR WOLF】を眺めてた

ファントム隊での僕の愛機は『F-16C Fighting Falcon』だったけど……もう、僕はコイツにメロメロなんだよねえ……

嗚呼、人は恋すると世界が変わって見えるって言うけど……これが
【恋】なんだなあ……

僕は機体を撫でながら、例えようのない幸福感に包まれる。嗚呼、
もう最高……

「……ジェイソンから聞いていたが……まさか、ここまで【重症】とはな……」

「あ、フランキー中佐じゃないですか。お早う御座います」

振り返れば、昨日はナターシャたちと一緒に隊長を【喰って】いたフランキー中佐が居た。寝起きなのか、衣服は若干、緩められておりラフな格好となっていた

「ああ、お早う……ジェイソンは見なかったか？ 今朝、起きたら既に姿が無くてな……昨日はあれほど、長時間を掛けたと言つのに凄まじい体力だな、アイツは……」

「もしかして、途中からは隊長が【主導権】を持っていたとか？」

「その通りだ、お陰で腰に鈍痛が今も走っている……」

そう言つて、フランキー中佐は細い腰に手を当てた。本当、隊長つて美人さんに好かれるよねえ……でも、何でだろう。ファントム

隊でも随一である女好きの【Viper】……『ハンス』も『隊長』って美女に好かれるけどよ、色んな意味で苦勞するから決して羨ましいとは思えない』って言ってたけど、本当だなあ……

「……何故、遠い目をしているんだ？」

「いえ、隊長の苦勞って奴を考えてまして……」

「……しかし、ジエイソンとは不思議な男だな……海兵隊から戦闘機乗り、その類い希なる操縦技術を持ち『生粋のエース』……【ACE OF ACE】と呼ばれ、今では世界初の『男性IS操縦者』……」

「あ、やっぱり隊長だったんだ。ニュースなんかでも大騒ぎだったけど……」

「……驚かないんだな？」

フランキー中佐は不思議そうな表情で僕へと目を向ける

「何せ、隊長だからねえ……ナターシャは空軍だから、この事は知らないけど……隊長って、あの【CIA】や【FBI】なんかの様々な組織の『要注意人物』……【BLACK LIST】に載ってるんだよ?」

「……それも初耳だぞ……?」

「元海兵隊、その後は海軍のエース・パイロットとしてのお墨付き。色んな任務に着任したよ」

「ファントム隊の隊長としてのデビューからは、もう激戦地の最前線に駆り出され、世界各国を巡る羽目になってね。世界的なテロ組織の壊滅、【超危険】と称された傭兵集団、独裁者が支配する独裁国家……そんな連中を隊長は僕らを率いて相手していった」

僕は機体を点検しながら、話を続ける

「つまり、隊長はファントム隊を率いて戦う内に【一個師団】に匹敵する腕前になったんだよ」

「……成る程、一個師団では無く【一人師団】となった訳か……」

「陸や空でも戦い続け、戦況を読めた上で常に向上を望んだ隊長は偉大な戦闘機乗りの一人だよ」

でも、そんな隊長も【憧れの戦闘機乗り】ってのが居るんだよ。昔、その話題を聞いたら隊長は子供みたいに目を光らせて言っていたよ」

普段はクールな感じの隊長がだよ？、僕はそう付け加えた

「それは……気になるな、あのジェイソンが憧れる人物……同じ【戦闘機乗り】か？」

「フランキー中佐も聞いた事はあると思うよ？ 戦闘機乗りなら誰もが知っているあの『伝説の戦闘機乗り』……【SKY CAP
スカイ
・キャプテン
TAIN】だよ」

そう、あの『白騎士事件』の数年前に周囲の仲間のみならず、各国の軍に惜しまれながらも名誉除隊した【歴戦の戦闘機乗り】……たった一機で一個師団を相手取り、無傷で勝利した『空の霸王』とも称された人物……その名前は……

「フランス空軍の英雄、『空の霸王』とも称された戦闘機乗り……
『クロード・デュノア大佐』か……愛機は『Mirage 20

00-5』であり、任務成功率は単独及び団体を問わず、全てを完遂している」

「そう、正に史上最強かつ最高のパイロットだよ。フロントム隊の【SKY KID】……『カーター』は熱烈なデュノア大佐のファンでね、TACネームもカーターの愛機が『Mirage 2000-5』であるのも憧れから来ているんだよ」

「ジェイソンのみならず、戦闘機乗りならば皆の憧れだろう。偉大な戦闘機乗りであり、我々の【大先輩】にあたるのだからな」

フランキー中佐は静かに笑みを浮かべ、言った……僕って女の人よりも機体の方が好きだけと思わず、中佐の笑みに見惚れちゃったよ……隊長、ゴメンね？

「……さて、ナターシャやイーリもそろそろ起きる頃だろう。私も身仕度を済ませるとするか……」

機体の点検は抜かりなくな、ライリー？」

「了解、お任せ下さいよ」
ライリー

僕は敬礼をフランク・中佐へと向け、中佐が去った後に機体の点検を再開した

それは【ジェイソン・シーガー】がまだ軍へと入隊する以前の頃だった

カナダにて一人の男性が長い生涯を終え、家族が見守る中で安らかに息を引き取った。亡くなった男性は七十年という歲月の中、かつては名ジャーナリストとして名を馳せた。その男性の名は……『カイル・ウィーバー』

遺族は『カイル・ウィーバー』が生前、肌身離さず、常に持ち歩いていた一つの【手帳】を遺産として相続した。その手帳は名ジャーナリストと呼ばれたカイルがまだ、駆け出しの新人ジャーナリストから愛用していたモノだった

【手帳】の最初のページはこう書かれていた

『空には偉大な戦闘機乗りたちが居る。歴史に名を残す者、又は歴史の闇へと葬られた者たちが……』

私は彼らをこう呼ぶ。『空の守護神』 . . . 【SKY GUARD
IAN】と……』

これは一人のジャーナリストが遺した【手記】に書かれたモノである

- - - - -

私はジャーナリストとなった。所謂、新米 . . . まだ駆け出しと言
った所だ

私が追っているのは軍の活躍した出来事 . . . つまり、『戦争』と
いうジャンルだ。元々、私は陸軍に在籍していたが……任務中、背
中を負傷して医師からは【椎間板損傷】と宣告されてしまった。日
常生活やある程度の激しい運動でも別に大した支障は無いのだが…
…腰に爆弾を抱えてしまった兵士が追いやられる場所は情報部など
の所謂、机仕事を専門とする所くらいしか無い

私は戦場に立つ事を軍人としての誇りと見出していた為、除隊の道を選んだ

ジャーナリストとなったのは、今まで国の為に【戦争】へと駆り出されてきたが、別の視点から【戦争】という存在を見てみたいという好奇心からだった

私は陸軍時代に空軍の【言い伝え】を聞いた事があった。それは昔、遙か彼方の大陸には優れた技術力と精強な軍隊 - - 特に空軍を持つ国があった

その国は経済恐慌の煽りを受け、徐々に衰退していった。そして、隣国の豊富な天然資源に目を着けた。そして、衰退していく国の領土の拡張、隣国の天然資源を奪う為に戦争を始めた

戦争を仕掛けられた隣国は総力を用いて、戦った。だが、自国よりも優れた技術力と軍隊を持つ国が相手である為、苦戦を強いられた隣国は【とある傭兵】たちを味方に付けた

その傭兵たちは優れた戦闘機乗りであり、各々が歴戦の兵揃い。苦戦を強いられた戦況を簡単に巻き返したと言い伝えられていたらしい。これが空軍に言い伝えられていた【片羽】と【鬼神】の伝説だが……私はある【一人の戦闘機乗り】と出会う事になった

伝承などに興味が無かった私には単なるお伽話としか思えなかったが……私はある【一人の戦闘機乗り】と出会う事になった

その戦闘機乗りは『D』と名乗っていた。どうやら、名前の頭文字らしい

私は『D』に【片羽】と【鬼神】の伝説についてを聞いた。すると『D』は笑いながら、こう答えた

『知っているも何も……俺は【あの二人】と飛んだ事があるんだよ。まだ青臭いハナタレの小僧ガキの頃にな……』

『D』は私に【片羽】と【鬼神】の事を語ってくれた

【片羽】と【鬼神】の正式な呼び名は【片羽の妖精】と【円卓の鬼神】

その二人の部隊は『地獄の番犬』の異名を持ち、畏怖と敬意の狭間に生きた存在だと私に言った。『D』は後に雇われたパイロットであり、終戦までの間、僅かながら共に空を飛んだ間柄らしい。そして『D』は言った

『あの二人は戦友であって相棒……いや、それ以上の信頼関係を持ち、誰から見ても名コンビだった

俺も一人の戦闘機乗りとして、あの二人に恐れを抱き、そして憧れを抱いた』

だが、戦争の最中だった。【片羽】が突然の離脱をしたのは……

【鬼神】は相棒を失うもその呼び名通りの強さを発揮して、戦争を終結へと導いたと『D』は言った

私は【片羽】はどうして離脱したのかと聞いた

『……恐らくは国家間の資源を巡る貪欲であって、卑劣な姿勢に嫌気が差したんだろう……』

そう言った『D』は空軍に言い伝えられてない【続き】を語り始めた

戦争末期、戦争を仕掛けたその国は自国内へと進行してきた敵軍を討つため、自国内にて核兵器を起爆させるという愚行を行った。その愚行による混乱の最中、【片羽】は乗機ごと離脱したらしい

後に【片羽】はクーデター軍へと参加、大規模破壊行為による文明の崩壊を切欠に腐りきった世界を再構成……『リセット』しようという軍の思想を実行しようとした

だが、【鬼神】はそれを阻止すべく相棒であり、戦友でもある【片羽】と命を賭して激突したらしい

その時、『D』は【鬼神】と共に出撃し、クーデター軍を攻撃して

いた様だ

そして、激しい死闘の末……勝ったのは【鬼神】だった。自らの手で【片羽】を撃墜して……

私は『D』に聞いた

『何故、相棒であり戦友でもある二人は戦わなければならなかったのか？ 他に解決策は無かったのか？』

すると『D』はこう答えた

『……俺は以前、二人に聞いた事がある。【何の為に戦う】と……
そしたら、二人はこう答えたよ

【片羽】は『俺らは傭兵なんて生業をしているけどよ、腐った政治やらお偉方の為でもなきや、荒れ果てた大地の為に戦う訳でも無い』

【鬼神】は『そんなモノよりも……もつと価値があり、最も大切な【護るべきモノ】の為に俺たちは戦うんだ』

……俺は二人に聞いた。なら、その【護るべきモノ】ってモノは一体、何なんだとな

すると【鬼神】はこう言った……『それは人それぞれだ。皆が同じ答えを持つ訳じゃない』

そして、【片羽】は笑いながら言ったよ……『まっ、何れはお前にも分かる日が来るだろうよ。そんな時のお前が飛ぶ姿……見てみたいかもな？』ってな』

『D』は静かに言った

『あの二人は……そう、互いに自分たちの【信念】の為に戦ったんだらう』

そう言った『D』は……どこか、嬉しそうな表情を浮かべていた

- - - - -

あれから、長い歳月が過ぎた。私は最愛の妻と娘にも恵まれながらもジャーナリストを続けていた

あれ以来、私は戦争に対して【加害者】と【被害者】、両方の視点から真実を見出す様に心掛けていた

私は幾つもの戦争を記事にしている内、名ジャーナリストと呼ばれる様になった

『D』とはあれ以来、友人と呼べる関係になっていた。だが、私は彼についてはあまり知らなかった

年に数回は会うが彼は様々な戦場を経験したと言う。私に【存在しない戦争】又は【重巡管制航空母艦】という聞いた事も無い様な兵

器の破壊任務にも参加したと言っていた

彼には何と妻が【三人】も居るらしい。既に息子も居る様で、その息子も結婚したらしい

これまた驚きなのは三人の妻の内、二人は元【CIA】であり、もう一人は【陸軍】所属だった様だ

『D』は苦笑いを浮かべ、言っていた

『お陰様で浮気をする前にバレて【搾り尽くされる】よ、モテる男も辛いな……』

私たちは笑い、互いに昔話に華を咲かせた。それが友人としての『D』と私の関係でもあった

- - - - -

そして、月日は流れた。私はジャーナリストを引退し、カナダにて
隠居生活をしている

既に娘も成長し、結婚……私には孫娘が出来た。彼とはもう長い間、
会ってはいない

だが、お互いに穏やかな余生を過ごしているだろうと感じる

私は彼 - - - 『D』と出会う事である事を知った

我々が日常で何の気なしに見上げる空には『偉大な戦闘機乗り』た
ちが居るといふ事を。我々が知っているのはほんの一握りだけであ
り、各々が【護るべきモノ】の為に命を賭して飛んでいた事を……

彼 - - - 『D』に最後に会った時、彼は自分が飛ぶ理由をこう言っ

ていた

『【あの二人】は決して譲れなく、曲げられない『信念』の為、命を賭して飛んでいた。俺はまだ分からない、何の為に自分が飛んでいるのかを……』

その理由を知りたいから、俺は飛ぶんだよ』

彼もまた『偉大な戦闘機乗り』の一人なのだろう。私はそんな【彼ら】をこう呼ぶ

『偉大な戦闘機乗り』 . . . 【空の守護神】と……

.

そして、最後のページにはこう記されていた

『私以外の誰かがコレを見る頃、私はもう居ないだろう……』

私はかつて、名ジャーナリストと呼ばれた。だが、私がジャーナリストとしてしたかったのは何か……

それは【次の世代】に伝えたかったからだ。『歴史』とは長い歳月の間に起こった物事の表れでは無く、その一つ一つに意味がある事を……

『英雄』とは何か、それは【本当に護るべきモノ】を見出し、それに命を賭した者だという事を……

だが、この『空の守護神』の話だけはこの手記に閉まっておこう。彼らは地位や名声だけの為に飛んだ訳ではない

各々、自分たちの【護るべきモノ】の為、命を賭した……『偉大な戦闘機乗り』たちへの私なりの手向けだ

だが、何時の日か……その信念を受け継ぐ者たちが現れるだろう。ならば、私はその者たちの為にもコレを遺す』

-
-
-
-
-
-

『カイル・ウィーバー』が亡くなった数日後、一人の老人が現れた。その風貌は老いを感じさせるものの【筋骨隆々】という表現を表した様な肉体であり、鷲の様に鋭い眼をした老人だった

その老人は『カイル・ウィーバー』とは生前、友人であったと言い、その墓前に挨拶をしたという

『カイル・ウィーバー』の孫娘……【アリシア・ウィーバー】はその老人の名前を聞いた

すると老人はこう言った……『D』……【ダリアス・シーガー】と名乗ったそうだとか……

それから数時間後、漸く起きたナターシャとイーリに合流した俺らは基地を発つことになった。向こう……『存在しない基地』までの足はライリーの操縦する【AIR WOLF】だ

因みにだが、昨日の【一件】以来、ライリーの奴はナターシャとフランキーの二人に対して、かなり【従順】……いや、寧ろ【絶対服従】という様な状態になった。ライリー曰わく『あの二人を敵に回すなら、まだ気化爆弾を抱えて敵陣に特攻した方がマシ』らしい

だが、俺だけは【別の機体】で行く事にした……フランキーの愛機【Su-33 Flanker】だ。フランキーの愛機だけはまだ擬似ISを搭載していない通常仕様……
スタンダード・エディション

だから、一度は向こう……『存在しない基地』に持って行く必要がある訳だ

そこで俺は【ある事】を実行すべく、フランキーから操縦許可を得

た。一応は『アイツ等』にも挨拶をしないと……

.....

「遅いぞツ!! 展開は0.5秒で済ませるんだツ! 戦場では僅かな時間差で命運を決すると常に心掛けるツ!!」

『イエス・マムツ!!』

私……ドイツ軍、IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』
……通称『黒ウサギ隊』の隊長である『ラウラ・ボーデヴィツヒ』
は隊員たちへと一喝を飛ばす

【あの日】……『教官』と『隊長』が一年間という指導期間を終え、この基地を去ってから数日が過ぎた。私の首元には『落ちこぼれ』と呼ばれた私を再び【隊長】という座へと押し上げてくれた恩師……元アメリカ海軍のエース・パイロットであり、『生粋の工―ス』の呼び名を持つ戦闘機乗り……

そして、私にとって【理想の隊長像】 - - - 『ジェイソン・シーガー元大尉』から預かった認識票が太陽の光を受け、鋭く輝いていた。隊長は正に『生粋のエース』 - - - 【ACE OF ACE】だった。私たち、『シュヴァルツェ・ハーゼ』は隊長の戦いを二回程、見た事がある

一度目は我が隊の監査として、ドイツへとやって来たアメリカ代表のIS操縦者 - - - 『イーリス・コーリング』との模擬戦にて戦闘機でISと戦い、圧倒的な戦力差を隊長はISの比類無き高性能さを利用し、勝利した

二回目は祖国、ドイツを襲った試作兵器 - - - 【スタウロス】の時だった。隊長は【男性】でありながら、ISを起動させ……ドイツとアメリカが二国協同開発した『IS搭載戦闘機』 - - - 【CFA-44】を操縦し、この国を救った

だが、その直後だった。謎に包まれた【無人IS機】が現れたのは……

しかし、隊長はその【無人IS機】をも撃墜した。その時、私たち
- - - 『シュヴァルツェ・ハーゼ』は悟った

隊長は私たちが想像できない様な修羅場を潜り抜け、そして勝利し
てきた『歴戦の兵』 - - - 私たち、IS操縦者の頂点に立つ存在……

『ブリュンヒルデ』 - - - 【織斑 千冬】教官と同じ『高み』に立
つ存在である事を……

私は一人の兵士として……そして一人の女としても隊長に憧れ、惹
かれた。いや、私以外にも他の隊員や教官、フランキー中佐たちも
隊長に惹かれているのだろう

私たち - - - 『シュヴァルツェ・ハーゼ』の目標は、フランキー中
佐から聞いた『IS編成戦闘機部隊』 - - - 【TASK FORCE
E】の一員となる事

まだ結成はされていないが、隊員たちは隊長やフランキー中佐を含

む歴戦の兵揃い。正に世界最高かつ最強の部隊、私たちはその部隊の一員となるのを目標に今も鍛えている

何時か、必ず……『隊長と共に空を羽ばたいてみせる』

そう誓って……

「隊長、アレを見て下さい……」

ふと、思考の海へと引き込まれていた私を副隊長……【クラリツサ・ハルフォーフ】の声引き戻した。声を発したクラリツサの方へと視線を向けると、クラリツサだけでは無く他の隊員たちもが空を見上げていた

私は同じように私以外の向ける視線の先へと目を向けた。そこには

……

「あれは……フランキー中佐の【Franker】……?」

私たちが見上げる空には……白銀の機体と尾翼部に刻まれた『八つ
の足を持つ神獣』……『スレイブニルSleepnir』の隊章エンブレムを持つフラン
キー中佐の愛機……『Su-33 Franker』が空を舞う
姿があつた

優雅であり、鋭い機動で空を疾走していくその姿に私たちは暫しの
間、訓練中である事を忘れて見惚れていた

その一つ一つの動きにも洗練さを感じさせる機体は私たちの視線に
気付いたのか、機体を傾けて操縦席が見える姿勢となる

ISを展開していた私には、はつきりと見えた。操縦席に座るパイ
ロットが私たちに向け、敬礼をするのを………そして、そのパ
イロットが誰であるのかを………

「……『隊長』………」

私が見たのは……マスクを外し、口を動かす『ジェイソン・シーガ
ー 元大尉』の姿だった。そして、隊長の口の動きを見て私に伝え
ようとしている言葉……

『…頑張れよ、ラウラ』

今まで経験した事の無い嬉しさで涙が零れそうになるのを感じる。
でも、私は必死で堪えた

そして、私は……精一杯の笑顔を浮かべて、空を舞う隊長へと敬礼
を掲げた

- - - - -

《挨拶とやらは済んだか、ジェイソン？》

【Su-33 Franker】の進路を目的地……『存在しない基地』へと向け、飛行する俺に隣を飛ぶへり……【AIRWOLF】に搭乗しているフランキーの無線が入る

「まあな、取り敢えずは俺が操縦していたって事も分かったみたいだしな……」

すると俺とフランキーの無線による会話にへりを操縦するライリーが割り込む

「でも、隊長 どうせだったら、ナターシャの時みたいな風にすれば良かったんじゃない？」

「ああ……ジエイが私の誕生日を忘れていた時の【プレゼント】の事？」

「昔の話だろ……あの時だって、お前の誕生日をすっかり忘れていたのを悪いと思ったから、無理を言ってやった事だぞ？」

するとフランキーとイーリからの無線が入る

《一体、何をプレゼントしたんだよ ジェシー？》

《付き合っていた相手の誕生日を忘れていたとは随分と酷いな、ジェイソン？》

手厳しい言葉を貰い、俺は苦笑を浮かべた

《……ライリー、弁護してくれないか？》

《OK、その頃の隊長は毎日が忙しくてねえ……ファントム隊も彼方此方に引つ張りだこだったんだよ。それで、すっかりナターシャの誕生日を忘れてプレゼントを用意出来なかったって訳

そしたら、隊長は整備班の連中に必死で頼み込んで『航空ショー』とかに使われる発煙器を取り付けた機体を借りてきたんだよ

それで、空にナターシャの名前とお祝いの言葉、それに謝罪を描いたんだったよね、隊長？》

《ああ、お陰様で整備班の奴らにひと月は酒を奢る羽目になったけどな……》

《随分とロマンチックな事をするんだな、ジェシーって？》

《ロマンチックって言っても、パイロットにしか分からないだろうけどな？》

《あれ？ でも、クリスは昔、誕生日祝いで隊長が車のタイヤ痕で名前を書いてくれたって言っていたよね？》

《……ジェイ、それはどういう事かしら？》

ナターシャの低い声が無線から聞こえてくる……心底、へりに乗ってなくて良かったと感じたのは余談だ

《おいおい、車で地面にやるのと空にやるのじゃあ、スケールってモンが全然、違うだろうが？

それに車なら手元になれば、何時でも出来るが、あの時はかなり無理を言っただけでやってやったんだぞ？

始末書を書かされるのを覚悟してな》

《なら、私の誕生日の際にはナターシャと同じように空に描いて貰うとしよう》

《おい、抜け駆けはズルいぜ フランキー？ なら、アタシは車の方で頼むぜ、ジェシー？》

《あら、じゃあ……私は両方をお願いしようかしら？》

ナターシャ、イーリ、フランキーの三人からは要望の音が拳がる

《……あのなあ、そう簡単に言うてくれるが、無茶振りし過ぎだろ
うが……》

俺らはそんな会話を続けながら、ドイツを後にした……

.....

目的地.....『存在しない基地』へと到着した俺はドイツから操縦していたフランキーの愛機.....【Su-33 Franker】を待機していた整備班たちへと預けた。【擬似IS】は用意しているらしく、直ぐに機体への搭載作業に取り掛かる様だ

流石、ISに関する設備と優秀な整備班たちのお陰なのか……【48時間】もあれば、作業は完了できると言っていた。大したモノだよ……

それに整備班たちからは【ある報告】を俺に伝えてきた。それは『IS編成戦闘機部隊』.....【TASK FORCE】の戦闘機パイロットであるフランキーを除く俺たち、『ファントム隊』のメンバーの当時、愛機だった機体を揃えたという報告と……

【TASK FORCE】の結成祝いとして、国連から一機の【試作機】が届けられたという報告だった。どうやら、俺の専用機.....【CFA-44 Nosferatu】の設計を基礎とし、『擬似IS』を使用する試作機らしく、男でも操縦が可能との事だ

それらの報告を受けた俺は、残る六人のメンバーが待機しているという会議室へと向かった

-
-
-
-
-
-

会議室の前へと到着した俺らは、ナターシャたちを別室で待たす事にした

一部を除くが、数年振りに『ファントム隊』の一同が勢揃いする訳だ……積もる話もあり、昔の【戦友】……仲間たちと水入らずにしたいんでな……

俺はライリーと共に会議室の扉を開き、室内へと踏み込む。其処に居るのは懐かしい顔触れの面々だった

「……よお、お前ら……まだ、生きているみたいだな？」

「隊長ッ！ それにライリーッ！！ 本当に久しぶりッスねえッ！
！」

陽気な表情を浮かべる【SKY KID】 - - - 『カーター・ウィ
ンストン』

「相変わらず、隊長も有名だよなあ……お久しぶり？」

静かに笑みを浮かべ、軽く手を振る【Viper】 - - - 『ハンス・
ラファティ』

「それにしてもマジで、久しぶりだよな？ この面子が揃うのもよ

相変わらず、『iPod』を手放さずに一同を見渡す【iPod】
- - - 『リチャード・ウォルター』

「隊長も元気そうで何よりですよ、それにライリーも久しぶりだな」

くだけた感じの敬礼を俺に向ける【Baron】……『シヨーン・トバイアス』

「その『生きていたか』って、台詞をそのまま返してやるぜ？　まあ……相変わらず、イイ男のままじゃねえかよ、コツチは【溜まってる】んでな」

白銀の髪を掻きながら、相変わらずの口の悪さを見せる【Reaper】……『クリスタ・ネコルヴィッチ』

「……………」

相変わらず、無口のままに軽い会釈をする【Iron Hide】……『バーンズ・アーチャー』

「いやあ……この一同、勢揃いなんて昔を思い出すね、隊長^{ボス}？」

アフガンにナイジェリア、ボリビアとベトナムとかさ」

子供の様な笑みを浮かべる【Ratchet】……『ライリー・オドネル』

「ああ、ファントム隊の集結って訳だ」

すると【Reaper】……『クリス』は言う

「集結ね……まあ、3〜4人は居ねえツラも居るけどよ、それで彼方此方に散らばったアタシらを勢揃いさせて、どんな要件なんだよ？」

「そうだな……【二度目のチャンス】到来ってヤツだよ」

- 【結成】 -

俺は語った……軍を去り、世界各国を旅した事からドイツでの一件まで……【全て】をな

そして、俺たちの新たな『敵』……『亡国機業』に関連した情報を此処（会議室）に居る【七人の候補】たちに伝えた

会議室に居る全員がかつての戦闘機乗りとしての顔をして、聞いていた。誰一人が普段の軽口すら発しなかった……

鉛の様に重たい空気の中、俺は言った

「…俺たちは一度は空を去った。その理由は『IS インフィニット・ストラトス』が大きな原因だろう……」

だが、国がまた俺たちを必要としている。はっきり言えば、『亡国

機業』の脅威は今まで俺たちが相手してきた連中とは桁外れだ……
この中の誰かが死ぬかも知れない」

俺は一同を見渡し、言葉を続ける

「……けどな、俺らは【軍人】だ。今は違えど、全員が一度は星条旗に誓った筈だ……」あらゆる脅威から国を護り抜く」とな

このまま、連中を野放しにすれば……アメリカだけではなく、世界中があつた『9・11』以上の悲劇に見舞われるだろう

それを知っていて、断るなんて馬鹿な事が出来るか……？」

すると、シヨーンは口を開いた

「……俺は……何時だって、隊長の頼みや命令を断つたり、逆らう事は無かつた。ファントム隊が結成されてから、ずっと……」

……そして、それは【これから】も変わりませんよ、隊長」

続いて、カーターが言う

「つまりよ、それって俺らが世界を護る【英雄】^{ヒーロー}になれって訳だろ？
そんなビッグ・チャンスを逃す方が馬鹿ツスよ」

「やったね、英雄になって世界中の女の子たちにモテモテ。これ
で、俺の夢も実現にかなり近づく訳だ」

陽気な笑みを浮かべたハンスが言う

「しょーがねえ……ハンスやカーター程、乗り気じゃねえけどよ…
…行くっぜ、隊長」

もう一度、『Sweet SKY（愛しの空）』へと上がるっぜ？」

リチャードは愛用の『iPod』のイヤホンを外し、言う

俺はクリスへと視線を向けた。クリスは頭を掻きながらニヤケた笑

いを浮かべた

「アタシは戦闘機乗りになる時に言っただろ？」

『アンタと居れば、スリルがストーカーの様に付きまどってくる』
つてよ

……乗ったぜ、『愛しの隊長^{ダイレン}』？」

俺はB・Aへと視線を向ける

「お前はどつだ、B・A？」

「……隊長に任せる。それに俺の隊長はアンタ^{ボス}だけだ」

するとライリーはハシヤいだ様子で、拍手をしながら言った

「やったねッ！！ 皆でもう一度、ハラハラドキドキのスリル満点
な毎日が楽しめる」

「皆、礼を言っぜ……『ファントム隊』……【再始動】だ」

「あ、水を差す様で悪いんだけどさあ……隊長？」

拳手をして、言うライリーへと俺らは視線を向けた

「また空を飛べる上、英雄になれるのは嬉しいんだけど……それって【賞与^{ボーナス}】とか【危険手当】ってあるの？」

.....

話を終えた俺らは会議室へと別室で待機していたナターシャたちを呼んできた

「話は……成立したのかしら、ジェイ？」

「ああ、全員が受諾してくれた……が、2、3ばかり【要求】ってモノがあつてな……」

「……【要求】？」

イーリは首を傾げ、俺へと視線を向けた

「全員の要求を紙に書かせた……まあ、大した事じゃないぜ……？」

……そう、例えば……クリスマスからの要求は……『今まで、未払いの交通違反の罰金の帳消し』とか……」

するとクリスが口を挟み、こう言った

「7つの州で合計が【140件以上】な、少なくともよ」

「……クリス、余計な口を挟むなっつての…」

あと……リチャードの要求は『8トラ（エイト・トラック・テープ）の復活』……こりゃ、無理そうだな…」

あー……これはショーンからのだが…『ケネディ暗殺の真相』なんてモノは教えてくれる訳、無いよな？」

啞然としたナターシャたちの表情を横目に俺は続きを読み上げていく

「……ハンズの要求は【今、最も売れている美人モデル20人とのデート権】だそうだ……」

「デートだけで良いよ、後は自分で【口説き落とす】からさっ？」

ニタニタという表現が良く似合う笑みを浮かべ、ハンズは言う

「……次はライリーだが…『【AIR WOLF】を一機、自家用機にしたい』」

それにB・Aは『知人の移民系の一家、8人のアメリカでの市民権の獲得』……」

カーターは『自分のラジオ番組を独立、全世界での放送』だ……
以上だな」

するとライリーは言った

「隊長、何か忘れてない？」

「ああ……それから……全員、税金は払いたくないそうだ……【死ぬ
までな】」

「……一応、出来る限りの事はしてみるわ……」

最早、引きつった表情を浮かべてナターシャは言う

「……フランキーは何か、あるか？」

俺はフランキーへと視線を向ける。フランキーは顎に手を当てると

暫く考え込む……すると、

「……そうだな、ジエイソンを……」

「却下よ(だぜ)?」

間髪を入れず、フランキーの要求を遮るナターシャとイーリ

「……ならば、【TASK FORCE】での任期を終えた後に……
……向こう、5〜6年程はジエイソンをドイツ軍で『戦闘機乗り』
として教官を務めて貰うとしよう。構わないな、ジエイソン?」

「……それ位、引き受けるぜ? だから、その露骨に不服そうな表情
を浮かべるな、ナターシャ、イーリ……」

「……まあ、良いわ……それじゃあ……」

「やる事は山ほど、あるぜ?」

-
-
-
-
-
-

俺たち - - - 【戦闘機部門】の隊員たちは様々な検査を受ける事になった。先ずは『肉体面』 - - - 所謂、『健康診断』というヤツなのだが……

「おい、何だソリヤ……変なモン、アタシに打ち込もつてんなら、その注射器をテメエの心臓にブツ刺すぞ、コラ？」

注射器を持つ医者を見付けるクリス……

「クリス、医者を脅すな……ただの血液検査だろうが……」

「隊長、スキヤナーだけは勘弁してもらえないツスか？」

医者ともめているカーターへと視線を向ければ……

「カーター、スキャナー位で子供みたいに喚くなよ？」

「隊長は知らないんツスかあ！？ スキャナーは【男の大事なモノ】をダメにするって言われてるんツスよ？」

俺、何時か『パパ』って呼ばれたいんですよ、『ウインストン・ジユニア』に……」

「考えるだけで身の毛がよだつじゃねえかよ、カーター？」

一足早く、血液検査を終えたハンズは笑いながら言う

「ハンズ、リチャードは一緒じゃなかったのか？」

「ああ……リチャードなら……」

すると検査室の一室からはこんな声が響いた

やたらと腹部や胸部を撫で回してくる白衣が良く似合う金髪の女医
……【Dr・アイーシャ】へと俺は視線を向ける

気のせいだろうか……Dr・アイーシャは若干、息を荒げて興奮している様に見えるのだが……

「ハア…ハア……世界初の【男性IS操縦者】の身体……
完璧かつ理想的な肉体だわあ……」

撫で回すというよりも、舐めずり回す様な手付きで【触診】とやら
を行いながら、ブツブツと独り言を呟いているのを見守るしかない
俺は溜め息を零した

【触診】とやらで色々と『ギリギリ』を保った俺は他のメンバーの
様子を見に行けば……

「よお、ハンズ……大丈夫か？」

「大丈夫か……？ 見りゃ、分かんでしょうがッ！！」

俺の前には点滴をしながら、尻を押さえたハンズが居た

「大げさなヤツだな、これ位は大した事は無いだろう？」

「そうだぜ、テメエの股ぐらにぶら下がったモノは飾りか、それともピンポン玉かよ？」

ハンズに視線を向けながら、現れたのは【戦闘機乗り部門】の女性陣……フランクとクリスだった

「そりゃ、女は【挿される】のは慣れてるだろうけど、男は【挿す】専門なんだよッ！！」

「何、言ってるんだよ？ B・Aを見てみるよ。アイツは微動だにしないぜ？」

「ありや、恐竜並みに鈍感だろうがッ！！

第一にアイツしか居ねえよ、肋骨が数本もイカレてんのに平気なツラで任務に出るヤツなんざよッ！！」

……相変わらず、賑やかなメンバーだよな……？

俺はそんな光景を横目に苦笑を浮かべた

.....

検査を終えた俺たちは格納庫へと集合していた。俺たちの目の前には……かつての『愛機』が勢揃いしていた

俺の『愛機』……【F-14D Super Tomcat】

ショーンの【F-15C Eagle】e

カーターの【Mirage 2000-5】

ハンスの【Typhoon】

クリスの【Su-35 Flanker-E】

リチャードの【F/A18-E Super Hornet】

ライリーの【F-16C Fighting Falcon】

B・A・の【A-10A Thunderbolt ?】

それぞれ、かつての『愛機』を懐かしそうに見つめていた。すると、
ナターシャから機体についての説明が入る

「フロントム隊の機体を集めたわ、どの機体にも【擬似IS】が搭載済みよ」

するとナターシャの隣に居るイーリが言葉を続ける

「機体の性能も飛躍的に向上しているぜ？」

すると、カーターが拳手をする

「質問、飛躍的に対してもどれ位に向上してるんだ？」

カーターの質問にナターシャが答えた

「そつねえ…… B・A・の『A-10A Thunderbolt
?』の速度や機動性が、貴方の『Mirage 2000-5』
に匹敵する上、ミサイルの誘導機能も半端無いわよ？」

すると、クリスはニタニタと笑みを浮かべた

「最高……興奮してきたぜ。ISを撃ち落とせる日が来るなんてよ

お……

これもアンタに付いて来たお陰かもなあ……隊長？^{ダイリン}」

そう言つて、俺の右腕へと絡み付くクリス……相変わらずの【戦闘狂】だな

「……そうだな、【ISに対抗できるのはISだけ】という常識を覆すのも楽しそうなモノだな、ジエイソン？」

そう言つと反対側の俺の左腕に絡み付くフランキー……お前ら、何時から仲良くなつたんだよ？

あれか？ 同じ、女性戦闘機乗りで『Franker』シリーズに乗つてるからか……？

二人に両腕を取られた俺が周囲を見渡すと……笑いを堪え、肩を震わせている『ファントム隊』の男性陣と……ISの部分展開による腕部の武装を俺へと向けているナターシャとイーリが居た

「……OK、物騒なモノを下ろした上で話を続けてくれるか？」

「……なら、後で【じっくり】と話しましょうか、ジェイ？」

「そうだけ、アタシとナタルとジェイでの三人で【じっくり】とな
……？」

「……検査って、カウンセリングもあったか？」

すると先程まで、笑いを堪えていたメンバーから肩を叩かれた

「相変わらずッスね、隊長？」

「モテモテだもんねえ、隊長は？^{ホス}」

「決して、羨ましいとは思えないけどな」

「ま、隊長らしいと言えば、そうなんだけどなあ……」

「後で何か、差し入れますよ、隊長？」

「……頭痛薬と胃薬が良いか、昔みたいに」

上から、カーター、ライリー、ハンズ、リチャード、シヨーン、B
A・

「……酒が欲しいな、それもキツイヤツをよ……」

-
-
-
-
-
-

他のメンバーはこの基地……『存在しない基地』で用意された自
室へと向かい、格納庫には俺とB・A、ナターシャとイーリ、フ
ランキーの五人が残っていた。国連から用意された【試作機】とや
らを見る為にな

「国連から用意された【試作機】ね、ジェイの専用機……【CFA-44 Nosferatu】を基礎ベースとした機体らしいわ」

俺たちは格納庫の最深部にある【試作機】へと視線を向けた。そこにあつた機体は俺の設計した専用機……【CFA-44 Nosferatu】をそのまま、B・Aの『愛機』である【A-10 Thunderbolt ?】に形にした様な機体があつた

「機体名は【CFA-10A】国連の開発部門が着けたニックネームは『破壊者』……【Destroyer】デストロイヤーね」

俺は機体……【CFA-10A Destroyer】へと近付き、機体を間近で見る

「……こりゃ、悪ふざけの領域だな……」

【M102 105mm榴弾砲】を一門に【M61 バルカン】を一門搭載……

【AC-130】の武装だろ、コイツはよ……?」

するとナターシャは言った

「コンセプトとしては【AC-130】の小型化、その結果がコレよ。【CFA-44 Nosferatu】は広範囲による攻撃を主体としているけど、この【CFA-10A Destroyer】は地上に展開する敵性勢力の【殲滅】に特化した機体なのよ

【擬似IS】の搭載で、それらの武装も搭載できた上、機能性も安定しているわ」

すると、イーリは苦笑を浮かべて言う

「正に【破壊者】の名に相応しい機体だよな、ジェシー？」

「……コイツと俺の【CFA-44 Nosferatu】があれば、基地どころか一国を墜とすのも夢じゃないだろうよ……」

俺はB・Aへと視線を向ける。そこには『バーンズ・アーチャー』

ではなく、地上攻撃と近接航空支援の専門家……【Iron H
ide（鋼鉄の伯爵）】が居た

「……気に入ったか？ 【Iron Hide】」

「……ああ、最高だ。コイツでどんなヤツでもブツ潰してやるぜ」

凶悪なツラに良く似合う凶悪な笑みを浮かべ、B・A・は言った

「……これから、忙しくなりそうだな……」

- 隊員紹介 - (前書き)

今回は、元フロントム隊のメンバー紹介です。簡易的なモノですが外見のイメージはしやすくなると思います

- 隊員紹介 -

【ショーン・トバイアス】

アメリカ人男性、27歳。ファントム隊の副隊長を務め、軍隊での階級は『大尉』

容姿は茶髪で整った優しそうな顔立ち、体格は細身で引き締まった無駄の無い筋肉質な身体

ファントム隊でも常識人であり、常に隊長であるジェイソンのサポートと他の隊員（主にライリーとクリス）のブレイキ役でもある

かなりの幸運の持ち主でもあり、幼い頃に路上生活中に拾った宝くじから億万長者に成り上がる程。また、その時の宝くじを肌身離さず、身に付けている

TACネームは【Baron】(男爵)【】であり、愛機は『F-15 Eagle』

【カーター・ウィンストン】

アメリカ人男性、26歳。短く切りそろえた金髪でオールバック・ヘアー。整った顔立ちを持ち、長身で鍛えられた肉体を持ち、軍隊時代では結構、女性から人気があった

楽観的な性格であり、口数は多いがファントム隊でのムードメーカー的存在

兵役前はラジオDJを務めており、よく喋る事から【コンビニ】という異名を持つ（由来は24時間、ノンストップで喋った事から）

フランス空軍の英雄であり、伝説の戦闘機乗り……【クロード・デュノア大佐】の大ファンであり、彼のTACネーム【SKYCAPTAIN】から、自身のTACネーム【SKY KID】と名付ける程

軍での最終階級は【少尉】、愛機は『Mirage 2000-5』

【リチャード・ウォルター】

アメリカ人男性、28歳。短く切りそろえた黒髪に上記の二人と同様に整った顔立ちを持ち、無駄の無い筋肉質な肉体の持ち主

極度の音楽中毒であり、寝る時以外は絶えず、愛用の『iPod』を手放さない程。海軍史上初『MP-3 プレイヤー』と共に空を飛んだ事でも有名であり、海軍での語り草となっている

最終階級は【中尉】、TACネームは音楽中毒である事を因んで【iPod】 愛機は『F/A18-E Super Hornet』

【ハンス・ラファティ】

フランス人男性、26歳。元はフランス出身だが育ちはニューヨーク

輝く金髪に幼い容姿を持ち、体格は細身だがそこそこ筋肉質な体つき、ファントム隊で最も小柄。モデル顔負けの女顔の持ち主であり、女装をすれば男性とは気付かれない程

幼い容姿と女顔には似合わず、無類の女好きで趣味はナンパ（成功率100%）

最終階級は【少尉】であり、狙った敵機や女性を決して逃さない事から、TACネームは【Viper（毒蛇）】 愛機は『Typhoon』

【ライリー・オドネル】

アメリカ人男性、27歳。ファントム隊での問題児であり、空母のカタバルト射出装置をつかっただの『逆バンジー・ジャンプ』などの奇想天外かつ超無謀な事を平気でやる変人

容姿は茶髪に整った顔立ち、子供のように無邪気に笑うのが特徴

戦闘機乗りとしての腕はジェイソンやクリスと並び、ファントム隊

でもトップクラスであり、正気とは思えない様なアクロバット飛行を得意とする。また、天性の操縦技術を持ち、あらゆる機体にも精通している（ジェイソン曰わく『ライリーに乗りこなせない機体は存在しない』）

軍での階級は『大尉』手先が器用であり、メカニックとしての腕も中々である事を因んで、TACネームは【Ratchet】愛機は『F-16C Fighting Falcon』

【クリスタ・ネコルヴィッチ】 通称『クリス』

ロシア人女性、25歳

ロシア出身だが育ちはシアトル

容姿は透き通った銀髪に真紅の瞳、長身で女性らしさを強調した引き締まった肢体を持ち、モデル顔負けのスタイルを誇るが胸は……（本人曰わく『あんな脂肪の塊なんざ、あつたら操縦の邪魔だ』と気にしていない様子）

フロントム隊で随一の撃墜率を誇り、ジェイソンに次ぐ実力の持ち主であり、口の悪さもトップクラス（ジェイソン曰わく『口を閉じてれば、イイ女。口を開けば残念な女』）

ジェイソンとは海兵隊時代からの付き合いであり、共に戦闘機乗り
に鞍替えした。また、ジェイソンとは所謂『大人な関係』というモ
ノでもあり、戦闘時の欲求不満をジェイソンで【解消】していた（
本人曰わく『身体の相性は良いし、どうせならイイ男とやりてえ』）

軍隊での階級は『少尉』 TACネームはその驚異的な撃墜率を因
んで【Reaper（死神）】 愛機は『Su-35 Flanker-E』

【バーズ・アーチャー】 通称『B・A』

アメリカ出身の黒人男性、30歳。髪は綺麗に剃り上げたスキンヘ
ッド、筋骨隆々を体現した様な強靱な肉体を持ち、顔はかなりの修
羅場を切り抜けたマフィアのように【凶悪】な顔つき（ジェイソンや
クリス曰わく『道行く老若男女、全員が逃げ出す』と口を揃える程）

【凶悪】な顔つきとは裏腹に過去に一度の犯罪歴は無く、特技は【
家事】で趣味は【料理】と家庭的で見た目とのギャップが激しい

戦闘機乗りとしての腕は高く、近接航空支援と地上攻撃の専門家と
して有名 スベシャリスト

軍での階級は『中尉』 TACネームは『Iron Hide(鋼
鉄の伯爵)』 愛機は『A-10A Thunderbolt?』

- 隊員紹介 - (後書き)

他に敵として、亡国機業側のオリキャラも考えておりますが……現段階での構造ですら、ジエイソンの【女難】を更に悪化させる様なキャラばかりが思い付きます……

- 【来たるべき戦い】 - (前書き)

久々に戦闘を中心とした話となっておりますが、戦闘描写に関しては……曖昧な感じが目立つと思います

また、今回の話でナターシャの専用機……【銀の福音】が登場するなどのオリジナル展開を見せています。原作への介入もする予定ですが、様々なオリジナル要素を追加するつもりです

それらの点につきましては、皆様の寛大な心で御了承ください……

・ 【来たるべき戦い】 ・

『ファントム隊』改め、【国連】・・・『国際IS委員会』所属の
【IS編成戦闘機部隊】・・・【TASK FORCE】の結成か
ら、早くも三日が過ぎた

三日という期間、俺たちは訓練と『敵』・・・【ファントム・タスク亡国機業】につい
ての調査、等の様々な準備をしていた

その昔、こういう言葉を誰かが言った・・・【平和を望むのならば、
常に来たるべき戦いに備えよ】

俺たちは、その言葉通りに【来たるべき戦い】とやらに備えていた
という訳だ。そして……………

その【来たるべき戦い】は始まった

- - - - -

《現在、マイアミに向け、方位225で飛行中》

《こちら、『空中警戒管制機』 - - - 【AWACS】オペレータ
I 『Mag^{マジック}ic』です》

《マジック、状況報告を頼む》

俺は搭乗機 - - - 【F-14D Super Tomcat】を操
縦し、現在の状況を確認する。何故、この事態になっているかは今
から、30分前に遡る

- - - - -

【30分前】 . . . 『存在しない基地』

俺は会議室へと【TASK FORCE】の全隊員を召集させていた

「時間が無い。手短かに説明するから、よく頭に叩き込んでけよな

……現在、マイアミが『亡国機業』の【無人IS機】に攻撃されている。現時点で、確認されている無人機はドイツに現れたのと同型が12機、それに【新型】も複数、確認されている」

俺の後ろにあるスクリーンへと投影された映像には【新型】 . . . ドイツで、俺が撃墜した無人機をベースとしたモノが空中にて都市部を攻撃している様子だった

「恐らく、この【新型】は空中戦を主体とした機動性を重視しているタイプだろう……」

攻撃を受けている都市部には既に、ナターシャが率いるIS部隊 . . .
- - 【隣人の鐘】^{チャリテイ・ヘル}とイーリス率いる . . . 【野生の牙】^{ワイルド・ファンク}が逃げ遅れた市民の誘導と無人機との交戦状態にある

俺らの任務はマイアミ上空の制空権の奪還、地上支援だ」

俺は作戦内容を聞いている一同を見渡す

「今回の作戦の要は……B・A・、お前だ。地上に展開する無人機共に【丁重】にお引き取り願え

ハズとカーターはB・A・の援護カバに着け。残りは俺と上空の無人機を叩く」

再び、俺は一同の顔を見渡すと全員が抑えきれない【闘志】というモノを隠し、不敵な笑みを浮かべていた

「……潰すぞ、ヤツらをな」

- - - - -

《都市中心部にて、【隣人の鐘】及び【野生の牙】の両IS部隊が

展開し、逃げ遅れた一般市民の避難誘導を行っている。 戦闘機部隊は制空権の奪還を優先せよ》

『空中警戒管制機』 . . . 【AWACS】オペレーター 『Magi^{マジック}』
『C』からの応答を聞き、機体の更に速度を上げる

《了解した、全機に告ぐ。無人機の対処についてのおさらいだ

遭遇したら、確実に後ろをとれ。ISは【絶対防御】という厄介な代物を備えている

背後をとつたら、チャフやフレアを使う相手と同じだ。機銃で【絶対防御】のエネルギーを削れ

確実に仕留められる時以外にはミサイルを使うな。流れ弾で建物を壊しての始末書はゴメンだからな》

すると無線からは『カーター』 . . . 【SKY KID】からの連絡が入る

《了解したぜ、隊長。それから……別に全部、墜としちまっても構わないんツスよね？》

《ああ、好きにしる。それから【Reaper】、昔みたいに周辺を更地にしかけるのは止めとけよな?》

《そりゃ、時と場合によっては……だぜ、隊長^{ダイリン}?

それに、B・A・の【試作機】ってヤツを持ち出してんだ。ついでにあの【Nosferatu】ってのを持ち出せば、こんな任務なんて速攻でケリがつくだろ?》

《だから、更地にする訳にはいかないだろうが? あれは【殲滅兵器】^{モンスター}に分類される怪物だ。俺が設計した当時とは比べ物にならない位のな》

すると【TASK FORCE】の『副隊長』……【フランチェスカ・アルマ】こと【フランキー中佐】から無線が入った

《楽しい会話はそろそろ終いにしておけ。【歓迎】してくれるみたいだぞ》

俺は前方へと視線を向けた。視線の先にはあの【新型】が数機、俺

らへと向かい飛行する光景があった

《…全機……【rock・n・roll（戦闘開始）】！！》

『Yeeeeeha!!!』

その掛け声と同時に俺らと【新型】の空中戦が開始された

.....

《隊長、ケツに二機が張り付いてるゼツ！？》

俺が操縦する『F-14D Super Tomcat』は前方の
【新型機】を追尾して、都市部ビル群の谷間を疾走していた

《了解した》

短い返答を返し、スロットル・レバーを更に押し込み、新型機との距離を詰める。【iPod】からの無線連絡で判明した二機の無人機からの攻撃による警告音が狭い操縦席に鳴り響く

キャノピー越しから背後の無人機による【光学兵器^{レーザー}】らしき緑色の閃光が迫るのを確認できた。俺は操縦桿を小刻みに動かし、最低限の動きで攻撃を回避する

《緑色の変なモンをコッチに撃ってくるんじゃないやねえよ……！》

機体を『高機動急旋回』……【ハイGターン』で後方へと反転させ、背後に迫る二機の無人機へと機首を向けた。突然の動きに無人機の動きが止まるのを見逃す程、俺は寛大な心を持ってはいない

『特殊兵装』……【6AAM】へと切り替え、即座に前方の二機を補足する

《補足完了、FOX3!!》
ロック・オン

発射コールと同時に発射された六機のミサイルは無防備となった無人機へと迫る。咄嗟に回避行動へと移行しようとするも迫るミサイルは三機ずつ、二機の無人機へと直撃

どうやら【新型】は機動性を重視して防御面に関しては此方と同様だったらしい。直撃を受けた二機の無人機は鉄クズと化し、残った破片は炎上しながら墜落していった

《ターゲット標的を二機、撃墜!》

すると先程まで追尾していた無人機が俺の側面へと回り込み、迫ってくる光景を俺は目の当たりとする

《……Reaper、仕留めろッ!!》

俺は上空より垂直降下する『Su-35 Flanker-E』の
操縦者……『死神』を意味する【Reaper】へと無線を入れた

《ソイツはアタシのモノだけ？ テメエは引っ込んでな、鉄クス》

上空より垂直降下する『Su-35 Flanker-E』から発
射されたミサイルは無人機の背面部へと直撃、煙を吹き出しながら
無人機はビルへと突っ込んでいく

《助かったぜ、Reaper 今夜は一杯、奢ろう》

《一杯じゃなくて、【一発】なら大歓迎だぜ？ こんな鉄クスが相
手じゃあ、ストレス溜まりまくりなんでなあ……》

《……お前の場合、確実に【一発】どころじゃあ済まないだろうが
……？》

そんな会話を続けている最中、地上にて展開するIS部隊……【
野生の牙】ワイルド・ファンク隊の隊長……『イーリス・コーリング』からの無線が

入る

《こちら、ファング1 戦闘機部隊、聞こえるか?》

《こちら、【Phantom】ファング1、どうした?》

《三番街で一般市民の避難誘導をやっているが、パニック状態で詰まってるんだ。それに無人機も迫ってきている

地上支援を頼むッ!》

《了解した【Iron hide】、三番街に展開する無人機を叩け
【Viper】と【SKY KID】は【Iron hide】の
援護に着け》

《《了解》》

三人からの返答が返ってくるのを確認すると俺は機体を上昇させ、上空へと向かう

《他のメンバーは、俺と上空の無人機を潰すぞ。それから……もし

も、墜ちる場合は俺の見えない所で頼む。その方が事後報告なんかの処理も楽だからな》

- - - - -

「急げッ！、負傷者や女、子供を優先するんだッ！！」

IS部隊【野生の牙】隊長……『イーリス・コーリング』は他の隊員へと逃げ遅れた市民の誘導を行っていた。半ば、パニック状態となった市民たちは我先にと道を掻き分け、進んでいくのを隊員たちが抑える

「隊長ッ！、後方から無人機が迫っていますッ！！」

誘導を行う隊員がイーリスに向け、報告する。イーリスは後方へと振り向く

「クソツタレめ、まだ半分も避難出来ていないんだよ……！」

自身のISに搭載されたハイパー・センサーの能力により、後方から迫ってくる複数の無人機がはつきりとイーリスの視界に映った

「全隊員、防御態勢に入れッ！！ 避難誘導を行っているヤツらはそのまま、誘導を続けるッ！！」

後方より迫る無人機はイーリスたちの姿を確認したのか、背面部に搭載された推進機スラスターを起動させ、高速で接近してくる

だが、その時だった。高速で接近してくる無人機の上空から【三機の戦闘機】が現れたのは

《標的を補足、掃射開始する》

三機の内、一機の戦闘機……【CFA-10A Destroyer】が無人機の後方へと着くと同時に機体に搭載された武装……【M102 105mm榴弾砲】により、前方の無人機ごと道路と乗り捨てられた車を吹き飛ばす

轟音と共に車や無人機の残骸が宙を舞う中、直撃を免れた三機の無人機はそれぞれ、機体から黒煙を吹き出しながら、攻撃してきた【CFA-10A Destroyer】へと迫る

《三機、外した。SKY KID、Viper 援護を頼む》

冷静に前方から接近する無人機へと目を逸らさず、【Ironhide】は兵装を【M102 105mm榴弾砲】から【M61バルカン】へと切り替える

《右側のヤツは俺が頂くぜ》

【SKY KID】が操縦する機体……『Mirage 2000-5』は右側より迫る無人機に向け、機銃を発射して自機へと注意を引きつける

《左側のは任せな……嗚呼、コレが無人機じゃなければ操縦者（女）を口説いていたのによお……》

軽口を叩く【Viper】が操縦する機体……『Typhoon』は左側から迫る無人機をストレスに通り過ぎ、【SKY KID】と同様に自機へと注意を引きつける

《…補足完了、お別れだ》

ギリギリの距離まで引きつけた無人機へと【CFA-10A Destroyer】から発射された【M61 バルカン】の毎分6000発程を発射する20mm弾が無人機を貫き、鋼鉄製の機体^{ボディ}に複数の風穴をあけていく

チーズの様に穴だらけになった数秒前まで無人機であった残骸はそのまま、重力に従い地面へと墜落していった

《こちら、Iron Hide 敵性脅威を排除した》

《やるじゃねえかよッ!! 今夜はアタシが奢るぜ》

《その必要は無い、隊長が全員分を奢ってくれる》

《それでも、感謝するぜ。戦闘機なんぞ、お荷物にしかならねえと
考えていた昔のアタシをぶん殴ってやりてえよ》

《…隊長が昔、言っていた。【何事にも完璧なんてモノは無い。過
信すれば、ロクな目に遭わない】

だから、これからは気を付ければ良い》

《……だな、さっさと無人機をスクラップにして帰るぜ、Iron
hide!!》

《言われるまでも無い》

- - - - -

《へばってんじゃねえぞ、機械のくせによおッ!》

無人機の背後をとり、機銃を撃ち続けながら【SKY KID】は言う

後方より迫る機体……『Mirage 2000-5』から発射される機銃弾により、機体に穴をあけながら無人機は逃げる様にビル群の谷間を潜り抜けていく。だが、背後につく『屋気楼』の名を持つ戦闘機は難なく谷間を潜り抜け、背後から離れない

561

《さて、今回の標的^{ゲスト}は『秘密結社』の所有する【無人IS機】だ。どんなに凄いヤツかと思ったら、拍子抜けも良いところだぜ……

あの【白騎士】……『天使』に比べりゃ【月とスッポン】だな、こりゃ……《

無人機を追尾しながら、ラジオ中継をするかの様に喋り出す

《会えて、直ぐにお別れなのは俺様も寂しいぜ？　だが、戦いつてのは無情だ。ましてや、機械相手にかける情なんざ、有りやしねえ

最後に覚えときな、俺様の名は【SKY KID】　空を縦横無尽に駆け抜ける『ワル小僧^{ガキ}』さッ！！》

『Mirage 2000-5』より発射されたミサイルは前方の無人機へと迫る。散々、機銃弾を受け続けた無人機の機体は既に些細な回避行動にすら耐えきれない状態になっていた

ミサイルの直撃を避けられず、無人機は空中にて爆散。残った残骸が避難によって無人となった通りへと降り注いだ

《おっしやあッ！！　絶好調だぜッ！》

- - - - -

《乗れないねえ……無人機なんかじゃ、やる気も起きないぜ……》

溜め息を零し、操縦桿を動かして背後に迫る無人機の攻撃を気だる
そんな表情を眉一つ、動かす事無く回避していく【Viper】

《全く……IS操縦者は美人揃いなのによお……ナターシャとかイ
ーリスとか……【ブリュンヒルデ】も、レベル高いよなあ……》

ビル群の谷間を疾走し、軽々と機体を巧みに操りながら、呟く

《隊長もモテるよなあ……【女性限定の強力磁石】としか良い様が
無いっての……

まあ、決して羨ましいとは思えないけどな。あんな修羅場を毎回、
経験していたら胃がねじ切れちまうっての……》

機体を右ロールさせての一回転、速度を上げて後方より迫っていた
無人機はそのまま『Typhoon』を通り過ぎ、前方へと躍り出る

《さっさと片付けて、基地のあの子でも口説くかな……あ、でも整備班のあの子も捨てがたい……》

前方に躍り出た無人機へと補足を開始、その数秒後には補足完了を合図する電子音が操縦席内で鳴り響く

《うーん……ま、両方にすれば良いか。【可愛い子ちゃんは平等に愛でる】のが俺の主義だしなッ！！》

『Typhoon』から発射されたミサイルは無人機に直撃し、無人機は黒煙を吹き出しながらも飛び続けた。しかし、動きは鈍くなり今にも墜落しそうな弱々しいモノだった

《逃がさないぜ、『狙った女や敵は決して逃さない』……それが【Viper（毒蛇）】だからな》

すかさず、二発目のミサイルを発射。無人機は回避できずに二度目の直撃を迎えて墜落していった

- - - - -

《そんなスローテンポじゃ、婆さんすら乗れねえぜ?》

『F/A18-E Super Hornet』を操縦する【iPod】は操縦席内に取り付けた長年、愛用している『相棒』……【iPod】を操作し、曲を流し始める。流れ始めた曲は『Incubus』の【MAKE A MOVE】

狭い操縦席内で【iPod】から鳴り響く激しいサウンド音が木霊する。その音が機体を操縦する【iPod】を自身のペースへと誘う

《無人機には分かんないだろうよ、このテンポがよッ!》

機体を急旋回から垂直降下へと移行し、道路に乗り捨てられた車の

屋根をスレスレの低空飛行で上空から攻撃してくる無人機の猛攻を回避していく

そのまま、若干の高度を上げて通りの角をまるで車が急カーブをするが如く、急旋回して曲がっていく。無人機も同じように曲がっていくが既に【iPod】が操作する機体は姿が無かった

通りに佇む様に無人機は空中停止状態となり、従来のIS機と同様に搭載されたハイパー・センサーを起動させ、索敵状態へと移る

無人機のモニターには突如、警告が表示された。敵が迫っているのを知った無人機は周囲を旋回して索敵を続けるも【iPod】の姿は無い

《迂闊に蜂に触れるとどうなるか、知ってるか？・・・【刺される】んだよッ！！》

ビル群の死角から現れ、急上昇から無人機の遙か上空から垂直降下を開始する『F/A18-E Super Hornet』が無人機に迫る。無人機のモニターに映し出された光景は……

『F/A18-E Super Hornet』から発射されたミ
サイルが炸裂する瞬間だった

-
-
-
-
-
-

《まるで、バーベキューの時に群がってくるハエだな、テメエらは
よ》

前方の無人機を追尾し、ミサイルを発射しながら【Reaper】
は呟く

前方の無人機を発射したミサイルで撃ち落とすも、左右から再び二
機の無人機が『Su-35 Flanker-E』の後方へと追尾
してくる。機体を急旋回させ、建設現場にあるクレーン車と建設途
中の建物の僅かな隙間を潜り抜ける

《鬱陶しいんだよ、鉄クズ共がッ!!》

《【Reaper】、面倒な様子だな？ 手を貸すぜ》

無人機の後方に【Baron（男爵）】が操縦する『F-15C Eagle』がつく。ぴつたりと背後に張り付いた機体は前方に位置する二機の無人機の一挙一動を完全に注視して、追尾を続ける

《良いところに来たぜ、【Baron】 【殺虫剤】でもバラ撒いて、このハエを墜としてくれよ?》

《【殺虫剤】ならバッチリ、搭載してるから任せろ》

迂闊にも『Su-35 Flanker-E』の動きに翻弄されている二機の無人機は後方の『F-15C Eagle』への注意が散漫となっている状態だった

《補足完了、FOX3!!》

『F-15C Eagle』に搭載された特殊兵装……【4AA M】が発射コールと共に発射された四機のミサイルは二機の無人機へと二機ずつ、向かっていく

注意が散漫状態となっている無人機はミサイルの直撃を免れず、命中。バランスを崩した二機は建設途中の建物へと突っ込み、衝撃で崩れ落ちた瓦礫に押し潰されていった

《無人機っても【IS】だから、もう少し高性能なモノだと思っていたが……随分と呆気ないモノだな?》

《無人機だろうが、遠隔操作しているヤツがヘボだったら宝の持ち腐れだろうが?それに自分自身が戦場に出ないタマ無しがアタシらに勝てる訳、無えだろ》

《戦争をTVゲームか何かと勘違いしている連中じゃあ、これが限界なんだろう。相手が悪かったな?》

- - - - -

《やれやれ……動きに無駄が多すぎる上、大振りし過ぎた

だから、こうして簡単に【撃ち落とされるんだ】》

白銀の機体 - - - 『Su-33 Flanker』より発射された
ミサイルにより、前方の三機の内の一機に命中、きりもみを起こし
て残骸が墜落していく

570

《高性能過ぎるも考えモノだな、理想的な機動を描くのは良いが…
…熟練のパイロットならば、その理想的な機動を頭の中で描ける

……つまり、お前たちの行動を先読みするのも容易い訳だッ!!》

残る二機の無人機が急旋回すると同時に相手の移動先へと【Sie
インニル
ipnir】は機体を旋回させる。無人機は自身の移動先へと回り
込まれた事に一時、空中停止してしまう

《【常に相手の一步先を行け】、それが基本であり戦闘における鉄則だ》

『Su-33 Flanker』から発射される機銃弾が無人機の上半身を貫く。風通しの良い風穴をあけた無人機はそのまま、墜落していった

だが、残る一機は【Sleipnir】の背後をとり、搭載された【光学兵器】を使用しようとする

《中佐、よそ見は命取りになりますよッ!》

無人機の側面より接近した【Ratchett】の機体...『F-16C Fighting Falcon』から発射された特殊兵装...【4AAM】により、四機のミサイルが無人機を吹き飛ばす

《ドッカーンだッ!! ざまーみる、戦闘機に撃ち落とされてやんのッ!!!》

《良い腕だな。それでこそ、わざわざ見せ場を作ってやった甲斐もある訳だ》

《あ、もしかして……僕が無人機を撃墜するのも計算の内ですか？》

《勿論だ。それ位、計算できて当たり前だろう？》

《あちゃー……ままと中佐の計算通りだった訳ですかぁ……》

《だが、感謝はしているぞ。【Ratchet】》

《イヤだなあ、上官に褒められたら鼻の下、伸びそうですよ。【Sleipnir】》

二機の機体……『F-16C Fighting Falcon』と『Su-33 Flanker』は旋回し、再び戦闘空域と化している都市部へと向かっていく

.....

《マジックから、^{システム}【TASK FORCE】隊長……^{フラ}【Phan】
toB【へ連絡する

残りの無人機が撤退を開始した。現在、無人機はマイアミ・ビーチへと向かっている

【TASK FORCE】全機に告ぐ。撤退する無人機を全て撃墜し、敵性脅威を完全に排除せよ

《こちら【Phantom】 了解した

IS部隊……【隣人の鐘】隊長、チャリティ・ベル応答せよ

《こちら『ベル1』 一般市民の避難誘導を完了し、マイアミ・ビーチへと飛行中》

《よし、俺とお前で残りの無人機を叩くぞ。残りの機は都市部に無人機を近付けるな》

《ベル1、了解 久しぶりに暴れましょうか、『ファントム幻影』？》

《ああ、昔みたいにな。『スカイ・マリア空の聖母』》

都市部よりマイアミ・ビーチへと撤退する無人機群が姿を現す。その背後には『幻影』の異名を持つ【漆黒の戦闘機】……『F-14D Super Tomcat』と『福音』の名を持つ【銀色の

IS機】 - - - 『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが迫る

《補足した、FOX3!!》

鋭い機動で編隊飛行を組む無人機に切り込み、『F-14D Super Tomcat』の特殊兵装 - - - 『6AM』が発射され、編隊を崩された無人機は即座に散開しようとするも発射された六機のミサイルは止まらない

編隊を組んでいた六機の内、一機の無人機へとミサイルは全弾、命中。空中にて粉々に砕け、海上へと音をたてながら墜落していく。さながら、墜落する残骸が奏でるその音は『もがれた翼の断末魔』にも聞こえる

残った五機の無人機は『Phantom』が操縦する機体へと補足、一斉に攻撃を開始する。しかし、機体の鋭い機動と操縦者の高度のフライト・テクニック飛行技術により、攻撃は掠りもせず回避されていく - - - まるで、ファントム実体を持たない『亡霊』に攻撃をしている様に……

《ベル1 今だ、仕留めろッ!!》

《了解、『銀の鐘』^{シルバー・ベル}起動》

その言葉と同時に『ベル1』……【ナターシャ・ファイルス】が
操縦する『銀色のIS機』……【銀の福音】に搭載された全36
門という数の砲身を同時展開する

《实用テストは済んでいるのか？》

攻撃を回避しながら無人機を引き付け、翻弄する【Phantom】
は言う

《今回の任務がその实用テストよ。無人機ごと撃ち落とされたくな
ければ、今すぐに距離を取って頂戴？》

『天使の鐘』又は『歌声』とも聞き取れる様な美しい旋律の発射音
と共に、全砲身36門の同時展開を可能にした主砲……『銀の鐘』
のエネルギー弾が無人機へと迫る。無人機を引き付けていた『F-
14D Super Tomcat』は発射と同時に『高機動旋回』

……【ハイGターン】でエネルギー弾を回避、【Phantom】に翻弄されていた無人機はエネルギー弾を真つ正面から直撃を受ける

直撃を受けた五機の無人機はその原型を留めずに砕け散り、残骸を海上へバラ撒いた

《標的の殲滅を確認、全敵性脅威の排除を完了した》

《了解した。【TASK FORCE】 任務完了だ

隊員に負傷者は無し、逃げ遅れた一般市民たちも比較的、軽傷

……我々の【勝利】だ》

マジックからの任務完了の報告を受け、無線からは隊員たち、避難した一般市民たちの歓声が鳴り響く

マイアミ・ビーチ上空にて飛行する【幻影】と【聖母】は見る者、全てを魅了する様な美しい機動を空に描く

《【銀の福音】^{シルバリオ・ゴスベル}か……味方にとっては『天使の歌声』でも敵にとっては『死の旋律』だろうな……》

《貴方の【Nosferatu（不死者）】は敵、味方の両方にとって【畏怖】の対象になりかねないモノだけど？》

《あれは【怪物】だ。操縦者の命をも奪いかねない凶暴なヤツだよ……》

それよりも基地に戻ったら、全隊員分の酒を奢らなきゃならないんでな……》

《相変わらず、損な性格よね？》

《だが、昔はそんな所が良いつて惚れていただろ？》

《……今も変わらないわ、私は貴方一筋なんだから》

そんな会話をしながら、『幻影』と『聖母』は空を舞い続けた

これが全世界に対する『亡国機業』の宣戦布告であり、それに対抗する勢力――【TASK FORCE】と世界最高峰の腕前を持つ戦闘機乗り……

【ACE OF ACE】――『ジェイソン・シーガー』の存在を知らしめた瞬間だった

- 【来たるべき戦い】 - (後書き)

今後の話では作中にて度々、登場する【伝説の戦闘機乗り】
『クロード・デュノア大佐』を登場する予定です

また、ジェイソンの【女難】にも更に磨きがかかり、とんでもない
所からフラグが建つかも知れませんが……

今後もジェイソンの【女難】や戦闘機乗りとしての活躍を【そこそ
こ】期待してもらえれば、幸いです

- 【戦いが終わって】 -

【存在しない基地】 - - - 『格納庫』

先程まで天空を舞い、空を駆けた翼たち - - - ISと戦闘機が勢揃いしている格納庫内には大量の酒瓶と出来立ての軽食が並んだテーブルが置かれ、基地中の兵士たちが勢揃いしていた

皆、互いを労いながら笑みを浮かべていた。そこには『女尊男卑』という言葉は欠片も無かった

「ハイハイハイッ!!、親愛なる紳士淑女の諸君、此方に注目してくれッ!!」

マイクを片手にパイロット・スーツを着崩した格好の男性 - - - 『カーター・ウインストン』は格納庫内に置かれた自身の愛機 - - - 『Mirage 2000-5』の上に立ち、集まった兵士たちの

注目を浴びる

「俺は今日という日を迎えられた事を神に感謝している。一度は空^{ステージ}を降りる事になったが……今は、この『最高の仲間』たちと共に大空を駆け抜ける事が出来たッ!!」

集まった兵士たちは一斉に歓声を上げた

「そして、そのチャンスを俺にくれたこの男……世界最高峰の腕前を持ち、最高の隊長である『ジエイソン・シーガー中佐』に心から感謝しているッ!!」

格納庫内を覆い尽くす様な大歓声の中、カーターの隣へと現れた男性……『ジエイソン・シーガー』は苦笑を浮かべ、手を振った

「ちょっと盛り上がり過ぎじゃないのか、カーター？」

「何を言ってるんツスカ、隊長ッ!? アンタのお陰で俺らは空へと戻れたんだぜ？」

さあさあ、隊長も集まった仲間たちに何か一言、言って下さいよッ
!?!」

強引に自身が持つマイクをジェイソンへと押し付けるカーター。マ
イクを渡されたジェイソンは苦笑を浮かべたまま、頭を掻いた

「…あー…皆、今日はよくやった。今回の任務は文句なしで俺た
ちの【勝利】だ」

だが、油断はするな。今日は勝利を迎えたとしても明日は、この中
の誰かが死ぬかも知れない事を忘れるな……はつきり言って、敵の
勢力や目的は未だに不明だ。奴らは俺らの予想を遥かに上回る手強
い相手だろう

だが、俺には『最高の仲間』たちが居る。信頼し、安心して背中を
任せられる仲間がな」

皆が真剣な面持ちでジェイソンの言葉に耳を傾ける

「これだけは誓って欲しい……【仲間を見捨てるな】、決して【
裏切るな】」

もしも、誰かがその場で倒れたのなら……自分たちは他の仲間を助け、前へ進め……倒れた仲間は俺が必ず助ける

そして【仲間を誇れ】……それがこの部隊の規則だ^ル」

そして、ジェイソンは敬礼をして言葉を締めくくった。その敬礼と同時に皆が敬礼をする

するとジェイソンは敬礼を止め、再び苦笑を浮かべて言った

「……堅苦しいのはここまでにして……」

【隊長命令】だ……『飲んで騒げ、そして笑え』但し、明日に引き摺らない程度でな」

その言葉を合図に皆、一斉に歓声を上げた

.....

「いやあッ、流石ッスよ。隊長ッ！！ あの名演説、スゲエ感動したぜッ!?」

「名演説って……ただ、思った事を言っただけだぞ?」

機体の上から降りたジェイソンは酒瓶を片手に苦笑を浮かべて言った。一方でジェイソンの肩に腕を回したカーターは笑いながら、手にした酒瓶の酒を豪快に煽る

「ツプハッ!! 何、謙遜なんかしちゃってるッスか? 俺が女だったら忽ち、隊長に靡いちゃいますよッ!!」

「女と言えば、クリスやナターシャたちはどうした?」

「ああ、クリスなら彼処でイーリスと飲み比べの真っ最中ッスよ」

カーターが指差す場所には……空となった大量の酒瓶を背景に酒を

煽るクリスとイーリスの姿があった

「やるじゃねえかよ、イーリス？」

「アタシを誰だと思ってんだよ？ アメリカ 米国を代表するIS操縦者……
『イーリス・コーリング』だぜッ！？」

「上等だ、ぜってー酔い潰してやんよッ！！」

周りの隊員たちがはやし立てる中、クリスとイーリスは更に酒を煽った

「……似た者同士、気が合うのかね……？」

ため息を零し、飲み比べを続行する二人から視線を逸らせば……

「見て見てッ！！ ボム・ジャグリングッ！」

目隠しをして『三つの物体』を巧みにジャグリングしながら、高らかと笑うライリー……その『三つの物体』が……【手榴弾】で無ければ、マトモな光景なのだが……

「……何処から、持ち出したんだ……？」

更にため息を零し、視線をまた別の方向へと向ければ……

「スゲエッ！！ 15人抜きだぜッ!？」

「良いぞ、B・A……!! 男の底力を見せてやれッ!！」

腕部のISによる部分展開をした女性隊員を相手に【素手】アーム・レスで腕相撲リングを繰り広げるB・Aの姿があった。周りの隊員たちの歓声を聞けば、既に15人を相手にして完勝しているらしい

「……【Iron hide（鋼鉄の伯爵）】から、TACネーム

を【Iron body（鋼鉄の肉体）】にでも改名するか…？」

既に三本目になる酒瓶を空にして、再び視線を別方向へと向ければ

……

「いやあ……俺って、死んだんじゃないのかな？　こんなに美人の天使たちが周りに居る訳が無いんだからさ……」

20人以上の女性隊員を囲い、酒瓶を片手に口説いてる最中のハンズが居た。何気に女性隊員たちは頬を赤らめ、皆が一斉にハンズへとすり寄っていた

「……まあ、まだマシな部類だよな……」

他の方へと視線を向けていけば……

「……コール、ロイヤル・ストレート・フラッシュ」

「だあああッ!? チクシヨウツ!!」

「またかよッ!? クズカードしか回してないのにどうなってやがんだッ!!?」

ポーカーにて、持ち前の幸運を遺憾なく発揮して、隊員たちから金を巻き上げるシヨーン

「さあ、盛り上がっていこうぜッ!! 今日、L・A・で一番、ホットなクラブ……【Dance With Angel】の出張LIVEだッ!!」

恐らくは自身が経営しているクラブのスピーカー等の音楽機材を持ち込み、音楽を流しながら叫ぶリチャード

「それで……ジエイとは何回、寝たのかしら?」

「ふむ……両の手以上の数より先は覚えていないとでも言うておこ
うか……？」

「あらあら……でも、私に比べれば少ないわね……」

氷入りのグラスを片手に何やら、ジェイソンとの【情事】の回数を
競い合うナターシャとフランキーの姿があり、周りの女性隊員たち
は任務時以上の集中力で二人の会話へと耳を傾けている光景が……

「……全く……本当に退屈しないよな、コイツらと居ればよ……」

再びため息を零し、四本目となる酒瓶の封を開けたジェイソンは一
気に酒を煽った

- - - - -

少々、飲み過ぎた俺はアルコールで火照った身体を覚ます為、格納庫の外――滑走路へと出ると薄暗い夜空に浮かび上がった月を見上げる

冷たい夜風が火照った身体を冷まし、心地良く感じる中で俺は着用しているパイロット・スーツの懐に閉まってある一枚の『写真』を取り出す――今は、ドイツに居るラウラが持つ認識票と共に除隊後も、肌身離さずに持っていた『写真』

その『写真』には【漆黒の戦闘機】――『F-14D Super Tomcat』と【純白の戦闘機】――『Rafale M』を背景に幸せそうな笑みを浮かべるナターシャの背後から抱き締めるジェイソンの姿が写っていた

「まだ、その写真を持っていたんですね？」

「……お前こそ、まだ覚えていたんだな……？」

俺は声を掛けた人物……『シヨーン・トバイアス』へと視線を向ける

「そりゃ、そうですね……その写真を撮ったのは俺なんですから」

シヨーンは手にした酒瓶の酒を飲みながら、俺の側へと歩み寄る

「……隊長とナターシャは……お似合いのカップルでしたよ。一時期は【結婚】も秒読みだって、軍隊中が噂してたのに……まさか、別れるなんて予想すらしませんでした……」

酒瓶を俺へと差し出し、シヨーンは言う。俺は静かに酒瓶を受け取った

「……実はな、あの『白騎士事件』の数日前に……アイツに【プロポーズ】しようと思っていたが……止めたよ」

そうして、俺は酒瓶を傾けて酒を煽る

「……理由を聞いても……？」

「……『ボスニア』を覚えているか？」

ファントム隊が結成されて、初任務になった戦地を……」

「ああ……セルビア人の反政府軍を派手に蹴散らしましたよね……
今までで一番の長期任務でした……」

「だが、俺たちも派手にやられて……敵も友軍の連中も次々、墜ちていった……」

正に『地獄』だったよな……」

俺は滑走路へと腰を下ろし、月を見上げる

「……まだ生きてるってのに……気分は既に死んだ様な気分だった。俺は、そんな気分を払拭したくて酒を頼り始めた

憂さが吹っ飛ぶまで、浴びる様にな……」

するとシヨーンも腰を下ろし、俺の言葉へと耳を傾けた

「……出撃して、現地の基地に戻っては酒を頼る、そんな毎日を送る中……」

俺は地元の街を歩いてきた。酒を求めてな……海沿いの古い橋に立ち寄った時だ……そこに一人の女が古い手すりの側に立っていた……

その女はじつと俺を見つめたよ。その眼を見て俺は気付いた……『飛び降りる』つもりだな……」

「……それで……隊長はどうしたんですか……？」

俺は酒瓶の半分となった酒を更に煽る

「……何も……何もしなかった。何故か、女の眼を直視できなかった俺はその視線に耐えられずに踵を返して、橋から立ち去った……」

暫くすると波飛沫の音が聞こえて……女は死んだよ……

ボスニアでの任務を終えた後、俺は知った。その死んだ女には夫が居て、反政府軍の戦闘機乗りだった事を……そして、俺が撃墜したってな……」

空になった酒瓶を地面に置き、俺は言葉を続ける

「……俺が今まで撃墜してきた連中にも……恋人や家族が居ただろう。遺された奴らの最も憎い相手になっている俺に……本当にアイツを幸せに出来るのか？、そう考えてな……」

「……敵だろうと味方だろうと、それは覚悟の上でしょう？」

「……誰かを愛するってのはな……ソイツの全てが欲しいって訳だ。今まで、奪う事しか出来ない俺にはそんな資格は無い」

周りは俺を『生粋のエース』……【ACE OF ACE】と呼んだ。だが、俺は自分自身を本当に『エース』と思った事は無い

……『英雄』と『狂人』は【紙一重】……ましてや、『エース』なんて見方を変えれば、やられた方にとっては【誰よりも憎むべき相手】なんだよ……」

懐から煙草を取り出し、それをくわえると火を着ける。煙草の先端から空へと昇る紫煙が夜風によって、薄暗い夜空へと四散する

「……けどな、後悔はしていない。どれだけ、憎まれようが俺は飛び続けなきゃならない……墜としていった連中の分も……贖罪の為なんて綺麗事を言っつもりは無い

ただ、飛び続けなきゃならないんだよ…… - - 何時か、翼をもがれて地に墜ちるその日が来るまでな……」

するとシヨーンは立ち上がり、言った

「……俺はアンタの背中に憧れ、空を飛び続けてきた。俺だけじゃない……皆がアンタに憧れを抱いた

アンタが自分を『エース』と思っただ事は無くても……俺たちにとっ
て、アンタは『偉大なる戦闘機乗り』 - - - 【英雄^{エース}】なんだ……」

シヨーンは俺に向けて、敬礼を行う

「……光栄です。貴方を隊長である事を」

俺は煙草を捨て、立ち上がるとシヨーンに向け、敬礼をする

「……俺の誇りだ、お前が部下である事をな」

シヨーンは敬礼を止め、言った

「最後に一つ、質問させてください……」

俺たちは『白騎士事件』……【IS】によつて、一度は翼を捨てる事になった……なのに、今はその【IS】と共に空を駆け抜け、【IS】と戦っている事を……その道を選んだ事を『間違い』だつたと思えますか……?」

「……【人生】なんてモノは単純だ……『行き先を決めたら、振り返るな』 たったそれだけだ

それにな……例え、その道が『間違い』だつたとしても……【俺が選んだ道】だ」

その言葉を聞いたシヨーンは苦笑を浮かべた

「隊長らしいですね……さて、俺はライリーやクリスたちが手に負えなくなる前にブレーキでも掛けに行きますよ……」

そう言つて、シヨーンは格納庫へと戻つていった。一人、滑走路に残された俺は懐から新しく煙草を取り出し、先程と同じ動作で火を着ける

暫く、喫煙を満喫していると背後から気配を感じた。俺は気配のする方向へと振り返つた

「変わったわよね、昔は頭痛薬や胃薬は使つても煙草を吸う事は無かつたのに……」

そこにはナターシャが居た。ナターシャは俺の側へと近付くとその細い両腕を俺の首へと回し、身体を密着させて抱き付く

「煙草は嫌いよ。匂いが服や髪に着くから……」

「……以前、フランキーも似たような事を言ったな……」

「そう……なら、こんな事もしたかしら……」

その言葉と同時にナターシャは唇を重ねる。先程まで飲んでいた酒の香りが唇から伝わり、鼻を突く

五分位だろうか……暫く、唇を重ね続けたナターシャはゆっくりと唇を離す

「……それにキスも苦く感じるから、煙草は嫌いよ……」

「……甘いキスなんて、夢の中だけだ……」

「なら、砂糖をまぶせば良いわ。雪みたいに真っ白になる位にね……」

そう言つて、再びナターシャは唇を重ねる。不覚にも雰囲気に流されたのか、俺はナターシャの動きに合わせ、角度を変えながら唇を重ね続けた

俺は以前、ナターシャに聞いたある事を今一度、聞きたくて唇を離す

「ナターシャ、ドイツに居た時にも聞いたが……俺と付き合つた事、後悔した事はあるか……？」

「……その答えは同じよ、一度たりとも後悔した事なんて無いわ……」

それに……貴方を好きになり、愛した……それは今でも同じ。それが【私の選んだ道】よ」

……全く……今、改めて俺は……【最高の女性】と付き合つていた事を知つたよ……」

- 【部隊紹介】 - (前書き)

今回は、主人公 - - 『ジェイソン・シーガー』が率いる部隊について
の簡易的な紹介です

部隊名にも幾つかの【ACE COMBAT】ネタを多数、使用しています
がオリジナル設定も含まれますので、そこらについてはご了承ください
……

- 【部隊紹介】 -

【TASK FORCE】
タスク・フォース

【国連】に所属する『フリーパイロット』……【傭兵】であり、世界最高峰の腕を持つ『生粋のエース』……【ACE OF ACE】と称される戦闘機乗り……『ジェイソン・シーガー』が指揮するIS編成戦闘機部隊

『亡国機業』と対抗する勢力となる為、結成された部隊であり、所属する隊員たちは皆、精鋭揃いでもあり、正に世界最高かつ最強の部隊でもある

先のマイアミでの戦闘以降、世間に『亡国機業』という存在と共にその名を知らしめ、現在では世界各国のIS操縦者と軍隊が参加している

【TASK FORCE】という呼び名は結成時の部隊名であり、今は【TASK FORCE】を改め・・・【TASK FORCE E 108（タスク・フォース ワン・ゼロ・エイト）】と改名された（『108』の由来は世界各国で選りすぐりのIS操縦者と戦闘機乗りたちを厳選に厳選を重ね、総勢108名になった事から）

尚、【TASK FORCE 108】の隊章は隊長であるジェイソンが、かつて率いた戦闘機部隊・・・【ファントム隊】の隊章である『漆黒の首無し騎士』と【白騎士事件】にて、圧倒的な強さを全世界へと知らしめた『白騎士』が共に剣を掲げ、交差している姿を隊章としている（これは、ジェイソンが【戦闘機】と【IS】の協力を象徴する為、自らが設計した）

また、【TASK FORCE 108】は複数の部隊によって編成され、結成時の初代メンバーの内、数名は各部隊の隊長を務めている

.....

『I S部隊』

【隣人の鐘】
チャリテイ・ベル

米国のテスト操縦者……『ナターシャ・ファイルス』が率いるI S部隊であり、隊章は『天使の翼を生やした銀色の鐘』

【隣人の鐘】での機体カラーは【銀色】で統一されている

【野生の牙】
ワイルド・ファンク

米国を代表するI S操縦者……【イーリス・コーリング】が率いるI S部隊

隊章は『草原を背景に大型ナイフの様な鋭い牙が大地に突き立てられた光景』

部隊での機体カラーは多種多彩の『ストライプ（縞柄）』

『戦闘機部隊』

『Ghost Rider』
ゴースト・ライダー

隊員は【Phantom】・・・『ジェイソン』と【Sleeping ir】・・・『フランキー』の二名で編成された少数部隊であるが【TASK FORCE 108】内の戦闘機部門にて、トップクラスの強さを誇り、あらゆる任務にも対応できる・・・【最強】の戦闘機部隊

隊章は『神獣』・・・【スレイプニル】に跨り、高らかに剣を掲げた『漆黒の首無し騎士』

『Sky knight』
スカイ・ナイト

【SKY KID】 - - - 『カーター』を隊長とした『Mirage 2000-5』によって編成された戦闘機部隊

隊員はフランス空軍の精鋭揃いであり、皆が【SKY CAPTAIN】 - - - 『クロード・デュノア大佐』のファンでもある

隊章は『大空を背景に高らかと掲げられた剣と盾』

『Strigon』
ストリゴン

【Reaper】 - - - 『クリス』率いる【Franker】シリーズによって編成された戦闘機部隊

隊員はロシア空軍の精鋭たちで編成され、敵性勢力の【殲滅】を最も得意とする

隊章は『深紅のローブを纏い、杖の様な柄をした巨大な鎌を携えた魔術師』

『IS部隊』と同様、機体カラーを統一しており、『血』の色を彷彿させる様な赤黒い迷彩色が特徴

『War Wolf』
ウォー・ウルフ

【Baron】・・・『シヨン』と【Viper】・・・『ハンズ』と共にアメリカ空軍の精鋭たちによって編成された部隊であり、機体は『F-22A Raptor』で統一されている

隊章は『月夜を背景に遠吠えをする白狼』

『クラッシュヤー
Crusher』

【Iron Hide】・・・『B・A』率いる『A-10A
Thunderbolt ?』により、編成された攻撃機部隊

【対地】及び【対艦】^{ミッション}任務を専門とし、戦闘力に関しては『Ghost Rider』に次ぐ程。部隊名の由来は『地上に展開する敵性勢力を【粉碎】するが如くの戦闘力を所有する事』から来ている

隊章は『大地に振り下ろされる巨大な鉄槌』^{ハンマー}

『サウンド・ホーネット
Sound Hornet』

【iPod】・・・『リチャード』を隊長とし、機体を『F/A1

8 - E Super Hornet』で統一した戦闘機部隊

主に他の部隊の支援を専門としており、攻撃機部隊 . . . 『Cru
sher』と組んで飛ぶ事が多い

隊章は『ヘッドホンを着けたスズメバチ』

他にもロシア空軍によって編成された『Red Moon』等、多
レッド・ムーン

数の部隊が存在する

『戦闘ヘリ部隊』 . . . 『Big Baby』
ビッグ・ベイビー

【Ratchet】 . . . 『ライリー』を隊長とし、五機の『超音
速戦闘ヘリ』 . . . 『AIR WOLF』により編成された『多目
的・強襲部隊』

戦闘機部隊のパイロットが墜落した際の救助、IS部隊の支援などを目的としており、戦闘力に関しては戦闘機部隊とも引けを取らない

隊章は『葉巻をくわえ、睨み付ける赤ん坊』というコミカルなモノ

(設計は隊長であるライリー本人)

- 【部隊紹介】 - (後書き)

他にも【特別編成部隊】も多数、考えております。例を挙げるのなら『爆撃部隊』、ISや架想機(試作機)による『殲滅部隊』等々……

また、こんな部隊も良いのでは？ という皆様のアイデアも募集しておりますので、よろしければ御願いたします……

- 【友人】 -

マイアミでの一件から、少しばかりの月日が流れた。俺たちの出撃回数は既に数十回……【亡国機業】の無人機の出現場所は世界各国へと、その範囲を拡大していった

『無人機』……【連中】が出現する度、俺たちは世界中を駆け巡る事になったのは言うまでもない……

マイアミの一件以降、全世界が【亡国機業】と【TASK FORCE】の存在を知る事となり、各国は互いに手を組む事を表明……

【亡国機業】の脅威に対抗する為、結成された『IS編成戦闘機部隊』……【TASK FORCE】に各国の選りすぐりのIS操縦者と軍隊が参加していった

今では【TASK FORCE】を改め……【TASK FO

RCE 108（タスク・フォース ワン・ゼロ・エイト）【と改名、正に世界最高かつ最強の部隊として結成し直された

因みに『108』という意味は、世界各国の選りすぐりたち……
【IS操縦者】と【戦闘機乗り】たちを厳選に厳選を重ね、選出した結果……総勢で『108名』にまで絞り込んだ事からなのは余談だ……

また、【TASK FORCE 108】は複数の部隊により構成され、初代メンバーである俺を含む隊員の数人は各部隊の隊長として就任していった

.....

【存在しない基地】

俺は各隊員たちに用意されている自室にて、溜め息を零しながら正装へと着替えていた。ここ、最近では『亡国機業』の無人機による襲撃は急に減少……数日前、フランスに出現したのを機に今では音沙汰無しとなった

国連は『此方』……【TASK FORCE 108】の戦力を侮れないと『亡国機業』は判断したのだろう、と考えている様だ

そこで国連は結成されてから連日、世界各国へと出撃する俺たちに一時の【休暇】を申し渡した。確かに隊員たちにも疲弊といった色が見え始めていたのは明白だった為、俺たちには有り難い事なのだが……

現在、【休暇中】である俺は『古い友人』に数年振りに連絡を受け、こうして似合わない正装へと着替えている訳だ

「あら……スーツなんて、めかし込んで何処にお出掛けするつもりかしら……？」

「……ノック位、してくれても罰は当たらないと思うけどな、ナタ

「シャ……」

俺は何時の間にか、部屋に入り込んだナターシャへと視線を向ける

「相変わらず、ネクタイを締めるのは下手ねえ……」

そう言つて、ナターシャは側へと近付くと、俺の首に掛かったネクタイを手慣れた手付きで締めていく

「……それで、何処で『誰』と会つつもりかしら？」

「……お前と出会う前からの古い友人だよ……」

「そう……その『友人』って【女性】なのかしら……ッ」

ネクタイを締めていく力がこもり、俺は思わず息を詰まらせる

「うっ……お前が想像している様な【関係】では無いから、変な心配するなよ……」

「でも、女性なのは当たり前なのね？」

「言っただろ、古い友人だってな？」

今一つ納得しない、といった表情を浮かべながらもナターシャはネクタイを締め終える

「わざわざ、スーツに着替えてまで会わなきゃならない友人って言うのはどんな女性ヒトなのかしら……？」

「仕方ないんだよ……【立場上】な……」

俺は再び、溜め息を零しながら上着を掴むと足早に部屋を後にしようとする。遅れる訳にはいかないんでな……

「それで、その友人の名前位は教えてくれても罰は当たらないと思

「..」

「.....【アーシア・ハミルトン】だよ」

そう言って、俺は部屋を後にした。足早に通路を歩く最中、ナターシャの【絶叫】が聞こえたのは俺の【幻聴】なのだろう.....

.....

私は足早に部屋を後にしたジェイのベッドへと力無く座り込んだ。幻聴だったと思いたいけど、自分の耳はしっかりと聞いていた様で私の頭の中で、ジェイが言った『友人』の名前.....【アーシア・ハミルトン】という言葉が木霊していた

「ジェシー、暇ならアタシと『イイ事』でも.....って、ナタル？」

部屋へと入ってきた私の親友である『イーリス・コーリング』……
- 【イーリ】はジェイの部屋に居る私を不思議そうな表情で見つめる

「……一足違いだったわね、イーリ……ジェイなら出掛けたわよ……」

「何だよ、折角の【休暇】なんだから、ジェシーと『イイ事』でもしようと思って来たのによ……」

そう言って、イーリは頬を膨らませて私の隣へと腰掛ける

「……イーリ、ジェイの【天然誑し】は私たちの想像の範疇には収まらない様だったわ……」

「はあ？ ジェシーの【天然誑し】が、また誰かを落としたのかよ……？」

「ええ、恐らくね……それもかなりの昔に、かなりの【大物】をね……」

そう……【アーシア・ハミルトン】の名前を知らない人間なんて居る訳が無い程、と言っても過言じゃないわよ……

「……で……一体、何処のどいつを落としたんだよ？」

「口の聞き方に気を付けた方が良いわよ、イーリ……なんて言っただって、あの【アーシア・ハミルトン】なのよ……」

「へえ……【アーシア・ハミルトン】をねえ……って、あの【アーシア・ハミルトン】かッ！？」

「……他に誰が居るかしら……？」

「ナタル……【アーシア・ハミルトン】って言えば…… - - - 現アメリカ合衆国大統領『ジョージ・ハミルトン』の【愛娘】だぞッ！
!？」

- - - - -

「ヘッキシッ!」

「あら、風邪でも引きましたか…?」

「いえ、誰かが噂でもしているのでしょうか…お気遣いなく…」

「ふふ…貴方は有名ですもの…仕方ありませんよ…」

煌びやかに輝く金髪を靡かせ、その【芸術的】と呼べる様な美しさを誇りながら、優雅な仕草で口元を押さえ、そっと優しく微笑む女性…『アーシア・ハミルトン』は言った

「私は有名人などではありませんよ。それに…貴女に比べれば…」

「そうですね…ですが、今は只の友人として接してもらえませんか、ジェイソンさん…?」

「……ああ、済まないな……どうも昔みたいにはいかないな……」

今、俺は……現アメリカ合衆国大統領……『ジョージ・ハミルトン』の邸宅に居る。何故、そんな場所に居るのか……

それは、大統領の愛娘……俺にとっては友人でもある『アーシア・ハミルトン』に呼ばれたからだ

「随分と月日は流れましたね……貴方と出会った時から……」

「ああ……まさか、子供の頃に街の不良に絡まれていた君が【大統領令嬢】になるとは思いもしなかったよ……」

俺は邸宅内の広間に備えられたソファアへと静かに腰掛けた。このソファアも俺の給料なんかでは到底、購入できない程の高価なものなのだろう……

「……父が言っていましたよ？ 昔みたいに貴方に会いたいと……」

「…ハミルトンさ…大統領が…？」

「父の前でその呼び名は禁句ですよ？ 貴方は私の友人でもあるんですから…」

それに父も貴方の事を気に入っているんですし…」

「…恐れ多いな…現役の大統領閣下に気に入られるなんて…」

「ふふ…父は酔うと口癖のように言ってますよ…昔、無理矢理でも彼をお前の婿にすれば良かった」って」

俺の脳裏にはアーシアの父…『ジョージ・ハミルトン』のあの豪快に笑う様子が脳裏に浮かんだ…あの人なら、本気でやりかねないな…」

「…冗談なんだろう？ 大事な【愛娘】の婿に、当時は世間知らずの悪童ワルガキだった俺なんかを適任するなんて…」

するとアーシアはキョトン、とした表情を浮かべた

「あら……結構、父は本気でしたよ？ 寧ろ、今もそんな感じですよ……」

それによく言ってますよ……『私の【後任】が見つからないのなら、彼以外の適役は居ないだろう。それに私は是非とも彼を【息子】と呼びたい』って……」

「ここ最近、特に口になっているみたいですよ？」

俺は丁度、コーヒーを口にしていた為、思わず咽せ込んだ

「だ、大丈夫ですか……!？」

慌てて、俺の側へと駆け寄ると手にしたハンカチで俺の口元を拭う

「い、いや……大丈夫だ……」

「本当に……ですか……?」

心配そうな表情を浮かべ、俺を見上げるアーシア……俺とは僅か、2〜3歳差の筈なんだが……どうみても、20代前半にしか見えな
いんだよな……？

「大丈夫だ……しかし、あの人も変わらないな……」

豪快だが、思慮深く常に平等を心掛けた……そんな人だからこそ、
大統領になれたんだろう……」

『ジョージ・ハミルトン』……あの【白騎士事件】の数年前に大
統領へと就任した男性であり、その類い希なる行動力と決断力、判
断力を兼ね揃え、今の世界……『女尊男卑』の世界でも男女の平
等を心掛けるのでも有名だ……ましてや、湾岸戦争での【英雄】
……『エース・パイロット』であった事でもな……」

「……ですが、父も勝手ですよ？ 私とジェイソンさんは只の友人
なんですのに……」

「……まあ、あの人らしいとは思っけどな……」

それに本来なら、俺にも子供の一人や二人は居ても可笑しくはない
……すっかり、出遅れたかな……」

「それは私も同じですよ……こんな【おばさん】を貰ってくれる男性トなんて、居る訳が無いんでしょうし……」

……それは、世の中の女性に対しての嫌みにしか聞こえないがな……、と内心で俺は呟いた

「……いざという時は、ジエイソンさんに貰ってもらいましょうか……お嫁に……？」

本日、二度目となるコーヒーで咽せ込んだ俺は口元を押さえながら、アーシアへと視線を向ける

「ゲホッ……冗談は止してくれないか、俺なんかには勿体無さ過ぎる……」

「ふふ、冗談ですよ。貴方は色々な女性から好かれていると聞きますから、つい……」

「質の悪い冗談だな……親父さんが知ったら、泣くぞ……？」

『我が最愛の娘がグレたあああッ！！？』ってよ……あの人は頭に【超ド級】が着く程の親バカだからなあ……

昔を思い出すよ……一夏やラウラ位の歳だった頃、街をふらついていた時に不良に絡まれていた年下の娘……【アーシア】を気紛れで助けたら『お礼をさせてください』と言って、家に招待され……

『ジョージ・ハミルトン』……【親父さん】と会った途端に銃を取り出して『ウチの娘を誑かしたのかッ！？ このッ、泥棒猫（？）がッ！！？』と泣き叫び、銃口を突き付けた時をよ……

「父は大袈裟なんですよ、私が料理をする事を今でも反対しているんですから……」

頬を膨らませ、アーシアは言った

「まあ…【過保護】…なんて、レベルじゃ済まないな……」

俺がアジアと友人になった時には、もうパレード級の大騒ぎを繰り広げていたしな……『娘に友達が出来たぞッ!!』ってよ……

「でも、ジェイソンさんも凄いですよね……今では世界各国のIS操縦者と戦闘機乗りで、精鋭の方々を率いているんですから……」

「……皆、俺たちを【英雄】なんて持て囃しているが……そんな大層なモノなんかじゃないさ……」

誰かが【やらなきゃならない事】を俺たちが、やっただけ……

…変わって欲しいんなら、何時でも変わってやるよ……」

「……でも、ジェイソンさんや他の隊員の方々は自ら、その【やらなきゃならない事】をした……それが【英雄】と言われる由来なのでしょう……」

そう言って、アジアはそっと微笑んだ

「……………そう……なのかも知れないな……………」

俺は頭を掻きながら、苦笑を浮かべて……………
- - - 暫しの間……………【友人】
との一時を満喫していた……………

- 【新入り】 -

『友人』……【アーシア・ハミルトン】との再会から二日が過ぎた。無論、あの後で基地へと戻った俺はナターシャやイーリたちだけでは無く、基地中の連中からの質問責めにあつたのは言うまでもない……

【休暇】も終わり、俺たちは『亡国機業』による襲撃に備えるも……未だに連中が動く事は無かった。まるで本物の【亡霊】を相手している気分だ……いきなり現れては姿を消し、一切の痕跡も無く足取りすら掴めない

最早、馬鹿にされている様な感じだ。それに連中が仕掛けて来ないと言つても、時間を無駄遣いする気は無い国連は此方の【戦力強化】へと乗り出した

【擬似IS】の技術を各国のIS企業へと普及、ソレの『改良』と『大量生産』という協力を求めた。各国のIS企業はこの協力を快く受諾した

何故なら、最も優秀な結果を出した企業は『国連の専属』 - - - 英^{イキ}
^{リス}国で言う『英国王室御用達』^{ロイヤル・フランド}と同等の扱いを受ける事になるからだ

そうならば、国連がその企業の経営安泰を保証、IS企業界での『世界最高峰』と言う座を獲られるからだ

それを知った各国の企業は躍起となり、皆が【様々な手段】を用いて『擬似IS』の研究と開発を開始した

- - - - -

【存在しない基地】

俺は基地内の一室で『とある部隊』の資料に目を通していた。それ

は、世界各国で選りすぐりのIS操縦者と戦闘機乗りたちにより再結成された『IS編成戦闘機部隊』……【TASK FORCE 108】へ新たに配属される部隊の資料だった

「……あまり、気乗りしないな……」

資料へと目を通していた俺はため息を零しながら、煙草を取り出すとソレをくわえた。だが、くわえた煙草に火を着ける事は叶わなかった、何故なら……

「此処は禁煙だ。それに何時も言っているだろう？ 煙草は何時か命取りになるとな」

「…火は着けていないけどな？」

「以ての外だぞ、ジエイソン」

そう言っただけの間にか、部屋へと入っていたフランキーにくわえていた煙草を取り上げられた

「……正直、言って……【アイツ等】が配属されるのは気乗りしないな……」

「仕方無かるう、【ドイツ政府】と【本人たち】の強い要望だ。それに国連の考えも知っての通り……【味方は一人でも多いに越した事は無い】とな」

「だからと言って、アイツ等を駆り出すのは最善とは言えない……アイツ等は純粹過ぎる……」

俺みたいに【汚れていない】からな」

「……遅かれ早かれだ。それに【彼女ら】も充分、承知の上で志願したんだ……例え、それが【荊の道】であろうとな……」

そう言つて、俺が手にしていた資料をフランキーは机上へと広げる。その資料には……ドイツから配属されるドイツ軍IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』……『黒ウサギ隊』の詳細が書き記されていた

- - - - -

それから数時間後……俺はフランキーと共に【SKY KID】と【iPod】の二人を呼んだ。二人を呼んだ内容はこうだ……これから『ある部隊』が【TASK FORCE 108】へと配属される為、この基地へとやって来る。【歓迎】兼【試験^{テスト}】として、呼んだ二人はその部隊の【隊長】及び【副隊長】の模擬空中戦の相手をしる……という訳だ

二人には悪いが、相手となる『ある部隊』……【黒ウサギ隊】の詳細については言っていない。言ったのなら、確実に相手役を断るからな

.....

「どんな様子だ？」

俺とフランキーは隊員たちが集まるモニター室へと入る。室内の中心に設置された大型のモニターには四つの点が縦横無尽に駆け巡る様子を映し出していた

既に【黒ウサギ隊】は到着しており、隊長格の二名……『ラウラ』と『クラリッサ』は【SKY KID】と【iPod】との模擬空中戦を開始、俺たちは他の隊員たちと共にモニターで観戦している訳だ

「今、リチャードが『副隊長』の方にケツをとられた所だよ、隊長^{ホス}？」

ライリーは俺の方へと振り向き、言う

「まだ、カーターは『隊長』の背後をとっているけど……何とか、食らいついている感じですよ」

シヨーンは苦笑を浮かべ、モニターを指差す

「所で、どんな『部隊』なのか……まだ教えてもらってないけど、何処の国ですか？」

「楽しみは取っておけ、ハンス……だが、所属は『ドイツ軍』……
・フランキーの部下でもある……と言っておこつ」

「ワオ、ドイツ軍の精鋭部隊って訳ね……」

両手を挙げ、お手上げ状態といった動作をとるハンス

モニターには【iPod】を表示する黄色い点が相手である『副隊長』……【クラリッサ】を表示する灰色の点に背後をとられ、振り切ろうと縦横無尽に駆ける様子があった

「……仕掛けてくる……」

壁際に寄りかかり、腕を組んでモニターを見ていたB・A・が静かに言つと同時にモニターに映された灰色の点は一気に黄色い点……
・【iPod】へと距離を詰める。【iPod】は回避機動をとる

も、予測していたらしく灰色の点――『クラリツサ』は【i P O
d】の移動先へと回り込むと同時に黄色い点はモニターから消失した^{ロスト}

「【i P O d】撃墜……」

クリスは気怠そうな表情を浮かべ、呟くと同時にIS部隊一同からは歓声が、戦闘機部隊一同（俺を含む元ファントム隊とフランキー以外）からは落胆の声上がる

戦闘機部隊の何人かは懐から財布を取り出す様子からして賭けをしていた様であり、悔しげに財布から取り出した数枚の紙幣をIS部隊の隊員たち、数人に手渡していた

「残るはカーターか……まあ、相手が悪いかな……？」

俺はそう呟き、モニターへと視線を戻す。モニターには『隊長』――
――【ラウラ】を表示する黒い点が【S K Y K I D】を表示する
青色の点の背後を文字通り、完璧に張り付いていた

『カーターッ、逃げるッ！！　カーターッ、逃げるッ！！』

戦闘機部隊一同のエールが室内で木霊する。俺は苦笑を浮かべてモーターを見る

「……さて、どう仕掛ける…？」

フランキーがそう呟くと同時に青色の点は右ロールからの一回転を繰り返出し、速度が乗っていた黒い点はそのまま、青色の点を通り越し、前方へと躍り出た

それと同時に室内は戦闘機部隊一同の歓声が響き渡る

『良いぞッ、カーターッ！！　良いぞッ、カーターッ！！』

「……どうだかな…？」

黒い点の背後をとった青色の点……【SKY KID】は仕返しと言わんばかりに距離を詰めていく。しかし、黒い点……『ラウラ』は減速と同時に右旋回からの急降下を繰り返して、青色の点の真下へと移動するが青色の点は速度を若干、落として進路を維持していた

恐らく、雲の中へと潜り込んだのだろう。前方の相手が突然、姿を消した事に驚いて操縦席越しに辺りを見渡している【SKY KID】……『カーター』の様子が目に浮かぶ……

真下の位置へと着いた黒い点は右旋回から急上昇し、無防備となった青色の点の背後をとると同時にモニターから青色の点が消失した

「……【SKY KID】も撃墜されたな？」

その俺の言葉と同時に再び、IS部隊一同の歓声と戦闘機部隊一同の落胆の声が上がった

「あの動き……隊長の【JDロール】か……？」

「…【JDロール】って何だよ、B・A・?」

壁際に寄りかかり、モニターを見ていたB・A・の言葉に反応したイーリが言う。するとナターシャが現れ、イーリの側へと近付いた

「その昔、イギリス空軍が使っていたって言われている戦闘機動の一種よ。特にイギリス空軍のエース・パイロット……【Teac^{チャー}her】が好んで使っていたので有名ね」

「似た様な動きをドイツでアタシが相手だった時にも使っていたよな、ナタル？」

「あれも同じよ、最もジェイが改良したモノらしいけどね？」

「ジェシーはよく使うのか、その【JDロール】ってヤツをよ？」

するとB・A・がその質問を答える

「……いいや…【本気で退屈した時】ただだ…」

イーリがその答えを聞くと同時にジェイソンの方へと視線を向けるも既に姿は無かったのは余談だった……

.....

「大丈夫、ジェイ？」

「大丈夫に見えるなら、お前の眼は節穴だよ……」

先程、イーリからの平手打ちを喰らい、赤くなった右頬を擦りながら、俺は隊員たちを引き連れ、滑走路へと歩いていった

「でも、ジェイの【JDロール】をあの子が使っなんて驚きね？」

「俺もだよ、アイツ等に【あの技】を教えた覚えは無いんだが……
フランキー、お前が仕込んだのか？」

俺は隣を歩くフランキーへと視線を向けた

「いや、お前たちが去った後に部隊一同からお前の戦闘記録を閲覧
したいという申し出があつてな……」

許可を出したら、毎日、繰り返して記録を見ていたのまでは知って
いたが……」

「見事にモノにした訳か……あれだけの實力を持って、まだ成長す
るんだから……末恐ろしいな」

俺なんか、あつという間に追い越されそうだ」

するとフランキーは苦笑を浮かべて、言った

「本人たちの前で言ってやれ、きつと泣いて喜ぶぞ？」

「いや、泣かれても困るがな……」

「でも、ジエイは何処で【JDロール】なんて覚えたのかしら……？」

「パイロットになってから、俺は各国のエース・パイロットの戦闘記録を見てな……一番、俺と似た飛び方をしていたのが、イギリス空軍のエース・パイロット……【Teacher】でな……それで技を【拝借】したって訳だ」

すると俺とナターシャの会話を聞いていたフランキーは言う

「イギリス空軍のエースであり、その模範的な腕前と性格により【Teacher（講師）】の異名を持ったパイロット……『フランク・マクフィアソン』だな？」

確か……『白騎士事件』の数年程、前に自ら除隊したと言われているが……」

「結婚を機に除隊したらしい。相手は名門貴族の……そう、確か【オルコット家】のご令嬢だったな……」

……最も、もう随分と昔に女房と一緒に死んだけどな……」

「……やけに詳しいわね、ジエイ？」

「……昔、彼方此方を旅していてイギリスに行った際、その二人の【娘】に会った事があってな……」

母方の名字だったから、直ぐに気付け無かったよ」

そんな会話を続けている俺たちの前には着陸した自身の愛機から降りてくる【SKY KID】と【iPod】……その近くにはISを展開した『黒ウサギ隊』の隊長格である『ラウラ』と『クラリツサ』の二人がゆっくりと着陸した

既に滑走路にて待機していた『黒ウサギ隊』の一同を横目にフランキーは全隊員たちに紹介を始めた

「諸君、紹介しよう。ドイツ軍が誇る名実共に【最強】のIS配備特殊部隊『シユヴァルツェ・ハーゼ』……通称【黒ウサギ隊】だ」

「因みに【iPod】の相手は副隊長の『クラリツサ・ハルフォー」

フ』大尉、【SKY KID】の相手は『黒ウサギ隊』隊長……
『ラウラ・ボーデヴィツヒ』少佐だ」

俺は補足説明を付け足し、見事に【撃墜】された二人へと近付いた

「随分とやられた様子だな、油断したか？」

すると【SKY KID】……『カーター』は言う

「最初の方は油断してたツスけど、途中からはかなり本気マツだったんですよ？ まるで隊長を相手にしている気分ツスよ」

「そうそう、こっちの動きを完全に読まれていて、その上で誘導されちゃあ……なあ？」

【ipod】……『リチャード』はそう言つと、カーターに同意を求める様に視線を向けた

「しかも、隊長の【JDロール】までやられたんツスから……一体、何なんですか、あの部隊は？」

するとフランキーが俺らの会話へと割り込む

「彼女たちは以前、ジェイソンと『最強のIS操縦者』……【織斑 千冬】により鍛え上げられた部隊だ」

「……聞いてないツスよ、隊長……」

「言ったら、確実にお前らは相手役を断るだろ？」

「当たり前ツスよッ！！何が悲しくて、【最強のIS操縦者】と【最高の戦闘機乗り】が鍛え上げた『超精鋭部隊』の相手役をすると思っせんツスカッ！！？」

「つーか、隊長って…あの『織斑 千冬』とも面識があるんですか？」

口調を荒げ、叫び倒す様に喋るカーターと何故か、呆れ顔で俺を見るリチャード……何で、呆れ顔で俺を見るんだ…？

「ジェイソンと『織斑 千冬』は親しい友人だぞ、リチャード？」

「マジっすか……【最強】と【最高】のコラボレーションですよ、そりゃ……」

と言うより、フランキー中佐……【親しい】って、もしかして……？」

「十中八九、お前の予想通りだ」

「あー……また随分と【大物】ばかりを墜とすのが得意みたいですねえ……隊長って……」

ため息を零し、呆れ顔で俺を見るリチャードとフランキー……だから、何で呆れ顔で見るんだよ……？

「隊長、お久しぶりです」

俺を呼ぶ声がする方向へと振り返ると……

「……あー……久しぶりだな、ラウラ」

そう、其処にはラウラとクラリッサ……『黒ウサギ隊』の一同が勢揃いしていた

「それで試験結果はどうだ。【ジェイソン・シーガー中佐】殿？」

ニヤニヤという表現が良く似合う笑みを浮かべ、フランキーは言う

「そうツスよ、俺とリチャードをボロ負けにしたんツスから、評価点は最高点の筈じゃないツスか？」

「あそこまで、完膚無きまでにやられたんじゃあ……ねえ、隊長？」

苦笑を浮かべ、カーターとリチャードは俺を見る

俺は『黒ウサギ隊』の一同へと視線を向けた。皆、期待と不安が入り混じった表情を浮かべ、俺を見つめていた

「…俺の負けだな……試験結果は【合格】だ

本日を以て、ドイツ軍IS配備特殊部隊『シユヴァルツェ・ハーゼ』

――『黒ウサギ隊』は俺が指揮する『IS編成戦闘機部隊』――

・【TASK FORCE 108】に正式配属とする……

ドイツに居た時以上にキッチリと扱いてやるから、覚悟しとけよな
？」

『了解しましたッ！！ 光栄でありますッ！』

そして、ラウラたち……『黒ウサギ隊』一同は眩しい笑顔と共に敬礼を俺へと向けた……

まったく……此処まで追い掛けてくるとはな……

そう思いながら、俺は……苦笑を浮かべて敬礼をした

・
【歓迎会】
・

黒ウサギ隊の配属から、数時間後……

俺たちは基地の食堂にて、ささやかな『歓迎会』を開く事にした。
参加メンバーは俺ら、【TASK FORCE 108】の初代メン
バーたちと黒ウサギ隊だけだな

・
・
・
・
・
・

「しつつかし、凄えよなッ!? まだ小さいのに【少佐】かよッ?!
」

「天才って本当に居るんだねえー!? しかも、部隊長を務めてる
んだから尚更でしょ」

端から見てもかなりのオーバー・リアクションで、ラウラに視線を向けるカーター、如何にもインスタント製の味がするコーヒーが入ったカップを片手にカーターと同様、ラウラを見るライリー

他にもショーンやクリス、ハンズとリチャードとも打ち解けた様子の黒ウサギ隊の隊員の姿があった。ナターシャやイーリとは既にドイツで打ち解けているから、気軽に会話を楽しんでいる姿もあった

「私は天才なんかじゃ、ありません。【隊長】や【教官】が居たからこそ、今の私が居るんです」

ハンズとカーターへと視線を向け、相変わらず、堅苦しい口調で話すラウラ

「でも、貴女たちはラッキーよ？ ジエイやB・Aの手料理を食べられるなんてね」

「そうだけ、隊長とB・Aの作るメシはそこ辺のクソ高級レストランよりも遥かに美味しいからな」

黒ウサギ隊の隊員たちへと視線を向け、微笑みながら言うナターシヤと酒入りのカップを片手に豪快に笑うクリス

そう、黒ウサギ隊の『歓迎会』を兼ねて、俺とB・A・が手料理を振る舞う事になったのだ。俺はそこそこは料理を作れたし、日本では【五反田食堂】で働いていた分、人に食べられる位の腕は自負している

B・A・は、その外見とは似合わない【家庭的】な趣味や特技の持ち主であり、アイツの作る料理はそこらの高級レストラン以上のモノだ

「それで、メニューは何なんですか、【TASK FORCE 108】で、ピカイチの腕を誇る【料理人^{コック}】のお二人さん？」

リチャードは厨房にて、調理をする俺とB・A・へと声を掛けた

「…中国料理だ。隊長が以前、中国に言った際に覚えたって……何だった、隊長？」

B・Aは調理中の手を止めず、隣に居る俺へと視線を向けた

「ああ、【酢豚】って料理だよ。俺が中国に旅して、行った時に教わってな」

「教わったって、誰にツスカ？」

「聞いて驚くなよ、あの『凰ファン・ウォンレイ王怜』の娘だぞ、カーター？」

するとシヨーンは驚愕という言葉が良く似合う表情を浮かべて、俺を見た

「あの【神兵】の娘ですかッ！！？ ……隊長、もしかして…旅をしていた理由ってのは……」

「ああ、各国の【エース・パイロット】の生誕地巡りを兼ねての旅だよ。最も、その本人たちとは会える事は無かったけどな……」

すると、俺たちの会話を聞いていたラウラはフランキーへと問い掛けた

「フランキー中佐、その『凰 王怜』とは何者なんですか…?」

フラン・ウォンレイ

「中国空軍のエース・パイロットでな、腕前は他の国のエースたちと比べれば若干、劣るが…：…僅か、二年という期間で【史上最速】かつ【最年少】で、第一戦闘機師団の隊長の座へと上り詰めたパイロットであり、通称『神に遣われし兵』 - - - 【神兵】と呼ばれていた

しかし、その【神兵】もイギリス空軍のエース - - - 『Teacher』と同様、あの『白騎士事件』の前に自ら、除隊しているな

ティーチ

フランキーは俺へと視線を向けた

「……【Teacher】も【神兵】も結婚を機に除隊の道を選んだらしい。何よりも【護らなきゃならないモノ】 - - - 『家族』の為にな…」

「ふむ…：…確かに父親がエースであるのなら、その娘にも周囲からは必要以上の【期待】というモノを背負わされるだろう

それが、重荷となって、その娘の将来を潰してしまう可能性もあり得る……」

「自分の輝かしい経歴を捨ててでも、護らなきゃならない位……家族を愛していたんだろうよ、パイロットとしても【父親】としても偉大な男たちだよ」

するとクリスは言う

「……でも、中には【最凶】って部類の野郎も居るけどな……」

「ああ……あの【ロシアの伝説】？」

「その前に胸くそ悪いが付くけどな、ライリー？」

「何の話なんだよ、その【伝説】ってのはよ？」

イーリはクリスとライリーへと視線を向けた。するとイーリの質問にハンスが答える

「ロシア空軍で【最強】と呼ばれていた男、その男の名前はロシア軍では『最大の禁句』^{タブー}になってるらしいから、言えない様だけど……かなり、ヤバい奴だった話だ」

そう……ロシアは否定しているが……噂では『白騎士事件』から僅か、数ヶ月前に突然の謀反を起こし、たった一機で自身が所属していた師団を壊滅へと追いやり、その乗機ごと姿を消したパイロット……

今、現在もその事実は不明だが……噂では各地の激戦地に姿を現すと言われる【傭兵】

「……どんなパイロットだよ？」

俺とB・Aは出来上がった『料理』……【酢豚】をテーブルへと並べ、イーリを見る

「…奴の姿を見た奴は殆ど居ない……ただ、噂では傭兵になつたらしい

奴が現れた戦場には砕け散つた無数の戦闘機の残骸が転がり、遭遇したパイロットは皆、乗機ごと撃ち落とされたつて話だ」

俺の言葉の続きをB・Aは言う

「……これも噂だが……生き残つたパイロットたちは数人、居る……皆、二度と空を飛べない身体になつたらしい……」

そのパイロットたちは口を揃えて、こう言つたそうだ……『【鮫】が全てを食い散らかしていつた』とな……」

「そして、それらの噂から奴の呼び名は……【鮫^{シャーク}】と呼ばれている

最も、誰一人としてマトモにその姿を確認した奴が居ないから最早、空軍に伝わる作り話となつているがな……」

暫し、俺を含む戦闘機乗りには重たい空気が流れるも、カーターは言つた

「つと、そんな眉唾な話よりもメシだ、メシッ！！ お前ら、マジでラッキーだぜ？」

隊長とB・A・の作るメシは一度、食べば病みつきになる位だしなあ……つて、まさかとは思いつつスけど、メシに【ヤバい調味料】でも入れてないツスよね？」

鈍い打撃音が食堂内に木霊する。まあ、俺とB・A・の拳骨がカーターに炸裂した音なんだが……

「人間きの悪い事、言うんじゃねえよ。カーター」

「殴る事とは無いじゃないツスカッ！！？ アンタらの拳骨は最早、鈍器による一撃以上の威力ツスよッ！！」

殴られた頭を押さえ、文句を言うカーター。自業自得だろ、口の過ぎる部下に制裁を与えるのは隊長オレの使命だ

そんな俺らを見て、他のメンバーたちは皆、盛大に笑った

黒ウサギ隊の隊員たちも出会った頃とは違い、皆が年相応の明るい笑顔で俺らを見る。ラウラやクララ、フランキーもが笑っていた

俺はそんな中、ある事を思った

【Teacher】や【神兵】・・・他のエース・パイロットたちも皆、それぞれが【護らなきゃならないモノ】の為に空を飛び……そして自ら、翼を捨てた……だが、それは後悔してないだろう。その選択は自分自身が【選んだ道】であるのだから……

俺にとっての【護らなきゃならないモノ】……それは『仲間』だ。今も昔も変わらない、俺には【最高の仲間】が居る

……気付いたら、何時の間にか……その【護らなきゃならないモノ】は随分と増えちまったけどな……

俺は静かに苦笑を浮かべた

因みに料理は全員から好評であり、基地で週に一回は俺かB・A・
が全隊員分のメシを作る羽目になるのは余談だ

其処は暗い檻の中だった。辺りは暗闇しか無く、何処からか垂れる水滴の音が木霊する程、静かな空間……

その檻の中心には一人の女性が居た。ズタズタに切り裂かれ、彼方此方から肌を露出させて最早、服とは言えない位になった漆黒のドレスを纏った……

雪の様に白い肌、腰元まで伸びた艶やかな黒い長髪……見る者、全てを魅了する美しい容姿をしていて最早、その存在自体が【芸術的】と呼べる程の美女……しかし、その細い首には鋼鉄の首輪が着けられ、両手には鎖という拘束をされていた

「……………あは……………」

小さな歓喜の声を漏らし、女は一枚の写真へと視線を向ける。その瞳は暗く濁り、感情というモノが無く虚ろな瞳だった

「あは……あ……」

女は愛おしそうにその写真に写る【人物】……『一人の男性』をじっと見つめる表情は………【狂気】を孕んだ妖しい笑みだった

「……【ジェイソン】……ジェイソン……ジェイソン、ジェイソン、ジェイソン……」

壊れたテープ・レコーダーの様に繰り返して写真の男性の名を呟く

女は自身の胸元を細く繊細な長い指でなぞり、下腹部へと指を滑らす

「……あ……はあ……」

恍惚とした表情を浮かべ、写真の男性……【ジェイソン・シーガ

―】が写るその写真を愛おしそうに抱き締める

「…見つけた…私を… - - - 【殺したヒト】…」

女は【狂った笑み】を浮かべて、その写真へと舌を這わす。舌を這わす度に粘着質な音が暗い檻の中で木霊した

- - - - -

「…完璧にイカしてるな？」

薄暗い照明が灯された一室で短く切りそろえられた茶髪の女性は先程の【檻の中の女性】の様子を映しているカメラの映像へと視線を向けて言う

「それ程、夢中なんでしょう？」

『彼女』……【R】にとって『彼』は正に【殺したい程、愛して病まない存在】なんだから……」

隣に座り、苦笑を浮かべる艶やかな金髪の女性は言う

「……第一、この男の何処が良いんだかな……まあ、顔はそこらの【^{クソ}男性】より、よっぽど良いけどよ？」

「さあ？ 【R】本人から直接、聞いたらどうかしら……」

最も『彼』の名前を出した途端に【あんな状態】になるけど……」

そう言つて、二人の女性は映像へと視線を向ける。映し出された映像には恍惚とした表情を浮かべ、写真にキスをし続ける『女性』……
……【R】の姿があつた

「……やっぱり、イカしてるぜ」

「でも、実力は確かだよ？ 私たちの【部隊】では『S』^{サイシャ}や『M』^{マトカ}以上なんだから……」

「但し、この男絡みではだろ？」

最も『S』と『M』の奴らも興味を持っているんだろ？」

「ええ……『S』は出生が【アレ】だから、仕方ないとしても……『M』の方は意外ね……？」

「アイツ等はこれまでの【標的】……『ジェイソン・シーガー』の戦闘記録を飽きもせず、繰り返し見ていているんだからな？」

「【R】には引き続き、写真だけを定期的に渡しときましょう……映像なんて見せたら……彼女は【組織を潰して】でも、彼の元に行こうとするわよ」

「……『亡国機業』なんて廃れた名前を【隠れ蓑】にしてまで組織を存続させるなんて、気の遠くなる話だよ……」

「……【先代】と『私たち』……【第二世代】の考えは同じよ……」

……【祖国の再建】……それが『悲願』なのよ」

「……この【標的】が持つ『遺伝子』を狙ってるんだ。出来れば【

生かした】まま……最悪の場合は【殺して】でも……だろ、『スコール』」

茶髪の女性は金髪の女性へと視線を向ける

「そうよ、『オータム』」

でも、そう簡単には行きそうに無いわ……だから……【第二段階】に持ち込む必要があるわ」

金髪の女性……『スコール』は茶髪の女性……『オータム』へと視線を向けた

「……全ては【失った祖国】の為……」

そう呟き、部屋を照らしていた薄暗い照明は消えた……

【亡霊】は動き出す……空を駆け抜ける『生粋のエース』を標的

に
.....

-
【教官】
-

『歓迎会』から数日……その日も相変わらずだが『敵』……【亡
国機業】の動きは無く、その足取りもが不明のまま……

いい加減、自分たちが相手をしているのは正真正銘の【亡霊】では
無いのかと思えてくる。いっそのこと、新たに【霊媒師】や【悪霊
払い】でも隊員として、引き入れるべきか？、なんてくだらない事
すら浮かんでくる始末だった

-
-
-
-
-
-

『存在しない基地』

-
-
-
トレーニング・ルーム
【鍛錬室】

そこら辺のスポーツ・ジム以上の設備を誇る鍛錬室にて、ある会話が響き渡っていた

「しかし、暇だよなあ……最後に出撃したのは何処だったよ？」

「……フランスだ、ライリーが凱旋門を曲芸飛行で潜り抜けた……」

トレーニング・ウェアを身に纏い、それぞれが器具を用いて鍛錬をしながら、カーターとB・Aは会話を続けた

「あー……あと、危うくクリスの奴がエッフェル塔をぶっ壊しかけたよな……」

「……隊長が、直々にフランスへと出向いて頭を下げに行っていたな……」

すると二人の会話へと相変わらず、愛用の【iPod】を身に付けて鍛錬をするリチャードが割り込む

「そうそう……相手が【女】だったから、それ程のお咎めは無かったよな？」

「……今更だけども、隊長がハンズの奴みたい【その気】になれば『世界征服』なんて、簡単なんじゃねえの？」

今の世の中は【女が第一】……『女尊男卑』の世界だから、各国の要職に就いてる大半は女なんだからよ……」

「……いや、隊長が【その気】になるのは先ず、無いと言っても過言じゃないだろう……」

それに隊長は面倒事は嫌うだろう……わざわざ、自分から面倒に関わらない」

「でもよ、誰かがトラブルに巻き込まれたり、そんな場面に遭遇しちゃったなら、隊長は見過ごせないんだよなあ……」

ま、そこが隊長のイカす所なんだがな？、と言葉を付け足して苦笑を浮かべるリチャード

「そっいや、隊長を朝から見掛けないけど……どうしたんだ？」

イーリたち、IS部隊のメンバーはフランキー中佐とクリスが相手役で模擬空中戦をしてるのは知ってるけどよ……？」

「でも、ナターシャの奴も見ていないぜ？」

するとカーターとリチャードの疑問に鍛錬室の片隅で流れた汗を拭くシヨーンが答えた

「隊長はナターシャを連れて『教官』に会いに行ったらしいぞ？」

「あの【ウィリアム教官】にか？」

するとB・Aは鍛錬を一旦、止めてシヨーンへと視線を向けた

「…【War Dog^{ウォー・ドッグ}】のメンバーに会いに行ったのか…？」

「多分な、【War Dog】のメンバーは全員が俺たちの教官だったんだしな…ナターシャは『リール少佐』を姉の様に慕っていたしさ」

「でもよお…俺たちには教官であっても、隊長にとって『ウィリ

アム教官』はもっと【ややこしい存在】だろ？」

カーターはションへと視線を向ける

「確かにな……だって『ウィリアム・ファイルス教官』は……
ナターシャの【父親】だもんな……」

……

「本当に【教官】と会うつもりなの？」

「……会わなきゃならないだろ、お前の【父親】であって、俺たち
の【教官】なんだぞ？」

……もう一度、空に飛んだ以上……避けて通れない道だ」

俺とナターシャはライリーが操縦する『擬似IS搭載 超音速戦闘
ヘリ』……【AIR WOLF】に乗り込んで現在、飛行中だった

行き先はアメリカ西部に位置する空軍基地。其処には俺らが目的と
している【人物】……かつて、ファントム隊を鍛え上げたアメリカ
空軍、随一の戦闘機乗りであり、ナターシャの【父親】……『
ウィリアム・ファイルス中佐』に会う為だ

「隊長はナターシャと付き合ってから、ウィリアム教官に認めて貰
うのに【かなり】苦労したからね……？」

ヘリの操縦桿を握り、機体を安定させての【安全運転】を心掛ける
ライリーは言う。余程、ナターシャを敵に回したくは無いためだ
な……

「……ああ、ウィリアム教官は……自分の娘がパイロットと付き合
うのは断じて、許さん』の一点張りだったからな……」

仕方ないモノだろう。ウィリアム教官の妻であり、ナターシャの【
母親】……『アリス・ファイルス』の死は【自分の責任】だと感

じているのだから……

当時、アメリカ軍でその名を知らぬ者は居ないと言われた四機編成の精鋭部隊――【War Dog】ウォー・ドッグの隊長として活躍していた時だった。ウィリアム教官とまだ幼いナターシャを残し、妻である『アリス・ファイルス』が病で他界したのは……

元々、病弱な体質であつたらしい。長年、患つていた持病の再発と悪化が重なるという偶然が一致してしまつたのだ

誰のせいでもないのだが……ウィリアム教官は自分がパイロットであり、戦場の空を駆ける事が病弱だつた妻に過度の心労を与え、死に追いやつたと感じたらしい……妻の死後、程なくして【War Dog】隊は解散、ウィリアム教官は【教官】という道を選び、戦場に飛ぶ事は無くなつた

「……母さんが死んでから、私がパイロットになるつて言つた時は大喧嘩をしたわ……」

何週間も口を聞かなければ、顔すら見合わせなかつた……でも改めて、父さんにパイロットになる事を伝えると父さんは【ある条件】を前提に許可してくれたわ……」

その【条件】とは……『絶対にパイロットを恋人にしない事』
だった

「でも、隊長と出会った途端に……でしょ？」

ライリーはナターシャへと視線を向ける

「……ええ、ジエイを初めて見た時、一瞬で【一目惚れ】したわ……
何をしようにも、ジエイの事が頭から離れない……正に【撃墜】
された訳……」

苦笑を浮かべ、ナターシャは隣に座る俺の肩へと頭を乗せる

「……お前に【告白】され、交際を始めたが……ウィリアム教官に
その事を知られると『別れる』と言われたよな……」

そう……そして、ナターシャは子供の様に泣いて喚いて、それを拒否した。ウィリアム教官は俺が【TOP GUN】入りする事を知ると【ある条件】を突きつけた

『【TOP GUN】を首席で卒業しろ、そうしたら考えてやらな
い事もない』

……あの時ほど、物事を真剣に取り組んだ事は無い。ましてや、俺の教官が【ウィリアム・ファイルス中佐】である事もあり、唯でさえ【TOP 1%】と呼ばれる過酷な世界……【TOP GUN】の訓練は苛烈を極めた

そして、俺は首席で卒業を果たした。最終試験はウィリアム教官との一騎打ちという模擬空中戦だった

数時間以上の長期戦、燃料を三回以上も補給しての最終試験は正に【実戦】さながらだった。だが、俺は何とか勝った……無論、心身ともにボロボロになりながらな

そして、ウィリアム教官は俺とナターシャに言った

『娘がパイロットと交際するのは断じて、反対だ。それは絶対に譲れない』

やはり、無理なのか……俺やナターシャが諦めかけた時だった

『……だが……【エース・パイロット】ならば、話は別だ

お前は【合格】だ、ナターシャを…… - - 娘を頼んだぞ』

ウィリアム教官は俺を認め、ナターシャとの交際を許可してくれたのだが……その数年後、俺は『白騎士事件』の【戦闘空域】……後に『Round Table (円卓)』と呼ばれる空域へとフロントム隊を率いて、出撃……

そして、ナターシャと別れた……

「…………結局、お前とは別れた…………ウィリアム教官との約束も破った訳だ…………」

「…父さんも理解しているわ…………あれは貴方のせいじゃないわ…」

貴方は自分を犠牲にしても、味方を助けた…………父さんは言ったわ
- - - 『俺が教えてきた生徒の中で最も優秀であり…………そして、教官としての俺にとって【誇り】だ』ってね…………」

「…………光荣だ…………あの人が俺たちの【教官】である事をな…………」

そんな会話を続ける俺らに乗せたヘリは教官たちの居る空軍基地へと向かった

番外編 ・ 【老兵】と【エース】 ・

これは今から、数年前に遡る話……あの『白騎士事件』により、ジ
エイソンが不名誉除隊となった直後の頃……

.....

不名誉除隊となり……『アイツ』……【ナターシャ】と別れてか
ら早くも数日が過ぎた

俺は『自宅』……【車庫】^{ガレージ}にて日課の鍛錬^{トレーニング}をしていた

「.....298.....299.....300.....」

片足立ちとなった椅子の上で俺は右腕、一本で椅子の背もたれを掴み……【逆立ち状態の片腕立て】を行っていた

「…ふう……ッ」

椅子から地面へと着地し、側に置いてあるタオルを取ると身体中から吹き出る汗を拭う。ふと、時計へと視線を向ければ時間は、まだ朝の七時を迎えたばかりだった

俺は汗で濡れた服を脱ぎ捨て、シャワー室へと向かった

- - - - -

一人用の狭いシャワー室内で俺は温めのシャワーを浴びて、汗を流す。身体中に纏わりつく汗の不快感が温水により流れ落ち、爽快感を感じる中で俺はある事を考えていた

不名誉除隊となったが、生活に関しては何の心配も無ければ、支障も無い……が、俺は【ある人物】を思い出した

親父とお袋は俺が生まれた直後に死んだ……その後は【親類の軍人】
- - - 『祖父』^{ジジイ}に育てられた。軍人といっても、ジジイは親父が生
まれる随分、前に辞めたらしいのだが……

俺は軍に居た頃に数回程、過去の除隊人物リストを閲覧した事があ
ったのだが……俺以外の【シーガー】の名前は一切、存在しなかった

だが、ジジイはまだガキだった俺を【徹底的】に鍛え上げた。それ
は正に軍人のノウハウが生かされたモノだった……【近接戦闘】
から始まり【暗殺術】……【潜入】から【爆破】までありとあらゆる
分野全てを俺に仕込んだのだ

最も俺がジジイによって、軍へと入隊するまでの数年間……全ての
分野で俺は【たったの一度】もジジイに勝った事が無かったがな……

だが、別に恨んではいない……ジジイが俺を軍へと入隊させなけれ

ば、俺は『最高の仲間』ともナターシャとも出会う事は無かったんだらうからな……

しかし、軍に入隊後は一度もジジイと会う事が無ければ、電話や手紙すらもした事が無かった……【あのジジイ】が死ぬなんて事は想像すら出来ないのだが……もう長い間、会っていないのは事実……

「……会いに行くべきか……」

俺はそう呟き、シャワー室を後にした

- - - - -

それから数時間後……俺はバイクを走らせ、郊外の山道を移動していた。元々、俺が住む車庫はジジイのモノだったが、俺を軍へと入れるなり【入隊祝い】と言って、自分は郊外の山奥にある山小屋へと引っ込んでいった

山にはあまり良い思い出が無い。何故なら、俺を鍛え上げる際にその山小屋を使っていて、どれだけ喚こうが叫ぼうが誰一人にも聞かれないからな……

俺は路肩へとバイクを駐車させると獣道へと歩を進める。道とは呼べないモノだが……この道は散々、走らされた為に身体が道を覚えている

山小屋へと歩を進める度、ガキの頃の記憶が蘇る……【過度の重しを全身に取り付けられ、日に100回以上も往復でこの道を走らされた事や野生の熊なんかをナイフ一本で相手させられた事とかな……

そうこう考えている内に俺は山小屋へと辿り着いた。俺はその山小屋の入り口へと向かい、扉に辿り着くとドアノブへと手を掛け、ゆっくりと扉を引こうとするが、その動作を止めた

「……【簡単過ぎる】よな……？」

俺は扉を閉め、横にある窓から室内を覗き込む。すると扉にはワイ

ヤーが括り付けられ、そのワイヤーを視線で辿っていく

「……やっぱりな……」

ワイヤーの先には扉へと、その銃口を向けた【散弾銃】が椅子に固定されていた。迂闊に扉を開けたのならば、その扉ごと風穴を空ける羽目になる訳か……

「……訪問客、全てを殺す気かよ……?」

俺は溜め息を零し、小屋から離れていく。するとその時だった……
『職業柄』……【もう聞き飽きた音】が聞こえてきたのは

「ああッ、クソッ!!?」

俺は立て掛けてあった廃材の山を飛び越え、その陰へと身を低くして隠れた。それと同時に先程まで俺が居た場所に連続して『聞き飽きた音』……【銃声】と共に複数の穴が穿たれる

「ジジイッ、俺だッ！ ジェysonだッ！！」

だが、返ってきた返答はこうだった……『知ってる』

そして、再び銃声が鳴り響き、廃材には複数の穴が穿たれる

身を屈めた状態で俺は発射位置を探る。すると小屋の右側にある納屋の二階部分から微かに反射で光るモノを確認する

「……………彼処か……」

一度、呼吸を整えて飛び出すタイミングを計る。そして、俺は一気に納屋へと駆け出す

俺の後を追う様に銃弾が地面に穿たれていく。納屋の扉を勢い良く体当たりでブチ破り、俺は一気に二階へと駆け上がる

「ジジイ、いい加減に……?」

俺は発射位置へと視線を向けるも、其処にはワイヤーを引き金に括り付けて固定された『米軍仕様中量級機関銃』……【M240】が設置されているだけだった

「フェイク偽物かよ…ッ!」

俺は引き金に括り付けられたワイヤーを掴み、その先を辿っていく。すると其処には……

「……冗談じゃねえぞッ…!!?」

俺は一気に二階から飛び降りる。何故なら、ワイヤーの括り付けられた先には【地雷】……『M18 Claymore』クレイモアが仕掛けられていたからだ

飛び降りると同時に納屋の二階部は【綺麗】に吹き飛んだ。俺は背中から地面に落つこちる……地面自体は柔らかい土であった為、それ程の怪我も無く済んだが身体中が酷く痛む…

「っ…ゲホツ…」

軽く咳き込み、俺は仰向けになって深く息を吸い込む。すると俺の視界には人影が映り込む

「…鈍つたな、若造^{ガキ}め…」

老いを感じさせない細身ながら、無駄が無く引き締まった筋肉質の肉体……黒いカウボーイ・ハットに肩まで伸びきったボサボサの白髪、口周りに蓄えられた白髪髭に葉巻をくわえた鋭い目付きの老人
- - - 【ダリアス・シーガー】は言う

「…アンタも変わらないよな……【自分の孫】を殺す気かよ？」

「阿呆が、昔から言っているだろうが……【殺す気】でやらなきゃ、生半可にしか鍛え上げられんとな？」

「だからって、地雷まで持ち出すか…？」

せめて、アンタがお得意の【狙撃】で済ませろよ……」

「俺が狙撃をしているんなら、お前は此処から五キロ手前で死んでいる」

……確かにな……スコープも無い【骨董品】とも言える大昔のライフルで五キロ先の的を一発で仕留めるアンタにとっては造作もないよな……

俺は痛む身体を引き摺って、一足先にジジイが入っていた小屋へと向かった

-
-
-
-
-
-
-

「……んで……何の用だ、ジエイソン？」

ジジイは棚にある多種多様の酒瓶の一つを取り、封を開けるとその酒瓶に口付けて豪快に煽りながら言う。このジジイ……年齢は不明だが、とつくの昔に【80歳】は越えているらしいのだが……中身は『現役そのもの』だ

本人も『とつくの昔に年を数えるのは面倒になって止めた』と言っているが……化け物だよな？

「いや、色々とあってよ……それにアンタと会う事も無かったから、顔を拝みに来た訳だよ」

「ふん……【不名誉除隊】とはな……」

「……何で、知っているんだ？」

「舐めるなよ、元【CIA局員】の女を二人も女房にしていたんだ

ぞ？ それ位、アイツ等に仕込まれたんだ、造作も無い」

……そう、聞いて驚く無かれ……このジジイは女房が【三人】も居たんだよ。しかも三人の内、二人は【CIA局員】であり、残る一人は【陸軍最強】と称された女性隊員という『強者』でな……最も俺が生まれる前に三人共、老衰で死んだらしい……

ジジイは酒瓶を俺へと投げ渡す。俺はその酒を煽り、使い古しのがたつく椅子へと座り込んだ

「……ふッ、お前もやはり……俺の孫で『ジョン』の息子だった訳だな」

「……『親父』が？」

【ジョン・シーガー】……それが、俺の親父の名前だった

「俺もジョンもお前と同じだ。【馬鹿】をやって、不名誉除隊になった……」

「……親父も軍人だったのか……普通の写真しか無かったから、てつきり平凡な人間だと思っただよ……」

するとジジイは腹を抱え、大笑いをする

「っ…ハハハハッ！！ ジョンの奴が【平凡】だとツ?!?! アイツは【スペツナス】や【S・A・S】なんかの各国の軍や特殊部隊が取り合う程の兵士だったぞ?」

ジジイの話では『親父』……【ジョン・シーガー】は「アメリカ陸軍第一特殊作戦部隊分遣隊」……【デルタ・フォース】に所属し、どんな過酷な状況下でも任務を完遂させた上で生還する程の強者だったらしい

だが、ある時の任務中に窮地に陥った部隊を救う為、単身で敵の中队と応戦し、味方を撤退させて敵に【八割以上】のダメージを与え、自分も脱出したらしい

そして、上層部により【命令違反】としての不名誉除隊を受けたら

しい。俺と同様、過去の軍歴や功績を剥奪されてな……

「……俺は空軍、ジョンは陸軍、お前は海軍……親子三代揃って、三軍に所属していた上、三代とも不名誉除隊となった訳だ……」

ジジイは被っている黒のカウボーイ・ハットを深く被り直す

「……しかし……【女尊男卑】か……世界ってヤツは、こつも簡単に変わるな……」

「世界が変わった訳じゃない……世界ってのは【キツカケ】を与えるだけ……世界を変えるのは何時だって『俺達』だ」

「……俺が知っているのは世界は【巨大なマッチ箱】って事だ。誰かが火を着ければ、その炎は一気に燃え広がる

これまでの『世界大戦』もそうだ……【一発の銃弾】や【一人の人間の意思】でさえ、簡単に勃発した」

「……まあな、だが男にとっては肩身の狭い世界になるな……」

するとジジイは戸棚から『一丁の回転式拳銃』リボルバー - - - 【PEACE
メーカー】を取り出し、窓を開けるとその銃を構える

少しの間を空け、ジジイは引き金を引いた。一発の発射音の後、五
回の反射音が鳴り響き、上空を飛んでいた野鳥を撃ち落とした

「……【Five Cushion】ファイブ・クッションか、相変わらずの腕だよな？」

【Five Cushion】 - - -ジジイが得意とする射撃術の
一つ。緻密な計算により、銃弾の火薬を調整した上、発射時には跳
弾の角度を瞬時に計算し、計五カ所に反射させて標的を仕留める…
…『神業』というよりも【魔技】の領域だな…

「飯、食ってけ…」と言っても、食材はコイツ（銃）で仕留める

そう言って、ジジイは銃を俺へと手渡す。俺はその銃を受け取ると
同じ様に窓際へと立つ

俺は映画である様な早撃ちの態勢をとる。そして、瞳を綴じて引き金に掛ける指先と両耳へと全神経を集中させる

研ぎ澄まされた集中力により、俺の耳からは風の音と野鳥の囀り声が聞こえる

風の音が止んだ瞬間、俺は一気に五発全弾を連射させる。放たれた五発の銃弾は先程、ジジイの放った銃弾と同様に同じ五力所へと跳弾、そして空中に飛ぶ五羽の野鳥へと命中して、野鳥は墜ちていった

694

「ほう……お前もやつと、親父の『得意技』……【Six Shooter】クス・シューターを使えるか？」

【Six Shooter】……ジジイ曰わく、俺の親父である『ジョン・シーガー』が最も得意としていた射撃術。【Five Cushion】の『六連発版』なのだが……勿論、難度は桁外れであり、熟練の銃使い（ガンマン）でも不可能に近い技だ

だが、親父はこの技を『一週間』で修得マスターしたらしい。しかも、この技を狙撃にも用いた結果……『有り得ない角度』からの狙撃にも成功していたらしい

「……………一年も掛かったけどな……？」

「ジョンの奴は銃器に関して、天才的なセンスを持っていた……それこそ、【銃器の申し子】と呼ばれる程にな……」

仕留めた食材を取ってくる、そう言ってジジイは小屋を出て行った。小屋に一人、残された俺は立て掛けてある写真へと視線を向けた

695

そこには髪型と髪の色は違えど、今の俺と瓜二つの男性……【ダリアス・シーガー】と三人の女房……【金髪】と【赤髪】に【黒髪】の女性が写っていた

「……………三人も女房を持つとはな……」

俺は隣にある更に古い写真へと視線を向ける。そこには三機の『戦

闘機』……【F-15C Eagle】を背景に更に若い頃のジジイと二人の戦闘機乗りが写っていた

ジジイは昔、陸軍、海軍、空軍の三軍を経験していたらしい。不名誉除隊になるまでの数年は空軍に腰を据えていたらしいが、不名誉除隊後は【傭兵】として活躍していたそうだ。

当時の愛機は機体カラーを漆黒にして、両翼に炎模様フレイム・バイナルの塗装を施した『F-15C Eagle』であり、TACネームはフレイ【BLAZE】と呼ばれた様だ

「一体、何歳なんだよ……あのジジイ……」

そう呟き、俺は他の写真へと再び視線を向ける。其処には中国やイギリス、フランス軍などの戦闘機乗りと写るジジイの写真が多々、あった

そう言えば、ジジイは傭兵でありながら、各国の戦闘機乗りたちの教官も務めていたらしい。一説では、あの【SKY Captain
n】……『クロード・デュノア大佐』を始めとした各国の【エー

ス・パイロット」を鍛え上げた張本人とも言われているって話だ

まあ、あのジジイならば……有り得ない事では無い。何せ……」
俺の祖父』なんだから……

苦笑を浮かべ、俺は仕留めた食材を取りに行ったジジイの帰りを待
った……

因みに、仕留めた六羽の野鳥と共に体長を軽く3メートルは超える
野生熊を担いでジジイが戻ってきたのは余談だ……

・ 【手痛い再会】 ・ (前書き)

最近、残業が続いて深夜近くにまで仕事をする多忙な毎日の為に更新が遅れて申し訳ありません……

夜勤手当が付けば、良いものが【ブラック会社】な為に残業手当てしか貰えない……

更新が遅れた割には短いですので、皆様には重ね重ね申し訳ございません……

・
【手痛い再会】
・

そして、俺たちは【教官】たちの居る空軍基地へと到着した。不名誉除隊の際、ウィリアム教官に別れの挨拶をしようとするも、教官たちは多忙の為に結局、会う事は出来なかった……

「……気が重いな……」

「だったら、行かなきゃ良かったんじゃないかしら？」

「……それを言ったら、元も子もないと思うよ、ナターシャ？」

そんな会話をする俺たちの前に一人の男性が現れた

「よお……ジエイソン、それにナターシャ、ついでにライリー」

「僕はついでにですかッ?!?!?」

濃緑のパイロット・スーツを身を包み、短髪に無精髭を生やし、気だるそうな表情を浮かべて手を振る男性……『ジャック・バートレット大尉』

俺たちを鍛え上げた教官の一人であり、もう一人の教官と共に空軍で有名な『万年大尉』だ

「バートレット教官、お久しぶりです」

俺とナターシャは共に苦笑を浮かべ、敬礼を向ける

「ジャックで良いって言ってんだろ？ それにその堅苦しい敬礼なんだぞ、よせつての」

心底、気だるそうな表情で片手をヒラヒラと振るバートレット教官は言う

「しかし、お前さんたちが来るとはなあ……何の用だ？」

「挨拶ですよ、この度はジェイを隊長とした『部隊』……【TA
SK FORCE 108】のね？」

「ああ、あの『IS編成戦闘機部隊』な……と言っより、お前らっ
て破局したんじゃないかったのか？」

「……色々、ありましてね……」

するとバートレット教官は俺の肩を叩き、苦笑を浮かべる

「お前も相変わらずの苦労人だよなあ……ま、ウィリアムの奴に関
しては心配すんなって……」

まあ、当時の頃は大変だったけどなあ……ウィリアムの奴、戦闘機
を持ち出そうとしたんだぜ？」

「……迷惑を掛けて、すいませんね……」

「もう、父さんつたらやり過ぎなのよ。私と『リールさん』が父さんを気絶させなきゃ、爆撃機すら発進させる勢いだっただから……」

『そうよ、お陰で私とナターシャが中佐を殴って気絶させたんだからね？』

ふと、背後からは聞き覚えのある女性の声が聞こえる。俺はその声の主の方へと振り返った

「……お久しぶりです。【リール少佐】」

『ジャニス・リール少佐』……【ウォー・ドッグ隊】の二番機であり、副隊長を務めていた女性パイロット

そして、俺たちにとっては『教官』の一人であり、ナターシャにとっては【姉】と言えるべき存在でもある

「久しぶりね、ジェイソン……ナターシャにライリー？」

「リール少佐だけですよお……僕をオマケ扱いしないのはあ……！」

「お前は本当に子供ガキだよなあ、ライリー？」

若干、涙目でリール少佐を見つめるライリーと苦笑を浮かべ、ライリーへと視線を向けるリール少佐……そして、呆れた表情でライリーを見るバートレット大尉

それが昔から見慣れた光景でもあった。最も、あと一人の『万年大尉』が欠けているのだが……

「よおツ、随分と懐かしい奴らが来ているじゃないかよツ！」

「あら、【万年大尉】の片方も来たみたいね？」

「ジャンス、そりゃ無いぜ？ 俺やガッツの奴も出世には興味はねえけどよ、好き好んで【万年大尉】をやってる訳じゃねえんだぞ？」

「そうだけ、ジャンス。ジェイソンを見てみるよ？ アイツと俺らで『万年大尉トリオ』を組んでいたのに、何時の間にかに【中佐】に昇進してんだぞ？」

「俺も思わぬ出世をする羽目になりましたね……【グティエレス大尉】」

『ホセ・ガッツ・グティエレス大尉』……俺たちの教官の一人であり、バートレット大尉と共に【万年大尉】として有名なパイロット。しかし、その腕前は『F-15』の【アグレッサー教官】の資格を持つ程の実力者だ

「おいおい、昔みたいに【ガッツ教官】って呼んでくれよな？」

または『ガッツ大先輩』でも可、と笑いながらグティエレス大尉は言う

「相変わらずですね、ガッツ教官。会えて、嬉しいですよ」

「俺もだぜ、ジェイソン。何て言ってもお前らは俺たちが鍛えた生

徒の中で最も優秀であり、一番の【出世頭】だからな?」

「そうそう、隊長なんて『世界初の男性IS操縦者』なんですから、僕らも鼻が高いですよ」

何故か、自分の事のようにライリーの奴は鼻高々と言って笑顔を浮かべる

「そう……私の自慢の『元カレ』よ」

そう言って、ナターシャは俺の右腕へと抱き付いた

「本当に信じられないわよね、ナターシャとジェイソンが別れたなんて……?」

「ああ、俺も何を【馬鹿な冗談】を言ってんだって思っていたぜ」

「寧ろ、本当に別れたのかよ?」

上から、リール少佐、バートレット大尉、グティエレス大尉の順番で俺とナターシャへと視線を向け、苦笑いを浮かべて言う

すると俺は『誰か』に肩を叩かれた。俺はその方向へと何の気なしに振り向いた瞬間――俺は【迫る拳】をモロに喰らい、地面へと倒れ伏した

「痛……ッ!？」

強烈な右ストレートを喰らい、脳が揺さぶられて視界がぐらつく。周りの教官たちからは声を掛けられるも、はつきりと聞き取れない状態となった俺に一つの手が差し伸べられた

「……娘と破局した件に関しては【今の一発】で不問にしてやる」

俺はその声の主へと視線を向けた。其処には俺にとって、一番の恩師で教官でもあり……そして、ナターシャの『父親』……【ウィリアム・ファイルス中佐】が俺へと手を差し伸べる光景だった

・ 【手痛い再会】 ・ (後書き)

次回は今回よりも長く仕上げる予定です

内容はジェイソンと『教官』……【ウィリアム・ファイルス中佐】
との若干、シリアスな感じになると思います

「……まだ、痛むか？」

ウィリアム教官は先程、右ストレートを喰らった頬に氷入りの袋を当てて冷やす俺へとそう言った

「……見事な右ストレートでしたよ、危うく意識を持ってかれそうになりました……」

俺は苦笑を浮かべ、ウィリアム教官へと言葉を返す。今、俺と教官が居る場所はウィリアム教官のオフィスだ

因みにライリーやナターシャ、バートレット教官たちは食堂にて昔話をしているらしい。

「…悪かったな、もう済んだ事なのに」

「……貴方が謝る必要は無いですよ、ウィリアム教官。悪いのは全部、俺です……」

「……あの時、お前が娘と別れた事ナターシャを聞いた時には……はつきり、言っ【殺してやる】と考えた」

教官はコーヒー入りのカップを俺へと手渡し、そう言った

「……だが、冷静に考えれば、お前は一步間違えれば死んでいただろう。あの【白騎士】を相手に挑んだのだから……」

「……でも、結局は負けましたよ。それも完膚無きまでに」

「だが、お前は仲間を護った。自身を犠牲にしてもな」

教官は静かに笑みを浮かべ、机デスクの上に置かれた写真へと視線を向ける

そこにはかつて、ファントム隊と呼ばれる以前の俺たちと教官たち
- - - 【War Dog】隊のメンバーが写された写真が置かれて
いた

「……お前は俺の【誇り】だ。戦闘機乗りとして、娘の彼氏として
もな」

「……教官、俺は思ってしまった。あの【白騎士事件】- - -
『円卓』の場で……」

白騎士と対峙している時、何度もナターシャの顔が脳裏を過ぎった
……アイツを残して、まだ死ぬ訳にはいかない- - - 【生きたい】
と余計な事を考えてしまいました……」

教官は昔、よく言った。戦闘時に【余計な事を考えるのは命取りに
なる】- - - 『ただ、目の前の物事にだけを集中しろ』とな……」

「……ジエイソン、お前は昔から自分を犠牲にしても味方を助け
ようとする傾向があったな……」

それは、お前の長所であり短所でもある。上の連中に逆らっても、
誰かを助けようとする。だがな、死んだら、ただの負けだろう？

残された連中に責任を被せて、自分だけ死のうなぎ、卑怯者ではない――何故、自分が生きる為に戦わない？」

……確かにそうだ。あの時、俺が死んだのならば、残されたファントム隊のメンバーは自責の念に縛られる事になるだろう。そして、ナターシャは死ぬよりも辛い思いをさせて生きていく事になる――
- 正に【生き地獄】を味わってな

「……良いか、ジェイソン……よく覚えておけよ

【己を護れてこそ、人を護れる】――要するに自分すら護れない奴が、どう足掻いても人を護れないって訳だ

……これが、お前の【教官】だった俺が最後に教える心構えだ」

そう言って、ウィリアム教官は笑みを浮かべて敬礼をする

「ジェイソン・シーガー中佐、貴官は我が『部隊』――【Warrior・ドッグ】
Dog】が鍛え上げた精鋭たちの中で最も優秀であり、そして最高の戦闘機乗りとなった

『ウォー・ドッグ隊』は貴官に対する全面的な支援を約束する。これからは、教官と生徒では無く……お互いに【中佐】同士、対等な立場だ」

「……了解しました、ウィリアム・ファイルス中佐

私自身も率いる『部隊』……【TASK FORCE 108】の隊長としての責務に尽力を尽くします

そして……歓迎します、ようこそ……【TASK FORCE 108】へ」

俺は『教官』……【ウィリアム・ファイルス中佐】へと敬礼を向け、言葉を返した

これが、後に【TASK FORCE 108】の隊員たちを更に強化していく事になるのは余談だ……

・ 【些細な一言】 ・

教官たちの部隊 - - - 【War Dog^{ウォー・ドッグ}】が『TASK FORCE
E 108』の一員となつてから、2日が過ぎた

そんなある日、俺は自室に備え付けられたベッドの上で正に大の字で寝転びながら、ある事を考えていた

それはドイツ軍IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』 - -
・ 【黒ウサギ隊】の隊長であるラウラの事だ。アイツは出生からにして、とても普通とは言い難い

それに本来ならば、あれ位の年頃の少女は遊び盛りであり、友人なり何なりと楽しむのが普通だろう。だが、アイツは軍人 - - - それも【少佐】の階級を持ち、俺たちと共に戦場の空を駆け抜け、戦っている

「……適当な所で【息抜き】でもさせつかね…？」

でないと何時か、冗談抜きでパンクしそудしな……

そう考えた俺は部屋を後にした

.....

「………はい？」

食堂にて、その場で食事を取っていた隊員一同が固まり、ある二人へと視線が向けられる

其処には、コーヒー入りのカップを片手にキョトンとした表情を浮かべたジェイソンと手にしたサンドイッチをかじったまま、固まる

ラウラの姿があった

「あの……隊長、その……今、何と仰いましたか……？」

ラウラは手にしたサンドイッチを皿へと戻し、目の前の席へと座る
ジェイソンへと催促の言葉を言う

「いや、だからよ……お前も色々頑張ってるから……【デート】
でもするか？」

何を驚いているんだ？、と言わんばかりの表情を浮かべてラウラへと視線を向けるジェイソン。無論、この会話は食堂にて行っている
為にその場に居る隊員たちにも聞こえていた

「……………きゆう……………」

そんな間の抜けた声を出して、ラウラは食堂の床へと倒れ込んだ

「お、おいッ!? ラウラ、すっかりしろよッ!?!?」

慌てて、ジェイソンは倒れ込んだラウラへと駆け寄り、顔を覗き込んだ。気絶したラウラの表情はそれはそれは【恍惚】もとい幸せそうな表情だった

「た、隊長ッ!?!? マジで言ってんッスカッ!?!?」

「ジェイッ!! それは、どういう意味なのッ?!!!」

「そつだぜ、ジェシーッ!! デートするなら、アタシとしろよッ!?!?」

「抜け駆けはさせんぞ、イーリッ!! ジェイソン、私とデートしろッ!?!?」

いち早く、反応したカーターを皮切りにナターシャたちがジェイソンへと詰め寄り、食堂内は正に混乱の渦へと巻き込まれていく

「……どう思う？」

「いや、どうもどうも……」

「また、隊長の天然発言でしょ？」

末端の席からその光景を眺める上から、B・A、シヨーン、ライリ
ーの順に言う

「隊長の言う【デート】って、ただ普通に男と女が買い物なり何なりと出掛けるって意味合いだからねえ……」

「最も、隊長狙いの連中は大勢なんだから当たり前と言えば、当たり前前の反応だよな？」

続けて、その隣に座るハンズとリチャードの二人が言葉を続ける

「クリス、お前は【アレ】に参加しないのか？」

ナターシャたちを筆頭にIS部隊の隊員一同に詰め寄られ、揉みくちゃにされるジェイソンと哀れにもそれに巻き込まれ、とばっちりを喰らっているカーターをショーンは指差しながら、自分たちの隣に位置する席で随分と落ち着いた感じでコーヒーを啜るクリスへと視線を向ける

「アタシは別に構わねえよ。ただ【溜まった】時に隊長と一発、ヤれば満足だしな」

「うわぁーお、男以上に男らしい発言だよ、クリス」

「流石、クリス。そこに憧れないし、痺れもしない」

陽気に笑うクリスへとツツコミを入れるハンスとライリー

「しつつかし、隊長から【デート】なんて言葉が出るとはなあ……明日辺りにはこの基地に無人IS機の大群でも降ってくんじゃないか？」

「寧ろ、あの『白騎士』が攻め込んで来るんじゃないの？ 鋼鉄の白馬にでも跨って【ロビン・フット】みたいに」

「阿呆ぬかせ、シヨーンにライリー……それよりも『天災』が起るぜ、この基地にだけ目掛けてピン・ポイントだよ」

そんな風に揉みくちやにされるジェysonたちを横目に会話を続けるシヨーン、ライリー、リチャードの三人。しかし、当の本人たちは知らないが、シヨーンはとかくライリーとリチャードが言った事は半ば、冗談になっていない……何故ならば、ライリーが言う『白騎士』もリチャードが言った『天災』も騒ぎの発端となったジェysonに惹かれているのだから……

「……そろそろ、助けるべきじゃないか……？」

「……B・A……お前はあの混乱の渦に自ら、飛び込むような命知らずか？」

彼処に行く位なら、俺はホワイトハウスに核弾頭を抱えてタッチダウンをかました方がまだマシだぜ？」

「そうだよ、いくらB・A・のその『鋼鉄の肉体』アイアン・ボディを駆使してもナ
ターシャたち……IS部隊一同に大気圏にまでブツ飛ばされちゃ
うよっ。」

「…………隊長には後で救急箱を届けるべきだな…………」

「そりゃ、良いアイデアだな。ついでに鎮静剤代わりに【E1】
デキラimador】を一瓶、プレゼントしてやれよ」

そう言って、フロントム隊一同（ジェイソンとカーターを除く）は
哀れなジェイソンたちを眺めていた

- 【外出（作戦）準備】 -

「……………むう」

難しい表情を浮かべ、ラウラ・ボーデヴィツヒは鏡の前に立っていた。その両手にはゴシック調の黒いドレスが握られていた

「……………私には似合わない……………!!」

その声を荒げ、ラウラはベッドへとドレスを投げ捨てる。何故、彼女はこのような状況下に陥っているのか？

それは数十分前へと遡る事となる

.....

「……気分はどうだ？」

俺は医務室の綺麗なベッドへと身を預けるラウラへと視線を向ける

「……不思議な夢を見ました。私が隊長から……その……【デート】のお誘いを受けるといふ……」

ラウラは頬を赤く染め、純白のシーツを頭まで被る

「そうか、それで……どう感じた、その夢はよ？」

俺は悪戯心から起こるニヤケた笑みで緩む口元を手で覆い隠し、ラウラへと視線を向けた

「……その……凄く嬉しかったです。もう死んでも本望だと感じる程に……」

「……あー……ラウラ、聞きたい事があるんだが……また気絶しないで聞いてくれよな？」

「……何ですか、隊長……？」

「……俺と【デート】しないか？」

すると二人の間に暫しの沈黙が流れる

「……夢……じゃないでしょうか……？」

「……どうだ？」

「……いふあいれふ（痛いです）」

俺はラウラの両頬を軽く掴み、広げる様に引っ張る。ラウラは若干、

涙目になりながら答えた

「それで……答えたはどうだ？」

「……こんな私で良いんですか……？」

「お前は俺の部隊の一員になる事を目標としていた。そして、お前は見事に目標を果たした訳だ

だから、これはその【報酬】って訳だ。嫌なら、隊長権限を使っても受け取って貰うが？」

「……いいえ、喜んでお受けします。こんな私でも宜しければ」

ラウラは笑顔を浮かべ、俺へと敬礼を向けた

- - - - -

そして、冒頭へと至る訳なのだが、ラウラは悩んでいた。生まれて

から戦闘に関する分野、全てを学び、軍人として生きてきた彼女にとっては正に人生初の異性との【デート】……しかも、相手が自分の想う者であれば尚更だった

「うう……クラリツサから、もっと聞いておくべきだった……」

先程、彼女がベッドへと投げ捨てたドレスもクラリツサが用意してくれた物だが……何故、彼女がラウラにピッタリのサイズの服を持っており、それを用意していたのかは不明だ

「……………」

ラウラはベッドへと投げ捨てたドレスへと視線を向ける。話を聞きつけたクラリツサは『これを着れば、ジエイソンさんも隊長を見て墜ちるでしょうッ！』 普段は軍服に身を包み、凜々しい隊長がこのドレスを着る……嗚呼、何という【ギャップ萌】ッ！』等と何故か、鼻血を流しながら言っていたが……

「……………」

しかし、自分にはこのドレス以外にある服と言えば、軍服かISS
ーツ位しか無いのも事実……

ラウラは恐る恐る、そのドレスへと手を伸ばすと着替え始める。数
分後、着替え終えた彼女は改めて鏡で自分の姿を再確認する

「……何か、スースーする……」

慣れないスカートのためか、下半身に妙な涼しさを感じ、スカートの
裾を掴むとその場でゆっくりと一回転を試みる。フワリと風でス
カートの裾がほんの少し浮かぶ

「……隊長、喜んでくれるでしょうか……?」

頬を赤く染め、ラウラは鏡に映る自分の姿を見つめる表情は……何
処にでも居る様な【恋する乙女】の顔をしていた

- - - - -

フリーファイニング・ルーム
【作戦会議室】

作戦会議室の室内にはIS部隊一同が勢揃いしていた。皆が真剣な面持ちをしており、その瞳には命をも投げ出す覚悟を決めた【決意の焰】を宿していた

その隊員一同の眼前には……【TASK FORCE 108】の副隊長……『フランチェスカ・アルマ中佐』に【隣人の鐘】及びチャリテイ・ベル【野生の牙】……『両IS部隊の隊長である』ナターシャ・ファイルド・ファングワイルド・ファンク『ルス』と『イリス・コーリング』の三名が横一列に整列し、隊員一同を見渡していた

「諸君、我々は世界各国が誇る【精鋭】エリートだ。君たちの実力は私も良く知っている

……しかし、今回の任務は困難なモノだ……最早、それは【不可能な任務】ミッション・インポッシブルと言っても過言では無いだろう……」

フランキーの言葉を聞いた一同は皆、眉間に皺を寄せて目を細め、難色を示す

「……でも、私たちは最強であり、最高の部隊よ。^{チーム}それに『勝負は数の多さで決まるモノじゃない。一人一人の意志の強さで勝敗を決する』のよ」

「ナタルの言う通りだぜ。それによ……此処で意地を見せなきゃ、女が廃るってモンなんだぜ？」

ナターシャとイーリは胸を張り、隊員一同へと言葉を掛ける

「……任務開始時刻は今から、約三十分後……【12:00】からだ。諸君、無理強いはしない……この任務に反対の者は遠慮は要らない、速やかにこの部屋から退出してくれても構わない」

しかし、隊員一同は誰一人として部屋を退出する者は居なかった

「……皆に感謝する。諸君、それでは直ちに準備に取り掛かれッ！」

『イエス・マムッ!!』

「……あのー…フランキー中佐…」

「何だ、カーター・ウィンストン少尉？」

「いや、もう色々とツッコミ所が満載ッスけど……アンタら、何を
する気ッスか？」

「何って、私たちは【不可能な任務】に挑もうとしているのよ、カ
ーター？」

「【不可能な任務】じゃねえよッ!! 単に隊長とあの【ちびっ子
少佐】とのデートの監視だろうがッ!! しかも、全ISS部隊を引
っ張り出してよッ!!…?」

「安心しな、カーター。お前やライリーたちには尾行とかの役目を
用意しているぜ」

「用意しているぜ、じゃねえよッ!! 用意しているじゃッ!!」

何で、アンタらはデートの監視如きに対テロ作戦ばりの勢力を持ち出すんだよッ!!」

「【デートの監視如き】だと? お前にはこの重大性が分かっていないのかッ!?

惚れた男が別の女と……それも、同じ男に惚れている女がだぞッ!!?」

「分かりたくねえよ、んなモンッ!!!?

しかも、何であたかも俺が間違った事を言ったみたいにキレてんだよッ!!!?

俺、何か間違った事でも言ったッ!?

怒涛の勢いでフランキーたちへとツッコミの嵐を入れるカーター

「わぁーお、カーターってば、凄いツッコミだよね?」

「いや……寧ろ、今までの流れを見れば、誰だって普通にツッコむ

だろ……」

そんな光景を眺め、そう呟くライリーとリチャード

「……俺、辞めようかな……この部隊……」

「……軍隊に居た頃でも、こんな間抜けな任務をやらされるのは聞いた事が無いな……」

片手で頭を押さえ、溜め息をつくシヨンとB・A・

「隊長も苦労人だよなあ……【モテるのも辛い】って言葉は隊長の為にあるんだろうなあ……」

「良いじゃねえかよ、ハンズ。丁度良い退屈しのぎにはなりそうだが？ 面白そうだしな」

ジェイソンの気苦労を考え、合掌をするハンズと腹を抱えて笑うク

リス

しかし、ジェイソンはといえば……

- - - - -

「……無精ひげは剃るべきだよな、やっぱりよ」

そんな風に呑気に髭を剃りながら、出掛ける準備の真っ最中だった

……

「…………そろそろ、だよな？」

俺はクリスから借りてきた大型三輪車……【HARLEY-Davidson（ハーレー・ダビットソン）】に寄りかかり、腕時計を眺める。クリスの愛車でもあるこのバイクをアイツが気前よく貸してくれた事には感謝しよう……生憎、俺のバイクは整備中^{メンテナンス}だったしな

俺はふと、自分の服装を見直してみる。それは滅多に着ないスーツを着崩した格好であり、ネクタイはしていないモノだった

「…………無難にこの格好で良かったよな？」

自問自答をしながら、俺は煙草をくわえる

「……た、隊長……!!」

背後からラウラの声がし、俺はその方向へと振り返る

「……そ、その……クラリツサが【デート】にはこの格好をした方が
良いと言ったので……」

そこにはゴシック調の黒いドレスを纏い、そのドレスと同色の可愛
らしいリボンで髪を一つに束ね、頬を赤らめるラウラの姿があった

俺は普段とは違うラウラの姿に思わず、見惚けてくわえていた煙草
を地面へと落とした

「……や、やっぱり……似合いませんよね……」

ラウラは俯きながら、スカート裾を掴む

「……いや、余りにも可愛らしいからよ、思わず見惚けちゃったよ」

「か、かかか……可愛い……?」

「ああ、似合っているぜ。ラウラ?」

「可愛い……私が……可愛い……」

「……大丈夫か?」

「い、いえ、大丈夫ですッ!」

ラウラは頬を赤らめ、とても嬉しそうな表情を浮かべる

「……ま、せつかくの【デート】だ。楽しもうぜ……」Princess（お姫さま）『?』

俺はそう言つて、バイクに跨ると何やら独り言を小さく呟き、上の空のラウラを後ろへと乗せた

- - - - -

《^{マザー}えー……^{バッキー}【M a g i c】より『本部』 - - - 【B i g M o t
h e r】へ。標的が移動を開始した》^{ビッグ}

《こちら【B i g M o t h e r】、了解した。全隊員に告ぐ、標的が移動を開始した。繰り返す、標的が移動を開始した

標的のバイクには【発信機】を取り付けている。逐次、標的の位置を確認する事を忘れるな》

《……マジでやるか、普通……？》

《カーター少尉、諦める。こっちは非番なのに『緊急任務』と引つ張り出されたら、ジェイソン中佐とラウラ少佐の位置情報を送らなければならんだぞ？》

《お前も災難だよな…【M a g i c】

つーか、アンタらは『空中警戒管制機』……【AWACS】を持ち出すかッ!?!?

職権乱用にも限度ってモノがあるんだぜッ!?!?》

心底、疲れた声で報告を入れる『AWACS オペレーター』……
- 【M a g i c】とツッコミを入れるカーターの声が無線に響き渡る

《少しは静かしろよな、それに軍用回線で本名は使わないぜ、軍隊での常識だろうが?》

《軍用回線を使ってまで、データの監視する方がおかしいだろうがッ!?!?》

何で俺らまで駆り出されなきゃならねえんだよッ!?!?》

《協力しなきゃ、減給するってフランキー中佐から言われただろ?》

カーターのツッコミを咎めるイーリに対して、ツッコむカーターと溜め息混じりに【強制参加】の理由を言ったりチャード

《まあまあ、これも訓練の一環だと思えば良いじゃないの?》

《ライリーの言う通りだぜ、それにそうでもしなきゃ、やってらんねえ……》

呑気に笑いながら言うライリーと不本意ながら、ライリーの意見に賛成するハンス

《……なあ、俺らって【税金泥棒】っていつのか?》

《…シヨーン……それを言うな、悲しくなってくる……》

溜め息混じりに呟くシヨーンとB・A・

《…か、行き先とかは分かるのかよ?》

《心配ないわよ、クリス。デート・プランはクラリツサが立案者だし、ラウラも初めてのデートだから、そのプランに従う筈よ》

《抜かりはありませんよ、隊長の事は熟知しております。隊長の好物から癖、昨日の寝言までも完璧に知り尽くしていますッ！！》

《……これが世界各国の【精鋭】を集めた最高かつ最強の部隊か……それを束ねるジエイソン中佐も大物だな……》

【M a g i c】の眩きが静かに無線内で響き渡った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6975u/>

IS インフィニット・ストラトス - ACE OF ACE -

2012年1月2日01時51分発行